

闇の魔法を使える武偵っておかしいか？

トカイナカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある《悲劇》により大切な人を救えなかった男は、女神の計らいにより緋弾のアリアの世界に転生することになった。

その身に宿すのは《闇》の力。

様々な出会いと別れにより彼は成長していく。

『魔法先生ネギま!』×『緋弾のアリア』のクロス物です。

『魔法先生ネギま!』(2003)

『緋弾のアリア』(2009)

時系列的にズレがありますがこの作品ではネギま!の時系列を2006以降にしています。

なのでネギま!キャラの大半は女子高生(高3)です。(一部例外あり)

二次小説サイト

暁様でもタイトルほぼ同じ物を載せています。

目次

第一章 武偵殺し編

プロローグ ドSの女神様に転生させられました。 | 1

装填1 闇の魔法《マギア・エレベア》 | 9

装填2 強猥？それは誤解だ!! | 15

装填3 緋色と夕陽と | 15

クラスと…。 | 22

装填4 《双剣双銃》VS《闇の魔法》使い | 29

装填5 明日学校に行つてはいけない病が… | 38

装填6 前門の虎、後門の狼!?!? | 46

装填7 日課と風の警告と暴れん坊な同居人!?!? | 54

装填8 『闇の福音』 | 62

装填9 雪姫の実力? | 70

装填10 猫探し | 76

装填11 追憶 | 86

装填12 情報収集 | 95

装填13 全力で…。 | 103

装填14 山と言つたら温泉だ! | 111

装填15 魔法武偵 綾瀬 夕映♡ | 124

装填16 異変!?!? | 132

装填17 絶望の中で見つけた光。 | 140

装填18 追いつく為に…。 | 147

装填19 最強の名探偵、現る!?!? | 156

装填19・5 雪姫先生は素直じゃない。 | 172

装填 20	氷の女王	181
装填 21	神の代理人?	203
装填 22	模擬戦【画像有り】	211
装填 23	父娘デート? いいえ、ただのお食事です!	226
装填 24	バスジャック①	234
装填 25	バスジャック②	247
装填 26	リセットOKな人生?	261
〜IFルート〜		
IF	もし金次が猫探しではなく遺跡調査に行ったら①	271
装填 27	デスメガネ参戦?	280
装填 28	人造霊	292
装填 29	上位雷精	304
装填 30	デスメガネと悪魔?	313
装填 31	高畑・T・タカミチの決意	321

第一章 武偵殺し編

プロローグ ドSの女神様に転生させられました。

……転生してしまった。

そう、してしまった。別に俺の意思じゃないのに、転生してしまったのだ。

だがしかし、その転生先が普通に元いた世界であればなんの文句もない。

でも、転生させてくれちゃった女神様は俺に優しくなかった。

「はあはあはあ……」

朝、お台場に近い人工浮島にあるとある公道。

通っている高校の通学路に指定されているその道を一台の自転車が爆走している……いや、人事みたいに言うのはやめよう。

猛スピードで自転車のペダルをこいでいる俺。何故朝っぱらから汗だくになってこんな事をしているのかと言うと……

『その自転車には爆弾がしかけてい、やがります♪』

自転車のすぐ後ろに自走してる20台のセグウェイ。

銃座が付けられており、その銃座にはイスラエル製のUJIが装着されており遠隔操作で不振な行動をしたらすぐさま蜂の巣になるように設定されている。

きわめつけには自転車のサドルの下に自動車を吹き飛ばせる量のプラスチック爆弾が仕掛けられている。

「知ってるよ、クソツタレ!!」

ああ、知ってる。

俺はこの展開をよく知っている。

体験したことなどないがこの後何が起こるかよくわかってる。

この世界の事は誰よりもよくわかってる。

でもな。

「何で俺なんだよ!？」

それだけはよくわからない。

いや本当になんで俺が狙われてるんだらう？

どうしてこうなったかよくわからないが状況の説明をしたいと思う。

人に言っても信じてもらえないが、俺は転生者だ。

……うん、その人。かわいそうな目で俺を見るな。

そりゃわかるよ。

俺が逆の立場だったのならそういった人を受け入れてくれる専門
医院や施設をすすめるだらう。

だが俺はどこもおかしくない。

いたって《一般的》な《普通》の人間だ。

……俺の中では、な。

回想。

前世の最後の記憶はあるができればあまり思い出したくない。

俺は《人》として《最悪の行為》を犯し、結局最愛の人を救えなかったからな。

人生の終わりの瞬間に目を閉じて最期の時を迎えていると頭の中に声が聞こえた。

目を開けると大きな樹がぽつんとたってる広い草原の中に俺は倒れていた。

「目、覚めましたか？」

可愛らしい少女の声が聞こえ、起き上がって声が見た方を見ると大きな樹の下の幹に寄り添うようにして金髪の美少女が立っていた。

少女の右手には魔法使いが使うような大きな木製の杖が握られており、左手には本を持っている。

少女は俺の顔をみると微笑み俺の傍にまるで滑るように、摩擦なんかないように滑らかな動作で近寄ってきた。

「無事に魂の固定が終わったようですね。」

では次は転生の儀式といきましょうか」

なんだかよくわからない言葉を口に出す少女。

ただ一つだけわかる単語が聞こえた。

「転生？」

「はい。」

転生です。

あなたにはとある世界に転生してもらいます。

今、神々の間で行われている《代理戦争》の駒……一兵士としてこれから送る世界で修行していただきます」

いやいやいやいや。

突然何言ってるの？

それにいまこの子、俺のこと《駒》って言ったよな？

聞き間違いじゃないよな？

「絶対嫌」「あなたに拒否権はありません」……は？」

何言ってるの？

「もう、あなたは私の物なんです。」

さつき魂を固定したと言いましたよね？

あれは神である私の力でああなたの存在の力を、事象を書き換えたいんです。

あなたを《代理戦争》に出すためには神の眷属という扱いにしなければならぬので申し訳ありませんが強制的に転生していただきます。

安心してください。

あなたには神である私の権限で強力な魔法をつかえるようにしておきますので」

無理無理無理無理。

「無理だから「私には嫌いな言葉が3つあります。

無理、疲れた、めんどくさい。

この3つの言葉は人間の能力を落とすよくない言葉です。

私とあの子達の前では口にしないように」…っておい」

「聞けよ、人の話を!!」

自称神の美少女は俺の言葉を見殺して俺の前でジャンプし、空中に浮かんだ。

「期待してますよ、私の歩…兵士さん？」

「お前、人を駒みたいに言うな——!!」

「あ、忘れてました。

私の名前はアポロ。

あなたの名前は何でしたっけ？

えっと…ゴミさん」

「人をゴミ呼ばわりすんな——!!

俺の名は、八神^{やがみ みつる}光だ!」

この自称神様、絶対DSだろ。

「DSですけど?」

「認めた!?!」

もうやだ…。

「さあ、時間ももつたいないですしさつさとゴミを追い出し……転生の儀式をはじめましょうかー」

「いつか……土下座させてやる」

「そうですか。」

では100000年後になりますね」

「長っ!？」

「動かないでくださいね?」

そう言っただけで彼女は俺の目の前に一瞬で現れて顔を近づけてきた。

近くで見るとやはり可愛い(顔は)。

そんな少女に近寄られてドキドキしないはずない。

「ふっ緊張してますね?」

「そりゃ初めてだからな」

「そうですか。」

では私がリードしてあげますね!」

顔と顔が近づき俺と彼女は一つになった。

「っって痛てええええええ——!!」

俺の眼球に彼女の指と中指が突き刺さっている。

いわゆる目潰しというやつだ。

「我慢してください。」

攻められるの大好きでしょう?」

ガンガンいきますよ!」

「うぎゃああああああ」

「転生の儀式には痛みか興奮が必要です。」

本来ならキスでいいんですがドMな光君のために《初めて》の目潰しにしてみました」

そう言っただけで彼女が指を動かした。

「ほらほらグリグリされたんでしょう?」

もっとしてあげますからね」

指を回転させる自称神。

「みぎやああああああ」

ちなみに俺にM属性なんか
ないっつらない。

痛いだけで快感なんてない。

本当だよ？

この悪夢のような儀式はこのあと30分ほど続いた。

「さて、とづくに終わってましたけど楽しくて29分も余分に続け
ちやいましたねー。

光君と私の相性はいいんですねー。

また今度やりましょうか・」

「もうやりたくねえよ!!」

駄目だこの神。

はやくなんとかしないと。

「転生はもうできます。

あなたには4つの力を与えておきます。

一つ目は身体強化。

二つ目は答えを知る者。アンサー・トーカー

三つ目は膨大な気と魔力。

具体的に言えばネギま!のラカンとナギの10倍の量。

そして四つ目は……。

マギア・エレベテ
闇の魔法です。

使いすぎに注意してください。

今のあなたでは呑み込まれます……闇に」

回想終了。

で、転生して16年たったわけだが。

うん。

どうしてこうなった？

爆弾付き自転車を漕いでると目の前に見知った奴がいた。

あれは!?

「金次———!!」

武偵憲章1条だ!」

「ん？」

光かおはよ……何だその後ろの!」

俺の前方で自転車をのんびり漕いでいるのは俺の親友（ここ重要）
の遠山とやま金次きんじ。

同じ高校に通う同級生でこの世界の主人公だ。

俺の後ろを見て絶句する金次。

「少しお前にやる。

お互い助け合おうぜ!」

「断る!」

武偵憲章4条に武偵は自立せよってあんだろ!」

「うるせ———!!」

1条に仲間を信じ、仲間を助けよってあんだろが———!!」

「その馬鹿達、さっさと頭を下げなさい!」

お互いに迫るセグウェイを押しつけあつてると上から少女のアニメ声メが聞こえた。

その少女は長いピンクブロンドの髪を揺らし、その髪をツインテールに結んでいる。

背丈はよく見えないがおそらく小学生に間違えられるくらいしか

ないんだろうな。

その少女の名は、神崎・H・アリア。
上から降って来る少女を見て思う。

ああ。

やっぱり。

この世界は——。

『緋弾のアリア』の世界なんだな、と。

装填1

闇の魔法《マギア・エレベア》

“武偵”

武偵とは凶悪化する犯罪に対抗して作られた国際資格であり、武装を許可され逮捕権を有し報酬に応じ“武偵法”の許す範囲内においてあらゆる仕事を請け負う——いわゆる便利屋である。

そして彼らを育成するための教育機関が東京湾岸部に存在する。

東京武偵高——通称、“学園島”

俺、八神 光は転生者だ。

転生先のこの世界の知識を幸運な事に持っている。

前世では漫画やアニメ、ラノベが好きで《緋アリ》も読んでた。だから原作が始まるこのシチュエーションもアニメで見ている。

金次のチャリに爆弾が仕掛けられ、空から振ってきたインなんとかさんのような幼児体型の少女に助けられるのが物語のスタートのはずだ。

はずなんだが…。

何で俺のチャリに仕掛けられてるんだよ!?

俺はこの世界の主人公ではないはずだ。

まさか、崩壊してる!?

「おい、金次。

お前元強襲科アサルトのSランクだろ!

なんとかしろ」

隣を並走する金次に助けを求める。

「お前こそ、現探偵科と超能力捜査研究科でSランクだろ！
何とかしろよ」

金次はそう言い返してきた。

そう、俺は転生時に与えられた能力とこの10年近い特訓の成果により《天才》といっても過言ではない程の能力と評価を得ていた。

《探偵科》ではアンサー・トーカーの能力により未解決事件の捜査を指揮し、SSRでは魔術（法）の取得、改良、開発を行っている。

最初は失敗し続けたが今ではだいぶ上手に魔法を使えるようになった。

まあ、あくまでも普通の魔法はだけどな。

闇の魔法はまだまだ完全には制御できない。

いわば《不完全体》だ。

金次とどうしようか言い争っていると上の方から声が聞こえた。

可愛らしい、アニメ声が。

——空から女の子が振ってくると思うか？——

「ほら、その馬鹿二人！

さっさと頭下げなさいよ!!」

——それは不思議で特別なことが起きるプロローグ——

見上げると女子寮の屋上に誰かいる。

いや、わかってる。

彼女の名は——

屋上から彼女は飛び降りた。

手に持つコルトガバメントを二丁拳銃で水平撃ちし俺と金次を追い回すセグウェイ（UZI）を破壊していく。

だが数が多い。

彼女の持つ銃の装弾数では全て破壊するのは無理だ。

誰かが援護しないと。

誰が？

決まってるだろ、俺しかねえよな。

「おい、そこの桃まん女。

このチャリには爆弾が仕掛けられている。

おそらくだがそつちのネクラ男のチャリにもな」

「誰がネクラだ！

げっ…本当にありやがる」

金次は俺の指摘によりようやく気づいたようだ。

「減速すると爆発するタイプの物だ。

俺は自分でどうにかするから金次の事は頼んだ！」

「え!？」

「待て、何をやるつもり…アレをやるのか?」

どうやら金次は察しがついたようだ。

アリアはそんな俺と金次を見てから頷いた。

「何をやるつもりか知らないけどここは信じてもいいのね?」

「ああ。

武偵憲章1条。

仲間を信じ、仲間を助けよ…だ」

金次を助けようとアリアはパラシュートを開いて金次の上に落下していった。

金次はアリアの太腿に挟まれながら自転車から体を浮かされていった。

俺はまずは爆弾の動作を停止させるために魔法を放った。

「来レ氷精。

大気二満チヨ。

白夜ノ国ノ凍土ト氷河ヲ…」

喰らいやがれ。

俺は発動させた魔法を自分と金次の自転車に向けて放つ。

クリュスタリザイオー・テルストリス
「ゴオル 大地!!」

自転車はアスファルトごと凍りついた。

俺は技を発動させた際に《虚空瞬動》により上空へと退避していた。続けざまに金次やアリアを狙うUZIを破壊する為の魔法を放つ。

「来レ氷精。」

爆ゼヨ風精…」

アリアが破壊できなかった4体のセグウェイに向けて放った。

ニウイス・カース
「氷 爆」

凄まじい爆風が起こる。

氷の爆発によって俺も吹き飛んだ。

ヤバイ。

威力調整ミスった。

元の場所に戻ったがそこには破壊したセグウェイの残骸と俺と金次の自転車の残骸しかなかった。

金次とアリアの姿はどこにも見当たらない。

これが原作通りなら体育倉庫に飛ばされてるはずなんだが。

「行ってみるか」

俺はアリアたちが飛ばされた方角へ《瞬動》を使って移動した。

「…へ…へ…へンタイ——!!」

体育館倉庫に着くと中から少女の悲鳴が聞こえてきた。

どうやら金次は《やっちまった》らしい。

さて、原作通りならあとは金次一人で十分なんだが。

…まじっすか!?

思わずうなだれた俺は悪くないと思う。

なぜならさつき破壊したセグウェイが30体もきやがったからだ。

「おいおいおい、《武偵殺し》さんよはっちゃけすぎだろ!!
あとであの子にはお知りペンペンしちやる」
なぜか九州弁が出たがそこは気にしないでほしい。

「さて、アレを使いますか」

俺はセグウェイの前に飛び出した。

ガガガガアアアア――

セグウェイからは9mmパラベラム弾が勢いよく発射された。

俺は歩法の一つ。

《瞬動術》を使いセグウェイの背後に回りこんだ。

銃弾は誰もいないところを通過した。

俺は《遅延》させていた魔法を発動させる。

「開放！雷の暴風：固定」

掌を開いたまま空中で渦巻く魔力をその場に留まらせる。

「掌握」

留まらせた魔力を握りつぶし体内に吸収させる。

「魔力充填

アルマテイオーネ

術式兵装……」

体が白く発光し雷撃が迅る。

アギリタース・フルミニス

「疾風迅雷」

フオ――ンという風を翔る音が聞こえると一筋の白き閃光が
迅ばりセグウェイを、それに搭載されているUJI(サブマシンガン)
を次々と破壊していく。

残り7体が残ったがあえて破壊せずにこの場に来たもう一人のS
ランク武偵に一任する。

「遅せえよ……金次」

「悪い、すぐに終わらせる」

金次は向かっていった銃弾を体を大きく反らしてやりすごし、自身
が持つ銃《ベレッタM92Fs》を連射した。

金次が放ったたった7発の銃弾はUJIの銃口に吸い込まれ次々とUJIは破壊されていった。

「今のがへ銃口撃ちか…さすがは元Sランクだな。

人間じゃねえ」

「お前が言うなよ!?!」

金次の突っ込みはかなり深く俺の心に突き刺さった。

装填2

強猥？それは誤解だ!!

折り重なるようにして倒れたセグウェイたちが全て沈黙しているのを確かめると、俺達は体育倉庫の中に入ってしまった。

中ではアリアが跳び箱の中に入っている。

跳び箱から上半身出した状態で『今、私の目の前で何が起きたの?』という顔をしている。

俺達と目が合うと、ぎろー!と睨み目になって、もぐら叩きのモグラみたいに跳び箱の中へ引っ込んでしまった。

何だか、怒っているようだが…ああ、そうか。

確か、金次を助けた際にベルトのホックが壊れたんだよな…。

しかも金次がヒステリアモードを発動させた際に爆風でブラウスが捲れて『(寄せて上げる)偽造ブラ』を不可抗力とはいえ、直視されたのも怒りの原因の一つなんだろう。

つまり原因は。

「死ね、金次!!」

「うおおお…危ねえ!」

俺が繰りだした手刀を間一髪で避ける金次。

ヒス金だからこそ回避できたんだろう。

「突然何しやがる!」

「うるせー、このロリコン野郎が——!!」

幼女に手をだしてるとんじゃねえ——!!」

「だ、誰が…誰が…幼女ですって?」

あ、やばい。

地雷踏んだ。

「ま、待て落ち着け。

冷静になろう、な…?」

爆弾処理班の心境で爆発させないように慎重に言葉を選んで誘導させる。

「アリアならさっきのセグウェイどうにかできたよな?」

《話題逸らし》を使い強引に話題を変えた。

「と、当然よ。あんなおもちゃぐらい、あたし一人でも何とかできた。これは本当よ。本当の本当」

強がりながらアリアは、ゴソゴソ。跳び箱の中でうごめく。

幼女の生着替えタイム（服の乱れを直す）か。

誰得なんだ、この展開。

「そ、それに、今さっきの件をうやむやにしようたって、そうはいかないから！」

今さっきの件？

「えつと…？」

「あれは強制猥褻！れっきとした犯罪よ！」

なんだ…金次がしでかした件か。

幼女発言の責任取らされると思ったぜー。

よかったー。

「それは悪かったな。

この馬鹿なら煮るなり、焼くなり好きにしていいいから」

「おい待て、見捨てんな！」

金次が非難の声をあげるが俺は金次にただ一言放つ。

「ま、頑張れや〜」

親友？武偵憲章1条？

何それ？

食えんの？

「こうならば…道連れだ…」

金次は防弾制服の内ポケットから何か（おそらく胡椒）が入った壘を取り出し、俺の顔に振りかけやがった。

ま、まずい———と思つたときにはもう遅く俺は盛大なくしゃみをしてしまった。

「はっくしゅん———！！」

———ぶおおおおおん。

凄まじい突風が巻き起こり体育倉庫の中は物が散乱した。

「な、ななな…何すんのよ——この、度ヘンタイ!!」
風が収まると下着姿のエリアが顔を真っ赤にさせていた。

「さっ、ささささっ…最低——!!」

このチカン！人でなし！」

ぼこぼこぼこことグーパンでおもいつきり殴ってくるエリア。

「あんたたち、二人とも強狼の現行犯で逮捕するわよ！」

「今の（あれ）は誤解だ」

声をそろえて抗議する俺と金次。

俺の悪い癖というか弱点。

ちよつとした刺激（主にくしゃみ）で魔力が暴発してしまい、周囲の人間に迷惑をかける。

なぜか暴発した魔力は武装解除呪文となって周りにいる人間、特に女子の服を脱がしてしまうというどこぞの薬味少年みたいな事をしてしまうのだ。

「今の（あれ）は不可抗力というやつだ（よ）。理解してほしい」
声をそろえて抗議すると金次は自分のベルトを外して、エリアが入っている跳び箱に投げてやった。

「あ、あれが不可抗力ですって!？」

エリアは金次のベルトで留めたスカートを抑えつつヒラリと跳び箱から出てきた。

ふわ。

見るからに身軽そうな体が、俺達の正面に立つ。

やはりエリアはちっこかった。

さすがは万年145cm。

これはどうみても小学生だろう。

脳内で『エリアちゃん10歳』というフレーズが出てきたがなんとか笑い出すのをこらえた。

「ハ、ハッキリと…あんた…!」

エリアは金次を見て怒り心頭という顔をしている。

ぎゆう、と拳も握りしめている。

そして、わわ、わわ、わ。ローズピンクの唇を震わせてから、がい

ん！言葉を発する勢いづけのためか床を踏みつけた。

「あ、あたしが気絶している隙に、ふ、服を、ぬ、ぬぬ、脱がそうとしてたじゃないっ！」

「ウワーキンジクン、マジサイテー」（棒読み）

「誤解だ！」

「そ、そそ、それに、む、むむむ」

がいん！

また床を踏んだよ。

「胸を見てたあああつ！これは事実！強狼の現行犯！」

頭から火が出そうな勢いでアリアは続ける。

「そっちの度ヘンタイは公衆の面前で服脱がした！」

強狼！強狼の現行犯で風穴空けてやる！」

今度は俺を睨みつけて怒ってる。

耳まで真っ赤にさせてるよ。

事故（道連れ）なのに。

「よしアリア、冷静に考えよう。いいか。俺達は高校生だ、それも今日から2年だ。「待て、金次！」中学生を脱がしたりするわけがないだろう？」

年が離れすぎだ。だから——安心していい」

「遅かった……」

がくりと項垂れる俺。

そんな俺を不思議そうに見つめる金次。

おそろおそろ、アリアの顔を見ると、アリアは、わああー！という

口になって両手を振り上げた。

声が出てないのは絶句してるからだろう。

そして——ぎぎん！と涙目になって俺達を睨みつける。

「あたしは中学生じゃない!!」

がすんっつっ！踏みつけた床がとうとう弾けて木片が飛んだ。

——やばいな。

金次の馬鹿のせいで地雷を踏みまくってる。

「……悪かったよ。インターンで入ってきた小学生だっ……お前はも

うしやべるな——!!!

右腕開放!魔法の射手、

コンウエルゲンテイア
雷の

101矢!!!《フルグラリス》一雷崩拳!!!

ぎやあああああ——!!!

言ってはいけない《地雷》を踏みまくる金次にたいし、俺は武力行使に出た。

風の魔法、それも電撃系の初歩の魔法だが拳に乗せて放てばもの凄い威力が出る。

電撃系なら相手を麻痺させることもできるしな。

「まったく、金次の馬鹿は。」

いくらアリアが小学生みたいな形してるからって…」

はっ!?

しまった。

「…こんな…やつら…助けるんじゃ、なかった」

ばぎゅばぎゅん!

「うわああああつ!」

足元に撃ちこまれた2発の銃弾に、俺は青ざめた。

撃ちやがった。

それも二丁拳銃で!

「あ。た。し。は。高。2。だ。!!!」

一難さってまた一難。

まあ、この学校《武偵高》なら日常茶飯事だから慣れてるけどなー。

「待てっ!!」

まだ《闇の魔法》が続いていた俺は、至近距離から撃ってきたアリアに飛びかかり、その細腕を両脇に抱え込んで後ろに突き出した。

ばりばりばりっ!がきんがきんっ!

アリアは反射的に引き金を引き、背後の床が着弾した音を上げる。

2丁とも弾切れになった。

そのまま取っ組み合いになったが

「——んっ——やあつ!」
くるっ。

体をひねりアリアは柔道の跳ね腰みたいな技で、体格差をものともせず、俺を投げ飛ばした。

「ぐっ——!?」

さすがはSランク武偵。

格闘技もうまい。

「逃げられないわよ!」

あたしは逃走する犯人を逃がしたことは!一度もない!

——あ、あれ?あれ、あれ?」

アリアは叫びながらスカートの内側を両手でまさぐった。

「探し物はこれか?」

さつき投げ飛ばされたときにスっておいた弾倉を掲げ——アリアから遠い場所へ投げつける。

「——あ!」

遠くの茂みに落ちていくそれを目で追ってから、アリアは無用になった拳銃を上下にブンブン振り回した。

原作でも同じみのやつたな!やつたな!という動作だ。

「もう、許さない!ひざまずいて泣いて謝っても、許さない!」

拳銃をホルスターに収めるとセーラー服の背中に手を突っ込み——じやきじやき!

そこに隠していた刀を、二刀流で抜いた。

「糞——!!少しは人の話を聞けよ!

サギタ・マギカ魔法の射手 セリエス・ルークス光の3矢!」

「強狼男は神妙に——つわおきやつ!?!」

アリアは俺に向かって駆け出てきたが俺が咄嗟に放った魔法に驚き真後ろにぶっ倒れた。

「こ、この…みやおきやつ!」

立ち上がろうとしてまた倒れた。

いつの間にか意識を取り戻した金次がアリアの足元に銃弾をばら撒いていた。

その銃弾を踏み、両足が真上を向くくらい勢いよくコケている。本当に漫画みたいだ。

「逃げるぞ、金次!!」

「ああ。ごめんよ」

金次とともに駆け出すと、背中で、彼女の捨て台詞が聞こえた。

「この卑怯者! でっかい風穴——空けてやるんだからあ!」

これが俺、やがみ みつる八神 光&遠山金次と。

後に『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、神崎・H・アリアの硝煙のニオイにまみれた、最低最悪の、出会
いだった。

装填3

緋色と夕陽とクラスと…。

(…はあく、またやつちまったよ…)

結局出れなかった始業式の後、《闇の魔法》が解けた俺とHSS《ヒステリアモード》が解けた金次は鬱々とした気分マスターズで教務科へ事件の報告をしに向かっていた。

「おや、ミツル君とキンジ君じゃないか。

どうしたんだい？」

教務科の扉をノックし、弾が飛んでこないか身構えてると中から扉を開けられて中年の男性が出てきた。

眼鏡が似合うその男性は強襲科の担当教師で素行の悪い生徒達からは《テスメガネ》、《笑う死神》などと呼ばれているが奇人変人が多い武偵高の教師の中でも比較的マトモな教師だ。

「おはようございます。高畑先生」

挨拶をすると高畑先生は笑いながら挨拶を返してくれた。

「おはよう。」

始業式は終わったよ？

クラスに早く行った方がいいよ」

「それが…チャリジャックにあいまして」

「朝から鬼ごっこし(UJI付きのセグウェイに追い回され)て最後は花火上がり(爆弾でチャリ吹っ飛び)ました」

「それは…災難だったね。」

怪我とか大丈夫だったかい？」

「俺は平気ですが、金次は(精神的に)駄目そうです」

「…何がお姫にしてあげよう、だよ。」

何お姫様だっこしてんだよ俺は…

ああ、もう死にてえ…」

《あのこと》を思い出したのか頭を抱えて項垂れる金次。

「てなわけで…報告しにきました」

「…ああ、うん。」

「苦勞様」

哀れみの視線を金次に向ける高畑先生。

「一応武偵殺しの模擬犯の線で捜査を始めるように伝えるけど…難しいだろうね」

高畑先生が俺達を書いた書類をチェックしながら自身の見解を述べた。

「今回の犯人は狡猾で計画性があると思うな。」

セグウェイを遠隔操作して武偵を狙う事により自身の存在を武偵殺しに向ける手法といい、武偵殺しと同じ爆弾を使ってる事から武偵殺しを崇拜している愉快犯かあるいは関係者のどちらかだろうね」

「さすがは高畑先生。」

やはり愉快犯ですよね?」

金次は武偵殺しのことを完全に愉快犯だと思っている。

「先生。」

本物という線は?」

真相を知っている俺はそう言ってみた。

「ないだろ」

金次は何言ってるのこイツはみたいな顔をしてるが俺は真剣な表情で高畑先生を見つめる。

「う〜ん。」

その可能性は低いと思うんだけど、だけど個人的にはまだあの一連の事件は終わってないと思ってるよ」

「え!?」

何ですか?」

高畑先生が武偵殺しを疑ってる事に驚く金次。

「金次。」

可能性事件って知ってるか?」

「可能性事件?」

なんだそれ?」

俺がそれを口にした時高畑先生の目が僅かに開いた。

「ミツル君…それは」

「さあな。」

武偵ならばは自分で調べろ」

高畑先生は何かに気づいたようだが《それ》を口に出さない。

「二人とももうすぐHRが始まるからもう行きなさい」

「あ、そうだ。」

先生超研の実験室放課後に使ってもいいですか？」

「また、魔法の練習かい？」

研究熱心だね。」

うちの強襲科の生徒にも見習せたいね。」

うん、わかった。」

SSRの担当教師の先生には僕の方から言っておくよ。」

壊さない程度に使ってほしいな」

「…善処します」

使う度に施設を破壊してきた前科がある身だからそう言うしかなかった。

掲示板に出てた二年A組の教室に入り適当な席に腰掛けると爽やかイケメンの不知火が話しかけてきた。

「おはよう。」

今日はいつもより遅いね。」

珍しく寝坊したのかな？」

「おはよう…ああ、おかげで人生初の貴重な体験ができたよ。」

大人の階段を三段飛ばして上がった感じだ」

「…な、なん…だ…と？」

金次に話しかけて一蹴された大男の武藤が大袈裟に言った俺の言葉に反応してきた。

「光お前、ま、まさか…星伽さんと。」

お前は俺達の同胞だと思ってたのに…。」

糞、金次のたらしが光までうつったか」

「いや、俺を金次みたいなたらしと一緒にすんなよ。」

それと武藤、白雪とはなにもないからな。」

俺と金次は白雪にとつてたんなる友人と幼馴染(恋人?)の関係だ」

「そ、それじゃ俺にもチャンスが…」

「いや、それはない(んじゃないか)な」
重なる俺と不知火の声。

「ちきしょー!!?」

泣き叫ぶ武藤。

そんな馬鹿騒ぎをしているとチャイムが鳴り、担当になる教師が入ってきた。

で、HRが始まり自己紹介がはじまったんだが…。

「先生、あたしはアイツらの隣に座りたい」

俺と金次がクラス分けされた二年A組の、最初のHRでー

気絶しそうな程不幸なことに同じ二年A組だったピンクのツインテールが、いきなり金次と俺を指してそんなことを言ってきた。

クラスの生徒達は一瞬絶句して、それから一斉にこつちを見て…
わあーつ!と歓声を上げた。

俺はーただ呆然としていた。

ありえん。

ありえないだろ…これは。

何で金次だけじゃないんだよ!!?

先生は「うふふ。じゃあまずは去年の三学期に転入してきたカーワイイ子から自己紹介してもらっちゃいますよー」などと前置きをしたからてつきり原作通り金次の隣に座るものとばかり思ってたのに…。

「な、なんで…だよー!」

ようやく出てきた声で、呟く。

「よかつたなキンジ、ミツル!」

なんかしらんがお前らにも春が来たみたいだぞ!先生!オレ、転入生さんと席代わりしますよ!」

武藤の馬鹿が使わなくてもいい気を使って俺と隣だった席をアリアと代わろうとする。

「あらあら。最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤君、席を代

わってあげて」

事情を知らない先生は馬鹿が出した案を即採用してしまう。

わーわー。ぱちぱち。

教室は拍手喝采を始めてしまった。

俺の隣に着席したアリア。

「キンジ、これ。さっきのベルト」

アリアがちっこい身長を伸ばして手に持つベルトを高く掲げた。

キンジの席は教壇がある列の後ろで俺とアリアからは離れている。

「理子分かった！」

分かっちゃた！ーこれ、フラグばつきばきに立ってるよ！」

俺の正面に座っていた理子が、ガタン！と席を立った。

「キーくん、ベルトしてない！そしてそのベルトをツインテールさんが持ってた！

！
これ、謎でしょ謎でしょ!!?でも理子には推理できた！できちゃた

あれ？でもそくするとミツくんは…あ、そうか。そっか。

キーくんは彼女の前でベルトを取る何らかの行為をした！

そこにミツくんが彼女を訪ねてきて修羅場になったんだね！

キーくとミツくんが彼女を巡って対立、彼女は二人とも愛してたんだよ！

で、ケンカの後には仲良く三人で《いいこと》したんだね？

キーくんはその時彼女の部屋にベルトを忘れてきた！

つまり三人は熱い熱い、恋愛の真つ最中なんだよ！」

馬鹿理子。お前。

だがここは馬鹿の吹きだまり武偵高。

「キ、キンジがこんなカワイイ子といつの間に!!?」

「影の薄いヤツだとおもってたのに！」

「女子どころか他人に興味なさそうなくせに、裏でそんなことを!!?」

「フケツ！」

「光君はそういうタイプじゃないっておもってたのに！」

「ガツカリだよ！」

「サイテー！」

「先生、遠山君と席を代わります」

新学期なのに、息が合いすぎだろお前ら。こういうことになることになると、不知火が気を使ったせいで金次もアリアの隣にさせられた。ザマアみろ。

「お、お前らなあ……」

すぎゆぎゆん！

鳴り響いた二発の銃声が、クラスを一気に凍りつかせた。

真つ赤になったアリアが、例の二丁拳銃を抜きざまに撃つたからだ。

「れ、恋愛だなんて……くっつだらない！」

翼のように広げられた両腕の先には、左右の壁に一発ずつ穴が空いていた。

チンチンチンチーン。

拳銃から排出された空薬莖が床に落ちて、静かさを際立たせる。

馬鹿理子は前衛舞踏みたいなポーズで、ズズツと着席した。

理子の馬鹿には朝の分も含めて後でお尻ペンペンしちよる。

武偵高では、射撃場以外の発砲は『必要以上にしないこと』となっている。つまりは、してもいい。

だが、始業式の朝からいきなり撃つたのは彼女が始めてだろう。

「全員覚えておきなさいー！そういう馬鹿なことを言うヤツには……」

それが、神崎・H・アリアが最初に発したセリフだった。

「風穴あけるわよー！」

「来れ」

「虚空の雷 薙ぎ払え」

「雷の斧!!!」

標的ターゲットの丸太が俺の放った魔法で真つ二つに割れた。

五時限目、SSRの超能力実験室内で俺は魔法の練習をしていた。

今のは、取得中のハイシェント呪文上位古代語魔法だ。

威力は中の上。

技のキレや発動までの時間が長くまだまだ実践では使えそうになり。
い。

「はあ。」

なんか今日は疲れたな」

全ての授業と自主練習を終えて帰宅しようとSSR棟を出るとソイツはいやがった。

「遅い！」

「レディを待たせるなんて紳士失格ね」

夕陽を背に浴びて緋色に輝く：神崎・H・アリアがな。

装填 4

《双剣双銃》VS《闇の魔

法》使い

武偵高では1限目から4時限目まで普通の高校と同じように一般科目の授業を行い、5時限目以降、それぞれの専門科目に分かれての自習を行うことになっている。

5時限目、俺は超能力捜査研究科の超能力実験室で魔法の練習をしていた。

来れ

虚空の雷

薙ぎ払え

雷の斧!!!

雷鳴が迅り、雷光を纏った斧のように鋭い一撃が標的の丸太を切り裂く。

雷系の上位古代語魔法。中の上程度の威力だが連携技をしやすい。

「ちっ…発動まで時間がかかるな。

今練習しているこの魔法は、雷の暴風より強力な上位古代語魔法だ。

その威力は上位古代語魔法とあってかなり高いが、取得は難しい。取得は難しいが使えればかなり強力な武器になる。

まあ、取得が難しいといっても呪文の詠唱が短い分、まだまだ改良の余地があるな。

練習で慣れるしかないか…。

闇の魔法で装填させることができるようになるのは当面先だな。

次は『闇き夜の型』を起動させて…よし、いける」

俺は闇の魔法、術式装填の前の段階である闇のモードを起動させ、自身にこれから《装填》する魔法を発動させた。

「来れ 深淵の闇

燃え盛る大剣!!

闇と影と憎悪と破壊

復讐の 大焔!!

インケンダント・エト・メ！・エト・エウム
我を焼け 彼を焼け
シント・ソールム・インケンデンテース
其はただ焼き尽くす者
インケンディウムゲヘナエ
奈落の業火!!!
スタグネット

固定!!!
コンプレクシオー
掌握!!!
プロ・アルマティオーネ
術式兵装」

魂と肉体を喰わせる狂気の技法。闇の魔法。

「獄 炎 煉 我」

俺の身体は黒く染まり闇の焰を体内に取り込んだ。

身体から黒い炎、いや…オーラのようなのが発生し見るものを萎縮させるような暗黒を纏った姿に変貌した。

「獄炎煉我…よし、問題ないな。」

出力をもう少し上げられれば…いや、危険か…」

気がつけば6限目が終わり放課後になっていた。

自主練習を1時間くらいやり、今日は朝からいろいろあったせいか疲れ果てた俺はSSR棟を出て自室の第3男子寮に向かおうとした時、SSR棟の出入り口前に立っていたピンク色のツインテールの少女に気づいた。

武偵高には、特殊な魔術を使う超偵として武偵登録している。

超偵とは超能力や魔術（魔法）、異能を使う武偵の事を示す。

それぞれの専門科目にはランクがあり、FからSまでであるが通常はFは格付けされないランクで、Sランクは《超人》といってもいいくらい人間離れしている奴らなる。

通常のランクはE（落ちこぼれ）からA（優等生）が一般的だと俺は思っている。

Sより上にRランクなんていう世界中に7人しか格付けされていないランクも存在しているがあれは《人外》だと俺は思う。

Aランクですら敵対したくないのに（ランク的にはAランクは東になつてもSランクには敵わないが）Sランクみたいな超人との敵対は

避けたい。

だが、俺をこの世界に送り込んだドSの女神様は甘くなかった。
何が言いたいかという俺の目の前に『超人武偵』の一人。

神崎・H・アリアがいた。

「遅い…淑女を待たせるなんて紳士失格ね！」

出会い頭からツンツン口撃をしてくる万年145cm。

「…な、なんでいるんだよ？」

俺は思わず項垂れてしまった。

「ここにアンタがいるからよ」

「答えになつてないだろ!?!」

会話のキャッチボールができてない。

「アンタがSSRで訓練してるって聞いたからわざわざ放課後まで
待ってたのよ」

だ・か・ら・なんで俺を待つんだよ☒

「俺はお前に用はねえよ」

「あたしはあるのよ」

アリアは太ももからモロに見えてる（武藤いわくガンちら）銃を抜き放った。

ガガン。

という銃声が鳴り響き俺の右胸へ銃弾が当たった。

「…やっぱりね」

いきなり銃弾をぶつ放しやがったアリアは《こうなる事を》確信していたかのように冷静に落ち着いて銃弾の最期を見送った。

俺の右胸に向けて放たれた銃弾は右胸に当たる直前で見えない《壁》に阻まれて地面へ落下した。

「いきなり銃弾ぶつ放しといて言うことがそれか!?!」

嫌だもう、俺は金次みたいなドMじゃないからアリアみたいなツンデレの相手は無理だ。

「どうせ効かないんでしょう?」

オイ、効かないなら銃撃してもいいのか？
もう少し常識を持ってくれ!!？

「ここは日本だ。」

アメリカカみたいに銃撃で挨拶する文化はねえ！」

ほんとこれだから銃撃^死斬撃^死依存症^固の強襲科の奴らは嫌なんだ。

「うるさい、うるさい、うるさい。」

アンタ銃撃しても死なない変態でしょー。

愚痴愚痴文句言ってるんじゃないわよ！」

ひでえ、酷すぎる。

何この扱い？

「……何しに来たんだよ」

アリアに言いたいことは沢山あるがまずは一番聞きたかった質問をした。

「わからないの？」

「わかるかよ!!？」

いきなり来て銃弾ぶつ放す奴の行動なんかわかるか。

俺は読心術を使える超能力者や魔法使いじゃねえ…いや、魔法使い
だけど。

アリアはそんな俺の態度が気に入らなかったのか俺に人差し指を
向けて聞きたくなかった言葉を言いやがった。

「アンタ、私の奴隷になりなさい」

今なんて言った？

土鈴になりなさい？

どれ胃？

……聞き間違いだったらいいな…。

アリアはパートナーを探している。

自分の《母親》を救う為に。

あの組織に挑む為に。

たった一人で今まで戦ってきたんだろう。

アリアのパートナーが務まる人間なんてそうそういるもんじゃないからな。

世界中のどこかにいるかもしれない未来のパートナー。

いる確約もなしに今までたった一人で戦ってきた。

そして今日、偶然にもパートナーになりそうな候補者が見つかった。

人付き合いが苦手なコミュニケーション力ほぼ0のアリアはパートナーにする為に無茶苦茶な行動に出た。

そこまでは解る。

だがな…。

なんで俺が奴隷宣言されてるんだ!?!?

母親の件には同情する。

助けてやりたいとも思う。

だけど…

「だが、断る」

「なんでよ!?」

「アリアがそのちっこい背を一生懸命伸ばして抗議の威嚇射撃をおこなってきた。」

銃弾は上空に乱射される。

「いきなり来て銃弾ぶつ放しといて拳句の果てに奴隷になれだ？」

「アリアお前いくらコミュ力0でもこれはねえよ!」

「本当どういう教育されてきたんだ？」

「なんでよ…嫌だ!ミツルはアタシのもんだ。」

「あたしの奴隷よ!これは決まり、決まりったら決まりよ!」

「ただ理不尽なんだよ…。」

「決闘よ!」

「負けたら《勝った方の言うことをなんでも聞くこと》、決闘しなさい!」

「いいのか？」

「俺は金次と違って女の子でも容赦しないぜ?」

「望むところよ!」

「でっかい風穴空けてやるんだから」

「んで、強襲科の施設、黒い体育館へとやって来たが。」

「おお、光。死に強襲科に来たのか？」

「じゃあさっそく死んでくれ!」

「うるさい、田中。お前こそ先に死ね!」

「あれ?八神君じゃない？」

「自由履修で来たの？」

「じゃあさっそく死んで」

「嫌だ！君こそ先に死んでくれ！」

「死ね死ね死ね死ね…」

「ヤンデレかよ？」

「あんたこそ死ねー」

強襲科の悪しき伝統で何故か挨拶代わりに死ねと言うことが決まっている。

だから俺はこんなところに来たくなかったんだ。

死ね死ね団の魔窟になんか、な。

「それじゃあ、始めるわよ」

アリアはそう言つて両手に大型拳銃、コルトガバメントを持ち銃撃してきた。

銃口から放たれた銃弾は俺の左肩に狙いがつけられている。

俺はあえて避けずにその銃弾を受け止めた。

「どうやってんのよ、それ？」

アリアは俺に銃弾が届かない訳を聞いてきた。

「敵対者に教えるか…？って言いたいところだけど特別に教えてやる。

俺は無詠唱で一部の魔法を使える。

んで簡単な防御魔法の一つ、フランス風花

バリエース・アエリアーリス風障壁を展開して防いだんだ。

この魔法は10トントラックの衝突にも耐えられるからな」

連続使用できないがそんな弱点まで教えてやる必要はないしな。

それに某白髪の少年のような曼荼羅の障壁は俺にはまだ使えない。

「銃弾が効かないなんてやりにくいわね」

アリアはそう言つて銃をしまい、今度は背に隠している日本刀（小太刀）を二本抜いて切りかかってきた。

「小太刀の二刀流と二丁拳銃の使い手か…へ双剣双銃カドの二つ名は伊達じゃないな」

俺は《闇き夜の型》を発動させ、回避すると闇の魔法 術式兵

装を展開した。

「アギテール・テネブラエ・アビュシイ
来れ 深淵の闇」

エンシス・インケンデンス
燃え盛る大剣!!

エト・インケンデイウム・カリギニス・ウンブラエ
闇と影と憎悪と破壊

イニミール・キティアエ・デーストールクテイオーニス・ウルテイオーニス
復讐の
大焰!!

インケンダント・エト・メル・エト・エウム
我を焼け 彼を焼け

シント・ソールム・インケンデンテース
其はただ焼き尽くす者

インケンデイウムゲヘナエ
奈落の業火!!!

スタグネット
固定!!!

コンプレクシオ
掌握!!!

プロ・アルマテイオーネ
術式兵装」

闇の炎を体内に取り込んだ。

「シム・フアブリカートウス・アプ・インケンデイオー
獄 炎 煉 我」

漆黒の闇に染まった俺を見てビビるアリア。
ガタガタ震えてる。

「そういえばアリアはお化け系苦手な方だったな。」

「解放!!?」
ウンデセクサーギンタ
スベリトウス・イグニス!!
59柱!!
コエウンテース・
炎の精霊
集い来りて

「魔法の射手
サギタ・マギカ
セリエス・イグニス
連弾火の59矢」

俺は震えてるアリアに向けて初心者レベルの魔法を放った。

魔法の射手の威力を示すと、矢一発分はストレートパンチ一発分に

相当する。

つまり俺はアリアに対し59発分のストレートパンチを放ったこと
となる。

それも《破壊属性》の火の魔法でな。

「みぎやあ…」

モロに俺の魔法をくらいアリアは吹っ飛んでいった。

「そこまで!!?」

勝者、八神。

誰か神崎を救護科アシビユラスまで連れて行ってやれや〜」
それまで黙っていた強襲科一の問題教師、蘭豹の号令で決闘はお開きになった。

「はあはあ…」

闇の魔法を使いすぎたせいかな、少し息苦しい。

「…ん、ぐっ…」

闇の侵食が進み始めたのか痛みもある。

「…こりゃあ、ヤバイな。」

あのまま戦ってたら負けたのは俺の方だな…」

闇の侵食、闇の魔法の副作用。

闇の魔法を長時間使えない理由がこれだ。

使いすぎれば最悪俺は…いやよそう…まだそうなるとは決まってる。
ない。

何故かアリアの事を、あの組織の事を考えてしまう。

さっきの決闘はアリアがビビらなければ俺は負けてた。

アリアの弱点は四つある。

桃まん（中毒）、浮き輪（泳げない為）、雷（ビビリ）、超常現象系（心霊系）だ。

アリアは性格はともかく見た目は悪くない。

性格がキツすぎて俺には無理だが…。

だが同じクラスメイトで武偵…仲間だ！

それに…。

「やっぱり放っておけねえしな…俺も甘いな」

『ある決意』をして、俺は痛む身体を動かし強襲科の体育館から退出した。

装填5

明日学校に行つてはいけない病

が：

アサルト強襲科の施設から出た俺は帰宅しようと歩き始めた。

闇の魔法を使いすぎた影響か身体がだるい。

アンビュラス救護科に行くことも考えたが闇の魔法の副作用魔素を治療できるかどうかかわからないし、闇の魔法について聴かれたくなかったので自宅療法することにした。

「おや、今帰りなのかい？」

正門を出たところで高畑先生に呼び止められた。

先生は白いスーツを着ていて、右手には買い物してきたのかビニール袋を持っている。

「ええ…先生は当直ですか？」

ビニール袋の中身がチラツと見えたがタバコとお茶、おにぎりなんかが入っていた。

「残業だよ。」

ちよつと調べたいことがあるんでね…。

本当は強襲科の方に訓練の様子を見ないといけなかったんだけど蘭豹先生が代わってくれてね。

蘭豹先生は本当にいい人だよ…お酒を飲んで暴れなければ…」

遠目になり、現実世界からまるで魂が離れたように放心する高畑先生。

何があつたんだ？

すごい気になる。

「高畑先生も苦勞してるんですね…。」

話変わりますがそういえば今日は雪姫先生の姿が見えないんですけど《出張》ですか？」

今日の訓練で何故か出沒しなかった超能力捜査研究科S一の問題教師のことを聞いてみた。

「ああ、エ…雪姫先生なら今日は《麻帆良学園》の方に行ってるよ。」

学園長先生主導の元、武偵と魔法生徒との交流事業の件で話し合いがあつてね。

明日には帰ってくる予定だよ」

武偵高の臨時講師、雪姫教諭。

金髪碧眼で顔も背もスタイルよいSSRが誇る美人教師（笑）。

美人だが、性格が超ドSで毒舌。

ニンニクとお日様がちよつと苦手。

強襲科アサルトの蘭豹、尋問科ダギョラスの綴、そして超能力捜査研究科Sの雪姫、この三人は武偵高生の間で武偵高三大危険問題教師として認知されている。

「明日、休もうかな…」

急に明日学校に行ったらいけない病が発症したかも…病気ならしかたないよね！

「雪姫先生から伝言預かってるんだけど…聞く？」

高畑先生が苦笑いしながら聞いてきた。

「聞きたくねえ…だが、聞かなかつたら後が怖い」

雪姫先生の訓練は常軌を逸してる。訓練と称して、極寒の雪山に放置したり、密林ジャングルに持ち物、武器なしで放りこんだり、パラシュートなしでスカイダイビングさせたり、風船を身体に括りつけて空に飛ばしたり…思い出しただけで軽くヒステリア・鬱モードになれる虐待をされてきた。

「えっと…では、『フハハハハ、元気にしてるか、少年よ？』

私がいらないからって泣いちやた子は誰かな？

私がいらないからって訓練サボつたらどうなるかわかつてるな？

明日には戻るからそれまでに上位古代語魔法《千の雷》使えるようにしとけよ？

できなかつたり、詐病で登校拒否したら…わかるよな？』…だそう
だ。

エヴァは相変わらず無茶振りしてくるね…」

高畑先生に哀れみが混じった目で見られた。

うう…もう、嫌だ。

涙がでてきた。

もちろん嬉し泣きじゃなく、血の涙が…。

《千の雷》とか無理ゲーだよ。

それも明日までとか、どんだけ糞ゲー仕様な要求してくるんだよ？
できるわけねえだろ。

まだ《雷の斧》すら取得中なんだぞ!?!?

俺がやる詐病計画バレバレかー。

俺が雪姫と出会ったのは武偵高の入学試験の時だ。

転生後俺は女神様の意思とは逆に『普通な人生』を『普通に』謳歌してやろうと思っていた。

ところが：俺が転生した新しい両親は二人とも『武偵』という帯銃、帯刀を許可された特別な仕事に着いてる人達で、長男として生まれた俺は幼児の頃からしたくもなかった修業をさせられて育った。

武偵になる気はなかったが初めて魔法を使った時に魔法を行使する楽しさにハマってしまった俺はどっぷりと魔法漬けの毎日が遅れる超能力捜査研究科に入りたくなり中学は武偵高の付属中に進学したんだ。

で、中学の時にちよつとしたとある事件が起きてそこへ応援として駆けつけてきた(何故か、緋アリの世界にいた)高畑先生に見出され、武偵高の入学試験で何故か雪姫にも気に入れ(目つけ)られた俺は、ほぼ毎日のように金髪碧眼美人教師(笑)に修業という名の訓練イッメを受けている。

「明日学校爆発しねえかな…」

残業がある高畑先生と別れた俺は武偵にあるまじき発言をしながら帰路についた。

とここで終わればどれだけよかったか。

帰宅した俺はソファに倒れこみ、すぐさま投薬し、気づけば爆睡してしまっていた。

原作ネギとは違い寝ればある程度の《魔素》は身体から抜ける。それでも抜けない《魔素》はアンサートーカーで導きだして製薬した特製の解魔素薬を飲んで寝れば体調は回復する。

どのくらいの時間がたったんだろうか。

俺は鳴り響くチャイムの音で目を覚ました。

ピンポンピンポンピンポンピピピピ……ドンドンドンとチャイムを無視していたら間隔が短くなりしまいには玄関のドアを叩かれた。

犯人はわかっている。

「あーもう、うるせえな!!?」

玄関のドアを開けると予想通りの人物達がいた。

「遅い！あたしがチャイムを押したら5秒以内に出ること！」

びしっ！両手を腰にあて、赤紫色カメリアのツリ目をぎぎんとつり上げた――

――制服姿の神崎・H・アリアと。

「悪いな光。俺は来たくなかったんだけどこいつが無理やり……あ、おい！アリア」

アリアに無理やりつき合わされたのか無気力状態の遠山金次が来訪した。

アリアは金次の静止を聴かずにづかづかと部屋の奥に入っていた。

俺の部屋の中へ、な……

「家主の許可も取らずに入るなんて……ありえねえ」

本当にどういう教育受けてきたんだ？

「光。悪いな……アリアの奴、光の部屋でもこれかよ……」

「まあ、雪姫先生である程度慣れてるからいいが、金次お前の彼女女だろ

！
「なんとかしろ!!?」

「どうやら原作通り、俺との決闘後にアリアは金次の部屋に行ったらしい。」

俺の時と同じで《奴隷宣言》されたんだろう。

「彼女じゃねえよ!」

光までそんな風に言うのか!!?」

俺が女を苦手なこと知ってるだろ!!?」

ああ。知ってる。

金次が持つ特殊な^H体質^Sを知ってるのは同年代と俺だけ(というところ)になってるが他にもいる。某怪盗少女とか無口スナイパーとか。ただ金次には言っていない。原作ブレイクする気はなかったから)だ。

遠山一族に代々遺伝される力。

^Hヒステリア・^Sサウアン・^Sシンドローム

通称ヒステリアモード。

この体質を持つ者は、一定量以上の恋愛時脳内物質βエンドルフィンが分泌されると、それが常人の約30倍もの量の神経伝達物質を媒介し、大脳・小脳・脊髄といった中枢神経系の活動を劇的に亢進させる。

その結果、ヒステリアモード時には論理的思考力、判断力、ひいては反射神経までもが飛躍的に向上し、うんたらかんたら…:どのようので、簡単にいうとこの体質を持つ者は性的に興奮すると、一時的に人が変わったかのようなスーパーモードになれるんだ。

常人の30倍の能力を發揮できるとかチートだよな。
もちろん、この体質には欠点がある。

「おい、金次。」

アリアに何をしたんだ?」

何をしたのはすでに《知ってるが》あえて聞いてみた。

「不幸な事故だったんだ…あれはどう考えても不可抗力だ!」

知ってるけど（性格はともかく）美少女と密着して、ブラ見て、お姫様抱っこしたんだろ、本当リア充金次死ね!!?」

「なんか、変な殺気を感じたんだが☒」

金次がそう言っつて首を捻つてるが無視して話題を変えた。

「で?」

俺は金次を睨みつけながら問いかけた。

金次は顔面蒼白になって口を開こうとしたが桃まん武値の怒鳴り声が玄関ドア付近にいた俺達に向けて発せられた。

「遅い!」

何してんのよ!

さっさと来なさい!!?

お腹空いた:桃まんないの?」

本当に何様なんだこのチビは?

「いきなり人の部屋に来といてそれか!!?」

桃まんなら冷蔵庫の中だ!」

甘い。甘いぞ:俺。

アリアは冷蔵庫から桃まんが10個載つかてる皿を出しリビングルームのソファにどかつと座りやがった。

糞、アリアの外見は悔しいが可愛い。

小学生の妹におやつを与えてる気分だ。

俺の中でアリアちゃん（10）が桃まんを食べてるシーンが浮かんだ。

ヤバイヤバイ、本人の前で笑ったら風穴だ。

気を引き締めないとな。

「で?」

何しにきたんだよ?」

俺はアリアに問いかけたが。

「もふあわい」（おかわり）

桃まん10個を一瞬で食べたアリアがおかわりを要求してきた。

「手品か!!?」

お前は、猿とDの名を持つ麦わら帽子を被った海賊か!?!?

どんだけ桃まんが好きなんだよ!?!?

しかたなく、桃まんのおかわりを20個出したがまたすぐになくなった。

「わふあにやなひの?」(わからないの?)

「わかるかよ!?!?」

ちゃんと食物は飲み込んでから話せ。

アリアは口に入ってる桃まんを咀嚼してから話はじめた。

「さっきの決闘の件で来たのよ」

ああ、あれか。

「ごめん。」

一方的すぎたわ。

パートナーはあんた以外から探「なってもいいぞ!?!?」す……は?」

呆然とした表情をしているアリア。

俺の隣に座る金次も愕然としている。

「ただし、条件がいくつかある。

金次を奴隷(パートナー)にするのはかまわないが「オイ!?!?」、俺は奴隷呼ばわりするな!

あと、強襲科にも絶対にいかない。

例え、自由履修でもな」

「わかったわ。

その条件でいいわよ」

「よくねえよ!?!?」

金次が文句言ってるが無視だ、無視。

「でもどうして急にOKしたのよ?」

アリアが苦手な推理を放棄して俺に尋ねてきた。

「そりあ、アリアといた方が『面白そう』だし、いろんな超人や超偵と知り会えるしな!

…それにいろんな魔法見れるチャンスだしな」

最後の眩きは聞こえなかったようでアリアは嬉しそうにはしゃいで金次相手にバリツ（バーリ・トワード）をかましている。

装填6

前門の虎、後門の狼!??

アリアが金次相手にイチヤツパリツをかけてる間、俺は夕飯の支度を始めることにした。

料理はそこそこできる。

同じ寮の同居人や雪姫先生が家事を全くしないせいで、家事スキルは転生前と比べてメチャクチャ上がった。最初こそ、ハンバーグ焼こうとして家を焼きそうになるくらい酷かったが今ではハンバーグ、餃子、焼き魚、煮物、カレー、シチュー、串焼き、パスタ、ロールキャベツ、桃まんはレシピ本なしでも作れるくらい上達した。

作れる料理に桃まんが入ってるのは雪姫が最近になってハマリ、模倣戦と腕相撲で負けた罰ゲームで作り始めたのが原因だ。

作れるようになる為にわざわざ松本屋で桃まん製造のバイトまでした。苦勞の末桃まん製造課程修了証（桃まん検定1級）なる物を松本屋の社長さんから貰い、いつ雪姫が来てもいいように雪姫用に冷蔵庫に大量の桃まんを作っておいたが桃アまん中リ毒患者アの来襲により備蓄は無くなってしまった。

「はあく…また桃まん作らないとなー」

溜息を吐きながら今日の夕飯の献立を考える。

冷蔵庫を覗くと、人参、ジャガイモ、タマネギ、豚肉が入っている。

今日はカレーに決まりだ！

「アリアと金次。お前ら夕飯は？」

念のために確認をすると…

「お腹空いた〜」

「なんかないの？」

金次とじゃれあっていたアリアが金次から離れて、ソファアの手すりに身体をしながら聞かしながら聞いてきた。

その女っぽい仕草に、ドキドキしてしまった俺は顔を逸らしてアリアに答えた。

「今作るよー」

「カレーならできるけど食ってくか？」

そう言うとアリアは、ちよと驚いた顔をしながら話かけてきた。

「アンタ、料理できんの？」

『コイツ、料理できんのか？』みたいな失礼極まりない顔で俺を見るアリア。

「その言い方は失礼だぞ。簡単な料理なら作れる！」

さすがに凝った料理はできないけどな…」

「凄いいじゃない！うん。うん。さすがあたしのど…じゃなくてパートナーね！」

アンタやればできるじゃない！それに比べてこっちの奴隷は…」

俺を奴隷と言いかけて慌てて訂正したアリアは俺を褒めた(?)後、俺と同じパートナーのはずの金次に視線を向けるや否ややる気のない金次に対して怒りはじめた。

「キンジアンタ、少しはミツルを見習いなさい！」

料理が無理ならせめて言われる前に桃まん買いに行くくらいしなさい！」

「誰が行くか!!?」

金次がアリアに突っ込んだ。

さすがツッコミスター金ちゃん(笑)

いいコンビだな。この2人。

などとアリア&金次が夫婦漫才をしている間に、料理が^{カレ}できあがった。

皿に盛り付け、冷蔵庫に入ってたレタスとトマトとツナ缶で簡単なサラダも作りテーブルに並べた。

「わあく。いい匂い。美味しそうなカレーじゃない」

「へえ〜意外に家庭的なんだな〜」

「カレーだしな。このくらい誰でもできるだろ?」

たかがカレー。だけど褒められれば悪い気はしない。

「じゃあ食うか!」

「二「いただきます!!?」」

食事を始めると皆無言で料理^{カレ}を食べる。

アリアには辛かったみたいで金次に水を要求している。
中辛にしたがアリアは甘口派だったみたいだ。

見た目と同じで味覚も子供っぽいようだ。
食事を終え時計を見るともう8時半をまわっている。

そろそろ同居人も帰ってくる時刻なのでアリアにいつ頃帰るのか聞いてみた。

「なあ、アリア。外暗くなってるけどいつ頃帰るんだ!?!?」

原作を知っている俺は自身にあのイベントが降りかからないようにアリアが帰ることを期待して聞いてみた。

「言ってなかった? 今日泊まるから」

「は!?!?」

俺の頬が痙攣でも起こしたかのように引きつる。

「ちよ……ちよと待て! 何言ってるんだ! 絶対ダメだ! 帰れうえつ」

驚きのあまりちよとりバスしてきたカレーが喉からでかかった。

「うるさい! 泊まってくたら泊まってくから!」

おいおい……どうなってるんだ女神様よ?

原作ブレーカーしすぎだろ!?!?

どうしてこうなった?

「――出てけ!」

これは俺のセリフではない。

無論金次のセリフでもない。

俺が言うべきセリフを、アリアが先に叫んだんだ。

「な、なんで俺達が出てかなきゃいけないんだよ! ここはお前の部屋か!」

金次がアリアに不満を言うがアリアは…

「分かんず屋にはお仕置きよ! 外で頭冷やしてきなさい! しばらく戻ってくるな!」

ぎいー! と両拳を振り上げて、アリアは俺達に猫っぽい犬歯をむいた。

寮の部屋を追い出された俺達は近くのコンビニへ向かうことにし

た。

「なあ、光。なんで俺達が追い出されてんだ？」

コンビニまでの道を歩いていると隣を歩く金次がそんなことを聞いてきた。それは俺が聞きたい謎の一つだ。

「知らん。俺に聞くなよ…」

朝からアリアにまわりつかれて俺の心労は溜まる一方だ。

「つていうか、あそこ俺の部屋じゃないんだし帰って…あだだだ、腕が…腕があり得ない方向に曲がつてる!!?」

帰る? 帰るの? 還りたいんですか? の三段活用?

「一人だけ逃げたら…殺す!」

「悪かった。悪かったから腕放せ——!!?」

「敵前逃亡には死を。」

武偵ならよくわかるよな? 金次くーん

「顔が怖えーよ!?!?」

金次の腕に腕捻りをかけて、金次が一人逃亡しないように教育した。

俺達は夜のコンビニでトイレを借りたり、漫画を立ち読みしたり、ハーゲン○ツツを（金次の分も俺の奢りで）買って店で食べるなどして時間を潰してから俺の自室に2人で戻った。

泥棒のような手つきで、扉をソー…ツと開けて部屋の中に入ったが静かだ。静かすぎる。

直感的にヤバイと思った。

もし、原作が金次の寮の部屋ではなくここで起きてるのなら、俺が避けなければいけない地雷が二つある。

金次の奴がバスルームに行くのを横目で見ながら原作のあのイベントを回避する為の計画を^{プラン}考えていく。

原作の地雷。

一つ目は…。

…ピン、ポーン…。

「来た！来てしまった…」

慎ましい、ドアチャイムの音。

この特徴的な鳴らし方は。

「し、白雪!?!」

声を揃えて固まる俺と金次。

来てほしくなかった突然の来訪者に。

「う、うおっ!?!」

ドンッ!

焦ってテンバツタ金次が壁ドンをしやがった。

「き……キンちゃんどうしたの?大丈夫?」

ドアの外から白雪の声がした。

金次の馬鹿のせいで中に金次がいる事を白雪に知られた。

これじゃあ、もう居留守は使えない。

仕方なく玄関のドアを開けると白雪が立っていた。

俺の後をついてきた金次が白雪に声をかけた。

「あ、ああ。大丈夫」

そう言ってるが金次の顔色は悪い。

いかにも疚しいことをしてます的な顔色だ。

「な、なんでこの部屋に来たんだ?白雪?」

金次はそう言うてから白雪の恰好に気づいたようで新たな疑問を口にした。

「な、なんだよお前。そんなカツコで」

金次の視線はバスルームを警戒していたがその視線を白雪に向けた。

白雪は何故か巫女装束の袴姿でやってきた。

「あつ……これ、あのね。私、授業で遅くなっちゃて……キンちゃんにお夕食をすぐ作って届けたかったから、着替えないで来ちゃったんだけど……キンちゃんどうして光君の部屋にいるの?」

「そ、それは……」

「俺が誘ったんだ!たまには夕飯一緒に食おうって……な!

「そうだろ金次!?!」

「あ、ああ。そうだ。そうだった…」

白雪から包みを受け取ると言いよどむ金次のフォローにまわった。これで前門の虎は帰ると思ったがそんなに甘くなかった。

何故なら。

—— ちゃばあ。

バスルームから水の音が聞こえてきたからだ。

バスルームに視線がいく金次の不自然さに疑問を持ったのか白雪が眉を細めて聞いてきた。

「ねえ……キンちゃん。バスルームに誰かいるの?」

「中に誰もいませんよ!」

金次の馬鹿は敬語で返したが突然そんな話かたをすれば不自然すぎると感じられるのが普通だ。

白雪も人様にお見せできない顔で金次に問いかけた。

「……キンちゃん。私に何か隠してることない?」

目から光を失わせた黒雪モードになった白雪がそう言った。

「ない!ないない!隠し事なんてありあ、じゃない、ありえねーから」

「そうそうそう。そんなことありあ、じゃくて、ありえるわけないから!!?」

仕方なく、金次のフォローにまわろうとしたが動揺してしまってあやうくアリアと言いつつそうになった。

「……そう。よかった」

え?今ので納得したの?

白雪はニコつと春風みたいに爽やかな笑顔を作ると、ようやくこちらに背を向けてくれた。

よ……よかった。

前門の虎は片付いた。

残るは…。

二つ目の…。
後門の狼だ。

金次を見ると原作通りアリアが風呂に入っている隙を狙い、脱衣所にあるアリアの武器を無力化する為に一人で脱衣所に入っていく所だった。

巻き添えを喰らいたくなかった俺は部屋の外。ベランダにある防弾シェルター物置の中に緊急避難をした。

耳を澄ませばわずかに部屋の中から少女の叫び声が聞こえてきた。

「~~~~~死ね!!?」

と言う声が聞こえ、何か壁に物体が当たるような衝突音が鳴り、しばらくすると部屋の中は静まり帰った。

ソートとベランダからリビングに戻ると金次やアリアの姿はなく、寝室を覗くと余っているベッドからそれぞれの寝息が聞こえてきた。どうやら2人もマジでここに泊まるらしい。

床にはアリアが仕掛けた罠トラップがあちらこちらに仕掛けられている。

原作の金次除けなんだろう。

…ガチャガチャ。

玄関のドアが解錠される音が聞こえてきた。

同居人が帰ってきたようだ。

廊下に出ると玄関のドアが開かれ、黒髪の高身長なイケメンが入ってきた。

服装は黒っぽい服を着ていて首や腕にはシルバーアクセサリーをジャラジャラ付けている。

その少年の特徴は一言で言うと『異形』だ。

何故なら『普通』の人間にはない獣耳と尻尾があるからだ。

「お帰り。小太郎!」

「おう!ただいま帰ったでえ〜ミツル!」

獸人、狗族の少年犬上小太郎は元気よく帰宅の挨拶を返した。

————ピピピ、ピピピ、ピピピ。

「ん？朝か…」

目覚ましを停めて、時刻を見るともう5時半だった。

いつもの『日課』の時間だ。

素早く着替えて寮を出ると寮の前で準備運動をしてから『日課』の運動を始める。

「さて、日課の瞬動マラソン20km始めるか！」

装填7

日課と風の警告と暴れん坊な同居

人!?!?

「はあはあはあはあ…」

肌寒い早朝の公道。

その公道を『眼にも映らない速さ』で駆け抜けていく。

武偵高がある学園島は元々空港の滑走路として建設が計画されていた人工浮き島メガフロートを活用したせいもあり、その面積は広大だ。

南北2km、東西500mを有する広大な浮き島をマラソン瞬動術で駆け抜けていく。

マラソンをしながら如何に無駄な動作を無くしていくかが今の俺の課題だ。

「瞬動術の基本は『入り』と『掴み』…」

確か…あの人が言うには、瞬動術には三つの極意コツがあるんだっただけな。

えつと…『大地を掴め』、『地球を掴め』、『世界を掴め』だったけ？」

俺に瞬動術を指導してくれたある人の事を思い出しながら、マラソン瞬動術を続けていく。

あれは、俺が武偵中に通っていた頃。

ちょうど今くらいの桜が咲く季節だった。

当時の俺は高畑先生に稽古をつけてもらいながら自力で魔法の練習をしていて、気や魔力の使い方に煮詰まっていた時期だった。

瞬動術を高畑先生から学び始めたばかりで一人河原で練習していた俺にあの人は話かけてきた。

実際には話かけてきたと言うより絡んできたといった表現の方が正しいが。

俺の瞬動術が全然なっていないと怒鳴りつけてきて頼んでもいないのに無理やり稽古をつけてきたのがあの人との出会いだ。

瞬動術に関しては達人と聞いていい腕前を持っていたあの人に俺

は師事し約一ヶ月間という短い時間をあの人の元で過ごした。

あの人との出会いは唐突に始まり唐突に終わった。

海外に、遠くへ旅立つあの人から最後の試験を課せられた俺は瞬動術の『奥義』を喰らい、その身に受けたことで瞬動術のコツを理解しあの人に一撃入れ無事に卒業した。

瞬動術を会得するには三つのコツが大切だ。

一つ目は『入り』。

瞬動術の『入り』とは踏み込みのこと。

『地球を掴む』為には踏みしめないといけない。

足裏の柔軟性が大切。

足裏の柔軟性を鍛える為に足指で歯磨きができるようになるまで練習すること。

二つ目は『踏み込みの瞬間「世界の全てを背中に捨て去って」最速の力を得ること』

三つ目は『接地掴み』

『掴みの時にはその力は大地に返す』つまり、「世界に帰って」こなきやいけない』

『大地を掴む』、『世界を掴む』の本当の意味はこれだ。

指導してくれた格闘家は別れ際にそう言っ去って行った。

昔を懐かしみながら^{瞬動術}マラソンしていると左手の腕時計のアラームが鳴った。

時刻を見るともう午前7時だ。

自転車を『武偵殺し』に爆破された俺は、午前7時58分のバスに乗れなければ遅刻してしまう。

朝食を作るのが億劫になった俺は、寮へ戻る道にあるコンビニに寄って行くことにした。

コンビニに入るとそこには予想外の人物がいた。

彼女は商品棚から右手で取った商品を左手に持つ買い物カゴの中に入れていた。

彼女が持つ買い物カゴの中には大量のカロリーメイ??が入っ

る。

味はどれもチーズ味ばかりだ。

「ただだけカロリーメイ??好きなんだよ!」と突っ込みそうになったが以前突っ込んだ際にカロリーメイ??は優れた保存食であり、バランスよく栄養が採れる栄養食品だと普段おとなしい彼女に力説されたことを思い出し、突っ込みを入れるのを辞めた。

目の前にいる彼女は短い翡翠色の髪をしていて、その瞳は黄色っぽい色をしている。

背中には狙撃銃スナイパーライフルを背負っている。

彼女は狙撃科スナイプが誇る『天才児』で武偵ランクは当たり前のようにSランクに認定されている。

狙撃の射程距離は2kmを超えており、彼女が的を外したところを一度も見たことはない。

俺と目があった彼女は俺の側に近づいてきた。

「おはようございます…八神さん」

おはようと挨拶を返すと彼女は突然俺に警告してきた。

「気をつけてください。」

「風が…邪悪な風を感じます」

意味不明なことをいう彼女に説明を求めたが彼女は一言だけしか言わなかった。

「…風がそう言っています」と。

レジに向かい会計を済ませると彼女は俺に向かってぺこりとお辞儀をし、店外へ出て行ってしまった。

「やっぱりこの時のレキはまだ感情が乏しいな」

俺の呟きは誰にも聞こえなかったと思う。

朝食のオニギリやサンドイッチ、アリア用に桃まんを買って寮の自室に戻ると部屋が、自室が悲惨な光景になっていた。

「おいおい、嘘…だ、ろ?」

目の前の光景が信じられずに呆然とする俺に金次が声をかけてきた。

「くっ…光すまない。」

お前の留守中に…してやられた。俺には止められなかった…」
金次が声を震わせながらそう言ってきたがただ呆然としてしまい、
耳に入らなかつた。

一体俺の留守中に何が起きたんだ？

なんで？

どうして…俺の部屋が。

破壊されてんだよ？

俺が寝てたベッドも部屋の壁も床も何もかも。

俺の宝物も無残な姿とかしていた。

武藤から借りた巫女さん物が…!!?

誰がやったんだ!!?

いや、犯人達は分かっている。

俺が帰宅した瞬間、二人とも俺の顔を見て震えたからな。

「さて、ちよろろ〜と言いたいことあるんだけどいいかによ？」

「ツ!??」(ガクガク)

俺に声をかけられた容疑者2名は震えながら頷いた。

「まず、俺のベッドが切断されてるんだけど…これやったのどっちだにゃ〜?」

怒りのあまり語尾がおかしくなっているがそんなことも気にならないくらい俺は激怒していた。

「そ、それは…」

震えながらお互いを指差し2人は…

「この犬(アリア)がやったのよ!(んや!)」

神崎・H・アリアと犬上小太郎は叫んだ。

おかしいな。

アリアは手に銃ガバメント持ったままだし、小太郎は俺が玄関開けた時に「くおんばくさいけん狗音爆破拳」とか技名叫んでいたけどな。

俺の勘違いなのかな?そうか。

「へえー」

普段ださくない低い声が室内に響く。

アリアと小太郎は『まずいわ』、『やってもうた』とそれぞれ今になって気づいたようだが遅かったな。

何故なら、2人の前には『闇闇き夜モイの型ト』を発動させた俺が仁王立ちしているからだ。

「ねえ、2人は暑いのと寒いのと痺れるのとキリキザマレルノドレガイイ?」

「どれも嫌よ(わ〜)!??」

「ソツカー、ジャアゼンブダネ??」

「なんでそうなるのよ(んや〜)!??」

突っ込みを入れてくる辺りまだまだ余裕あるって事でしょ?

大丈夫。

「大丈夫、死なない程度に殺すから」

「意味がわからないわ(んわ!??)!??」

またしてもいきピツタリの突っ込みを入れてきた。

本当は仲いいだろ。お前ら。

「まずはレディファーストでアリアから殺るよ？」

「イイよね？イイだろ？イイよな！」

「怖いわよー！」

「お仕置きだ！」

魔法の射手連弾光の97矢」

魔法の射手を放ったがアリアはその場を後ろに飛び跳ねて躲し、背中に収納している小太刀を両手に握って振ってきた。

「こん、のおおお…」

アリアは二本の小太刀で斬りかかろうと俺に向かってきた。

俺はアリア馬鹿に向かって雷の魔法の一つ。

フルグラテイオー・アルピカンス
白き雷を放った。

「みぎゃあ…」という叫び声を上げアリアは気を失った。

次は小太郎大馬鹿に向かって魔法を放った。

稲妻（白き雷）を自らの肉体に取り込み打撃技として放つ。

デクストラー・エーミツタムはくらししょう
「右腕解放 白雷掌」

「あ、危なっ…何するんや!?？」

小太郎は素早い動作で魔法を躲すが小太郎の動きを読んでいた俺は小太郎が移動した着地点に向けて魔法の射手連弾光の101矢スを放った。

「んなっ…」

魔法の矢の直撃を受けて床に倒れる小太郎だが彼は英雄の仲間の一人。直撃を受けても直ぐに起き上がった。

「何するんや!!?？」

講義の声を上げる小太郎だが俺の怒りはこれくらいじゃ収まらない。
い。

「やられたらやり返す…武偵なら当たり前前の行為だ!!?？」

そう言った俺に金次は何故かジト目で聞いてきた。

「…本音はっ？」

「俺の巫女さんを返せ——!!?？」

「それかよ!?!?」

金次と小太郎のW突っ込みを入れられたが何で突っ込まれたのかよくわからん。

「武偵はエロ本破られたら発撃たれたらたれたら撃ち返すもの簧巻きにするもののдарろ?」

「意味が違いえ————よ!?!?」

金次と小太郎の突っ込みは寮内に響きわたった。

「俺らが悪かった。

スマン、許してえな〜」

小太郎は謝ってきたのでとりあえずこの件は保留とすることにした。

聞けば朝小太郎が起きた際にアリアが仕掛けた罠トラップが作動した事が原因だとか。

リビングのテーブルに着いた俺達は俺が買ってきたオニギリやサンドイッチを食べ始めた。

「あ〜。朝から運動ケンカして疲れた〜。

金次お茶!」

「俺にもコーヒー頂戴!」

「お前ら自分で入れろよ!」

「サンドイッチ食ったよな?」

「食ってたな〜」

「ちきしよー!ちよと待ってる!!?」

金次は文句言いながらもお茶を入れはじめ。

「煎れたぞ!」

やっぱり金次は人に使われる奴隷パシリ属性もあると俺は思った。

「あく人に煎れてもらったお茶は美味しいな〜」

「せやな〜」

「お前らな…」

金次が脱力しているがしようがないだろ。奴隷だろ、俺の。

「……今なんだか不愉快な事を考えてなかったか？」

鋭い。ヒスつてないのにやるな金次。

「何故わかった!?!?」

「顔がにやけすぎだ馬鹿ヤロー!!?!?」

「あく確かに光は変な事を考える時顔がにやけるわな」

「マジで!?!?」

「気づいてないのかよ……」

なんか2人に引かれたがなぜだ?

「なあ、ところで今何時なんや?」

小太郎がそんな事を聞いてきたので腕時計を確認すると……

気づけば時計の針は8時を示していた。

「……」

「……」

「……」

3人揃って絶句した。

武偵高行きのバスがバス停に来る時刻は午前7時58分。

既に過ぎていた。

「「遅刻じゃねえか!?!?」」

ヤバイ。やらかした。

自転車ないのにどうしよう……。

とりあえず……。

「アリアを起こせ!」

装填8 『闇の福音』

武偵高の校門に着いた。

遅刻を覚悟していたが時計を見ると時刻は8時10分だった。

アリアと金次はまだ着いていない。

小太郎は多分もう着いてると思う。

アリア達と一緒に着かないのは理由がある。

金次の馬鹿がアリアの車に一人だけ乗りやがったせいで俺と小太郎は走って武偵高まで行くことになったからだ。アリアの車は2人乗りだからな。

おかげで俺と小太郎は瞬動術で公道を爆走してきた。

小太郎は「これも修業の一つやく〜!」とか言って一人俺を置いて爆走して行ったけどな。

小太郎ほど修業体育脳筋バカじゃないから武偵高までの道をショートカットできないかを考えた末、建物の屋上や屋根を《虚空瞬動》で飛び跳ねて移動する術を思いつき実証してみた。

結論から言うと大成功だった。

武偵高まで行く道を自転車で行くより早くつけるショートカットをついに見つけた。

この道の情報を情報科インフォオルマあたりに売れば、遅刻常習犯の武偵高生達が買うんじゃないか。

今度情報科の長谷川ちゅうたんさんあたりに持ちかけてみよう。

そんなことを思っていると制服の胸ポケットに入れている俺の携帯がなった。

発信者は通信科コネットの茶々丸さんからだった。

電話に出ると。

「もしもし〜。」

「おはようございます八神さん」

「おはよう〜茶々丸さん」

「朝からお元気そうで何よりです。マスターから伝言を預かってます」

「ゆ、雪姫から…!?？」

俺に緊張が走る。

雪姫、この名前は武偵高生で知らない奴はいない。

三大危険教師の一人だからな。

「はい。一般科目が終わったらすぐにSSRのマスターの部屋に来るように、と。」

遅れたり、サボったりしたら血を貰うとの事です。

では八神さん…お気をつけて！」

「ちよつ、何に気をつければいいんだよ!?？」

茶々丸さんからの電話は切れてしまった。

血を吸うとか雪姫相当ヤバイじゃん。

うわ。ろくな目にあわない予感が半端ねえ。

昨日から俺、ろくな目にあつてないじゃん。

アリアと雪姫のWパンチとか無理ゲーすぎる。

「不幸だ———!!？」

俺の叫び声は武偵高の校舎の中まで響いたらしい。

結局遅刻してきた金次とアリア、それに小太郎は校門の前で待ち構えていた蘭豹に見つかったらしく、3人共蘭豹の教育体罰を受けて酷く疲弊していた。

金次やアリアはともかく小太郎が何故遅れたのか気になって理由を尋ねると小太郎は俺の先に行った後、白いスーツを着た紳士に声をかけられ勧誘されていたらしい。

その紳士は右手にステッキを持っていて、黒髪で自らを教プロフェッショナル授と名乗っていたとか。

小太郎は着いてくればさらに『強くなれる』と言われ迷ったみたいだがその誘いを断ったらしい。

なんで断ったのか理由を尋ねると。

「いや、断らなかつたら『夏美先輩』が怒るやん」と言った。

教プロフェッショナル授とか、勧誘とか気になるワードがあつたがそれよりも…。

「ああ…夏美先輩怒らしたら怖いからな」

小太郎の戦姉アミカの事を思い出す。

村上むらかみ 夏美。

彼女はこの世界だと俺の一つ上の学年で特殊捜査研究科CVのBランク武偵だ。

ある特殊な能力を持っていて初見の相手なら彼女の接近を防ぐ事は非常に困難だろう。彼女はその能力と中学時代に演劇部にいた経験を生かして特殊捜査研究科CVに入った。中学時代より逞しくなっていてランクこそBだがCVR内では将来を期待される有能な武偵という評価をうけている。

彼女は麻帆良学園まほらがくえんと武偵高の交流事業の一貫として一昨年武偵高へと入学をした。

彼女の他にも元麻帆良学園生ルムメイトは何人か武偵高生として通っている。

俺の部屋の同居人、犬上小太郎もその一人だ。

一般科目を終え昼休みになると俺の携帯にメールが届いた。

差出人は迷惑教師雪姫からだ。

文面は一言だけ。

『屋上に来い！』とだけある。

どこの屋上とか書いてないが雪姫が示す屋上なんてあそこしかない。

俺は昼食を誘ってきた金次や不知火、武藤らに断りを入れて超能力捜査研究科棟SSRに向かった。

SSR棟に着き、何故かトーテムポールが柱になっている階段を上り、何故か魔法陣が描かれた屋上のドアを開けると屋上には木造ログハウスの家が建てられており、そのログハウスの周りには家庭菜園場まで作られている。

慣れた手つきでログハウスのドアをノックすると中から小さな女の子が出てきた。

「ケケケ。ヒサシブリダナー。クルノガオソイカラコチラカラコロシニイクトコロダツタンゼー！」

女の子と思つた物はよく見ると人形で手には出刃包丁を握つて
る。

「よお、元気そうだなー。茶々0？」チャチャゼロ

「ケケケ：オレハゲンキダゼ！」

ゲンキスギテイマスグオマエヲキリキザンデヤリタイクライダ」

「おー。怖い、怖い」

相変わらずの戦闘バトル狂ジャンキーだな。

製作者に似て口調と性格が悪いんだよな。

「誰の性格が悪いんだ？」

俺の思考を読んだのか部屋の奥にいるこの家の主がそう尋ねてき
た。

「ケケケ。ババアガオイカリダゼ！」

キヨウハドンナイジメヲスルノカタノシミダ」

チャチャゼロがそう言うが俺は全然楽しくない。

「ふん。タカミチのぼーやから聞いたぞ。

お前を奴隷にしたがつている身のほど知らずの女がいるみたいだ
な」

椅子に胡座をかいて座るその少女は長い金髪の髪に雪のように白
い肌。見た目は10歳の姿をしているが実年齢は600歳越え。

名をエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルという。

金髪ロリ吸血鬼だ。

「今日はその姿のままなんだな……雪姫先生？」

超能力捜査研究科Sの雪姫教諭R。その正体は600年を生きる吸血鬼
だ。

この世界の吸血鬼、ブラドやヒルダ達とは種がまた違うようだ。

詳しくはわからないが彼女は10歳の誕生日に何者かに吸血鬼に
され、現代まで裏の世界で生きてきたらしい。

「貴様はどうやら幼女嗜好ロリコンみたいだからな。

この姿の方が嬉しいんだろう？」

「人をロリコン扱いするな！」

誰だそんなことを雪姫に言つた奴は。

「おやおや、おかしいな。タカミチのぼーやから聞いた話や茶々丸が録ったデータでは幼児体型の神崎・H・アリアの服を脱がせたことあったが…」

「あれは誤解だ！」

くっ、よりによつて雪姫に知られるなんて…。

元はといえば金次のせいだ。金次の馬鹿は後で殺す。

「で、使ったのか？」

雪姫が椅子から立ち上がり俺の目の前にくると俺のワイシャツのボタンを外しはじめた。

「ちよっ…何を!?？」

「黙っとれ！」

雪姫は俺の身体に触れると何かを確認するかのような動作で俺の身体中を触りはじめた。

「なっ!?？」

「腕に力を魔力を集めろ！」

言われた通りに魔力を集中させると…。

「ふん。ずいぶんと馴染んできたようだな」

俺の腕や背中に現れている紋章状の魔素痕を確認した雪姫はそう呟いた。

「やはり、貴様は…」

雪姫は何やら呟いたが声が小さくて最後まで聞こえなかった。

「何か言ったか？」

「何でもないわ！」

そう言った雪姫に押し倒された。

雪姫のその綺麗な顔が近づくと…。

……ッ!??

な、何赤くなつてんだ俺の顔。

ゆ、雪姫だぞ!?? 幼女に見えて中身600歳の婆さんだぞ!??

落ち着け、落ちつけ、俺。

「光。実はな…お前にずっと…ずっと伝えたい事があったんだ」
雪姫がその綺麗な顔を俺の口先数cmまで近づけてきた。

な、なんだよ？なんで雪姫あんたまで顔を赤く染めているんだよ？
「ずつと言おうかどうか迷っていたが……もう我慢できん」

え？え？なんなの。

入っちゃた？雪姫ルート入った？

雪姫の顔が俺の唇に近づき俺は全ての行為を彼女に任せる為に瞳を閉じた。

まだか、まだか？さあ、雪姫かもくん。

峰不二子に対するリュパン3世の心境で雪姫がするのを待った。

「うむ。では……いただきます!!？」

「…ツ!?？」

雪姫の唇が俺の首筋に触れ勢いよく血を吸われた。

「あぎやあああああ」

チュ~~~~とされ続け、俺の意識は暗闇の中に沈んでいった。

「はっ!?？」

目を覚ますと俺は雪姫の家のベッドで寝かされていた。

首筋に手を当てると傷跡はなかった。

どうやら夢をみてたらしい。

「起きたか」

部屋に入ってきた雪姫は変化していた。

背は高く、胸もいつものちっぴいではなく巨乳になっていて顔つき

も大人になっている。

年齢詐称薬を使ったようだ。

「やはりお前の血は美味かったぞ！」

傷跡なら心配するな。救護科アンビュラスの近衛が直したからな」

そういう問題じゃねえだろ！とツツコミたかったがなんか突っ込んだら負ける気がした。

「もうロリは飽きたのか？」

そう聞くと雪姫は。

「お〜やく。ロリコン好きの光君はあつちの私の方がいいのかな〜」

意地の悪い笑顔を浮かべてそんなことを言ってきた。

「違えよ!?？」

俺はロリコンじゃない。じゃないよな？

なんだか不安になってきた。

「不治の病露理魂ロリコンにはかかってない……はずだ」

自信がないのは最近、アリアや雪姫みたいなひんにゅー幼女に絡まれているからだ。

「ははは……まあそういうことにしといてやろう。

ところでもう『アレ』は使えるようになったのか？」

雪姫が言うアレとは『千の雷』のことだろう。

「なわけないだろ！無理難題すぎる！」

もっと取得難易度が低い誰でも使える強力な魔法を教えろよ！」

「は？取得難易度が低い誰でも使える強力な魔法？

そんな魔法はない！」

True magic results from courage of the heart
わずかな勇気が本当の魔法だ！」

「いや、あんたそれテキストに言ってるだろ!?？」

なんだよ、わずかな勇気って。

勇気だけじゃ誰も救えないんだよ！」

「勇気より力だ！」

「馬鹿か貴様は。

本当の魔法を理解できないとは情けない。

私はそんな風に貴様を育てた覚えはないぞ？」

「俺もあんたに育てられた覚えはねえよ！」

虐められたことしかねえ！

「いいだろう。」

私直々に教えてやろう。

この最低、最悪で最強の『不死の魔法使い』！

『ダークエヴァンジェリン闇の福音』がな！」

装填9 雪姫の実力？

雪姫に連れられてやってきたのは地下にある部屋だった。

六畳一間くらいしかないこの小さな部屋で何をやるのか不思議に思っていると、雪姫は部屋の真ん中にある丸い水晶のような物を指差し俺を手招きした。

「こっちに来い！」

雪姫の側に近寄ると水晶のような物の中に山や森、川や湖、城などのパノラマミニチュア模型が入っている。

これはもしかして…。

雪姫との付き合いは1年以上経つがいまだかつてこの魔法具を使ったことは一度もなかった。

魔法先生ネギま！の原作で見たことしかないが今日の前にあるこれは間違いなくあの魔法具だろう。

「どうした？」

何をそんなに驚いてるんだ？

そんなに珍しい物ではないだろ！

雪姫はそんな風に言っているが原作ネギま！を知っている身としてはこの魔法具を間近で見れて、驚いたり感動したりするのは当然の行為だと思う。

それほどにこの魔法具は重要で何より『強くなる為に必要不可欠』な道具なのだから。

「まさか、この目で実物を見る機会がくるなんてな…。

これが神の塔の先にある、神が住む場所にあるという精神と時の??屋か!?!?」

「いやダイオラマ魔法球だが？」

俺のボケに素で返す雪姫。

「ツツコメよ!!?」

ボケだいなしじゃん!?!?」

違うってことくらいわかるわ!?!?」

「は? 何故貴様のボケに付き合わないといけないんだ？」

私はそこまで暇じゃない。

変なボケばかりかましてると氷漬けの愉快的オブジェにするぞ?」

「ごめんなさい。調子に乗りました…」

ヤバイ、ヤバイ。

雪姫なら平気でやりそう。

修業と称して極寒の雪山に放置するような奴だからな。

「最初に言っておくがこのダイオラマ魔法球の中に入ったらまる一日中外に出れないからな？」

そこんとこ注意しとけよ?」

うん。知ってるけど。

1番ほしい魔法具だったからな。

「はい!」とテキトーな返事をしておいた。

「では入るぞ?」

雪姫が丸い水晶に触れると雪姫の姿は一瞬でこの場から消えた。

俺は雪姫と同じようにダイオラマ魔法球に触れると俺の身体が光に包まれ気がつくと外界と完全に引き離された水晶の内部、ダイオラマ魔法球の中に入っていた。

俺が現れた場所は城の外壁にある召喚場で足元には魔法陣が描かれている。

雪姫は俺の前に移動するダイオラマ魔法球の事を色々説明してきた。

いわく、ダイオラマ魔法球は1日、つまり24時間経たないと外界へ出れないこと。

昔話の浦島太郎の逆でこっちの1日は外界(現実世界)の1時間に相当するということ。

ようはこっちで丸1日過ごしても現実の時間ではわずか1時間しかたたないという時間チートな魔法具だ。

「便利だな。さすが魔法!」

あるんならもつと前から使ってくれよー」

雪姫に文句を言うと。

「聞かれなかったからな」

とニヤついた顔で言いやがった。
森の中にやって来ると。

雪姫は…。

「この辺でいいだろう？」

貴様が使える全力の力で来い!!？」

雪姫はそう言い、俺が返事を言う前に魔法の詠唱を始めた。

「集え氷の精霊 槍もて迅雨となりて 敵を貫け

ヤクラーティオー、グランディニス!!
氷 槍 弾 雨」

多数の氷の槍を飛ばして攻撃してきた。

慌てて回避行動をとったが腹と足に何本か喰らってしまった。ものすごく痛い。

「どうした？」

この程度か貴様の魔法は？」

雪姫はそんな風に挑発してきて俺に新たな魔法を放ってきた。

「闇の精霊 29 柱 !!？」 魔法の射手連弾・闇の29矢!!

謎の黒い弾丸を飛ばしてきた。

くっ…：雪姫の奴。どうやら本気だ。

雪姫の実力をよく知っている俺は俺の全力で行くことにした。

俺は『闇闇き夜モイの型ド』を起動させ咄嗟にその場を飛び跳ねて魔法の矢を躲したが雪姫はその動きを読んでいたようで俺の回避先、着地先へ魔法を放ってきた。

「来たれ氷精闇の精!!」 吹雪クけ 常夜の氷雪ス
「来たれ氷精闇の精!!」 闇の吹雪!!

雷の暴風と同じ大呪文の一つ。

強力な吹雪と暗闇を発生させて攻撃できる魔法が俺に遅いかかっ
てきた。

「来れ雷精ウエニアント・スピリトウス 風の精!!」 雷を纏アエリアーレス・フルグリエンテースいて
「来れ雷精ウエニアント・スピリトウス 風の精!!」 雷の暴風!!

とつさに今の俺が出せる最強の魔法で雪姫の魔法を相殺させたが雪姫はこれも読んでいたようで魔法が相殺されるやいなや、次の魔法を放ってきた。

「来れ氷精 爆ぜよ風精 弾けよ凍れる息吹!!」
ニウイス・カーズス
氷爆!!」

空气中に大量の氷を瞬時に発生させて、凍気と爆風で相手を攻撃することが出来る魔法を放ってきた。

「ちよつ……何で殺す感じになつてんだよ!!?」

「いや、楽しくてつい……」

「つい、じゃねえよ!!?」

「ただだけDSなんだよ?」

「ほら言うだろう。好きな奴ほど殺したくなるって!」

「言わねえよ!!?」

それを言うなら好きな人ほど虐めたくなる、だろ!!?

つてどつちにしろ駄目だろ!!?

雪姫の魔法は凄まじくその後も殺傷能力が高い魔法を次から次へ

と繰り出してきた。

「氷神の戦鎚!!?」

巨大な氷塊を作つてぶつけてきたり…。

「冥府の氷柱」

大質量で柱状の氷塊を出現させて落としてきたり…。

「凍てつく氷枢!!」

氷柱に対象を封じ込めることができる呪文を放つたり。

終いには…。

「来れ 虚空の雷 薙ぎ払え!」
ケノテートスアストラブサトーデ・テメトー
デイオス・テュロス

雷の斧!!」

苦手な筈の電撃系の魔法まで繰り出してきた。俺がまだ取得中の魔法を…。電撃系が得意な俺がまだ十分に使いこなせない魔法を…。

「うぐ……」

直撃こそしなかったが掠っただけでダメージがデカイ。

「どうした?この程度ではあるまい。貴様の能力は……」

「やってやるよ!!?」

やってやる。やらればなしで武偵が務まるかー。

「ケノテートスアストラブサトーデ・テメトー!
来れ 虚空の雷 薙ぎ払え
デイオス・テユコト
雷の斧!!」

全く同じ魔法がぶつかり合い、辺り一面は雷の閃光と轟音が鳴り響き森の中は落雷の直撃を受け木々は落雷により発生した火によって燃えはじめた。

俺は雪姫の魔法を受け地面にぶっ倒されたが雪姫は……。

「ふん。まあまあ……だな。

まだまだ甘いが合格としてやろう」

そんな声が響き、顔を上げて雪姫がいた場所を見るとそこには……。

落雷の直撃を受けても無傷姿の雪姫先生が佇んでいた。

いや、アンタ。

どんだけチーターなんだよ!

「わずかな勇気が本当の魔法だ!

だかしかし、貴様が言うように勇気だけでは守れない。

力が無いと守れない!

だがな……勇気を出す事も立派な力だ。

それに力だけでも駄目だしな。

強すぎる力は争いを生む。

ならどうしたらいいか……。

どちらかを選べ!!?

もしくは……。」

雪姫は右手を掲げると……。

「エンシス・エクセクエンス
エクスキューションソード」

固体・液体の物質を無理矢理気体に相轉移させる断罪の剣を出した。

「合格祝いだ!!? 受け取れ!!?」

雪姫の声が聞こえ、彼女が俺の目の前に一瞬で移動したと思った途端に断罪の剣が振り下ろされ俺の意識は暗闇の中に沈んでいった…。意識を失う直前、雪姫の声が聞こえた。

「白^{勇氣}か黒^力か…選べないなら両方^{両方}選べばいい!!?」

例え泥に塗れても、前へと進む者であれ!!?」

光の奴はどこ行ったんだ？

昼休み入った俺は昼休みになったと同時に消えた友人の事を考えながら専門科目を受講するために探偵科棟にやってきた。

今日は依頼クエストを受けるか。

侵略者アリアは今頃強襲科アサルトで戦闘訓練してるはずだしな。

アリア対策として校外に出る為に探偵科の依頼板クエストボードを見て簡単な依頼を探していく。

Eランクの俺でも受けられる楽な依頼ないかなー。

単位が貰えるならなんでもいい。

俺は来年からは一般高に通って『一般人』になる。

その目標の為に、まずは平穏な日常を取り戻さないと。

単位や報酬、仕事内容が書かれた依頼書を見ていくと俺にぴったりな依頼が二つあった。

一つは猫探し、もう一つは古代遺跡調査の手伝い。

猫探しは青海地区あおみ、古代遺跡調査は東大に行かないといけない。

どちらも報酬1万、0.1単位の仕事だ。

どちらにしようか迷っていると俺の隣にいた少女に先を越された。

「あつ…」

「何です？」

その顔には見覚えがある。

確か同じ探偵科の2年綾瀬夕映あやせゆえだ。

俺より1歳歳上なんだが…授業サボりまくって留年したとか。

実は帰国子女で異国の超能力者養成教育機関に留学していたとか。

そんな風に噂されてる奴だ。

「いや、それ。俺が受けようかなと思った依頼…それは失礼。残念です。」

久しぶりに非日常の世界に行けると思ったのですがここの東大の助教授がまた面白い人なのです。

はあー浦島先生の講義に参加したいです…」ああ、いや先に取った

のは綾瀬だからそれ受ける。

俺はこっちの猫探しにするから」

武偵高^{うち}だけでも充分非日常的だろと思いつつ綾瀬に依頼書を渡す。

「いいんです?」

「ああ。依頼が受けられるのなら内容はどれでもいい」

ヒステリア地雷がないならな。

「ふむ。それではお言葉に甘えるです。」

お返しにお礼としてコレあげます」

そう言つて綾瀬は俺に缶ジュースを渡してきた。

缶には『桃まんコーラ』と書かれている。

「嫌がらせか?」

「なっ!??失礼な。コレ結構いけるんですよ?」

そう言つて制服のポケットからコーラ缶を出して飲みはじめた綾瀬。

ゴクゴクと美味そうに飲んでるよ。桃まんコーラ。

「ふう。やはり武偵高の飲み物もなかなかいけますね。」

麻帆良やアリアドネーとはまた違った変わり種がありますしこれ

は趣味の飲み物探しが楽しみです」

ぜ、全部飲み干しやがった。

そんなに美味しいのか?」

桃まんコーラ……。」

「では、私はそろそろ行くです。お名前は何でしたっけ?」

「同じ探偵科2年の遠山金次だ。」

綾瀬は年上だし先輩呼びの方がいいか?」

「別に普通に綾瀬でいいです。」

私は遠山さんと呼ぶです」

「じゃあ…綾瀬って呼ばせてもらうな」

「はいです。ではまた……」

綾瀬は依頼書を受け取ると依頼の詳細確認をしに^{マスターズ}教務科に向かう
為^マに探偵科棟の出入口に歩いて行った。

「変わった奴だな」

探偵科の綾瀬との出会い。

俺は思いもしなかった。

この時の出会いによって俺の人生が『普通』から離れた非日常的な世界で過ごすことになるなんてな。

探偵科で依頼を受けた俺は探偵科の専門棟を出ると…

「キーンジ」

探偵科の専門棟の前で待ち伏せしていたアリアに、俺は膝から崩れ落ちる。

ガーンだな……出鼻をくじかれた。

「なんで……お前がここにいるんだよ……!」

「あんたがここにいるからよ」

「答えになつていないだろ。強襲科の授業、サボってもいいのかよ」

「あたしはもう卒業できるだけの単位を揃えてるもんね」

アツカンベー。紅い瞳をむいてベロを出したアリアに、気が遠くなる。

美少女が校舎を出るのを待っていてくれていた。

全国の男子諸君の憧れだろう。

だけどな、その美少女が二丁拳銃や二刀の小太刀で襲いかかってくる凶暴娘でも嬉しいか？

俺は嫌だ!

「で、あんた普段どんな依頼を受けてるのよ」

「お前に関係ないだろ。Eランクにお似合いの、簡単な依頼だよ。帰れっ」

入試の際にSランクに認定されたがアレは白雪を助けた際にヒスったせいになったんだ。

普段の俺にはEランクがお似合いだ。

「あんた、いまEランクなの?」

「そうだ。1年の3学期の期末試験を受けなかったからな。

ランクなんか俺にはもうどうでもいいんだよ」

「まあ、ランク付けなんか確かにどうでもいいけど。それより、今日受けた依頼クエストを教えなさいよ」

「お前なんか教える義務はない」

「風穴あけられたいの？」

イラツとした表情のエリアが銃に手をかける。

「今日は……猫探しだ」

「猫探し？」

「青海に迷子の猫を探しに行くんだよ。報酬は1万。0.1単位分の依頼だ。」

本当なら光も誘おうと思ってたんだが…連絡がとれないから一人で行くんだ」

「光を誘おうとしてたの？」

「ああ。あいつは何故か探し物とか得意だからな。」

まるで最初からそこにあるのがわかっていたみたいな感じで、あいつの的中率は100%だ！」

「やっぱりあいつにも何かあるのね！」

私も行くわ」

「ついてくんな」

「いいから、あんたの武偵活動を見せなさい」

「断る。ついてくんな」

「そんなにあたしがキライ？」

「大つキライだ。ついてくんな」

エリアは一瞬傷ついたような顔をし顔を伏せ、すぐに顔を上げ目を吊り上げた。

「もっぺん『ついてくんな』って言ったら風穴」

少し言い過ぎたかと思つたがエリアが普段通りに振舞つていたので俺は気にするのをやめた。

仕方なくエリアを引き連れたままモノレールで青海まで移動した。

かつて倉庫街だった青海地区は再開発され、今は億ションとハイソなブティックが立ち並ぶオシャレな街になっている。

「で、猫探しっていうけど、あんたどういう推理で探すのよ」

エリアが聞いてきた。

「別に。猫の行きそうなところをしらみつぶしに歩くだけだ。光なら

猫がいる場所にすぐに向かうけどな。ていうか……お前こそ何か案でも出せ。俺に聞くぐらいなら、何かあるんだろ」

そうアリアに聞き返すとアリアは首を横に降った。

「ないわ。推理はニガテよ。一番の特徴が、遺伝しなかつたのよねえ」
つまりなそうに言うアリアは、形のいいおでこの下から俺を上目遣いに見た。

「ていうか、おなかすいた」

「さつき昼休みだったろ。メシは食わなかったのかよ」

「(桃まん) 食べたけどへったのっ」

燃費の悪い奴だな。というかこいつが食ってるのもしかして全食桃まんじゃねえか？

そんな疑問を持った俺はアリアに聞いてみた。

「お前、普段何を食べてんだよ？」

「もちろん桃まんよ！」

だ、駄目だコイツ。早くなんとかしないと。

桃まん中毒者の行く末はアリアコイツみたいになるんだな。

ヤバイ、ヤバイぞ。桃まん。

桃まんに秘められた恐ろしき副作用カに驚愕していると…

アリアが突然唐突に言ってきた。

「なんかおごって」

「いきなり足を引く張るのかよ」

まだ猫のね文字も見つかっていないにもかかわらずもうアリア様は動けないようだ。

でも、まあ。今日は依頼を選ぶのに時間がかかったせいで俺も昼飯は抜いたしな。

しょうがねえ…おごってやるか。

「ハンバーガーでいいか？」

アリアにそう言っていた。

女王様アリアがご要望なさったギガ??ツクセットを、奴隷の俺が買って戻ってくる…アリアは、高級ブティックのマネキンを見ていた。

何をしてんだ？

よく見るとアリアはマネキンが着ているサニードレスと、自分の身体を交互に見ている。

……ぶっ。

アリアの奴、マネキンにあつてアリアにない部分を凝視していやがる。

何度確認してもアリア、お前はひんにゅーだ。

ああいう体型に憧れてるんだな。

寄りも上がりもしない小学生体型のくせに。

「おい」

「――あ」

振り返ったアリアは俺が含み笑いをしていたのに気付いたらしい。ぶわああと真っ赤に顔を染めると両手をブンブン降った。

「――ち、ちがうの！あ、あたしはスレンダーな奴なの！これはスレンダーだっていうの！」

どつからどう見ても小学生だろ。

と言いかけたが言ったら風穴なのでやめた。

「あつちの公園に行くぞ」

道の反対にある公園の中に入って行つた。

アリアは後ろについてきた。なんだか怒ってるような、何かを言いたいようなそんな顔をしている。

空いてたベンチに座るとアリアの奴も隣に座った。

ハンバーガーを食べながらアリアに言っておいた

「アリアはこの公園では離れていた方がいいぞ？」

「はなんでよよ」

「辺りを見りゃわかるだろ」

俺は飲みさしのコーラを置いて、視線で周囲を指す。

この公園はデートスポットになっていて周りはカップルばかりだ。

「あ……」

向かいに座っているカップルがくつついたのを見て、アリアはポテトをくわえたまま一瞬硬直した。

俺とカップルを何度も見て真っ赤になった。

コイツ、赤面癖があるみたいだな。

「……う。うー!」

ウブなんだな。

「ほらな。もう帰った方がいいぞアリア。」

こんな所を2人で歩いたら、またキンジとアリアはつきあつてるとか言われちまうだろ。俺は目立ちたくないんだ。お前だつて好きな男とかいたら誤解されちまうぞ!」

「す、好きな男なんて!」

アニメ声を裏返した。

「い、い、いないっ!あたしは、れ、恋愛なんて——そんな時間のムダ、どうでもいい!ホンットに、どうでもいい!」

過剰反応し過ぎだ。

アリアの弱点発見だな。

「でも、友達とかにへんな誤解されたくないだろ」

「友達なんて……いないし、いらぬ。言いたい奴には言わせればいいのよ。他人の言うことなんてどうでもいい」
じゅるるるる。

そう言つてコーラを飲みだした。

「他人なんてどうでもいい、つてのにはまあ賛成だがな。一言、言いたいことがある」

「なによ。けぶ」

「それは俺のコーラだ」

アリアはコーラを吹き出した。

「このヘンタイ!」

いきなりなぐつてベンチから吹っ飛ばしやがった。

痛えな。この馬鹿力やろう。

「理不尽だろ!?!?」

「うっさい。コーラあたしの分まで零しちやたじやない!

買ってきなさい!今すぐ」

理不尽すぎだろ。

コーラと聞いて俺は制服のポケットに入れたままのあのコーラがあることを思い出した。

「もらいもんだが、飲むか？」

桃まんコーラを見せると。

アリアは……。

「桃まん……？」

桃まんという文字に目を輝かしていた。

桃まん……マジ恐ろしい奴。

夕方。ようやく迷子の猫を見つけた。

公園の端、ドブというか運河にいたんだ。

にい、にい、とよわよわしく鳴く子猫は資料にあつた特徴と同じだ。

「よーし。おとなしくしてろよー……」

ガサガサと空き缶やゴミの中に手を入れて、毛を立てた猫を取り出した。

猫は俺と目があうと逃げだそうともがいた。

「お、おい……おっ、うおっ」

猫をだいたまま、運河の浅瀬にひっくりかえってしまった。

アリアは何だか小声で呟いている。

読唇すると。

『……へんねえ？』とか言ってる。ってか助けるよ。

「大丈夫ですか？」

突然、アリアに近づき隣りに並んだ女性がそう声をかけてきた。

「あんた、誰？」

アリアはその女性が着ている服が武偵高の制服に似ている物とわかるやいなや女性に訪ねた。

「遠山さん、平気ですか？」

アリアの質問には答えずに俺に声をかけてきたこの人を俺はよく知っている。

光に以前紹介されて面識があるからだ。

俺が武偵高内で唯一ヒステリアモードにならない人だ。

「平気です。茶々丸さん」

コネクト
通信科2年の絡繰茶々丸。

雪姫先生の遠縁ということになっていいるがどうみても人間じゃない。
いい。

「どうやって武偵登録したのか凄く不思議だ。」

「見た目完全にロボットなだけだな。」

樽ではよく装備科の超先輩や葉加瀬先輩の実験室に出入りしているらしい。

「よかったです。ここの子猫に餌をあげにきたら遠山さんが運河に落ちたので…。」

「ご無事で何よりです」

「あ、あんたこの人知ってるの?」

「アリアがそう聞いてきたのでいきさつを話した。」

「ふうん。通信科の武偵なのね。」

「ランクは?」

「Sです」

「茶々丸さん、Sなのかー。それは知らなかった。」

「茶々丸さんが持ってきた猫缶を子猫に与えると子猫はおとなしくなった。」

「ではわたしはそろそろ戻ります。」

「今日八神さんはマスターの所にいますのでご心配なく」

「そう言っって茶々丸さんは帰っていった。」

「後には俺とアリアと子猫だけが残った。」

その後。

「教務科で依頼の報告をしていると教務科の扉が開かれ、何故かボロボロ姿になった光が入ってきた。」

「心配して声をかけると。」

「雪姫が……雪姫に殺される……」

「ガタガタ震え怯えていた。」

一体何があったんだ？

「…ろ」

ん？声が聴こえる。

「…きろ」

何だ？さつきより近く感じる。

「起きんか!!？」

「ッ!!？」

ガバツ—— 耳元で大声で叫ばれたせいで変な感じがする。

耳鳴りが酷い。

こんな不快な起こし方をする奴は彼女しかいないな。

そう思い顔を上げて俺を起こした奴を見ると彼女はトレードマークの腰まで伸ばした黒いストレートヘアと頭頂部にあるアホ毛を揺らし、俺の顔を覗きこんできた。

「まったく、いつまで寝てんのよ！」

「いいだろ。昨日の残業で疲れてんだよ」

たまの休みくらい寝かせろよ…そんな風に思いながら寝返りをうつと彼女は…。

「あくも〜いい加減起きなさいよ!!？」

このままでは拉致があかない。そう思った彼女は俺を起こす為の秘策を用意していた。

……。

静かだな。諦めたのか？

そんな簡単に諦める奴ではないはずだったが睡魔には逆らえずそれ以上思考することを放棄して惰眠していると…突然耳元でカンカン鳴り響いた。

「あくもううるせえなく!!？」

耳元で響く音に驚き目を覚ました。

「やっ」と起きた。

もう、寝坊助なんだから！

ちやちやと朝ご飯食べてよ！」

うるさいな、お前は俺の母親かよ！と思いながら起き上がると彼女は俺の顔に自身の顔を近づけてきて唇にキスをしてきた。

「ふはあ……もういいだろ？」

長い口づけで呼吸が苦しくなり彼女の顔を放した。

「……ん、よし！」

マーキング終了！」

そう言い彼女はガッツポーズをして微笑んだ。

「意味がわからん」

マーキングってなんだ？と疑問に思う俺の考えを読み取ったようで彼女は説明しはじめた。

「そりゃあ……もちろんみー君の側に泥棒猫が近づかないようにおまじないをかけたんだよ」

「おまじない？」

「うん。みー君の安全を守るのは私の役目だからね！」

「役目って……親父の言うことなら聞かなくていいんだぞ？」

あんな社会不適合者なんて。

「駄目だよ。みー君は私の……なんだから！」

話してる途中からボソボソと声の音量を落として話したせいで彼女が何を言ったのかは最後までわからなかった。

「みー君は私が守るよ！」

だって私は……警視総監の娘だもん」

「ならなおさら駄目だろ!?？」

え？何でって言う顔をする彼女に言って聞かせた。

「だって俺ん家。」

ヤクザだし」

そうあの頃の俺の実家は裏家業まっし暗。地元では知らない者はいないほどの古くから続く極道さんだったんだ。

「だから正義の味方のお前ん家とは相容れない。

敵なんだよ！

だから帰れっ！」

「関係ないもん。私はヤクザだから恋したんじゃないもん……みー君だ

から好きになったんだもん」

顔を真つ赤に染めながら俺に自分の気持ちを伝えてきた彼女。その時自分の顔を鏡で見てたらきつと真つ赤だったんだろう。

場面が変わり。

季節はクリスマス真つ只中の12月。

コタツとツリーがある部屋で俺の帰りを待っていた彼女は俺が帰るとコタツから出ようとした。

「おい、馬鹿！

あんまり動くな」

動こうとする彼女を慌てて止めた。

「もう、平気だよ。

ちよつとくらいなら動いた方がいいってお医者さんも言ってたし」
そう言いながら左手で自身のお腹を摩る彼女。

彼女が俺に告白してから2年。

俺達は入籍していた。

年明けには新しい家族もできる。

まさに幸せの絶頂期だった。

さらに場面が飛ぶ。

俺達の赤ちやんが無事生まれ、桜が咲き誇る季節。

いつも通り俺は入社し、彼女は育児と家事に追われていた。

お互い助けあって、時にはケンカし、時には殴り合い、そして土下座（俺限定）する絵に書いたような幸せな家庭だったがそんや幸せは長くは続かなかつた。

俺の実家で抗争があつて親父と跡継ぎだった兄が死んだからだ。急遽俺は実家に戻らなくてはいけなくなった。

彼女と何度も話し合いをした結果、俺は一人で実家に戻る決意をした。

巻き込みたくなかつたからだ。彼女も、生まれたばかりの娘もな。彼女との別れの挨拶は意外と短かつた。

「またね…」ってな。

また場面が変わつた。

俺が実家を継いでから3年。

俺はシマを荒らした敵対勢力を潰す為、『出入り』を行っていた。

信頼できる部下達を引き連れ、『害』を与える者達を駆逐していた。

俺の家は古くから続くヤクザだけあり代々受け継がれる鉄の掟と云われるものがある。

『弱きを助け、強きを挫く』

正義の味方……ではないが、偽善者の集団だったのは間違いない。

資金も悪徳業者を潰した物や祭りの屋台、マカオのカジノから吸い上げたものなど法に触れない事を前提に活動していた。

もちろん弱者から依頼されても基本は彼らからは直接吸い取らなかつた。

警察もその辺は熟知しており持ちつ、持たれずの関係で共存していたんだ。

あの日までは。

その日、警察官僚が2人銃撃され死んだ。

警察は事件解決の為、自分達の有能さをアピールする為に早期解決にこだわりのある組員を逮捕した。

他ならぬ、俺の部下を、な。

すぐに義理父に連絡を取ったが相手にされず、俺達の組は世間から

非難された。

殺人犯の溜まり場というレッテルを貼られ、俺は人を信じられなくなっていた。

そんな時だった。

ずっと音信不通だった彼女から連絡がきたのは…。

娘はもう幼稚園に通う年齢になっていた。

彼女に似てるから将来は美人になる。そう確信していたが残念がらなれなかった。

娘は殺された。

俺の部下だったある男に。

信じたくなかった。

だけど俺の元送到られてきた包みに娘の頭部が入っていたのを目の当たりにし、俺は信じるしかなかった。

それと同時に絶望した俺は残った部下を引き連れ娘の仇討ちに向かった。

元部下は組の情報を流し、あろうことか警察官僚を殺った組織に取り入りその試練として、何の罪もない娘を射殺しやがったんだ。

許せない。

そう思った俺は親父の遺品から大型拳銃、デザートイーグルを持ちだした。

敵対者を射殺しながら屋敷を進むと離れに元部下と何故か彼女がいた。

彼女は人質に取られていたんだ。

元部下は俺に武器を捨てろと言った。

だけど彼女は武器は捨てないでと叫んでいた。

俺はその場を動けなかった。

あの男は憎い。

だけどあの男のすぐ前には彼女がいる。

撃てない。撃てるわけなかった。

「終わりだ！」

男がそう叫び男が手に持つ銃で俺を撃とうとした時、男の拘束がわずかに緩んだ彼女は男と俺の間に、直接線に飛び出した。

そして撃たれた。俺の目の前で。

俺は怒りのあまり男の眉間と左胸の二箇所を放った2発の銃弾で撃ち抜き殺した。

外しはしなかった。昔から射撃はちよくちよくやらされていたから得意だった。

人間を撃つたのはこれがはじめてだったけど。

彼女に駆け寄ると彼女の胸からは血が流れていた。止まらない。流れつづける血液。染まる紅い色。

俺は自分を攻めた。もっと早く撃っていれば。力があれば彼女を救えたのにと。

血を流し続けているのにもかかわらず彼女は俺に微笑んだ。笑っていた。

死が近いはずなのに微笑んでくれたんだ。

今思えば彼女が俺を安心させる為にしてくれたんだろう。

死が怖いはずなのに『わずかな勇氣』をだして。

だけど当時の俺は気づけなかった。

それどころかこう思っていた。

やめてくれ。そんな顔を俺に向けんな。

俺には君に微笑んでもらえるような資格はないんだ。

そう思った俺は無意識の内に手に持つ銃を自身の額に向けていた。

トリガーを引く直前、彼女の顔が見えた。彼女は泣いていた。俺は

彼女を最期の最期で泣かしてしまった。

さつきまであんなに微笑んでいた彼女を泣かしてしまったんだ。

ガチャツと音がし振り向くと。

俺が殺したはずの男が立ち上がっていた。

眉間と胸からは血が流れている。

最期の悪あがきだったんだろう。

俺は抵抗するのを放棄した。

俺は逃げたんだ。

死にたかった。彼女と娘を守れなかった情けない男だった俺は彼女の『わずかな勇気』を踏みにじって『死』に逃げた。

人として『最低な行い』をした。

俺は男に撃たれ、そして気がつく草原に寝ていた。

そして女神様と出会った。

これが俺が犯した『最低最悪な罪』と今までのいきさつだ。

「……ろー！」

声が聞こえる。

「……きろー！」

またあの夢か？

一体いつまで見続けるんだろう。

終わらない悪夢。繰り返される絶望。

夢なら早く覚めろ。そう思っていると。

「起きんかー！」

ゴンツと脳天に強烈な衝撃を受ける。

この痛みを生み出せるのは…。

「……痛えなー！」

普通に起こせ、馬鹿吸血鬼!!？」

俺が文句を言う。案の定。

「ほう。師匠を馬鹿呼ばわりとは随分といい身分だな。オイ」

目つきの悪い目をより悪くしている雪姫が俺が寝かされているベッドの側に立ち俺の顔を覗きこんでいた。

「随分と愉快的な夢を見ていたようだな？」

ちつとも愉快じゃねえよ。

「最初、デレデレだったではないか」

げ？ま、まさか彼女に告白されたシーンを見られた？

そういやあ、夢見の魔法とか記憶を覗く魔法とかあったな。

「靄がかかっていたから全部見れなかったがああ美少女は誰だ？

うん？」

何故だか雪姫は目を吊り上げ、頬をわずかに膨らませて俺の首を締め付けてきた。

「師匠命令だ！吐け」

師匠関係ないだろ!!？

「な、なんでもない。ただの夢だ……」

そう言ったが信じなかった。

何故か機嫌を損ねた雪姫に引きずられた俺はダイオラ魔法球の中で丸4日程、現実世界で四時間ほどこっ तरी、たっぷりシゴかれて肉体的にも、精神的にも追いつめられた。

まあ、でも特訓いしゅめのおかげで取得中だった『雷の斧』と雪姫から新たに習った『雷の投擲』を取得することができた。

結果オーライなのか……いや、どう考えてもデメリツトの方がデカイ。

雪姫に2日ほどサンドバックにされたせいで耐久性がまた上がってしまった。

吸血鬼に攻撃されても死なないとか、俺もしかして人間辞めてる？

ダイオラ魔法球の外に出ると日は暮れており、教務科で金次に声をかけられた。

金次はアリアと依頼デイトしてきたようだ。俺は雪姫との鬼吸血鬼の八つ当たりでごっこで走り周りクタクタになってたので金次に何かを呟いたようだがそれが何なのかはよく覚えていない。

余談だが。

雪姫からは今後ダイオラマ魔法球を自由に使う許可を取り付けた。
代わりに見知らぬ女に近づくことを何故か禁じられたが……なん
でだ？

装填12

情報収集

金次と共にマスターズ教務科を出ると金次がゲームショップに行かないかと誘ってきた。

気晴らしになるかと思いき、金次の案内でゲームショップへ向かった。歩くこと数十分。目的地に着くとそこは…

「おい、金次。何だここは？」

目の前の建物を見てそう言う俺。

「ゲームを売ってる店だ…」

そんなことはわかってんだよ。馬鹿金次。

「俺が言ってるのは何でゲーム買いにビデオ屋に来たのかって聞いてんだよ!?!」

俺達がやって来たここは、学園島で唯一のビデオショップ屋。R15のゲームが置いてある店だ。

「……報酬だよ」

金次はそう呟き店内に入って行った。

後続きながら考える。

報酬？

「ある奴にアリアの情報を探らせてるから、これはその情報料代わりだ」

金次のその言葉で俺は彼女の計画を思い出した。

「……理子か」

みね峰・りこ理子。

インケスタ探偵科のAランク武偵。

ネット中毒者の上にノゾキ、盗聴盗撮、ハッキングなどの情報収集能力に秀でた、現代の情報怪盗だ。

「明日、女子寮の温室前で会うことにしてる」

金次がそう言い、ポケットから出したメモを見ながら買うゲームを手にとっていく。

「それ、俺も行っているか？」

俺がそう言うと金次が驚いた顔をした。

「光。どうした？」

お前がそう言うなんて珍しいな」

ああ。俺もそう思う。

今までの俺なら関わらなかつたな。

けどなんでかな。原作のイベントだからこそ関わらないといけな
い。

そう思ったんだ。

「……駄目か？」

金次にそう聞くと。

金次は首を横に振り答えた。

「いいや。俺はいてもいい。むしろいてほしい。

理子と女子と2人つきりだと正直辛い」

ヒステリアモードになりたくないからか俺が参加する事に同意し
た金次。

気持ちにはわからんでもないが金次今の台詞、学校や人前で言うな
よ。変な誤解を招くぞ。

「じゃあそうと決まったらさっさとゲーム選んで帰ろうぜ！」

金次の支払いを待ち、会計が済んだ俺達は第3男子寮へと歩きだし
た。

因みに金次はゲームの中に続編物シリーズを入れようとしていたが止めた。
彼女が傷つく行為をする必要はないと思つたからな。

男子寮に着くと金次の携帯に着信がきた。

着信相手は……アリアからだ。

金次が出ると開口一番に……

「馬鹿金次！あんた今どこにいんのよ！」

さっさと帰ってきなさい！」

と奴隷金次を叱責するアリアのアニメ声が響いた。

「だー、うっせえー！今寮の前だ。光もいる」

金次がそう返すと御主人様アリアから俺に代わるようにとの指示が出た
ようだ。

「ちようどいいわーミッソ。あんたもこれから家うちに来なさい！」

逆らうと面倒そうだったので仕方なく、本当に仕方なく行くことにした。

「わかった。場所は……OK！」

今からすぐに行くよ」

そう言つて金次の携帯を切り金次に返すと金次が尋ねてきた。

「どこに行くんだ？」

「お前の部屋」

「なっ!?？」

絶句してる金次。

「ま、頑張れや。女子と同棲とか……アアウラヤマシイ」

「最後棒読みだ！」

あたり前だろ。いくら美少女でもツンツンのアリアさんは勘弁だ。

アリアは可愛い。それは認める。けどな、二丁拳銃や二刀小太刀持ち歩いてる女子なんか誰でも嫌だろ。

「金次、戒名考えとけよ！」

「不吉な事を言うな」

金次の部屋に上がりこむとまず初めにリビングに置かれた大きな旅行鞆に目がいった。

「随分でかい荷物だな。なんだそれ？」

俺がアリアに聞くと。

「何って宿泊セットよ」

「は？」

「キンジが強襲科に戻るって言わないと」

「言わないと？」 絶句してる金次の代わりに聞くと。

「泊まってるから」

「は？ちよつ……ちよつと待て！何言つてんだ！絶対駄目だ！帰れ！」

金次は断固反対した。

「うるさい、うるさい、うるさい！」

あんたはあたしの奴隷なの！」

なんか既視感を感じるな。

アリアと金次の言い争いは夜中まで続いたらしい。

俺は早々に帰宅したからその後のことは詳しく知らない。

俺は自室に戻るととある人物に連絡を取った。

「もしもし…」

電話をかけるとその人物からは不機嫌な返事が返ってきた。

「あゝ。もしもし?」

「……」

「こんばんわ。ちうたん」

「ちうたん言うな!?」

鋭いツツコミを入れる電話先の相手。

彼女は情報科所属の2年。Sランク武偵だ。

「わかったよ。長谷川さん」

長谷川 千雨。ありとあらゆる情報を掴んでいる腕利きの情報屋であり、その気になれば大国の国防総省のコンピュータにハッキング出来る腕前を持つハッカーでもある。

年齢は俺より一つ上だが、一年間ほど引きこもって過ごしていた為、留年したらしい。

ランク考査は無理やり出されたらしくSランク。卒業できるだけの単位はあるが出席率は最悪で、ほとんど寮から出ないガチのニートになりつつあるという話だ。(葉味少年談)

「千雨で言いつたつろ」

「わかったよ、ちうたん」

「ちうたん言うな!?」

どうやらちうと言うのは駄目らしい。

「わかったよ。千雨さん」

「ふん、で?」

俺は用件の一つでもある神崎・H・アリアについて情報収集を頼んだ。

「……。すぐ行くー!」

ちうたんが家にやって来た。

「歯を食いしばれ！」

俺の側に近寄ってきた彼女は、突然俺の顔を殴った。

「くっ……」

ストレートパンチが決まり頬に痛みがでた。

「この、たらしが……」

何故殴られたかよくわからなかったが文句を言える雰囲気ではなかった。

「そんなにロリが好きならいつでも、ちうになっ……って待て私。落ち着け、早まるな。」

危ねえ、盛大に自爆するところだったぜー」

一人で何やらブツブツ呟く千雨。

顔が赤いのは風邪でも引いたのか？

「ゴホン。あー、そのだな……。神崎・H・アリアとはどんな関係なんだ？」

千雨さんがそう聞いてきたのでありのままを話すことにした。

「んー。一応、(仕事の)パートナーかな？」

「寝食は共にしてないよな？」

「あく。したけどあれは……」

「なっ!!?」

ま、まさかそこまで関係を……

(つてきり仕事のパートナーだと思っていたが、まさか恋愛のパートナーだったとは……)

くっ……光。やっぱ後で殴る」
なんでだ？

その後も罵倒されたが結局ちうたんが何故怒り出したのかわからないまま朝を迎えてしまった。

翌日。

「理子」

金次と共に向かった女子寮の前の温室に彼女はいた。

ここの温室。ビニールハウスだが人けがなく、秘密の打ち合わせには便利な場所となっている。俺もたまに神鳴流の女剣士さんとか魔眼を持つ必殺仕事人とか中国拳法のお師匠様とか糸目忍者さんとか元気が最強と言う口癖のバスケット部員とかとの会合や呼び出し、仕事の話などでちよくちよく使っている場所だ。

「キーくん……あれ？ミつくんもいる？」

バラ園の奥にいた理子がくるつと振り返った。

理子はアリアと同じくらいチビだがいわゆる美少女の部類に入る。

ふたえの目はキラキラと大きく、緩いウエーブのかかった髪はツースイドアップ。ふんわり背中に垂らした長い髪に加えて、ツイントールを増設した欲張りな髪型だ。

「相変わらずの改造制服だな。なんだその白いフワフワは」

「確か、白アリだか白ヤリとかそんな名称じゃなかったか？」

「違うよ！これは武偵高の制服・白ロリ風アレンジだよ！キーくん、ミつくんもいいかげんロリータの種類くらい覚えようよお」

「だが、断る」

「キツパリと断る。つたく、お前はいったい何着制服持ってんだ」

金次の質問に答える理子。

「ん〜と100着くらい」

「ひゃ……ひゃく!?」

驚いて声もでないとかまさに今の状態を言うんだな。

金次は驚きながら手に持っていた紙袋から中身を取り出しはじめた。

「理子こっち向け。いいか。ここでの事はアリアには秘密だぞ」

「あと、俺がいたこともな」

「うー……らじやー!」

ぴしっ。

理子はキヲツケの姿勢になり、両手でびびしつと敬礼ポーズをした。

金次が苦い顔をしながら紙袋を開けると、包装紙をビリビリに破い

て鼻息をふんふんふんとしだした。

「うつつつわあ———！『しろくろ』と『白詰草物語』と『妹ゴス』だよおー！」

ぴよんぴよん飛び跳ねながら理子が両手をぶんぶん振り回しているのは、R15指定。

15禁ゲームだ。

「はあ〜」

理子のテンションについていけず溜息を吐く金次。

仕方なく俺が金次の代わりに理子に聞いた。

「おい、理子。頼んだもん、あるんだろ？」

「———あー！」

「よし、それじゃあとつとと話せ」

そして理子は語りはじめた。

アリアは強襲科のSランク武偵。友人はいないこと。徒手格闘、バリー・トワードや拳銃、ナイフの腕は天才の領域ということ。

二つ名は「双剣双銃」のアリア。

14歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパ各地で活躍していたこと。

99回連続逮捕で一度も犯罪者を逃がしたことはないこと。

父親はイギリス人とのハーフで母親は日本人。

アリアはクォーターにあたること。

そして、アリアの一族は貴族の称号を与えられていること。

祖母は『タイム』の称号をイギリス王家から授与されていること。

『H』家の人達とは上手くいっていないこと。

それらが理子が集めた情報だった。

ま、俺は知ってたけどな。

「そうだよ。リアル貴族。」

でもアリアは『H』家と上手くいってないらしいんだよね。

理子は知っちゃってるけどー。あの一族はちよつとねえー」

「教える。ゲームやったら」

「理子は親の七光りとか大キライなの。」

「イギリスのサイトでもググればわかるんじゃない？」

「まあ、そうだな」

俺は納得した……というような顔をした。

「俺、英語ダメなんだよ」

「がんばれやー！」

「おっと！」

理子が金次にぶつかりそうになったが理子を支えてやり金次の腕時計が壊れないようにしてやった。

「危ねえな。気をつけろよ理子？」

「……」

あつ、う、うん。ゴメンありがとう」

理子は苦笑いを浮かべ俺から離れた。

俺と金次は理子と別れ、金次の部屋。第3男子寮へと向かった。

装填13 全力で……

男子寮マンションに戻り、金次の部屋にお邪魔すると窓から見渡せる『学園島』を夕陽が金色に染めていた。

レインボーブリッジなどの湾岸地帯がよく見える。

隣の空地島は今は何もないが来年には宇宙軌道エレベーターの建設が予定されている。

ここから眺める湾岸の眺めは最高だ！

国際太陽系開発機構
「……ISSDAによりまずと火星の緑地化計画は来年から本格的に開始されるとの事です。」

事務局長のネギ・スプリングフィールド氏によると……」

ニュースが流れるテレビからは麻帆良に建設中の軌道エレベーターや火星を映した映像が流れている。

「ネギも大変だな……」

火星か……」

あつちの世界も見ておきたいし、ゴールデンウィークにでも行ってみるかな」

高畑先生を通して交遊ができた薬味少年の事やあつちの世界の事を考えていると扉が開閉する音が聞こえ、四部屋ある個室の一室からアリアが出てきた。アリアは右手に『松本屋』と書かれた紙袋を持っている。

「あら？ミツル、あんた来てたの？」

「ああ。部屋に居ても暇だしな。」

金次ならコンビニ行つたぞ」

「む？ちゃんと桃まん買ってくるかしら？」

手に持つてるその袋はなんなんだよ。そう思いアリアに聞くと。

「これは3時の桃まんよ！」

時刻を確認したがすでに3時は過ぎている。

「あたしが欲しいのは夕食後の桃まんのよ！」

桃まん食べ過ぎだろうと思つたが指摘したら銃ガバメントで風穴空けられるので聞こえないフリをして、テーブルの上に置かれていた新聞を読み

始めた。

天気予報が載っていたので確認すると台風1号が沖縄に上陸しているようだ。

新聞をペラペラ捲りながら読んでいるとリビングの戸が開かれ、この部屋の主である遠山金次が入ってきた。

『太平洋上で発生した台風1号は、強い勢力を保ったまま沖縄上空を北上しています』

入りっぱなしのテレビからはアナウンサの声が聞こえ、沖縄市街地の様子が映し出されていた。

「遅い」

ソファアーに腰掛け鏡を見つめていたアリアが金次に文句を言い放った。

「どうやって入ったんだ」

金次はそう言いながら俺を睨んできたので誤解を解くことにした。

「俺は知らない。」

俺が来た時にはすでに中にいた」

「じゃあ、どうやって……」

どうやって入ったんだと金次が聞く前にアリアは「あたしは武偵よ」と無い胸をはって言った。アリアの事だ。

どうせピッキングかカードキーを偽造したんだろう。

「カードキー造ったのよ」

「偽造すんなよ」

「レディを玄関先で待ちぼうけさせる気だったの？許せないわ！」

「逆ギレするような奴はレディとは呼ばないぞ、でぼちゃん」

「でぼちゃん？」

「額のデカイ女のことだ」

「あたしのチャームポイントがわからないなんて！あんたいよいよ本格的に人類失格ね」

金次にそう言ったアリアはイタリアの雑誌にモデルとして載ったことを自慢げに話すと鼻歌を歌いながら鏡に視線を戻した。

金次は洗面所に行き手を洗いながら「さすがは貴族様。身だしなみ

にもお気を遣われていらつしやるわけだ」と嫌味つたらしくアリアに言った。

するとアリアは……。

「……あたしのことを調べたわね？」

何故か嬉しそうな表情を浮かべ金次がいる洗面所に入って行った。

俺はそんな2人が入った洗面所をチラツと見て関わる必要はないなど判断し、視線を新聞に戻した。

「ふむふむ、国民的アイドルK泥酔して公園で全裸……そういやこんなのがあったな」

懐かしい事件や文化芸能の記事を読んでいると洗面所が騒がしくなった。

うるさいな。何を騒いでんだあいつらは。

「だから、あれは不可抗力だつってんだろ！それにそこまでのことはしてねえ！」

「うっせえーなー！何を騒いでんだよ？」

うるさいので仕方なく洗面所に行くとアリアは。

「ミツル。あんたは認めるわよね？」

「なんの話だよ!?!？」

「なんか、アリアの奴が初めて犯人を逃がしたんだと」

「へえー。金次をかー」

「ちよつと待て！さらつと俺を犯人呼ばわりすんな！」

「確か99回連続逮捕してたんだろー。」

金次を捕まえるんなら手伝うけど？」
100人

「俺は犯罪者じゃねえ！」

「……2人よ」

「2人？」

「あたしが逃がした犯人はあんた達2人よ！」

「ちよつと待て！金次（光）はともかく、俺は犯罪者じゃねえ！」

まったく、失礼な奴だな。金次の馬鹿はともかく俺が犯罪なんてするわけないだろ。

「強限したじゃないあたしに！あんなケダモノみたいなマネしとい

て、しらばつくれるつもり!??このウジ虫共!」

「だからあれは不可抗力だつてんだろうが!!?」

あれは事故だ。悪いのは脱がせた俺じゃなく、脱がす原因を作った金次だ。

「なあ、俺悪くないよなー親友?」

「ああ。ただの事故だしなー心の友よー」

うんうん。だよな。

そうだよな。

というわけで……。

「あれはこいつの命令で……!!?」

お互いの顔を指差す俺と金次。

くつ……金次の奴。自分の事を柵に上げて俺に擦りつける気だな。ヒスつてないはずなのに狡猾な奴め。

「あーもう、うるさいうるさいうるさいー!」

とにかくあんた達明日、強襲科に来なさい!」

アリアは真つ赤になりながら俺達を交互に指差した。

「嫌だ!」

「断る!」

「ミツル。あんた来なかつたら雪姫先生に借りたDVDばらまくから」

「はっ?」

「ミツルのこの一年間の醜態が記録されてるのよね!」

「なんでお前が持つてんだよ」

「決まってるじゃない!」

借りたからよ。

残念でしたー、べー」

あつかんべをするアリア。

「今日、教務科に行ったら雪姫先生が貸してくれたのよ」

「あ、あの馬鹿教師……」

「ショックでパニックるミツルの顔を見たいって言ってたわ」

まずい、あれはまずい。なんとしてでも取り戻さないと。
アリアは金次に迫っている。

「あんた入試の時の成績Sランクだった！
直感だけどあんたとミツルはただの武偵じゃない。」

特殊な条件下で何かしらの方法で力を発揮するタイプね」

鋭い、推理は苦手なアリアだか持ち前の直感力を発揮して調べたら
しい。さすがは最高の名探偵の子孫だ。

その直感力は本物だ。

「金次とミツルはあたしと同じ前衛フロントでいいわね！」

「よくない。何で俺なんだ」

「まあ、俺は『魔法拳士』だから前衛でもいいけど……」

魔法使いには二つのタイプがある。

後方から火力が高い魔法を放つ、まさしく砲台のような（魔法使い
本来の）役目の『魔法使い』と前衛で詠唱を唱えながら肉弾戦で闘う
『魔法拳士』の2種類が、な。

俺は右指の中指に嵌めている白い指輪を見つめた。

この指輪は雪姫から貰った物だ。

魔法の発動体になる物らしい。

弟子になった日にくれたから他の杖を使わずにずっとこれを杖に
している。

「金次、なんでもしてあげるから条件言いなさい！」
うわー。アリア凄い事を言っている。

金次に何でもするって、それ性的にほにやららすることだぞ？

普通の男なら今の台詞言われたら押し倒すくらいするんじゃない
か……。

まあ、金次に限ってそれはな……いとはいいきれないな。

金次、ロリコンだしな。

現にアリアに馬乗りされて喜んでるし。（俺目線）

「一度だけだー！」

金次はそう言い、上に乗るアリアをソファアに押しつけた。

「一度だけ？」

「強襲科に戻ってやるよ！ただし、組んでやるのは一度だけだ。最初に起きた事件を、一件だけ、お前と一緒に解決してやる。それが条件だ。」

ただし、自由履修でな。」

転科はしない。それでもいいだろう？」

俺がふと考え事をしている間に金次とアリアはそんな約束をしていた。

「いいわよ。ただし、全力でやんなさいよ」

「ああ。わかった。全力でやってやるよ」

通常モードの俺の、全力でな……とか思ってたのか。

悪いな、金次。

「金次、ちゃんと全力でやれよ？」

俺は金次に警告しておく。

「普段のお前の全力でじゃなく、お前が持つ能力ちからを全部出した全力でな」

「いや、それは……」

「何ミツル。あんた何か知ってるの？」

アリアがそう聞いてきたがさすがに金次の許可なく話していい事ではないのとぼけた。

「さあな。武偵なら、Sランクなら自分で調べろ！」

その日の夜。自室に戻った俺の携帯に長谷川ちゅうたさんから電話がかかってきた。

「神崎・H・アリアの情報と峰・理子の情報全てわかったぞ？」

頼んどいたアリアと理子に関する情報が書かれた資料を女子寮の温室まで取りに行きその場で目を通していく。

「理子は原作より厄介になってんな……」

「原作？」

「いや、なんでもない」

「峰は国家機密Aに指定されている犯罪組織で基礎魔法を学んでいたらしい。」

学校生活では一度も使ってないけどな」

「わかってるメンバーはほとんど予想通りか…」

ちうたんですらあの組織の全貌はわからないかー。

「もう少し探ってみるが気をつけろよ?」

ちうたんは真剣な眼差しを向けてきた。

「なんだか嫌な予感がするからな…:巨悪な臭いがピンピンするからよ。」

こっちはこっちで調べてみる。朝倉にも連絡するがいいだろう?」

「ああ。頼む!」

あさくらかずみ
朝倉和美。

インフォルマ
情報科3年のAランク武偵。

スパイゲーム
偵察機+αを飛ばして遠隔地から情報を収集できる情報収集のプ

ロ。

一緒に写真を撮るともれなく美少女の幽霊も一緒に写るとかなんとか。

報告を終え女子寮に戻るちうたんを見送って温室から出ると知り合いの諜報科レザドの女生徒が声をかけてきた。

女性にしては長身で目は細く閉じられている。資格好は忍者が着るような忍び装束を身につけており、

「ニン、ニン」などと呟いているどっからどう見ても忍者だが本人は指摘されてもとぼけている。

そんな糸目忍者の名は…。

ながせかえで
長瀬 楓という。

金次の戦妹、風魔陽菜ふうまひなの先輩にあたる諜報科の2年だ。

単位不足で留年したらしい。

「会合でござるか?」

「まあ、話し合いっす」

「拙者これから山に行くでござるが、光殿も一緒に行くでござるか?」

「山?」

「…彼女アスナ殿も来るでござる」

「ッ…?」

一旦寮に戻りサバイバルの道具と俺が普段使う武器、折りたたみ式ナイフと拳銃『ベレッツタM93R（対テロ用）』を携帯すると男子寮の前まで来ていた楓さんと合流した。

車輜科^コで仕事人が待っているとの事なので俺達は《瞬動^{ジュ}》を使い車輜科まで移動した。

装填14 山と言ったら温泉だ！

車輻科ロジにある煉瓦造りの車庫ガレージに着くとそこで長い黒髪を膝まで伸ばした背丈が高い褐色肌の女性が待っていた。

その女性の脇にある駐車している車、レクサスの中に何故か和服を着た長髪黒髪の少女が助手席に座っており、隣の運転席には黒髪のサイドテールの少女がハンドルを握って座っていた。

「遅いぞ、楓」

褐色肌の少女が俺の隣を走っていた忍長瀬少女の名を叫んだ。名を呼ばれた楓かえてさんは名を呼んだ褐色肌の女性に遅れた理由を話はじめた。「すまぬ。拙者の私用で遅れてしまったでござる。

いやはや、面目ない」

遅れたのは自分のせいだと主張し始めた彼女だが遅らせたのは俺だったので楓さんの擁護をすることにした。

「すみません、マナ先輩。」

楓さんが遅れたのは俺のせいです。

彼女は悪くないので俺を罰してください」

「ん？お、ミツルも来たのか。」

ならしようがない。ミツルに口説かれたんだろう。ミツルにナンパされない女子などいないからな。

今日はどんなキザなセリフをいったんだ？」

「ちよつと待て！俺をヒス金みたいな奴と同じにするな。

貴女あんたが俺の事をどう思っているのかよくわかったがあいにく俺はナンパなんかしねえよ！」

その言い方だと語弊がありまくるので釈明をしたが、何故か隣に立つ楓さんや助手席に座る関西癒魔術協会の長姫の娘君がウンウンと首を縦に動かし頷いているし、運転手を務める少女からは冷たい視線で睨まれている。

「ほう。そのわりには君の周りに美少女が集まるが…」

「せやね〜」

「いやー。そういえば道中拙者も口説かれましたな」

「……。(じー)」

「そうなん。やりおるなくミツル君」

「そう言えばエヴァンジェリンや長谷川とも仲がいいようだな」

「光殿はネギ坊主と同じで随分とモテるようすな」。

「拙者も光殿のことは嫌いではござらんが」

「まあ、確かに嫌いではないが……」

「先日のカモのランキングでも恋人にしたい男性でベスト6に入っていたな」

「ふむ。なかなかの注目株すな」

「そうやなく。ミツル君なら恋人にしてもええな」

「ちよっ……お嬢様!?」

「ほう。近衛も狙っているのか」

「やりますなく」

「い、いけませんお嬢様。」

「お嬢様にはまだ速すぎます」

「必死だな刹那」

「よほどお嬢様が盗られるのが嫌みたいでござるな」

「冗談や。ウチの恋人はせっちゃんだけや」

「このちゃん!?」

俺を置いてけぼりにして女子トーク始めやがったよ。

恋バナされてもどうかえしたらいいのかわからん。

「あの……とりあえず車に乗りませんか？」

車に全員乗り込むと目的地に向かった。

山と聞いていたからてつきりどつかの山奥に連れて行かれると思っただが場所は温泉地だった。温泉街で世界を救った英雄達を集めた同窓会をやるらしい。

そんなところに俺が参加していいのかと聞いたら主催者の一人が俺と会いたいようすで来てほしいようだ。なんでも俺の分の旅費も出してくれるらしい。

随分太っ腹な人もいるんだな。

まあ、いいや。山と言ったら温泉だろ！

車で移動する事数時間後。

俺達を乗せたクラウンは無事に神奈川の温泉街についた。

辺りは日が沈み、外灯がなければわからないほど暗くなっている。

車は温泉街を進み少し離れたところにある山というか小高い丘の上立つその建物の駐車場に停車した。

「ここは……」

目の前の古びた旅館風な建物を見て俺は啞然とした。

東北の温泉地にあるような歴史がありそうなその建物と建物の扉脇に書かれている看板に見覚えがある。

窓から溢れる電気の光によつて見える看板にはこう書かれている。

『女子専用寮　　ひなた荘』と。

「ラブひなかよ!?」

ネギま! キャラが出る世界だから出ても不思議じゃないが……まさか伝説の女子寮で寝泊まりすることになるとは。恐るべし融合世界。

「おじゃましてーす」

中に入るとドタドタバタと誰かが駆け寄ってくる足音が聞こえ玄関に現れたその人物にいきなり蹴り飛ばされた。

「おかえりーケータロー!」

ドゴオンという打撃音があがり俺は玄関の外に飛ばされたが着地の際に受け身をとり華麗に着地をきめた。

「ありやあ? ケータローじゃない」

不思議そうな顔を女性はしているが蹴られた俺の方こそ意味がわからん。

「俺はケータローじゃない。

八神光だ」

「私達は素子さんの知り合いの者です。」

素子さんは「在宅ですか？」

俺達をこの旅館に連れてきた桜咲刹那先輩さくらさきせつなが蹴りを出してきた女性に聞いた。

「ありやりや……失敗してもうた。」

わいはスウと言うんやー。よろしくな」

スウと名乗った女性によると刹那先輩の知り合いは仕事に行っていて留守との事で代わりにスウさんが中を案内してくれるということになった。

「本当なら管理人夫妻がおるんやけどなー。」

今2人とも仕事に行つとるんや」

なんでも管理人夫妻を始めこの旅館あらため女子寮ひなた荘には東大生ばかり住んでいるらしい。

なんでも10年程前からこのひなた荘で暮らすと成績が上がりどんな馬鹿でも東大に行けるようになったらしい。

一部では伝説の女子寮と呼ばれているとか。

「宴会は食堂でやるようや。準備ができたら呼ぶから待っててなー。お仲間さん達なら離れにおるでえー」

案内され離れの戸を開けるとそこにはオレンジ色の髪をツインテールに結んだ美少女と赤毛の優男ルームメイトと同居人の犬上小太郎らの姿があった。

「よおーミツル。遅かったな〜」

「遅いわよー！」

「ミツル君お疲れ様！」

小太郎、神楽坂明日菜かぐらざかあすな、ネギ・スプリングフィールドの順にそんな事を言ってきた。

「久しぶりだな。ネギ、アスナ」

「ですね。ちょうど一年前でしたね。師匠マスターの家で出会ったのは……」

「エヴァちゃん元気？」

2人と学校での出来事（雪姫の事や修業の事）を話していると小太郎が話に割り込んできた。

「なあなあネギとミツル。聞いたかー、この旅館には凄腕の剣士が
るんやてー。」

なんでも刹那さんと同じしんめーりゅーとかいうやつみたいや。
後で闘おうやー」

小太郎は悪い癖の戦闘脳になって戦いたくてウズウズしている。

「え？・そうなの」

「俺はいい。ネギかアスナを連れてけ」

「私もいいわよ。光と小太郎で行ってきなさいよ」

「え？僕もいいで……」

がしっ。

小太郎がネギと俺の肩をつかんだ。

「やるやな？」

掴まれた肩を強く握られ骨が軋む音がしてきた。

ゴキ、バキ、ボキッ。

あきらかに砕いただろうという骨が粉碎する音がなったが俺もネ
ギも騒いだり慌てたりしない。雪姫の修業ではこんな事は日常茶飯
事だったからだ。

もし重症を負ってもこの場には救護科の3年、近衛木乃香先輩もい
るし大丈夫だ。

「ま、まあ。興味あるな」

「いや僕は……」

「そうと決まれば早速行くでえー。」

もう帰る頃って言ってたわー」

小太郎に引きずられ食堂に行くところには……。

「コラ、スウ！つまみ食いは駄目だろ」

「あーん、素子勘弁やー」

「もういい歳なんだから落ちつけー！」

斬空閃」

飛ぶ斬撃によって吹き飛ばされたスウが俺達の方にやって来た。

「「ちよっ……」」

激突する瞬間に俺とネギは闇の魔法をを、小太郎は気を纏い防御し

衝突の際に起きた衝撃を緩和した。

「アタタタタ……やられてもうたー」

「む？すまない。一般人を巻き込んだか。

大丈夫か？」

黒髪を腰まで伸ばした美女が声をかけてきたので返事を返した。

「ええ。大丈夫です。

なあ、平気だよなネギ、小太郎？」

「はい。この程度大丈夫です」

「まあ、フェイトやエヴァさんの攻撃に比べたら軽いやなー」

「な、なんだと……!?」

浦島みたいに不死身なのか？」

黒髪美人は驚愕している。

「あの……貴女は？」

ネギがそう聞くと美女はネギの顔を見て再び驚愕した。

「あ、貴方はネギ・スプリングフィールド!?」

何故ここへ!?」

「それは私が呼びました。お久しぶりです。素子さん。

ネギ先生、皆こちらの方は私が小さい頃からお世話になっている
京都神鳴流剣士しんめいりゅうけんしの青山素子さんあおやまもとこだ。彼女は現神鳴流の師範代で
らっしやる。

素子さん。こちらのネギ先生は私の中学時代の担任で魔法世界を
救済した時のチームの代表でもあります。

隣の彼らは今の学校の後輩や同級生です。

今日同窓会を開くという事は鶴子元師範代から伺っていませんか
？」

刹那先輩が前に出てきてそう説明した。

「……聞いてないが」

確認すると言って自室に向かった素子さん。

俺はその間、料理の支度をせっせとしている黒髪の女性に声をかけ
た。

「突然来てすみません」

「いえ、いいんですよ。」

大人数の方が楽しいですから。自己紹介はまだでしたね。
私は前原まえはらしのぶはらといひます。

よろしくね」

「八神光と言います。」

「こちらこそよろしく願ひします」

自己紹介している間に素子さんが食堂に戻つてきた。

「連絡とれたがどうやら姉上が連絡入れ忘れていたらしい。

すまない」

「そんな、頭を上げ「決闘や！」ええ!?？」

素子さんが頭を下げてきたが彼女は悪くない。

頭を上げてくれと説得しようとしていると空気を讀まずに小太郎が素子さんに決闘を申し込みやがった。

「俺らと勝負せや！」

「なんでそうなる!?？」

「ふむ。よかろう。浦島以外と最近稽古していなかったからな。

お相手いたす」

あれ?素子つてこんなに戦バトル闘狂ジャンキーだったか?

いつも剣振り回してる描写あつたけどまだマトモなキャラじゃなかつたか?

「では皆さんお茶入れますからこちらにどうぞ」

しのぶの案内で女性陣はしのぶの後に着いて行つてしまった。

残されたのは俺と小太郎と刹那先輩だけだ。

外に出た俺達は庭で向かいにいる素子&刹那ペアと対峙した。

「さて、最初は誰から来ますか?」

手に黒刀『ひな』を持ち、服装も動きやすいジャージに着替えた素子さんが最初は誰が戦うのか訪ねてきた。

「俺から行くでえー」

修業脳筋小太郎が前に出た。

ペア戦のはずなのに先走り突撃していく。

「待て小太郎。闇雲に突つ込んでも勝てねえよ!」

静止を心みたが言うことを聞かずに。

「刹那ねーちゃんより強いのはわかる。

強いからこそ1対1で戦いたい。

すまんがミツルは刹那先輩の相手を頼む」

そう言つて駆け出した。

「俺の全力で行くでえ」

「ふふ。お手柔らかに、な」

「ほな、行くで。

はあああ……」

「甘いー」

小太郎は『気』で強化した身体能力で素子の懐に入り込み『気』で強化した拳を叩きこんだが素子は小太郎の拳を刀の刀身で受け止めてガードし無防備になった小太郎に『気』を纏った打撃技を放った。

「斬空掌!!?」

気を弾丸のように放った素子の技は小太郎の身体に直撃したが小太郎は気を集中させ、気を鎧みたいに纏い被弾を防ぐ。

「ぐっ……キツイわ」

キツイと言いながら小太郎は再度素子に迫り十八番おはこの我流技を放った。

「狗音爆碎拳！」

小太郎が気を凝縮させた一撃を放ったが素子はそれを『ひな』の刀身で受けてから流し軌道をわずかに変えさせて自身に直撃するのを防いだ。

「まだまだ甘い！」

神鳴流奥義雷鳴剣！」

電気エネルギーを纏った剣が小太郎に襲いかかり小太郎は黒焦げになり地面に倒れた。

小太郎が黒焦げにされてるのを横目でみながら俺は刹那先輩と戦っていた。

「よそ見をしながらとは余裕ですね」

「全然余裕ないっす」

先輩が手にしている小太刀『夕凧』を魔力を纏った手で真剣白刃取りしながら答える。

刹那先輩は刀を持つ手を緩めるところかグイグイと注ぐ気の量と入れる力を増してきた。

「なんか怒ってませんか？」

「いえ、別にこのちゃんに見惚れてたからとか、このちゃんに好かれてるからとかそんな理由で怒っていません。

怒っていませんとも！」

「めっちゃ怒ってんじゃない?？」

あれー刹那ってこんな人だったけー?

おかしいなー。俺の中のせつちゃんに対するイメージとか心象とかが崩壊しそうだよ。

「私はこの……お嬢様の従者として貴方を倒す!
来たれ!!? 建御雷」

そう言って右手に夕凧を持ち左手に魔法具の石剣を出し、二刀流で襲いかかってきた。

「百花繚乱」

直線上に気を飛ばす技が俺に襲いかかるが俺は光属性の魔法の矢を放ち相殺させた。

「斬鉄閃」

気を纏った鉄をも両断する剣が襲いかかった。

「風花 風 障 壁」

10tクラスの衝撃にも耐えられる防御魔法を展開し身を守る。

「なかなかやりますね……でも次で終わりです」

刹那先輩が持つ二つの刀剣に刹那先輩から放出された気が集まった。その凝縮された気を円を描くように剣を振るうと凄まじい衝撃波が巻き起こり俺は吹っ飛ばされた。

「神鳴流奥義 百烈桜華斬」

上空に吹っ飛ばされた俺と巻き添いで吹っ飛ばされた小太郎は空

高く飛ばされそして下へと落下した。

ズドオオオオオン。
バチャ

下に落ちた俺達は暖かいお湯の中に落とされた。

「ぎ……ぎやあー!!?」

女性の叫び声が聞こえたような気がしたが息が苦しくてそれどころじゃない。

痛む身体を動かし水中から出るとそこには黒髪の少女が全裸で立っていた。

ん? 全裸!?!?

辺りを見渡すと白い湯気がたっている。

ここはラブひな名物野天風呂らしい。

「ち……ち……痴漢!?!?」

「誤解だ!」

やべえ。今の状況だとどっからどう見ても不審者だ。

空から男子が降ってくると思うか?

それも女性が入浴中の露天風呂に。

それは終わりへのエピローグ。

捕まったら最後。

そいつはきつと狭くて暗い監獄に行くことになり後悔することになるだろう。

だから俺は行動を起こす。

最低、最悪な逮捕劇エンディングを避ける為に、な。

「すみませんでした」

何故か石の上に置かれていた埴輪のかぶりものをかぶり俺は出入り口に向かって駆け出した。

「へ、ヘンタ

イ!!?」
後ろを振り返ると眼鏡をかけ肩にカメレオンを乗せた少女がバス

タオルで身体を隠しながら追いかけてきた。

服くらい着ろよ！

なんて恰好で追いかけてきたんだよ。と思いながらも歩を緩めることなく、むしろ駆け足で逃走する。

「待ちなさい！」

くっ……スウさん作製の捕獲兵器作動」

カチツと廊下の壁にあるボタンを少女が押すと壁の中からミサイルが出てきて発射された。

「ミサイルじゃん!?」

どこが捕獲兵器なんだよ。と叫びながらも逃走する為に魔法を使い迫ってきたミサイルを迎撃した。

「くっ……魔法の矢 連弾光の10矢 ！！？」

魔法の矢で迎撃できたが爆風で外に飛ばされてしまった。

「あべしっ」

「待ちな……きやあ〜」

爆風で飛ばされた俺と少女は無事に地面に着地したが着地した態勢は最悪だ。

なぜなら俺が少女を押し倒している形になっているからな。

「っ!?」

「いっ嫌 ！！？」

少女の叫び声があがるとドタバタドタバタと足音が近づいてきたのがわかり後ろを振り向くと仁王立ちしたアスナと刹那先輩と素子さん、それに管理人夫人である浦島うらしまなるなるがいた。

「あ、あんた何やってんのよ……反省しなさい ！！？」

「ひ ーん ！！？」

ボゴオ ーん。

アスナの魔法障壁無効化キックとなるの鉄拳なるパンチが同時に炸裂し、俺は意識を失なった。

目を覚まし時計を見るともう朝の5時だった。

「ヒドイ目にあつたな……」

普段から雪姫に虐待されてなかつたら死んでたレベルだぞ。

あの攻撃を繰り返されても平気とか恐るべしネギ&景太郎。

お腹が減つたので寝かされていた部屋から外に出て食堂へ入るとそこは酔っ払い達により地獄絵図になっていた。

「おろく刹那殿が5人に見えるでござる〜」

顔を赤くしビール瓶をラツパ飲みしてるくノ一。

「せつちゃん、せつちゃんなんで黙ってんや」

置物の招き猫を刹那先輩だと勘違いして話かけるこのか先輩。

「お、イケるくちやな。

負けへんで〜」

「ふっ。私に挑むとは愚かな」

酒瓶を一气飲みしあう狐顔の女性と龍宮真名先輩。

「ちよつとネギさつきから飲んでいないわよ!」

「すみません、僕日本酒苦手で……」

「あん?私がついだ酒は飲めないのか!?!」

絡むアスナと絡まれるネギ。

「刹那、さつスキの試合見たがまだまだ甘いな!」

そんな事では神鳴流剣士として一人前とみなされないぞ!!?」

「す、すみません。師範代。

どうすればいいんでしょう?」

酔っ払いを放置して修業談話に花を咲かせる女剣士。

「しのぶくバナナ頂戴!」

「もう、カオラつたらさつき食べたでしょ!」

お母さんと子供みたいな会話をするスウとしのぶ。

「何だこの混沌部屋は……」

あまりの酷さに絶句していると……痴漢呼ばわりした少女が近寄ってきた。

「あ、変態……じゃなかった。

あのさつきはごめんなさい」

俺に頭を下げてきた眼鏡をかけた童顔少女。

「君は？」

「こんな子ラブひなにいったけなーと思いい名を尋ねると……。」

「真枝まえたえま絵馬えまです。」

「後ろから読んでもまえだえまです。」

「さつきはごめんなさい」

「絵馬？」

「あくいたなーとその存在を思い出した。」

「確かラブひな最終巻に二話だけでたな。」

「つてか後ろから読むとか自分から言うのか。」

「絵馬ちゃん大丈夫？」

「テンパっている絵馬の側によって来たのはこのひなた荘の管理人の一人。」

「浦島なるだ。」

「さつきはごめんね。」

「それと……」

「謝罪してから言葉をとめ、周りの住人全員と声を合わせて言った。」

「「「ようこそ！ひなた荘へ」」」

???

「……ハアハアハアハア」

激しく息を乱しながら暗闇の中を走っています。

駆け出す最中に何度も何度も転んでしまいました。

「くう……ハアハア。マズイです。早く外に出ないと……」

岩や硬い地表の天井や壁を触りながら私は外を目指して暗闇の中を駆け抜けます。

「マズイです。浦島先生と離されてしまったです。なんとかして外に出ないと……このままでは彼らに殺られるです」

彼らとの戦闘で持っていた荷物や装備品を落としてしまうというミスを犯した私は唯一残された初心者用の杖を片手に探知呪文を使って地上へと繋がっている道を選んで進んで行きます。

「こんなことになるなら猫探しの依頼クエストにすればよかったです」

タタタツと駆け出しながら進む私の背後から突然炎を纏った蜂が数匹飛んできました。

「……ツッ??」

間一髪で気づいた私はその蜂から逃れようとして頭を下げましたがそのまま勢いよくズザアアと地面に頭から滑るようにヘッドスライディングをかましながら倒れてしまいました。

今のスライディングで手足を擦りむいたが気にするほど重症な怪我は負っていません。

蜂はさつきまで私の頭上があった場所で爆発しました。

痛みに耐えながら起き上がると音もなくソイツらは私の前に立っていました。

「な、何故貴方がここに……」

私の質問には答えずにソイツとソイツの仲間である眼鏡をかけて白いロリータファッションに身を包んだ神鳴流の女剣士と黒い長髪で口にキセルを加えたちよつと陰険な感じがする少女は私を拘束

しようとして近づいてきました。このままでは捕まる。そう思った私は《遅延》させておいた魔法を解放しました。

フルグラティオー・アルビカンス
「拡散・白き雷!!」

土埃を発生させ、目くらましをしてから逃走を計ったがそんな子供騙しにかかるほど彼らは甘くありませんでした。

「ふん。無駄な事を……」

「そないな技で逃げられるわけないやろ〜」

「ふー。退屈ねー。いい毒薬も持ってなさそうだし……後は貴方たちに任せるわ」

「貴様……また何もしない気か……」

いくら貴様が我が主と協力関係にある教プロフェッショナル授の組織の者だとしても使えないのなら逃げまとうとしているその小娘と共に灰塵にするぞ?。」

「くだらない。貴方をその女共々毒してあげてもいいのよ?」

「まあまあ、落ち着きません……皆さんやらないならウチが貰うてもええか?」

「ふん、好きにしろ!ただし30秒だ。30秒以内に殺れないのなら燃やしてやる!」

「そうね。3分待つてあげるわ。3分逃げきれたら毒してあげる」

「結局みなはんやる気やないか。まあ、ええわ。ほなウチからいくでえ〜」

背後からそう言った奴らの一人は私に向けて日本刀を横に振るってきました。

「斬空閃」

曲線状に気を放って敵を斬る技をその女剣士は放ってきました。

私はとっさに竜牙兵を召喚して防御させたが竜牙兵は一撃で斬り裂かれ技の衝撃によって5〜6mほど吹っ飛ばされました。

「うっ……」

岩に全身を強くぶつけてしまったが倒れたままでは危険だと思い、痛む体を無理やり動かす為に魔力によって身体能力を強化しました。

狙われているという殺気を感じ、すぐにその場を飛び跳ねたが私が

飛び跳ねたタイミングとほぼ同時に女剣士の声が聞こえました。

「斬鉄閃」

螺旋状に気を放って、敵を斬る技が私がたつた今までの場所に直撃しました。

私がたつた今までの岩場は大きく抉れ瓦礫が散乱しています。

もし回避できなかったら潰れたトマトやふ??っしーの梨汁??ッシャーみたいに潰れされた上に真っ赤な液体が飛び散るくらいに悲惨な光景となっていました。

「状況は最悪です。襲撃者が一人ならまだしも複数人いてその中に奴らがいるなんて……。」

正直私一人では荷が重いです」

襲ってくる月詠の攻撃を回避しながら私は今おかれている立場と状況を頭の中で整理しました。

奴らは昔より凶暴性が増していますね……。

昔は『制限』がかかっていたようですがさつき殺す感じで襲ってきましたし……。

誰かが人間を殺せるように『調整』し直した？

誰が？

奴の強さはどのくらい変わっているんでしょう……。

昔、あの世界で奴の仲間に挑んだ事がありましたがあ那时的は惨敗しました。

あの時、フェイトが裏切らなければ私達は消されていたかもしれません。

『リライト』で『完全なる世界』の術式の中へ……。

それほどフェイト並に厄介な奴らなのです。

さて、困りましたね……どうしましょうか。

奴が起動しているということはあの組織が復活しているということでしょうし、あの組織が復活しているということは何者かがエヴァさんの封印魔法のあの白薔薇を溶かしたという事になります。誰がどうやってやったのかは不明です。

ですが少なくともエヴァさんクラスの術師が関わっていると考え

の方がよさそうですね。

そんな風に考えながら月詠が繰り出す神鳴流の気を使った斬撃を避けていると私の周囲3mを取り囲むように蜂が覆いつくしました。

その数、じつに30匹ほどです。蜂は私を取り囲むとボツボボという発火音と共に一斉に燃え始めました。私はすぐ様防御結界を展開する為にアリアドネーで使っていた長剣を呼び出しました。

装剣!!
メー・アルメツト

呪文を唱えると魔法陣が展開し魔法世界にあるアリアドネー騎士団の魔法剣が出てきました。

私はすぐ様着装し防御結界を展開しました。

「アリアドネー九八式 瞬時絶対対物小隊結界!!!」

剣を回転させながら呪文を唱えます。

「戦乙女の花楯」!!

剣を防御に使い、飛んできた蜂の爆発から身を護ります。

身を護りながら事態を打開する為に、一瞬の隙を生み出す為に、攻撃呪文の詠唱を始めます。

「影の地 統ぶる者」
スカーサハの 我が手に授けん

ヤグルム・ダエモニウム・スピニス・トリギンタ
三十の棘もつ愛しき槍を」

呪文を唱えると魔法陣が展開され数10本の魔法の槍が出てきました。

「雷の投擲!!!」
ヤクラーティオー・フルゴリス

魔法の槍を投擲すると槍は眼鏡女剣士と黒髪の少女には刺さったが奴には刺さらずに槍が当たる直前に見えない壁みたいなものに当たって弾かれました。

「やっぱりです……。予想通りです」

私はそう言いながら次の手を撃つことにしました。

今までただ闇雲に逃げていたわけではないのです。

私が逃げていた方角には秘策があるのです。

「鬼さくんくこちらですー」

ワザと挑発しながら身体強化した身体で走りながら敵3人を誘導した。

背後から放たれる気を使った斬撃やら気弾やら火魔法やらをかわしながら進んで行くと天井が高くなり開けた岩場のドームみたいな広い空間に出ました。

ようやく戻ってこれた。ここは発掘現場で私達が彼らに襲われた場所でもあるのです。

ドームの中央に立つと私はまず床に落ちていた私の愛銃であるクリス ヴェクターを拾いマガジンに特殊な弾を装填します。

この弾は対超能力者用に開発された物で特に魔法使いに絶大なる効果があるものです。

開発には中学時代の友人数名が関わっていて、あの夏の冒険の体験が生かされた装備なのです。

「ここまでです！」

「何がここまでなんだ？」

「もう降参ですか？」

「捕まって堕ちる魔法少女もいいかも……ネタができたわ」

「魔法探偵……いえ、今は魔法武偵綾瀬 夕映と名乗るべきでしたね。

いざ尋常に勝負です!!？」

私はそう名乗りをあげ3人組に向け手に持つ銃、短機関銃サブマシンガンを乱射しました。

私の銃に使う弾丸は、45ACPを使っていてマガジンの装弾数は30発入るのです。

そのマガジンに入っている30発全ての銃弾を全て特殊弾に変えました。

銃口から放たれた弾丸はまず火のアーウェルンクスの魔法障壁に当たると魔法障壁が強制解除され、彼の身体にも銃弾が幾つも命中しました。

被弾した彼は呻き声をあげ、私を睨みつけながら呪文を放とうと魔法を発動させようとしたが魔法は発動しませんでした。

被弾した彼からは大量の魔力が消失しています。

「これは……?？」

彼は驚きの声を上げました。無理もないです。彼からは魔法の力

が失われたわけですから。

切り札を使うことになるとはこちらとしても予想外でした。女剣士の方を見ていると銃撃した際に弾みでかけていたメガネが落ちたようで『眼鏡く眼鏡く』とまるで一昔前のコントみたいなことを言いながら地面を這いつくばっているです。

黒髪少女は何やらスケッチブックを出して絵を書き始めたです。なんとも自由な人達です。

「時間もあまりないことですし、さっさと終わらせるです！」

あの弾は長くても3分しか効果が出ません。

あの弾の名は新開発されたばかりの『魔力消失弾』と言います。

まだ試作品なのです。

『魔法禁止弾』をベースに武偵用に開発された物です。

私は逃げまどう中で遅延させておいた魔法を解放して彼に向けて放ちました。

「これで終わりです！」

ゼロ距離から私が今撃てる最大の雷系呪文を放ちました。

エーミツタム
「解放!!？」

ヨウイス・テンベスターズ・フルグリエンズ

雷の暴風!!？」

ドオオ——ンという爆発音がなり響きました。

爆風により、辺り一面は土埃に包まれ岩と土でできた壁や天井は崩れ落ちました。

もの凄い威力です。

さすがは大呪文。ゼロ距離とはいえとんでもない威力です。

さすがにあの人数でもこれほどの威力ならただではすまないでしょう。

そう思い土埃が晴れたあと、彼の姿を探すと彼はお腹の部分に穴を開けた状態で立ち上がりました。

「まだやるのですか？」

私は彼に銃を向けましたが彼が喋るよりも先に聞いたこともない男の人の声が突然聞こえてきました。

「やめたまえ！」

今の君の状態では彼女には勝てないよ？」

私と彼の間に突然その男性は現れました。

「貴様……」

「はじめまして、というべきかな？」

彼はそう私に声をかけてきました。

私と男性を睨みつけてくる彼を無視して……。

「やめたまえ、君の攻撃は僕には当たらないよ？」

彼が手を動かしましたがその男性からは見えない位置、男性の背後で動かしたにも関わらずその男性はまるで背後を、死角を見えているかのようにそう言いました。

「何故攻撃していかないのにわかる？」

「初歩的なことだよ……クウアルトウム 4 君？」

チツチツチと右手の人差し指を回しながらそう答えるスーツ姿の

男性。男性は左手にステッキを持っています。

「推理したからだよ……予知とも言っている。」

もつとも、私の物は推理や予知を超えた物だけだね」

「予知!?？」

「予知だと!?？」

「そうとも。」

私はこれを条理^{コグニス}予知と呼んでいるがね」

「条理……予知？」

「貴様、一体なんのつもりだ？」

主との同盟を忘れたのか？」

「もちろん覚えていられるとも……ただ、君達の都合で僕の計画を狂われされたくないからね。」

僕の曾孫が育つ為には彼女、夕映君の力が必要なんだ。

だからここで君達に夕映君を殺らせるわけにはいかないんだよ。

もつとも、殺られそうなのは彼女ではなくて君達の方だったがね

……」

「ふっ、ふざけんなー！」

「騒がしいのは嫌いだよ。」

「また3時間後に会おう！」

謎の男性はそう言っつていつの間にか、手に持っていた銃で彼を撃ちました。

撃たれた彼は黒い球体に捕縛され、一瞬にして消えました。

「さあ、君達はどうする？」

残りの少女達に問いかけると黒髪の少女も女剣士もその場から魔法を使ったように忽然と消えました。

「……君ももう帰りなさい。」

遅くても3時間以内には出るんだ！」

そう言った男性、謎の紳士は先程の彼女達のように忽然と姿を消しました。

まるで転移魔法を使ったかのように忽然と……。

2時間半後、散々彷徨って道に迷った私は元の場所に戻ってドームの崩れた天井を登り地上に出るとそこは古い旅館のような場所でした。

装填16 異変!?!?

遺跡の中で魔法（武偵）少女が逃げまわっている頃

俺はひなた荘の食堂で酔っ払いの介助をして酔いつぶれた奴らを布団に寝かせてから朝食の手伝いを申し出た。

懲りずに酒を飲み続ける一部の酔っ払いを放置して朝食の準備を始める管理人代行。

女子寮入居者のしのぶさんはもちろん客であるアスナや俺も手伝い朝食を作り始めた。

アスナやしのぶさんも昨夜はかなりの量のお酒を飲んだ筈なのに酔いが覚めたのかももう動きまくってる。

アスナには魔法無力化マジックキャンセルの能力があるけど酒もキャンセルできんのかな？

しのぶさんは長いことこの寮にいるから慣れてんだらうけど……。「それじゃあしのぶちゃんはいつも通り味噌汁をお願いね。

アスナちゃんは卵焼きを作るからボールに卵を割ってね。光君はスウちゃんの密林部屋からバナナ取ってくれば?。」

「は〜い!。」

管理人である浦島なるから出された指示に返事するしのぶさんとアスナ。

即座にツツコミを入れたのは俺だけだった……。

「ちよつと待てーええええ!。」

何で俺だけバナナ担当!?!?。」

2人に比べあきららかに担当の配置がおかしい。

投げやりぽつかたし……。扱いが雑すぎる。

女子寮なのに密林があるとか部屋の中にバナナの樹が植えられているとか『普通』じゃない。

確かスウの部屋ってターオンが住んでそんな魔境になってたよな？

一般人が入っても大丈夫なのか？

「スウちゃんに気に入られてるようだし、光君なら大丈夫でしょう……多分」

「そうね。普段からエヴァちゃんの虐めに慣れてるミツルなら大丈夫よ……多分」

「え？え？大丈夫……なのかな？」

なるとアスナに発言に戸惑いながらも結局肯定の返答をするのぶさん。

「イヤイヤイヤ……全然大丈夫じゃないだろ！」

語尾に多分とか不安になるような言い方すんなー。

後しのぶさんもこの2人の言う事を間に受けなくていいですからねっ！

「にやはは……ミツルくバナナほしいか？」

寝ていた筈のスウが起き出し俺に抱きついてきた。

首と腰に手を回されて抱きつかれる形になり女性の柔らかい部分が密着しているので物凄いドキドキしている。

「ちよつとミツル。何ニヤニヤしてんのよ！」

エヴァちゃんに言いつけるわよ！

何故か怒るアスナ。

何故アスナが怒る？それと雪姫は関係ないだろ？

そう思いながら魔法障壁を咄嗟に展開したがそれを突き抜ける脚キックをアスナは放ってきた。

「理不尽だ……」

アスナの魔法障壁を無効化する脚は俺の股間に命中し俺は悶絶したが痛みを堪え、抱きついてるスウを引き離し、彼女の部屋に向かって駆け出した。

スウの部屋301号室に着き彼女に断りを入れてから部屋の戸を開けると中には――

熱帯植物が生え、日本には生息しないはずの野生動物達、カメレ

オンやら蝙蝠やらトカゲやら猿の仲間やら蛇（模様からして猛毒）やら巨大なゴキ……やら虎やらカメやらが生息していた。

昨夜他の人の部屋を見せてもらったが普通の部屋（6畳半）ほどの広さの筈だったが、スウの部屋はその30倍の部屋の広さになっていた。

「ここ……本当に女性が住む部屋なのか？」

部屋の中を見た感想はその一言だった。

「にやははは。こういう部屋の方が故郷にいるみたいで落ち着くんや」

「スウの故郷って何処だっけ？」

「モルモル王国や。トーダイ市とトーダイ遺跡が有名でカップルの聖地になってるんやで」

にやははと笑いながら答えるカオラ・スウ。

「そーいや忘れてたがこう見えて彼女はモルモル王国の王女様でいらっしやた。」

人は見かけによらないものなんだよな。

などと失礼な事を考えていたらスウに『見せたい物がある』と言われ部屋の中に連れられ、奥にある押し入れを改造した製作所の中に入った。

「見て見て、これを見せたかったんや」。

武偵高の装備科^{アムド}で名高いチャオとハカセと共に制作中の新しい発明品ができたんや」

そこにあつたのはSFなんかに出てくるパワードスーツのような物で乗るといふより着るといった某OSのような宇宙空間を移動することを想定したロボットスーツが置かれていた。

形は服や人型ロボットというよりカメの着ぐるみに近い形をしているが……。

「どうや凄いやろー？」

まだ試作段階やけど東大と京菱グループの援助で開発した超科学兵器や」。

通称PAD。名前はメカタマゴ110号や！」

それが本当なら確かに凄い。

最先端技術の結晶であるPADをすでに開発してるとかスウの開発能力半端ねえー。

聞けばスウは現在東大の大学院に通っているらしい。

将来は工学系の大学博士かマッドサイエンティストになってそうだな……などと考えていたらスウは俺がよく知っている人の名前を出している事に気づいた。

「超先輩や葉加瀬先輩とも知り合いなのか……」

世の中は広いようで狭いもんだなー。

と雪姫に師事する事になってから知り合った装備科の超天才（天災）コンビの顔を思い浮かべているとスウはPADを指差して俺に乗るように言ってきた。

「この試作機は設計中の量産機と違って魔力で動かすんや……それも膨大な魔力がいるんや。だから相手を選ぶからデータも気楽にとれないんや。」

お願いミツル。協力してな〜

スウがそう言って抱きついてきた。

スウが抱きついてきたのと同時にジャングル部屋の動物達が示し合わせたかのように出入り口を塞ぎやがった。

コイツらスウに完全に飼い慣らされてんな……。

俺は溜息を尽きながらもスウのお願いを聞いてやることにした。

何故かって？

決まってるだろ！

男なら美少女（？）に頼まれたら断れない……よな？

試作機の起動を朝食後に行う約束をし、俺はスウの部屋に自生していたバナナ（スウによつて品種改良済み）を収穫し、バナナを奪おうとする猿や猿や俺を狙う虎を魔法で返り討ちにしたりしてから食堂に向かうと、途中、地面が床下から大きな地鳴りが聞こえひなた荘の建物自体が大きく揺らいだ。

地震か？と思ったが地震というより何かが爆発したような音が下

から聞こえた。

ガス管に亀裂でも入ったか？

不安になった俺は外に出て周りを警戒してみることにした。

外に出ると中庭に大穴が空いてるのが見えた。その穴の中から誰かの叫び声が聞こえた。

叫び声の原因を探ろうと穴に近づこうとしたが足を一步踏み出した途端、何故か周りの音が聞こえなくなり脚が震えその場から動けなくなった。

まるで異空間に取り込まれたかのように……世界から断裂させられたかのような感覚になった。

すぐ目の前にある穴からはこれまで感じたことがない圧迫感を感じた。

ヤバイ。あの穴の中に近づいたら死ぬ。

なんとなくだが直感的にそう思った。

俺の時間的感覚では数分間の出来事だったが、実際には二時間半以上も俺はその場を動けずにいる。途中で心配したのかアスナやネギをはじめとした『白き翼』の面々やなるをはじめとした『ひなた荘の住人』も俺の側に集まってきたが俺に、穴に近づいた瞬間、その場から動ける人はいなかった。

唯一の例外は「闇の魔法」^{マギア・エレベア}を発動したネギと俺。『魔法無効化能力』を持つアスナは咸卦法を発動させて踏み入れてから二時間半が過ぎた頃には臨戦態勢に臨めるくらいには自由に動けるようになっていた。俺達は不測の事態に備え臨戦態勢で構えることにした。

咸卦法とは「気と魔力の合一」^{シユンタクシス・アンテイケイメノイン}を行う技法だ。

左手に「魔力」、右手に「気」を溜めて融合し、体の内外に纏って強大な力を得る高難度の究極技法と呼ばれる「闇の魔法」^{マギア・エレベア}に並ぶ超高等魔法技術だ。

発動すると、肉体強化・加速・物理防御・魔法防御・鼓舞・耐熱・耐寒・耐毒等の作用を有するチート性能を発揮できるようになる。

地面に空いた大穴から出てきた『何か』が周りに被害をもたらす前に俺は先手必勝の心構えで先制攻撃を加えていた。

「魔法の射手……雷の101矢」

「やつと出られたです——!!?」

外は最こ……あぶしつ……」

相手を麻痺させて動きを鈍らせる効力を持つ電撃系の初歩魔法を放った。

魔法はちょうど穴から出てきた『何か』に当たり、その何かは呻き声をあげた。

攻撃が当たったので確認をしようと近づくと『それ』は俺達武偵高生が着ている防弾制服を着た女生徒だった。

「い、痛いです。」

いきなり攻撃するとか貴方はドSです?」

木乃香先輩の魔法具アイニティファクトにより怪我の治療を終えた女生徒、綾瀬夕映は膨れっ面で俺をドS呼ばわりしてきた。

失礼な。俺にはどこぞの女神様やロリ吸血鬼のように虐める事で快樂を得るような趣味嗜好はない。ないったらない……本当だよ?

なんて事を思いながら綾瀬に地下で何をしていたのか聞いてみた。

「あーところであんな穴の中で何をしていたんだ?」

「はっ!??そ、そうでしたっ……今あれから何十分たったのですか?」

「30分くらいかな?」

腕時計を見てそう答えると綾瀬が顔を青くして叫び出した。

「ま、マズイです。早く逃げるです!」

「逃げる?何で……」来たですー!」!??」

地面の下から何かが発射したような音が聞こえ、地震がきたかのよ
うな激しい震度が襲った。庭の地面にはあちらこちらに亀裂が入り、

ありえないことにその亀裂から炎が噴き出した。

なんだ……何が起きているんだ？

穴から噴き出した炎は一つに集まり、その炎の中からは1人の少年が出てきた。

「ハハハハ……教授に飛ばされてみれば目の前に俺が探していた獲物があるなんてな。

ずっと探していたぞ……ネギ・スプリングフィールド!!？」

白髪の少年は自身の周りに大量の蜂を飛ばしながらもその視線の先にいるネギを睨みつけた。

「貴方は??？」

『あの時』貴様に殺られたカリは今日返す!

九つの鍵を開きて レーギヤルンの筐より出て

来れ!!?

グラディウス・デイウィス・フランマエ・アルデンティス
燃え盛る炎の神剣

手に巨大な炎剣を出現させ、ネギに向かってそれを放り投げてきた。

「させないわよ!

アデアット
来たれ!ハマノツルギ」

アスナが胸元からカードを出すと呪文を唱えた。

カードが大剣になり相手の大剣の攻撃を、炎を無効化した。

「貴様……擬似人格の分際で邪魔をするな!」

「アスナさんは擬似人格じゃありません。

アスナさんはアスナさんです!」

ネギは魔法の詠唱を始め、ネギを護るようにアスナが前に出た。

「ネギには指一本触れさせないわよ!」

魔法界に古くから伝えられる言い伝えの如く、火力重視の魔法使いを護る『騎士』のように……。 (本来ならアスナ自身が魔法の国のお姫

様だが……)

シニストラ・エーミッサ・スタグネット
「左腕 解放 固定・

キーリブル・アストラペー
「千の雷」!!

デクストラ・エーミッサ・スタグネット
右腕解放 固定・

「千の雷」!!

ドウブレイクス・コンブレクシオー

双腕掌握!!

プロ・アルマティオーネ

術式兵装

ヘー・アストラペー・ヒューベル・ウーラヌー・メガ・デユナメネー
雷 天 大 壮 2

タストラパー・ヒューベル・ウーラヌー・メガ・デユナメネー
雷 天 双 壮

ネギは電撃系最高規模の広範囲殲滅呪文である『千の雷』を術式兵装して体内に取り込んだ。

今の、この状態になったネギは常時雷化して秒速150kmで攻撃できる。

さらに雷化中は思考加速・身体機動加速ができるオマケ付きだ。

副作用である『魔素』も理由はよくわからないが人間を辞めたことにより人外化し、不死者となった為に克服したようだ。

雪姫曰く『人外の化け物』『灰色の存在』。

ザジ・レイニーデイ曰く『灰色の結末』、『少年冒険譚の失敗例』。

取得困難な大呪文を二重に装填できる辺り、天才としかいいようがない。

「行きますよー!

雷速瞬動!!?」

秒速150kmの雷と同じ速度の攻撃が相手に襲いかかった。

装填17 絶望の中で見つけた光。

雷鳴が迅り、ネギの身体はほんの一瞬で、炎を操る白髪の少年の真後ろに移動し、ネギはそこで右手を振り下ろし、強烈なボディブローを加えた。

ボゴオン、という鈍い音が聞こえ、すでに腹部に穴が空いていた少年の胸部に、ネギの正拳が突き刺さった。

ゴプつと口から液体を吐き出した白髪の少年、クウアルトウム・アーウエルンクス。

『火のアーウエルンクス』とも呼ばれている少年。

ラテン語で4番目という名を持つ彼は、肉体を、胸や腹を貫かれても尚、戦意を喪失させることなく、最期まで抗う仕草をした。

ネギがいればどうにかなるな。とすっかり空気と化していた俺だが、そんな俺にも重大な任務が入った。

攻撃を加えてしまったネギはそんな『彼』に向かってなにやら、言葉を投げかけた。

俺からは2人との距離が離れていた為に、ネギと彼の声を直接聞くことができなかつたので探偵科で習った武偵スキルの一つ。読唇術を使ってどんな会話をしているのか読み解いた。

探偵科で習ったばかりだが自信はある。

死神のノートを使って殺人をするような犯罪者相手だって読めるな。

自信満々で相手の唇の動きをよく観察して解いていく。

脳内でアンサートーカーが警告表示を出していたが、危険はないと判断して読む。

何故か読心術や読唇術には反応しにくい能力なので自力で解き明かすしかない。

(ミツルの読唇術で読んだ場合)

『何故、何故ですか。僕は貴方の事を忘れられないんだ。世界中で一番好きだったんだ！愛していたんだ！ううん、違う。今もまだ愛し

ているんだ！どんなに離れていても、敵対していても世界中の誰よりも……』

（現実）

『何故、何故ですか。もう僕達は争う理由はないじゃないですか！魔法世界は救われる！火星の緑地化は進めています。もう《完全なる世界》の術式を発動する理由はないんです？』

なのに何故貴方は……』

俺は読唇術を使ったことに、読唇してしまったことを後悔した。使えなかった。知ってはいけない禁断な秘密を知ってしまった。これからネギにたいして、どうやって接していいのかわからなくなってきた。

「何やってんのよ！馬鹿ミツル！」

スパアーンと誰かが俺の頭をハリセンでぶつ叩いた。

痛えな、誰だよ。馬鹿力でぶつ叩いた奴は。そんな風に思いながら叩かれた頭を摩って、顔を上げると、目の前に俺をぶつ叩いた張本人。神楽坂明日菜がいた。

「痛えな。何すんだよ」

俺がそう言うのとアスナは手に持つハリセンをもう一度振り上げ、勢いよく俺の頭をぶつ叩いた。

アスナが持つハリセンは、彼女がネギと仮契約パクテイオーしたことで得た魔法具で大剣とハリセンの形態を自在に交換できる。

その能力は、彼女自身が持つ魔法無効化能力の武器版だ。
魔法障壁を展開してても、気を纏いガードしても防ぐことは出来ない。

実に魔法使い泣かせな能力だ。

まあ、弱点もあるけどな。

けど、ハマノツルギはともかく、封魔の剣ホウマンツルギはどういう効果があるんだ？

残念ながら火星から地球を救った劇場版は観ていないからよくわ

からないんだよな。

この際、聞いてみるか。

「なあ、アスナ。アスナが使……!?？」

アスナに声をかけた瞬間、殺気を感じた。

アスナは気づいていない様子で首を傾げているが、この殺気を向けてくる奴らは只者ではない。あくまで直感でしかないが、かなりの強者だ。

俺はアスナを自分の方に抱きしめる形で寄せ（アスナは突然抱きしめたことに怒ったのか顔を赤くしたが、今は聞いている場合じゃない。今すぐにやることは状況の把握だ）、周囲を素早く見渡した。

すると背後、俺らから50mくらい離れた所と右斜め前、左に30m離れた所に突然、黒い球体が現れた。

俺の左側に、雷の能力を操る、『風のアーウエルンクス』が突如あらわれた。

嫌な予感がしたので右斜め前に視線を向けるとそこには……。

ゴスロリの服を着た白が特徴な女神鳴流剣士『月詠』がいた。

背後を振り返ると、女性型フェイト。『水のアーウエルンクス』までいた。

……完全に囲まれたな。

『あ、コレ、詰んだなー』と思いつながらも抱きしめていたアスナを放し、風のアーウエルンクスを、睨みつけながら問いただした。

「何故お前ら、『完全なる世界』がいる？」

コズモエンテレケイア
〈完全なる世界〉。

3年前まで存在していた秘密結社。

地球の各地や『魔法世界』で様々なテロや戦争を起こした犯罪組織。ネギま！の原作で最期は雪姫の超絶封印白薔薇魔法によりボス以外の幹部を氷漬けにし、アスナとネギが封魔の剣を振るい、『千の魔法を使う男』に取り付いた『始まりの魔法使い』を滅した（逃がした？）事で解散した筈の組織だ。

雪姫に以前聞いたが、『始まりの魔法使い』の行方については今だ調査中だと聞いていた。

まさか、奴らが目の前に現れるなんて想定外だ。
はつきり言つて、『勝てない』。

今の俺ではコイツらと戦りあつても勝負にすらならない。
絶望的なくらい差がある。

何故なら原作でもフェイト・アーウエルクスと同レベルの強さを
持っていたからだ。

某伝説の傭兵剣士による強さ表によると……その強さは推定10
000以上。

闇の魔法を、俺が今使える最強の呪文『雷の暴風』を術式装填して
も無理だ。勝てない。

強さ表によると、イージス艦で強さ1500程だ。

それを考慮して考えると……。

無理だ。勝てない。逃げろ！

頭の中で、心の中の自分がそう叫んだ。

自分の事ならよくわかつている。

そもそも、俺は自分から積極的に行くタイプじゃないだろ？

無理だ。めんどくせえ。戦ったら、動いたら、疲れるだろう？

やめよう。逃げよう。そうだ。それがいい……。

頭の中で、俺は自分に向かってずつと同じ事を言っていた。

だか、隣でアスナがハリセンを大剣にして構えたのが目に入った。

入ってしまった。視えてしまった。目についてしまった。なら、『逃
げる』という選択肢は消えた。

同時に、頭の中に、女神とアリアに言われた言葉も思い出した。

『無理、疲れた、めんどくさい。これらは人間が持つ可能性を封じ込め
るよくない言葉。』

言うのは禁止』だと。

それに……。

もっと単純で……。

わかりやすい行動を起こしたくなった理由。

それは……。

「女が戦おうとしてるのに、『男』の俺が先に逃げるわけにはいかねえよな……」

そうだ。俺は『男』なんだ。

『女』を、『女性』に戦いを任せて自分だけ逃げるなんていう事はできない。

これでも、元極道だしな。(前世では)

俺は、制服の内ポケットに入れていた、愛銃を取り出して、安全装置を外し、それを敵の一人である女剣士に向けて放った。

当たらなくてもいい。躲されてもいい。

どんな強者であろうが、拳銃の弾を防ごうと、あるいは、躲した直後には隙ができて必ず動きは止まる。

その時がチャンスだ。

俺は《瞬動術》を使い、月詠の背後に回った。

その無防備な背中に一撃を加えようとしたが、その時。

仲間である『風のアーウエルンクス』と『水のアーウエルンクス』が同時に動いた。

『風のアーウエルンクス』はネギと同じように雷化していて、俺より速く動くことができている。

俺が月詠に一撃加えるより速く、俺の腹部に蹴りを入れてきた。

「ぐッ……!?」

強烈な膝蹴りが腹部に入り、俺はあまりの痛みにも気を失いかける。

その場に、硬い土の上に、ひなた荘の庭に倒れそうになるがなんとか片膝を立てて踏ん張った。

常人なら今ので跡形もなく吹き飛んでいてもおかしくない。

「けほっ、けほっ……痛えな！」

痛む腹を抑えながら立ち上がると俺が立ち上がることは想定していなかったようで、『水のアーウエルンクス』はアスナに視線を向けていたせいか、隙だらけだったので、『風のアーウエルンクス』の攻撃を回避しつつ、近づいた俺は彼女の手前で《瞬動》を使い、運動エネルギーを増して勢いをつけて、その身体に向けて魔力を込めたストリートパンチを叩きこんだ。

ただの魔力を込めたちよつと強いパンチだったが、至近距離から放ったせいか、魔法の矢より威力は落ちるものの、それでも少しはダメージが入ったようだ。

『水のアーウエルンクス』の意識が逸れた隙を狙い、アスナがハマノツルギで『水のアーウエルンクス』の胸を貫いた。

『風のアーウエルンクス』が邪魔しようとしたが、咄嗟に『闇き夜の型』を発動させた俺が彼の行くてを阻んで、アスナと『水のアーウエルンクス』が一体一になる状況を作り出した。

そして、俺は『風のアーウエルンクス』と『女剣士』の2人を相手にするつもりで立ちはだかった。

絶望的だ。

目の前の相手には到底敵わない。

それは変わらない。

だけど……。

「よくもったな。」

後は任せとけ！」

「後は我らに……。」

「ミツル殿はゆっくり休むでござる」

「よくやったな……少年」

「ミツルだけにええかつこはさせんでえ〜」

素子。刹那。楓。マナ。小太郎の5人が動けるようになったのか、そう声をかけて、俺の隣に並んでくれた。

そうだ。そうだった。

俺は……『俺達』は1人や2人じゃない。

『仲間』がいるんだ！

『武偵憲章第一条。仲間を信じ、仲間を助けよ！』

俺達は。俺は……今は『武偵』なんだ。

あの頃の『ヤクザな自分』でも、『無力な自分』でもない。

俺には『今』、『護り』、助け合いたい仲間』がいる。

1人じゃない。

そう思うとどんなに目の前の相手と差があろうが、絶望感があろうが不思議と『大丈夫!』と思えてきた。

「呪文の詠唱に入りますから、時間稼ぎお願いします」

そう目の前の頼もしい『先輩』や『同級生』に言うと、彼女らは当たり前とばかりに口を揃えて叫んだ。

「「「「任せる(なさい)！」「」」」」

俺が呪文の詠唱に入った同じ頃、ネギは『火のアーウエルンクス』にトドメを刺そうとしていた。

本当ならそこまでするつもりも、必要もなかったが、彼が抵抗して自身の能力で作りに出した『爆発する火蜂』を大量に発生させ、あろうことか無関係な筈の『ひなた荘』を燃やす勢いでいるために彼にとつて不本意だがトドメをさして終わらせようとしていた。

「ふ、また勝てないのか……」

所詮は人形。主に調整をしてもらわなくては変わらない、な……」
「貴方は人形じゃない。」

前に言った筈です。人形でいる必要はないんだって！

ネギは顔を歪ませながら、全てを終わらせる為の呪文を発動させた。

「もし、次があれば……次があるなら、その時は一緒に紅茶を……ミルクティーを飲みましょう！」

『火のアーウエルンクス』は苦笑いを浮かべながらこう返した。

「俺はカレーしか飲まない！」

その言葉に、ネギも彼も笑い合い、両者最期は笑顔のまま別れた。
「さようなら……千の雷!!?」

電撃系最高呪文。『雷の暴風』の実に10倍の威力がある広範囲殲滅呪文が彼に炸裂し、彼は塵となって消滅した。

装填18追いつく為に……

「刹那、貴様はあの巫山戯た神鳴流剣士の相手を……。

長瀬と龍宮はアスナ姫殿下の助太刀に……。

八神の助太刀は私が入ろう」

俺とアスナのピンチに駆けつけた仲間の一人で神鳴流師範代の肩書きを持つ青山素子は他の仲間達に指示を出し、戦力を分担させた。

「師範代、お一人ですか!?？」

「いくら何でも無茶だと思うぞ?。」

「奴らは手強いでござるよ?。」

「せや!俺も戦るでえ!!?。」

「いや、ここは分担した方がいい。

敵が2人とは限らないからな。

陽動という可能性もある。

コタローは木乃香お嬢様の護衛を頼む!

お前は切り札だからな……。」

「切り札!??。」

「ああ。お前はライダーみたいなヒーローだからな。お嬢様を頼むぞ!。」

「おう、任せときく!!?。」

「……(チョロいな)。」

「二二……。(うわっ!??単純……)二二」

「……。(素子に扱い方を知られたコタロー……憐れだ)。」

素子さん達『白き翼』(ひなた戦線)VS『完全なる世界』の全面対決がここ、ひなた荘で開戦した。

刹那先輩は月詠の元へ。

楓先輩と真名先輩はアスナの元へ。

小太郎は近衛先輩の護衛を……。

そして、現神鳴流師範代である素子さんは俺と対峙する《風のアーウェルンクス》討伐に参戦してくれた。

これなら勝てる。

そう思いながら俺は呪文の詠唱を始めた。

「ふん。何人かかって来ようが我々に叶うはずはない」

《風のアーウエルンクス》であるクウイントウム（5番目）は俺が呪文を詠唱を始めたのとほぼ同時に呪文の詠唱を完成させていた。

「イグドラシルの恩寵を以って来れ貫くもの
轟き渡る雷の神槍」

「来れ雷精風の精！！」

雷を纏いて吹きすさべ

アウストリーナ

南洋の嵐

ヨウイス・テンベスタース・フルグリエン

雷の暴風!!!

スプレーメントウム

装填!!!

俺も急いで呪文を完成させたがあえて今装填させずに別の魔法の詠唱を始めた。

今すぐに発動させても奴に効くとは思えないからな。

「来れ深淵の闇 燃え盛る大剣!!」

闇と影と憎悪と破壊

復讐の
大焰!!

我を 焼け彼を焼け

其はただ焼き尽くす者

奈落の業火!!!

装填!!!

よし、次!!?

影の地 統べる者

スカサハの……」

俺が二つ目の呪文詠唱を終えた時には、奴は呪文を完成させ、雷系最大の突貫力を有する魔装兵具である雷の大槍をまだ次の呪文詠唱が終わっていない俺に向け投擲した。

雷光と雷撃を纏った雷の大槍は膨大な魔力を撒き散らしながら俺へと一直線に向かつて投げられた。このままでは槍は俺に当たり、呪文詠唱中で無防備な俺は雷撃の槍で貫かれ黒焦げになるだろう。俺が使える防御呪文の中には奴の攻撃を防ぎきれない防御結界や魔法障壁はないからな。アーウエルンクスの強さはイージス艦（一隻の強さ1500程。実際、イージス艦でこんなにあるかは不明）の約7倍（10000）以上とされており、さらに奴らはその身を多重魔法障壁の一つである「マンダラ曼荼羅のような魔法障壁」で護っている。

実際にはおそらく12000クラスに届いているだろう。

つまり俺はイージス艦隊を相手にするより厄介な敵と戦っているわけだ。

イージス艦には魔法障壁はないからな。

強さ表によると俺の強さは約2200程。（闇の魔法。術式装填を使った場合だが実際にこんなにあるかは不明）

例えるならば、こちらの攻撃力、防御力共に上回る艦隊の主砲を向けられた状況で尚且つ、高い装甲を持つ化け物相手に挑むようなものだ。

そんな事を考えていたが相手の攻撃は直ぐ目の前まで迫っていた。死ぬ直前には走馬灯とか、冷静に分析する時間とかあるんだよなあ。

などと考えていると槍が殺傷圏内に入り、雷の槍が俺に当たる…….
と思いきや、神鳴流剣士の師範代、青山素子の技によって防がれた。

「神鳴流奥義……滅殺斬空斬魔閃!!？」

素子は神鳴流奥義の一つ、剣から巨大な気を飛ばして敵を消滅させる技（素子最強の技）を放ち大槍にぶつけて相殺させた。

魔を滅することを使命とする神鳴流で師範代となった素子は本人は知らないでいるが世界最強クラスの實力者へと登り始めていた。

といっても強さ表で表すと約10000程で『千の魔法を使う男』や『千の顔を持つ英雄』には及ばないが…….

「神鳴流奥義斬魔剣『弑の太刀 一閃』!!？」

技を相殺させると続け様に『斬魔剣 弑の太刀』の上位相互版で気

を鋭く絞って飛ばす技を放った。

本来ならアーウエルンクスシリーズには『曼荼羅魔法障壁』が標準装備されており、通常は魔法防御、物理防御が完璧になされてしまうのだが、『式の太刀』の特性で魔法障壁を『すり抜けて』攻撃できる為、《風のアーウエルンクス》は素子の攻撃をモロに受けて吹き飛ばされた。

『式の太刀』を使える事で神鳴流では一人前とみなされる。

《風のアーウエルンクス》は「へぶっ……」と言う間抜けな奇声をあげながら吹き飛んでいった。

今の一撃は奴の胸と腕に当たっていた……ように見えた。

「チツ……腕の1、2本斬り落せると思っただが硬いな……」

素子はそんな事を言いながら追撃する為に『風』のアーウエルンクスに向けて技を放った。

「斬空閃・改!!?」

曲線状に気を飛ばす技を放ち、『瞬動術』（縮地）を使い接近し次々と神鳴流の技を放った。

「斬岩剣 式の太刀!!?」

神鳴流奥義の一つ。剣に気に乗せて一振りで岩をも真つ二つに斬る技の『式の太刀』を放ち、続けて剣先に電気エネルギーを溜めて振り下ろした。

「雷鳴剣!!?」

剣先に帯電させた技を腹部に放ち貫いたが相手は風属性を極めた最強の魔法使いの一人。

雷を操る風属性だけに雷化をして攻撃をすり抜けた。

《風のアーウエルンクス》は素子が持つ妖刀『ひな』の刀身を右手で刀が抜けないように握り締めた。

素子は刀を抜こうとしたが抜く前に《風のアーウエルンクス》の魔法が素子に向けて炸裂した。

「契約により我に従え」

ト・シユンボライオン・デイヤコネート
モイ・バシレウ・ウーラニオーノーン

高殿の王

エビゲネーテートアイタ
来れ 鬼神を滅ぼす

ケラウネ・ホス・テイテーナス・フテイレイ
燃ゆる立つ雷霆
ヘカトンタキス・カイキリアアキス
百重千重と重なりて
アストラ・プサト
走れよ稲妻!!
キリブル・アストラベ
千の雷!!!

雷系最大呪文でその魔力は「雷の暴風」の10倍以上を誇り、対軍勢用で広範囲に適用される呪文が素子に直撃した。

バリバリバリと激しい雷光と雷撃が放たれ直撃した素子は『氣』を全身鎧状に纏ることにによりガードを試みたがガードしても尚、そのあまりに高い威力により全身麻痺を起こしその場で崩れ落ちた。

「かはっ……」

「まだ息があるのか……トドメを刺しておくか。」

《枷》は今回ないからな」

そう言つて素子の頭を踏みつける《風のアーウエルンクス》。

雷撃を纏つた手刀を素子に当てようと振り下ろし……ようとした

所で背後に回りこんでいた俺は奴に攻撃をしかけた。

「左腕解放固定

コンプレクシオ

スプレメントウム・プロ

アルマテイオーネ

アギリタース・フルミニス

疾風迅雷!!」

《闇の魔法》、術式装填により《雷の暴風》を体内に取り込んだ。

取り込んだ途端、俺の身体は白く発光し、風のように目にも止まらない速さで駆け抜けて《風のアーウエルンクス》に接近し左手の拳を握り奴の背に渾身の一撃を、ストレートパンチを叩き込んだ。

強烈な一撃を入れた余波で土埃が舞い視界が遮られた。

「……」

「嘘……だ、ろ？」

土埃が晴れ、視界が鮮明になる中俺の目に入ったのは多重の魔法障壁により防がれた俺の左拳だった。

「厄介だな……その曼荼羅障壁は」

幾つにも重ねられた魔法障壁が展開されており物理攻撃はもちろ

ん、魔法攻撃も通りそうにない。

原作ではネギが特殊な呪文で打ち破って攻撃を加えていたが俺は雪姫からはまだ障壁を破壊できる呪文は教わっていない。

普通に攻撃するだけでは障壁を貫く事は難しそうだ。

「貴様ら如きの力で殺られるワケないだろう!!？」

諦めるんだな」

諦める？

それは無理な選択だな。

何故なら女神様と双剣双銃様にそれは禁止されてるし、武偵憲章10条に武偵は諦めるなどあるしな。

何より……。

「それは……どうかな」

ここで諦めたら俺はずっと雪姫に追いつけないしな。

今まで鍛えられた成果を出す時は今だ！

「あまり舐めるなよ」

雪姫に鍛えられてきたこの一年間で俺は雪姫を超える為に、やがて起こる戦いから大切な人達を護りぬく為に密かにオリジナル呪文を開発してきたんだ。

「やってやるよー！」

俺は左腕に装填させておいた呪文を解放させた。

「シニストラ・エミツタム左腕解放……ヤクラーテイオーフルゴリス雷の投擲!!!」

&左腕解放……」

魔法の槍を投擲してからさらに左腕から一太刀の黒い日本刀の形をした魔法の剣(刀)を出した。

奴は魔法の槍を魔法障壁で防御して受け止めた。

だけど俺の本命はコレだ!!？」

「闇夜月光輝漆黒刀!!?!」

開発中のオリジナル魔法の一つで重力魔法と闇魔法を組み合わせた呪文だ。

出現させた魔法剣を手に取り《風のアーウエルンクス》に向けて振り下ろした。

「はあああ!!?」

「ふっ、無駄な事を」

ガキーン。

曼荼羅魔法障壁によって刃先は弾かれた。

だけどそれは想定内だ。

俺は刀身にさらに魔力を込め刀にあるダイヤルを操作してもう一度斬りつけた。

「はあああ……50万倍!」

ガキーン……ピシリ。

ありったけの魔力を込めて刀を振るうと重力魔法の効力により重さが加わり《風のアーウエルンクス》が展開している魔法障壁にヒビが入った。

「なっ!?」

驚きの声を上げる《風のアーウエルンクス》。

俺はさらに魔力を込めて刀を振るう。

「はあああああ……!!?」

魔法障壁が割れる音が鳴り響き曼荼羅魔法障壁は砕け散り魔法障壁が割れたと同時に《疾風迅雷》は解除された。

「まだまだ!!?」

今が最大の好機!!?

インケンディウムゲヘナエ

奈落の業火!!!

デクストラー エーミツサ・スタグネット

右腕 解放 固定!!!

コンプレクシオー

掌 握!!

プロ・アルマテイオーネ

術式 兵 装

シム・フアブリカートウス・アフ・インケンディオー

獄 炎 煉 我」

闇属性を帯びた焰を体内に取り込み魂と肉体を喰わせて出力を上げた。

能力を増強させて手に持つ魔法剣で思いっきり斬りつけた。

「うおおお!!?」

「き、貴様あああ——!!?」

「はああああああ……喰らええええ重力50万倍だあああ——!!
?」

《風のアーウエルンクス》の胸部を刀の刀身が貫き奴の動きは、抵抗する動きが弱まった。

刀身の刃先が《アーウエルンクスシリーズ》に存在する《核》を貫いたみたいだ。

おそらく、素子との戦闘で傷ついていた核が今の一撃に耐えられなかったのだろう。

「ま、まだだ!」

まだ終わらんよ……貴様らの負けだ!!?」

そう言い《風のアーウエルンクス》は光の粒子となって消えた。

負け惜しみか?

などと思っていたが残念ながら負け惜しみではなかった。

本当の《絶望》はこれからだったんだ。

ギュルルルン。

シュパアアアアアアン。

何故なら《闇の魔法》を使い、《風のアーウエルンクス》を倒した俺の前には『彼』が現れたからな。

突然出現した黒い球体から忽然と人が現れた……。

燕尾服を着た紳士の男性がな。

その男性は開口一番にこう名乗った。

「初めまして……僕はシャーロック・ホームズだ!!？」

装填19 最強の名探偵、現る!?!?

「初めまして。僕はシャーロック・ホームズだ」

突然出現した黒い球体から現れた男は、俺の方に向かって一歩、一歩、歩き始めながらそう言った。

シャーロック・ホームズ。

イギリスの英雄。

誰もが認める世界最高の、そして最強のGreat Detective名探偵。

古めかしいデザインのスーツで正装したその身体は、大柄だ。

背丈は180センチほどで、年齢は20歳ほどに見える。

髪はオールバックで整えられており、鼻は高く、顔つきは端正。

しかし、その印象は探偵科インケスタの教科書で見た写真よりも頑健で、手強そうな雰囲気インケスタを漂わせている。

「もう逢える頃と、推理していたよ」

そう告げたシャーロックの発言に、俺の全身は硬直した。

身体だけじゃない、まるで心まで驚揺みされたみたいだ。

なんだ　この雰囲気は。

カリスマとでもいうのだろうか。

この男の前では誰もがひれ伏せてしまいそうになるほどの、そんな

格の違いが、伝わってくる。

たった一言発しただけなのに……。

「卓越した推理は、予知に近づいていく。僕はそれを『コグニス条理予知』と呼んでいるがね。つまり僕はこれも全て、予め知っていたのだ。」

だからミツル君。君が奥の手を使ってクウインクウイントウムトウムを倒すことも　推理できていた」

まるで全てを見透かしているかのようなそんな瞳で俺を見つめてきたシャーロック。

「さて、八神ミツル君。君も僕の事は知っているだろう。いや、こう思う事は傲慢ではない事を理解してほしい。何故なら僕の事は世界中

で書籍や映画で取り上げられているだからね。でも、可笑しい事に――

――僕は君に、こう言わなければならぬのだ。今ここには、僕を紹介してくれる人が一人もいないようだからね」

癖なのか回りくどい言い方をしたシャーロックは、そこで一拍おいてから――

「では改めて、僕はシャーロック・ホームズだ。

と同時に教育互助組織^{イ・U}のリーダー^{プロフェッショナル}で教授と呼ばれている者だ」

名乗った。

そうだよ。

そうだったな。

やっぱり奴はいやがったよ。

何故『完全なる世界』と手を組んでいるのかは解らないし、奴が何処まで知っているのかも不明だけど……。

この世界に奴がちゃんと存在していることに何故か安心したと同時に奴が精霊魔法を身に付けていないか不安な気持ちになった。奴が言った伊・Uは簡単に言うと言った能力を持つ者が能力を互いに教えあう場だからな。まあ、何で奴が伊・Uを教育互助組織として名乗ったのかは今置いとくか。

どう考えても教育組織というより問題児が集まった犯罪者集団なんだけどな。

「ふむ……予想以上に冷静だね。

もう少し戸惑った様子を見せるかと思ったんだが……君の事は不思議な事に推理できないからね。

君という異分子に直接会えば少しは解ると思ったんだけど僕でも推理できないなんて初めてだよ。

これは刺激を加えなければ変化は現れないかな？

少し確認させてもらおう」

刺激？

俺が疑問を述べる前にシャーロックは動いていた。

一瞬の事だった。

シャーロックの姿が忽然と消えたと思った時には俺は地面に横倒しになっていた。

一瞬の出来事で何が起きたのかも全くわからなかった。

「ふむ。先程までの力は今はないようだね。

プロ・アルマテイオーネ
術式装 填と言ったかな？

長い間は装填し続ける事は難しいようだね。

やはり闇の魔法なしだと魔法を使えない竜種とほとんど変わらな
い強さしかないか……。

なるほど。ということは装填しないとジャンヌ君よりも少し弱い
くらいか……」

シャーロックは何かを確かめるように一人で呟くと俺の背中を履
いているブーツで踏みつけながらさらに俺の首筋に何か冷たい物を
押し当てた。

「少し予定より速いけど、ミツル君。

君には……これから戦うであろう難敵の技を、「予習」させてあげよ
う。

なにしろ僕は、古い怨敵と同じ名前
るのだからね」

プロフェッショナル
教授と呼ばれてい

そう言つてシャーロックは俺の首筋に当てた『何か』を一度引つ込
めると背を踏んでいた足も退かした。

足を退かれた後は不思議な事に踏まれていた圧迫感や重さを感じ
なかった。

俺は手に握っていた重力刀をシャーロックに向けて刺突させる勢
いで突き出した。

—— バチイ、パリーン。

突き出した刀はシャーロックの片手の掌で真剣白羽取りの要領で
受け止められ、止められると同時に砕け散ってしまった。

《風のアーウェルンクス》相手に効いていた重力剣だが、この男には片
手で受け止められた拳句、砕かれる程度の意味のない魔法だった。

未完成とはいえ、オリジナル魔法を簡単に破られたショックと彼が

現れた目的に混乱しつつ、俺は彼の鳩尾につま先に魔力を込めた蹴りを放ち立ち上がった。

直ぐに立ち上がるとシャーロックから離れる為に飛び退いて距離を空けた。

30メートルほどの距離だが至近距離よりはマシだ。

「さあ、見せてごらん。」

君の魔法を」

シャーロックがそう微笑みながら言うと、彼の周りにはいつの間にか黒い球体が現れ、その中から複数のセグウェイ現れた。

それが自走して迫ってきた。

セグウェイの行き先は、標的は当然俺のようだ。

その数はおよそ30台程だ。

この状況はアリアと出会った、あの時の……。

「まずは……『復習』からだよ」

考え事をしていたがシャーロックの声で我に還った。

奴が言葉を放った直後、一台のセグウェイが速度を上げて迫ってきた。

俺はシャーロックが放った一台のセグウェイを防弾制服の腰ベルトに装着していたホルスターから抜いた銃で打ち抜いた。

セグウェイは銃座にイスラエルのサブマシンガン『uzi』が備えられていたが弾が当たり銃座は吹き飛んだ。

3発の銃弾が放たれのは想定外だが嬉しい誤算だった。

余った2発の弾丸は破碎したセグウェイの部品に当たり、運がいい事に跳ね返った弾はそのセグウェイのタイヤに直撃してセグウェイは大破した。

3点バーストを標準装備してあるせいか弾が3発もほとんど同時に出てしまったが先行で攻撃してきた一台に確実に当てて破壊させる事ができたので結果オーライだ。

G I I Iじゃないけど銃は主武器メインウェポンじゃないしな。

俺が手に持っている銃。

それは

ベレッタM93R。

対テロを想定して造られたモデルで弾数は20発。(通常は15発)

ダブルカラムマガジンと呼ばれる弾倉マガジンを使用している為弾数はやや多く、3点バーストも元から撃て、単発しかでない拳銃に火力を上げ、かつ、撃った時の反動によって命中率が変化するものを3発ほど一気に放つのでそれほど射撃においてぶれることはない拳銃だ。

もつとも、秘匿性があまり良くない、銃検の間隔が短い、日本ではほとんど流通してない、本体や専用パーツの相場も高い、世間的な実戦数も少なく信用度は改造銃の92改と変わらないなどの理由で武偵といえあまり使う奴はいないけどな。

セグウェイを一台潰す事は出来たがまだ残り29台も残っている。チラツとシャーロックの方に一瞬、視線を向けるとシャーロックはその場を動かさず、俺がどう動くかをじっくり観察していた。

その眼は子供のように好奇心に溢れた眼差しをしていた。
あまり手札を見せたくはないんだけどなあ。

そんな事を思いながら襲ってきたセグウェイが放つ銃弾の嵐の中を歩法の一つで縮地法と同じ効果を生み出す『瞬動術』と瞬動術の一種で空中ジャンプと空中移動ができる『虚空瞬動』を使って回避していった。

セグウェイが放つのはベレッタで使う9ミリパラベラム弾。

その威力を示すと弾のエネルギーは約450〜500ジュールで音速を超える弾を撃ち出す事ができる程だ。

自動車のドアなら外装を貫通し貫ける。

二枚目(内部)は無理だけどな。

普通に避けようとしたら避けられない。

だが銃口の向き、セグウェイの動きを予測して身体を動かせば躲せる。

機械的な動きで放たれた弾なら尚更な。

銃弾を避けてセグウェイの脇を通り過ぎる時に、魔力を纏った手刀を放つ。

銃座を破壊され固定されたUjiは支えが無くなり、次々と地面に落ちていく。

30台のセグウェイを無力化するのにはそれ程苦戦はしなかった。まあ、当然と言ったら当然だ。

雪姫の魔法の矢や槍と比べたら大したことないからな。

いくら自動走行できようと機械的な動きと人間的に……いや、化物的な動きをする吸血鬼とじゃ差があるしな。

魔法を使うまでもなかったな。

まあ、おかげで無駄な力や装備を消耗しなくて助かったが。

弾代は節約しとくことにこしたことはない。

本命の教授がまだ残っているしな。

その教授は俺の動きを観察し終えたのか満足そうに「ham……」等と呟き、俺を見つめる瞳を細めた。

その表情は何故か不満そうだ。

「どうしてだい？」

シャーロックは何故か不満気な顔で聞いてきた。

「何がだ？」

「何故、魔法を使わないのかね」

「あんな程度の玩具に魔法なんて勿体無いだろ」

「ふむ。この間は使っていたのにかね？」

シャーロックはあの時の様子を知っているみたいだな。

武偵殺し本人から報告を受けたのか。見ていたのか。

いや、違うな。奴なら推理するだけで全てが解るのだろう。

奴の条理予知はかなり厄介な能力だからな。

「それも条理予知の力か……」

「いやいや、こんなものは推理の基本だよ、ワトソン君」

「ワトソンじゃねえよ!!？」

ボケたのか？

ボケをかますとは余裕だなあ、シャーロックの奴。

「おっと失礼……蜂のマークのゲームメーカーの社員の方だったかな？」

アウトー！

「そりゃあ、ハ○ソンだろ！」

「冗談だよ……ツツコミ役は大変だね」

「誰のせいだと思ってるんだ!?？」

「君がツツコム事は推理していたよ」

「いらねえんだよ。そんな推理」

「三年前から解ってたよ」

「もう捨てちまえ、そんな能力」

シャーロックさん、貴方なんて能力の使い方してんの？

無駄だよ。

事業仕分けの対象になるよ？

「てやあ」

突っ込みながらもシャーロックに接近し、魔力を纏って手刀を叩きこむ。

手刀が、手の先が届く距離まで近いたその時。

バツ！ババツ！

シャーロックが懐から抜いたりボルバー式拳銃で俺の腹部を撃った。

ワルサーp99に通常使われているのは9×19パラベラム弾。

俺が使うベレッタM93Rに使用している弾丸とほとんど同じ物だ。

防弾制服を着ているとはいえ、かなり痛い。

通常、武偵は防弾繊維でできた衣類を身に纏い犯罪者や同業者と戦う。

その為、防弾繊維で出来た衣服を身に纏った相手と戦闘になった場合、拳銃は一撃必殺の刺突武器にはならない。打撃武器なんだ。

まあ、頭部に被弾すれば即死するけどな。

通常弾（9ミリルガー）なら当たりどころさえ気をつければ痛いですむ。

痛みを堪え奴を見るとその手には小型拳銃のワルサーp99を握っていた。

ワルサーp99の特長としてフレームが一体成型されている他のポリマーフレーム拳銃と異なり、グリップ後部のバックストラップと呼ばれる部品が交換式となり、使用者の手に合うよう形状を3段階に変更できる。露出した撃鉄を持たないハンマーレス型となっており、目視や指による触感で撃発可能な状態か確認できるよう、スライド後端からストライカーの一部が突き出す構造になっている。装填についても、薬室内に弾薬が装填されるとスライド側面のエキストラクターが動き、後端に赤い印が現れることで目視と接触による確認が可能になっている。

などがあり使い勝手が良い銃の一つだ。

「さて、ここまでが『復習』だよ、ミツル君。

そしてこれからが『予習』だよ」

奴が持つ銃や強襲してきたセグウェイの残骸を見て分かった。成る程。

『復習』と『予習』ってそういう事かよ。

これから戦う事になる彼女の銃と技で俺を抑える……そう言うたのか。

シャーロックの奴は完全に嘗めてるな。俺の事を。魔法使いを。

いいぜ。好きただけ嘗めてろ。

その方が付け入る隙ができる。

「サキタマキカセリエス グラキアーリス魔法の射手連弾・氷の101矢!!?」

俺は瞬動を使い50メートルくらいの距離をとって離れ、氷の魔法で形成された矢を放ったがシャーロックの周りに現れた謎の気体の泡、ゴマ粒みたいなサイズの、小さなシャボン玉に矢が触れた瞬間、大爆発が巻き起こった。

今のシャボン玉には身を覚えがある。

確か……。

「バオバオ爆発!?」

そうだ。

あれは気体爆弾の一種で、シャボン玉が弾けて中身が空気中の酸素と混ざると爆発するものだ。

「これは藍幫ランバンの曹操コウロウが使う技か」

「知っているのかね？君と彼女に面識があるとは驚きだ。それはさすがに僕でも推理できなかったよ。不思議な男だね、君は」

シャーロックが驚きの声をあげた。奴にしてみれば接点がない筈の俺とココの間に何かがあるという疑念が生まれた筈だ。実際はただ俺が原作知識でココの技を一方的に知っているだけなんだけどな。

「推理したんだよ。貴方のお得意のな」

「なるほど……探偵科Sランクだけの事はあるね」

勘違いしてるようだが都合だ。Sランク武偵だから類稀ない推理力で技の詳細がわかったという事にしよう。

「ふむ。君が使える魔法は光、火、風、闇、氷、重力の6つの属性のようだね。」

ん？おや……」

シャーロックが何かを探るような視線で俺を見たかと思えば眉を曇らせ、理解できないといった顔で俺を見つめてきた。

「精霊の動きが活発化している!!？」

これは……そうか。どうやら君の事をみくびっていたようだ」

シャーロックはそう言って手にした太めの金属製ステッキを持ち上げた。

拳銃ではない……あれは!!？」

「仕込み武器……スクラマサクスか」

「ははっ。凄い推理力だ。君には名探偵の素質がある。僕が保証しよう」

「……適当だな、あんたも」

そんな会話をしながらもお互いの距離を詰めていく。

接近戦は一見不利に思うが奴には条理予知がある。

遠距離攻撃をしかけても躲されるのは目に見えている。

なら接近戦に持ち込んで推理できないくらいの連続攻撃をしかければ効く筈だ。

「ハッ!!？」

闇闇モイモイドドの型を発動させてシャーロックが振り下ろすステッキを魔法

障壁でガードしつつ中国拳法の技の一つ、寸勁すんけいによる掌打を放つ。

寸勁は発勁を短い距離から行うものだ。発勁には比較的長い距離を必要とするものを長勁、短い距離から行うものを短勁と言って距離による区別がある。

突き出す自分の拳と相手との距離によって尺勁（長い距離）、寸勁（短い距離）、分勁（極めて近い、ほぼ触れた距離）に分けることもある。具体的に言うとな手から一尺（約30センチ）ほどの距離から突くのを尺勁と呼び、一寸（約3センチ）の距離から突くものを寸勁、さらに短く相手に殆ど触れたような状態から突くものを分勁と呼んでいる。つまり尺勁は長勁に分類され、寸勁・分勁は短勁に分類される。

ちなみに発勁はつげいとは、中国武術における力の発し方の技術のことで元々中国語には発勁という熟語はないが、発と勁で「激しく力を発する。」という意味ともとれる。楊式太極拳の第三代伝人の楊澄甫の弟子である鄭曼青によれば「左萊蓬老師曰く『力は骨より発し、勁は筋より発する』と主張している。この論は形意拳大師の郭雲深の『三歩功夫』にも重なる論であるとされている。

「ぬ……」

「おい嘘、だろ……」

拳がシャーロックの腹部に直撃するも入った手ごたえは感じなかった。

硬い障壁に拳が阻まれているのがわかる。

「……今のはいい攻撃だったね。」

精霊魔法を使えなければかなり危なかったよ」

そう言うシャーロックの周りには無数の魔方陣が出現し、幾十にも重なった魔法障壁『曼荼羅魔法障壁』が展開されている。

原作でさえ、誰も手がだせなかったシャーロックが精霊魔法という本来なら緋弾のエリアの世界に存在しない筈の魔法を駆使している事を露見させた瞬間だった。

「驚いたかね」

シャーロックの顔を見るとまるでイタズラに成功した子供のよう

な顔をして笑っていた。

「3年前になるかな。僕は世界中を旅していたんだけどその時、たまたまウエルズを訪れたのだよ。魔法使いが隠れ住む町という噂と異世界への扉があると聞いてね。

大きなストーンサークルに行つた時、そこで出会つた白髪の少年とちよつとトラブつてね。

彼が使っていた魔法障壁に興味湧いてね。彼との戦闘を観察してその後、魔法世界から戻つた後に僕なりに研究した結果できてしまったのだよ」

フェイトオオオオオ

お前の仕業かー!!?

シャーロック強化の原因がああ白髪イケメン野郎にあるなんて。

今度魔法禁止弾を撃ち込んで殴る！そう心に決め、中国拳法を繰り返しながら魔法の呪文詠唱を始める。

ウーヌス・フルゴル

コンキテンス・ノクテム

「闇夜切り裂く

一条の光

我が手に宿りて 敵を喰らえ

フルグラテイオー・アルピカンス

白き雷!!!

稲妻を放射して攻撃できる魔法を中国拳法と組み合わせてゼロ距離から放つた。

バチイイイイツ!

ギギギギギイイイイ!

電撃系魔法がシャーロックに直撃したがやはり、奴が展開している障壁を破る事はできなかった。

シャーロックがステッキで刺突してきたのでそれを躲し、距離を少し放しかと行って距離が離れすぎないように気をつけながら魔法の詠唱を始めた。

「影の地 統べる者

スカサハの

我が手に授けん

ヤククルム・ダエモニウム

三十の棘もつ

愛しき槍を

ヤクラーテイオー・フルゴリス

雷の投擲!!!

&……」

雷の槍を放ちさらに……

「集え氷の精霊 槍もて迅雨となりて 敵を貫け

ヤクライテイオー・グランデインス
氷 槍 弾 雨！!!？」

多数の氷の槍を飛ばして攻撃を仕掛けた。

雷と氷の槍はシャーロックに向かって勢いよく降り注いだが発展されている多重魔法障壁により放った槍は全て貫通する事なく防がれてしまった。

「チツ、硬いな……やっぱ普通の魔法じゃ効かねえか」

予想通りだが、状況としてはかなり分が悪い。

魔力はまだまだ余裕があるが闇の魔法はできれば使いたくない。副作用の『魔素』があるからな。使い過ぎた結果負の感情により進行して人外の化物になりたくないしな。

それに……ネギと明日菜がこの場にいるのがせめてもの救いだ。

あの二人なら教授の障壁を破る術を持っているし、俺より遥かに強いからな。

今、俺がすべき事は出来るだけ長く戦って時間を稼ぐ事だ。

無理して勝つ必要はない。

「時間稼ぎかね？」

シャーロックが手に持つステッキで地面を突きながら俺の方へゆっくりと歩いてきた。

何度もその身に魔法を放たれた筈だが傷一つない。

全て障壁で防いだようだ。

「残念ながら助けは来ないよ。彼らは彼の相手で忙しいだろうからね」

そう言ったシャーロックが視線を左に向けた。

奴が向けた先を見るとそこにはいつの間にか巨大な龍種が召喚されていた。

「なっ!?!？」

ば、馬鹿な、あれは……ウリクシヨ・ナーガシヤ 龍 樹」

古龍《エインシエントドラゴン》の一体であちらの世界で帝国を守護している守護獣。

某帝国傭兵剣士いわく友達。(飲み仲間)

巨大な召喚魔方陣が3つ現れ、中から三体の召喚龍が出て暴れだした。

「なんや、あれ!」

小太郎の声が聞こえ、視線を上に向けると空には巨大な浮遊物が浮かんでいた。

鳥か？

いや、違う。

あれは……。

「どうやら免れざる客達も来たようだね。

まさか、富嶽ふがくを持ち出すとは……」

呆れたような声で呟き、短い溜息を吐くとシャーロックは視線を俺の方に戻した。

「僕は出来れば彼女達、いや彼らには渡したくないのだよ。

僕が持つ「緋弾」もアリアが「所持している緋弾」も、そして君達が扱う闇の魔法マキア・エレベアもね。

彼女達、鬼はまだ来ないよ。

僕の仲間がお邪魔しているからね。

さて少し講義をするとしようか」

そんな事を言いシャーロックは自身が所持している拳銃、アダムズ1872・マークIIIを抜いた。

かつて大英帝国陸軍が使用していた、45口径ダブルアクション拳銃だ。

弾倉から奴は一発の銃弾を取り出した。

「ミツル君。君は『緋色の研究』は知っているかね？」

シャーロックが言ったその言葉なら聞いたことはある。

アーサー・コナン Doyle 作の小説のタイトルにある有名な推理小説。

あらすじは簡単に纏めるところだ。

医学博士ジョン・H・ワトソンはイギリス軍の軍医としてアフガニスタンの戦場に赴くが、左肩に重傷を負い、イギリスに送還された。為す事もなく過ごしていると、かつて助手をしていた男からシャー

ロック・ホームズという特異な人物を紹介され、ベーカー街221Bで共同生活を開始する。初対面にもかかわらず、ワトソンが負傷してアフガニスタンから帰ってきたことや、見も知らぬ男の前歴を言い当てたホームズの観察力と推理力は、ワトソンを驚かせる。

共同生活を始めて間もなく、ホームズの元にスコットランド・ヤードのグレグスン刑事から殺人事件が発生したとの手紙が届き、ホームズはワトソンを連れて現場に向かう。グレグスンとレストレイド刑事は難事件にお手上げの様子である。殺されていたのは立派な服装の中年男で、イーノック・ドレッツバーの名刺を持っており、壁にはRACHE（ラツヘ：ドイツ語で復讐の意）と血で書かれた文字があつて、女の結婚指輪が落ちていた。

シャーロック・ホームズシリーズの第1作目として世界中で有名だ。

もつともそれは元の世界での話で、この世界ではシャーロックとワトソンのパートナーで挑んだ最初の事件として探偵科の教科書に載っている。

「ああ。知っている」

「そうか。やはり君は知っていたのだね」

有名だしな。あの小説は。

「なら話は早い。僕が手にしているこれが、『緋弾』だ」

シャーロックはそう言つて手に持つ銃弾を摘んで見せてきた。

その銃弾は―― 血のような、薔薇のような、炎のような――

―― 緋色をしている。

「この弾丸が、緋弾なのだよ。いや、形は何でも構わない。日本ではヒヒイロカネ緋々色金と呼ばれている……要は、金属なのだからね。近いうちに君達の前に現れる武偵殺しが持つ青い十字架もこれと同じ同族異種の金属を極微量に含むイロカネ合金だ」

ん？

あれ？

ひよつとしてシャーロックが言う『緋色の研究』と俺が思った『緋色の研究』って違うんじゃないや……。

まあ、いいや。どっちも少しは知ってるしな。

「ふーん。で？」

「で、とは？」

「それと闇の魔法が何か関係あるのか？」

「イロカネ合金は例えるなら『超常世界の核物質』で、闇の魔法は『超常世界の異分子』となる。まあ、これはあくまでも僕の考えだから完全ではないけどね」

異分子か。

その通りかもな。

俺がいなければ多分二つの世界が融合してこの世界に精霊魔法があるなんていうことにはならなかった筈だしな。

「君なら解るだろう。もうすぐ世界を巻き込む大きな戦いが始まる。

その日は近い。そしてその時が来たら僕はいないだろう。

僕のことを継いだ者が組織を引き継げばいいが、残念ながらこのままでは世界は争いを始めるだろう。

だから僕は育てなければいけないのだよ。

後継者と彼女を護る騎士達をね」

騎士？

「さて、長い講義は一端終わりだ。

今から試験を受けてもらうよ。

彼女を護れる騎士になれる力を持っているかを見せてくれたまえ

！
プロ・アルマティオーネ
術式装填……」

そう奴が言った瞬間、奴の身体が黒い焰を纏った。

「シム・フアブリカートウス・アフ・インケンデイオー
獄 炎 煉 我」

「嘘……だ……」

信じられなかった。否、信じたくなかった。

最強の名探偵と呼ばれるイギリスの大英雄が闇の素質を持っているなんて、な……。

「ぐっ……いやはりキツイな。

僕はこれでもギリギリだよ。

普通に使えるなんてやはり君は特別な存在なんだね。

キツイが3分は大丈夫だ！

さあ、始めよう。

第2ラウンドの開始だよ」

装填19・5雪姫先生は素直じゃない。

「さあ、第二ラウンドを始めよう」

濃い魔力が放出されると禍々しい魔素痕を纏った男の姿が見え

——そして響き渡る轟音と燃え広がる灼熱の炎。

「ふん。情けない顔をしておって……」

そんな地獄のような状況下で

私は奴とミツルとの戦いを眺めていた。

私がいるのは古びた旅館の屋根の上。眼下では闇の力を纏った男と愛……馬鹿弟子の一人が対峙していた。

先ほどまでの人形との戦いは見事だった。

まだまだ詰めが甘いとところがあるが私の予想では人形の障壁を破る事なく、雷の魔法で殺られると思っていた。仕方なく手助けをしてやろうと考えていたが馬鹿弟子は私の想像を超えた魔法を繰り出し見事人形を倒してみせた。

いつの間に重力魔法など覚えたんだ？

ミツルが唱えた魔法は重力と闇が混合しているようにみえた。

重力魔法を使える魔法使いはそうはいない。

私知知っている重力魔法の使い手はまだあの学園の地下にいるはずだ。

世界を救った英雄の一人。アルビレオ・イマ。

今はクウ・ネル・サンダースなどという巫山戯た偽名を名乗っているが私の知る限り、最高の重力魔法の使い手は奴を差し置いていない。

私の知らない内に、アルビレオ・イマとミツルは接触していたのか？

だとすれば何時だ？

武偵高に入る前か？

中等部の頃のあいつが何をしていたのかは詳しくは知らない。

私があいつを見たのは武偵高の入学試験が初めてだ。

能力測定の際、能力者は個別に能力に応じた試練を受ける。

攻撃系の能力を持つ者は試験官相手に手合わせ、回復系なら傷ついた動物や人の治療、防御系なら試験官が生み出した魔法に耐えられるか、など受験生によって異なる。

ミツルは攻撃系の魔法を使うとあって試験官相手に手合わせすることになったがそこで教師連中を驚愕させた。

あいつは試験官を務めていたタカミチのぼーやに近接格闘を挑んだからだ。

そこまでならまだ……いい。

タカミチのぼーや相手なら距離を詰める戦いをするのが得策だからな。

前例もある。まだ弱かったぼーや（ネギ・スプリングフィールド）が麻帆良の武道大会でそうした戦法をとって勝利を納めている。

だから戦い方について私は驚きはしなかった。

だが、しかし……ミツル、あいつはあろうことか、私の前で闇き夜の型を発動させた。

全くもってありえない出来事だ。

マギアエベレア
闇の魔法。

それは、かの究極技法、咸卦法と対をなす技法。

使用するには闇の眷属の膨大な魔力を必要とし、肉体と魂を喰わせる狂気の技法だ。

元々、まだ弱かった頃の私が生み出したもので使える奴は私とぼーやくらいな筈だ。

筈なんだが……ミツル、何故か奴は最初から使えた。

当時、タカミチの奴はあからかさまに手加減していたがミツルの魔法、術式装填により強力な一撃を受けて大怪我を負った。タカミチだから怪我ですんだが常人なら死んでもおかしくはない攻撃だ。

結局試験は手負いのタカミチが居合拳を放ちミツルと相打ちになつて終わったが教師を倒せる受験生はそうはいない。

試験後興味が湧いた私は奴とO・HA・NA・SHIをした。

会話の後なんだか疲れた顔をしていたがSSR棟の屋上に連れて行きまあ、そこでもまたいろいろあつて最終的には弟子にしたわけだ

が……。

それにしても気に入らない。

私に秘密でこんな楽しそうな事をしていたとは全くもって気に入らん。

奴が私を訪ねて来なければわからなかったな。

偶には役に立つな、あの筋肉ダルマも。

さて、前置きが長くなったが私がここにいる理由。

それを語るには――。

時を少し戻る事になる。

光が車輛科に（勝手に）向かった頃。

東京武偵高、SSR棟の屋上。そこにあるログハウスの中でメイド姿の女学生と口の悪い幼女人形、そしてそ奴らの主人である私はワインを嗜んでいた。

「ふむ。やはりワインはフランスの物がよいな」

「クケケ。ワインヨリ、アイツノチノホウガスキナンジャンイカ？」

「確かにそうですね。マスターはミツルさんの事が大好きですから。この前血を吸った時も……」

「余計な事を言う口はこの口か？この口だな」

ムニユ。ムギユムギユ。

メイドロボ、茶々丸の頬を両手で摘んで引っ張る。

口の悪い人形、チャチャゼロはすっかり見慣れた光景（毎度のことだが悪いのはコイツらだ）に口は出さず「ケケケ、ババアガテレテルナー」などと呟いていた。口の悪い人形めが、一体誰に似たんだか……。

チャチャゼロの態度にイラついていると玄関の扉がノックされた。

ええい、こんな時に誰が来やがったんだ。

茶々丸を解放して玄関に行かせる。しばらくすると茶々丸の奴が

珍しく笑い声をあげていた。

「マスター。お客様がお見えになりました」

「客だと……誰だ？」

「それが……」

茶々丸の返答を待つ前にソイツは人の家の中にツカツカと上がり込んだ。

「よう。来てやったぞ、ロリババア」

私の前に現れたのは全身筋肉のダルマ男。

こいつの顔を見るたびに昔イカサマで取られた魔法具巻物の事を思い出す。

「ジャック貴様……何しに来た？」

イラついていた気分がさらに悪くなった。

「おいおい、せっかく来てやったのにあいかわらずの態度だな、オイ」
溜息を吐くかと思えば変顔をしだす馬鹿な男。

一見馬鹿っぽい（実際馬鹿だが）奴の名は、ジャック・ラカンという。

こことは異なる世界。魔法世界の住人で伝説の傭兵剣士、アラルプラ〈紅き翼〉の一員で英雄の一人でもある。

《千の刃》、《つうか、あのおっさん剣が刺さんねえーんだけどマジで？》などの様々な二つ名を持つ最強の元奴隷剣士でその強さはないほど強く、常識では考えられない事を平然と行なう。

理論上では脱出不可能な空間を気合で破ったり、全身からおかしな光線出したり……私が言うのもなんだが規格外な奴だ。

最早チーターだと長谷川などは言っていた。（ぼーやは究極の努力の人と言っているが……）

「んだよ、せっかく遠路はるばる来たのに麻帆良にいねえし、じじいに聞いたら東京にいるって言ったから来てみれば……随分な扱いだな」
「ふん。貴様などと馴れ合う気はない」

馬鹿の顔など見たくないわ。

「まあ、俺は同窓会に参加するついでに来たからいいんだけどな……つてか、聞いたぜ？」

同窓会？

なんだそれ？

というかそのニヤついた顔、今すぐ辞めろ！

「何をだ？」

ニヤつき顔を睨みつけてガン見してやるとラカンの馬鹿はニヤついたまま、奴が知らない筈の事を聞いてきた。

「新しい弟子取ったんだろ」

「何故貴様が知っている!?？」

一体誰がこの馬鹿に喋ったんだ？

奴の顔がいい獲物（からかいの対象）を見つけた者の顔つきになった。

「いろいろと噂になってんぞ。」

ボーズの事もあるし、どんな奴かちよくら見にきた」

「余計な手出しするなよ」

「それは相手次第だな……」

この馬鹿と関わらせたらミツルの奴に悪影響を与えかねん。不本意で面倒だが私が護ってやらねば……。

「ぼーやにしてみたみたいが無茶な修行はさせんぞ」

「金さえ払えば俺は誰にも稽古してやる。」

今なら300万ドラグマでエターナルネギファイバーとラカンインパクトを教えてやろう」

「……あんなのできるのは貴様くらいだろうに」

気を纏って凝縮させて飛ばすのはまだしも、全身からおかしな光線を出せるのは目の前のこの馬鹿くらいだ。

「そうか？」

首を傾げる筋肉ダルマ。

此奴は自身がバグで出来てるといふ自覚をいつになったら持つのだ……まあ、今さらだがな。

「まあ、稽古（手出し）するかどうかはまずは会って見ないとわからんな。な。」

さてと俺は行くがババアはどうする?？」

顔を再びニヤつかせ、奴は私に付いてくる気があるか尋ねた。

「この馬鹿は私に喧嘩売ってるんだな？よし買つてやろう。」

「そうか、氷漬けにされたいんだな？」

「はー。素直じゃねえロリバアさんだな」

ヒュバクソン・テーン・デアテークーン・アクソン・メ

「契約に従い、我に、応えよ」

アイオニア・バシリツサ・トウ・スコトウス・カイ・テース・キオノス

闇と、氷雪と、永遠の女王

アン・テイス・メナ・レウカ・ロダ・トウ・バグ
咲きわたる氷の白薔薇

眠れる永劫……」

「マスター止めてください」「ええい、離せー茶々丸。この馬鹿は氷漬けにせんとわからんのだ！」落ち着いてください。その魔法を使われたら私や茶々ゼロも一緒に氷漬けになります」

「ぬ……そうだな」

「オイオイ……マキゾエトジコメラレルトカ、カンベンダゼー」

失念していた。筋肉ダルマはどうなつてもよいが茶々丸や茶々ゼロはいなくなつては困る。

べ、別に寂しいとかそんなことは思わん。

ただ、家事できる奴がないのは困るからな。

まあ、いざとなればミツルにやらせるが……文句いいながらもんだかんだ言つてやるしな。あいつは将来いい主夫になるな。

「ふん。茶々丸達に免じて許してやろう。」

行くぞ、さつさと来い」

「素直じゃねえな」

「ケケケ、ババアハアイツノコトニナルトカホゴニナルカラナー」

駆け出した私の背後からチャチャゼロの眩きが聞こえたが聴き取れなかったことにしてやろう。

過保護とかそんなこと、ありえん！

で、到着したわけだが……何をしているのだ、あの馬鹿弟子は。筋肉ダルマの誘いに乗って古びた旅館に来た私だがそこは戦場と化していた。

〈完全なる世界〉の人形と女剣士に襲われていた馬鹿弟子達と初めてみる女達。

ネギのぼーやや神楽坂明日菜がいるので手を出す気はないがこれはかなりまずい状況だ。

隣に座る筋肉ダルマに視線を向けたが奴はいつの間にかいなくなっていた。

「……筋肉ダルマめ、どこに行った？」

「マスター、ミツルさんが倒しました」

「おっ？」

視線を眼下に向けるとミツルの奴が雷を操る似非フェイトを手に持つ黒い刀で突き刺すところだった。

「ふん。まだまだ甘いな……」

「その割には嬉しそうですが……」

「余計なことをほざく口はこれだなー。この、このー」

茶々丸の頬を摘んで左右に引っ張る。

まるで本物の皮膚みたいで気持ちいい。

やるなーハカセ。

ロボらしさが感じないがこれはこれでいい。

「ユリツテルトコロワルイガ……ヤバイゼ、アレ」

誰と誰が百合るんだ!?!?

とチャチャゼロに突っ込みを入れる寸前になって気づいた。

全身から嫌な汗が出てきた。

なんだこの感じは……来る。

「もう、会える頃と推理していたよ」

突然現れたソイツは呆然とするミツルの方に歩を進めてきた。

全身から発する圧倒的な気迫。

これに似た感じを昔、魔法世界の祭壇で感じた。

此奴の気配は何処かへ始まりの魔法使いに似ている。

アレはマズイ。

ミツルには荷が重い。

すぐ様動こうとしたが私の肩を掴む奴がいた。

「まあ、待てロリババア」

「ジャック、貴様なんの真似だ。」

それに何処に行つてた？」

私を静止したのは筋肉ダルマだった。

奴は何処から手に取ったきたのか、その手にはバナナを握っていた。

……さて、そのバナナどうした？」

「ちよくら探検と人助けをな」

「貴様が人助けなんてするわけなからう」

騒動を起こしたの間違いだろ。

今度は何をしでかしたんだ？」

「随分な言いおうだな、このロリババア。ちよくら密林部屋からメカを掻つ払つてきただけだが？」

得意げに背中に担いだ着ぐるみのようなメカを見せてきた筋肉ダルマ。

メカにはミサイルやらゴツイ武装やらが付いていた。

「臨時とはいえ武偵高の教師を務める私の前で盗みを働くとはいい度胸だな、オイ……」

「借りただけだすぐ返す……ふん、よしちよつとサイズがキツイが何とか着れたな。」

拳だと手加減しにくいからこれなら遊んでやれるな。

それじゃあ俺はあつちの龍樹飲み友と遊んでくるからよ、ババアはミツルとかいう餓鬼を助けるや」

龍樹だと!!？」

古代龍が何故いる？」

辺りを見渡せば巨大な魔法陣からどデカイ召喚獣が三体出現していた。

奴らはこの辺りを灰塵にする気か。

「ちよつ、待てジャック……あの馬鹿、勝手に行きおつて……。ふん。まあ、いい。言われんでも死になつたら助けてやるさ……」

筋肉ダルマはさつきと行つてしまつたが問題ない。

私一人で助けは十分だ。

まあ、そうそうあの馬鹿弟子なら殺られることはないとは思ふがな。

……なんて思つていたさ。

ミツルが戦つている相手。奴が術式装填なんかしなければな。

「仕方ない……面倒だが助けてやるか」

「マスター……ツンデレるのはほどほどに「喧しいわ！」」

装填20氷の女王

「術式兵装……獄 炎 煉 我 !!?!」

シム・ラブリカートウス・アブ・インケンテイオー

目の前の男がそう叫ぶと黒い獄炎が濃度の高い魔力の塊と化し空中に留まり、その男の体内に吸収されいった。

その光景を間近で見るとその感想はあり得ないの一言だ。

濃度の高い魔力を体内に吸収させて暴発させずに扱う……一見簡単そうに見えるが実際にできるのは世界中でわずか数人しかいない。
マギア・エブレア
闇の魔法。

それは肉体と魂を喰わせることで単に常人に倍する力を得て戦える魔法……ではない。

間違いではないが、闇の魔法とはそもそも闇の眷属となった者のみ扱えるもので使用するには膨大な魔力と恐れ、恨み、怒り、憎悪などの負の感情……アバウトに言えば『ヤなカンジ』が必要だ。

その特性上、適正がある人は限られる。

例えば、よく悩んだり、一人で落ち込んだり、ぼっちになるような人にオススメな魔法だ。

闇の魔法とは、善も悪も強さも弱さも全てをありのままに受け入れ飲み込む力。

雪姫……あの、『闇の福音』が10年の歳月をかけて完成させた技法でそのポテンシャルは究極技法に匹敵する。
ダーク・エヴァンジェル

俺を含めて扱える者は3人しかいない。

それなのに……奴、シャーロック・ホームズは当然のように使用している。

ただ使用するのならまだいい。

ジャック・ラカンでも術式兵装はできる。

装填できても制御できずに魔力を暴発させてぶつ倒れたけどな。
自爆

装填できても制御はできない。

ラカンでもできなかった事。

それが適正がない者が使えない理由だ。

だが目の前の人物シャーロック・ホームズ、奴は制御できている。

全くもってあり得ないことだ。

「……シャーロック、お前どうして……」

どうして闇の魔法を使うことができるんだ？

そう聞こうとしたが聞く間もなくシャーロックは俺を攻撃し、無詠唱の炎の矢が飛んできた。

とつさに『瞬動』を使い回避したが……。

「危な……うっ」

回避先に炎の槍が飛んできて当たってしまった。

「ぐっ……」

痛てえ。

右肩に刺さった。

これは致命傷だ。

俺じゃなければ即死している。

油断した……。

俺の身体から夥しい量の血が流れ出た。

身体中が熱くなり、徐々に寒くなってきた。

「申し訳ないがあまり時間がないのだよ。

さて、準備が整ったから『予習』の続きといこう」

「……予習？」

肩を貫かれた痛さで意識を朦朧とさせたまま、目の前のシャーロックに問いかける。

「これから僕の曾孫や君達が戦うことになる強敵の技を特別に見せてあげるよ」

そう言うときシャーロックは魔力を高め、呪文の詠唱を始めた。

「契約にト・シユンボライオンデアーコネート・モイホ・テユラネ・フロゴス従エヒゲネーテートいフロクス・カタルセオース我フロギネー・ロンファアにレウサント従ピユール・カイえソドムを……炎燃え盛る大剣のソドムを……霸王燃え盛る大剣

来レウサントれピユール・カイ浄化ソドムを……の燃え盛る大剣炎燃え盛る大剣

ほとばしれよソドムを……」

魔法を使う者は詠唱中無防備となる。

とくに詠唱が長ければ長いほど。

「……焼きしテイオン

火ハ・エベフレゴン・ソドマハマルトートウスとエイイス・クーン・タナトウ硫黄罪ありし者を死の塵に……

攻撃するタイミングとして数少ないチャンスと思い、俺は痛みを堪え呪文を詠唱し魔法を発動させた。

「魔法の射手・連弾光の101矢」
サキタマキカ セリエスルーク

呪文の詠唱が短く、尚且つ一度に多く放てる魔法の射手を唱え、光属性の矢を大量に放射した。

ただし、ただ放っただけでは防がれるので直線上ではなく放物線を描くように射った。

降り注ぐ矢の雨……101発の光の矢が雨のように放物線を描いてシャーロックに襲いかかる。

普通の人間では耐えきれないほどの威力と魔力を込めて射ったが……。

キイイイイ

奴の周りを強靱な蔓茶羅魔法障壁が展開された。

ここぞとばかりに魔法の射手を放ったが奴の身体には傷一つ付くことなく、全て魔法障壁により防がれてしまったようだ。

やっぱり威力が高い魔法でないかあの障壁は破れないか。

そんな事を考えながら次の魔法を放とうとしたその時

奴は無傷の右手を動かしてその掌を開くと此方に向けて火属性の最

高呪文をその掌から放ってきた。

「燃える 天空!!!」
ウーラニア・ラゴシス

一定の空間内に超高温の炎を発生させることができる広範囲焚焼殲滅魔法が俺に向けて放たれた。

「くっ、障壁最大……&気合い防御!」
バリエース・マキシム

とつさに何重もの魔法障壁を張り、保険としてあり溢れる氣を全身に纏って防御した。

「……がほっ」

防御したもののあまりに高威力な呪文だった為、障壁や気合いでは防ぎきれずにその身に受けたダメージが通ってしまった。

気合い防御は『千の刃』が使う防御を真似てみたがやはり簡単には

あれだけの防御を再現することはできなかつた。

貫かれた右肩の傷も開き、蓄積された疲労のせいか意識も朦朧としてきてその場に倒れてしまった。

本格的にヤバい状況の中……シャーロックは俺の方に向かってその歩を踏み出してきた。

カッーン、カッーン。

その足音はまるで死神が迫るような、武偵高的にいうと笑顔の蘭豹が『M500』片手に迫ってくるような恐怖を増進させる効果を生み出している。

「どうしたんだい?」

まるで『え?何故あのくらいの攻撃で死にかけているんだ?』といったような予想していなかったかのようなそんな態度をしながら俺の側に近寄るシャーロック。

「……」

視界がボヤける中、シャーロックの声だけははっきり聞こえてきた。

「ふむ。君ならもう少しできると思ったけど……期待外れだったようだね」

「……」

俺は最後の悪足掻きをすることにした。

こっそりと遅延させた呪文を解放し、シャーロックが寄ってきた瞬間――発動した。

「解放!!?奈落の業火!!?!」

装填……術式兵装・獄炎煉我!!?!」

「なっ!!?!」

虚をつきシャーロックの懐に入った。

術式装填により出力UPした拳がシャーロックの魔法障壁に当たり、膨大な魔力を込めて放った拳は障壁にヒビ割れを起こしてそのまま障壁をぶち抜いた。

シャーロックの鳩尾に拳は決まりシャーロックは吹き飛んでいった。

「何か言ったか？」

シャーロック。お前の方こそ功夫しゅぎょうが足りないんじゃないか？」

シャーロック。お前は俺達、武偵を舐めすぎだ！

こつからは俺のターンだ！

……なーんて調子に乗って思ったりしてたが。

「魔法の射手・光の1001矢!!？」

すぐに現実に気づくことになった。

魔法の矢数100発をシャーロック目掛けて放ったが放った時にはすでにシャーロックはそこにはいなかった。

「紅き焰!!？」

&

魔法の射手・光の1001矢……」

「魔法の射手・光の1001矢!!？」

魔法の矢を矢で撃ち落としてもより強力な魔力が襲いかかってきた。

「魔法の射手・火の5001矢!!？」

シャーロックの放つ呪文や魔術が次々と俺に当たり、俺の身体はロボロになり悲鳴をあげていた。

圧倒的な力量差。

さつきシャーロックに言ったがよくよく考えてみれば功夫が足りないのは俺の方だ。

いかに魔力や気が多く、人より身体能力が高くても俺はまだ未熟だ。

シャーロックより勝るのは気力や魔力の残量しかない。

経験や知識では太刀打ちできない。

だが魔力や気力の残量だけではシャーロックには勝てない。

相手が強すぎる。

「どうやら戦うのにはまだ早かったようだね。

次はもっと楽しませてくれたまえ」

シャーロックが何かしらの呪文の詠唱を始めた。

その呪文の詠唱を聞きながら思ってしまう。

……俺、なんの為に力を貰ったんだっけ？

……なんの為に力をつけたんだっけ？

……なんの為に「愚痴愚痴と考えるな、馬鹿もんが!!？」……!!？」

呪文を詠唱していたシャーロックが詠唱を中止してその場から飛び跳ねた。

シャーロックが飛び跳ねるのとほとんど同時にそこに氷魔法の槍が突き刺さった。

「君達は……!!？」

驚きの声をあげ槍が飛来した方向を見上げるシャーロック。

その声の視線の先に首を動かし見てみるとそこは……。

古びれた旅館。

元旅館。『ひなた旅館』で現在は女子寮『ひなた荘』となっている建物の屋根の上。

そこに3つの人影があった。

「ケケケ、ヨウヤクキツイタヨウダゼ。ババアノヨビカケデ」

「大変です。早く手当しないと……」

「ふん。あまりに弱いので助けに来てやったぞ。全く世話のかかる生徒だ」

「あ……」

そいつらの姿を捉えた時、俺は自分の視力が悪くなったのか本気で疑った。

視界が曇りまるで雨に打たれた時のように水で濡れて見えなくなったような見え方をしたからだ。

断じて涙が流れたとか、そんな理由じゃない！

そんな事を考えていると人影の一人、髪が長い女性の姿が忽然と消え……たかと思ったが俺のすぐ目の前に突如姿を現した。

驚いたがよくよく見れば影から飛び出していた。

どうやら影から影へ転移してきたようだ。

「どいてろ」

「あべしっ……」

突然、重症にも関わらずにその女性に思いっきり蹴っ飛ばされた。何しやがる！と文句を言おうとしてその状況に気づく。

俺の側に現れた人物に、シャーロックはいきなり魔法をぶっ放したからだ。

「ものみな焼き尽くす浄北の炎」

オムネフランマンズフランマブルガートウス
ドミネー エクステインク テイオーニス エト シグヌムレゲネラテイオーニス

破壊の王にして再生の徴よ

我が手に宿りて 敵を喰らえ 紅き 焰

爆炎が起こり呪文によって発生した爆風によって吹き飛ばされた。

「ゆ、雪姫……!!?」

俺を守る為に代わりに爆炎が直撃した彼女の名を叫んでしまう。

「ふん。喧しいわ!」

この程度の呪文で私が殺られるわけなからう」

爆煙の中から氷 盾によって身を守る雪姫が姿を現した。

「氷 爆!!」

雪姫は空気中に大量の氷を瞬時に発生させて、凍気と爆風を発生させる魔法で相手を攻撃した。

シャーロックは正面から爆風を受けたのにも関わらずその身は全くの無傷だった。

……人間じゃねえ、コイツら。

◇ ラカン視点

エヴァの元から懐かしの龍樹に会いに来てみれば目の前の飲み友はまた操られていた。

オイオイ、その巨体で暴れたら周りの迷惑じゃねえか!。

やたらとデケエし。それも一体じゃねえし。

なんだよ、三体つて……まあ、面倒だがちよっくら一体と遊んでやるか。

なーんて……気まぐれ起こしたのは間違いだったか？
エヴァ^{パバア}の方から濃い魔力の反応があるのが気になる。
さっさと終わらせて様子でも見にいくか。

「オラーいくぜー！」

ラカン・ストライク（ただのミサイル）」

目の前の巨大な召喚龍に向けてメカに装備されているミサイルを放つ。

誘導式のミサイルは龍樹に向かって飛んでいきその巨体、翼が生える部分と胴体の部分の境に被弾した。

「ギヤヤアアアア」

龍樹の翼はミサイルの爆炎により挽き裂かれた。

翼が挽げたことにより空中から地面に堕ちた龍は怒りの咆哮をあげる。

「グギヤヤヤー」

「す、凄い……」

「え？まさかラカン殿がその機体を……何故動かせるのだ？

いや、それより魔力を大量に使うのに全く疲れる様子がない……だと!?？」

「にやはは……いいデータ取れたな」

神鳴流剣士、刹那や素子の眩きが聞こえるが何故動かせるのか聞かれても理由なんざ知らん。

気合いで動かしたら動いたからな。

俺は再度ミサイルを乱射したが龍樹は長い尻尾を一振り振るう

たった、それだけで数十発あったミサイルを
全て叩き落としやがった。

「ほう。操られててもいい動きするじゃねえか」

龍樹は鋭い爪で俺が纏う着ぐるみ^{P A D}を引き裂いた。

「気合い防御！」を発動させたがどデカイ装備品まで防御する余裕はなかった。

爆炎をあげて粉々に砕け散る着ぐるみ。

「どう！ラカンダブルWパンチ」

脱出しながら龍樹の上空に飛んでパンチを放つ。

「ギャヤヤー」

ただのストレートパンチの両手打ちだが龍樹の巨体は吹っ飛んでいった。

おー！よく飛んだな。

次は気弾でも放つか……いや、待てよ。

気弾を放つ……全身から気を放つ、光線を出す。

よし、龍樹相手に効くか試してみるか。

まずは気弾からだな……。

「ラカンさん我々も……」

「助太刀致す！」

刹那と素子がそう言ってきたが……ん？

龍樹の様子が……。

「ギャヤアアア!!？」

咆哮をあげて威嚇してきた龍樹。

「ん？何だ？」

タイマンでやり合いたいのか？

武器はないけどいいか？いいのか？

いいぜ！ならやろうぜ！いや、本当にいいのか？

俺は……」

サシでやり合いたいとは男だな。

性別知らねえけど。

けどいいねー。何だか楽しくなってきたぜ！

久しぶりに思いつきり暴れるとしようか。

「素手の方が強いぜ!!？」

◇

「まさか、あの『闇の福音ダーク・エヴァンジェル』が来るとは……それは推理でできなかったよ」

雪姫相手に近接格闘を繰り広げながら余裕の表情で話しを続ける
シャーロック・ホームズ。

雪姫は氷の矢や槍、氷槌を繰り出しシャーロックを牽制していた。
シャーロックは雪姫の攻撃魔法をいなしたり、魔法で防いだり、相
殺させたりしている。

魔法だけでなく両者、体術の攻防でもお互い攻めぎあっている。
俺には手が出せないまさに頂上決戦といってもいいと思う戦いだ。
シャーロックと雪姫は互いに魔法を放ちながら戦いの場所を移動
し始めた。

「……君？」

おおっ!?!?

シャーロックが燃える天空と氷の魔術を同時に放った。

今シャーロックが放った氷の魔術、アレはジャンヌ・

ダルクの『オルレ안의氷花』!?!?

異なる魔術と魔法を二つ同時に使えるのか?

シャーロック……お前バグキヤラになってるな。

雪姫は影から影へと転移することで躲しているし。

「……ル君？」

あ、雪姫が呪文の詠唱に入った……。

「……ツルク……？」

目の前で繰り広げられるあまりに次元が違う戦闘に魅入ってしま
い、自身を呼ぶ声がかけていたのにも気づくのが遅くなってい
まった。

「ミツル君？」

うわあ。

「びつくりした……どうしたんです？」

近衛先輩

「よかった……間に合った」

気がつけば近衛先輩が俺のすぐ側で治癒の魔法を唱えていた。

あれ程痛みがあった右肩や全身の傷は跡形も無く無くなっていた。

「治癒間に合つて本気によかつた……」

近衛先輩の魔法具アーティファクトコチノヒオウギとハエノスエヒロ（効果は外傷完全治癒と状態異常快癒）はいかなる怪我でも3分以内なら治せる。治癒の効果があるものだ。

1日1回だけだがどんなに大怪我を負つていても完治できる希少な魔法具だ。アーティファクト

個人的には俺が欲しいと思う魔法具トップ3に入る魔法具だ。

まあ、この魔法具は極東一の魔力を持つ彼女だからこそ扱えるのかもしれないけどな……。

近衛木乃香先輩には治癒の才能があり武偵高の救護科に所属している。

付いた二つ名は『癒しの姫君』

腕利きの救護武偵として重宝されているらしい。アンビュラス

「近衛先輩、護衛は？」

「コタ君がいたけど……今あそこで戦つてるのが、それや〜」

近衛先輩が右手の指先を指した。その方向に視線を向けるとバカでかい召喚龍とその龍の前に一匹の犬が対峙していた。

あの犬物凄くモツサモサだな。触ったらモフモフしてて気持ち良さそうだな。

その犬は「行くでえー」、「爆ぜろ！」とか人語を話しながら気弾を放っていた。

「あれ、コタ君や〜」

俺が触りたいと思つたのを読み取つたのか木乃香は人差し指を犬……もとい、犬上小太郎に向けながら言った。

うん。知ってるよ。

犬化しているけどコタローだつてことは一目でわかる。

何故かつて？

だって喋ってるやん。関西弁話せる犬なんてコタロー以外知らないし。

木乃香先輩の護衛、小太郎に任せたの失敗だったかもしれない。

「護衛対象放置で化け物の相手すんなよ」

非常事態なら仕方ないか？

いやいや。近衛先輩の従者である刹那さんに知られたら後が面倒なことになるって。

「治療ありがとうございます。」

もう俺は平気なんで先輩は建物の中に避難しててください」

「う、うん。わかったでー。」

本当はウチも戦いたいけど足手纏いになりたくないから避難してくわ。

ミツル君。気いつけてな……」

「ええ。それじゃあちよっくら行ってきます！」

アルマテイオーネ
術式兵装……

アギリタース・フルミニス
疾風迅雷!!?!」

近衛先輩から離れた俺は闇の魔法を術式装填し雪姫とシャーロツクの戦いに割り込む為に駆け出した。

◇ 雪姫視点

チマチマ戦うのにも飽きてきた私は少し本気を出すことにした。

「……契約に従い 我に従え 氷の女王

疾く来れ 静謐なる 千年氷原王国

咲き誇れ 終焉の白薔薇

アントス・バゲトウ・キリオン・エトーン
千年 氷華!!」

長い詠唱を終わらせ、放出される筈の魔力を魔力の塊のまま空気中に留まらせた。

スタグネット・アントス・バゲトウ・キリオン・エトーン
「……固定 千年 氷華!!」

コンプレクシオー
掌握!!」

……術式兵装

クリュスタネー・バシレイア
……氷の女王!!?!」

留まらせた魔力を握り潰し体内へ吸収させ己の肉体へと取り込んだ。

私の背後、背中の部分に氷で出来た翼が複数枚出現し、周囲の気温を氷点下まで下げた。

この術式兵装の特徴は……周囲数キロに自らの氷圏を展開し、支配域とする。

氷結呪圈内なら上級以下の氷属性魔法を無詠唱無制限に放ち続けられる。

といった効果がある。

「久しぶりにコレを使うことになるとはな。

ホームズ郷と言ったな。貴様もこれで終わりだ！」

術式兵装した私の力を見よ！

私が繰り出す氷魔法が無詠唱、無制限でホームズ郷に襲いかかった。

「魔法の射手!! 連弾 闇 の 29 矢!!」

闇属性の黒い弾丸を飛ばしたり……

「集え氷の精霊 槍もて迅雷となりて 敵を貫け ……」

氷 槍 弾 雨!!」

複数の氷の槍を飛ばし……

「来れ氷精 爆ぜよ風精 弾けよ凍れる息吹!!」

氷 爆!!」

空気中に大量の氷を瞬時に発生させて、凍気と爆風で相手を攻撃する
ことができる魔法を放つたり……

「凍てつく氷枢!!」

氷柱に対象を封じ込めることができる魔法を放つたり……

「氷神の戦 鎚」

巨大な氷塊を作つてぶつかけたり……

「エクスキュージョナーソード」

固体・液体の物質を無理矢理気体に相転移させた断罪の剣を出し、
ホームズ郷に繰り出したりした。

物量差で攻めたこともありホームズ郷の魔法障壁は破れ、今やその
身体には魔法の攻撃により槍や矢が刺さっている。

もつとも全体を見れば大した負傷ではない。

急所には一撃も入らずに急所を狙った攻撃は全て躲かされていた。

「いい攻撃だよ。」

流石に今の君の攻撃は僕でも完全には推理しきれなかったよ」

最早、目の前の男からは先ほどのような圧倒的な力は感じなかった。

「オルレアンの氷花」

ホームズ郷が呟くのと同時に――――水の魔法が私に向かい

放たれた。

ふん、この程度の術式で私を狙おうなんて甘いわ。

断罪の剣で氷を斬り裂きいてホームズ郷に迫る。

奴は宣言通り3分間術式兵装を使い、私の魔法に対抗していたが、宣言通り3分きつちに術式兵装は切れた。

好機とばかりに攻めたが奴は――――精霊魔法とは異なる魔

術と呼ばれる力を使い砂人形を作り、私が振るった断罪の剣はホームズ郷ではなく郷をガードした人形を斬り裂いた。

郷の姿が突然消え、私から離れた場所に再び姿を現わすと――――

新たに奴の周りに三体の砂人形が生まれ動き始めた。

ええい、面倒な奴だ。

何故本気を出さない？

「ふん。見慣れない魔法を使いおつて……本気を出さないと殺すぞ」
威嚇して脅しを試みるがのらりくらりと躲された。

「君のような可愛い娘さんになら刺されるのもアリかな？」

もっとも私より先に彼が君に刺される方が先だろうけどね」

「一体貴様の目的はなんだ？」

ふん。貴様などに口説かれても嬉しくないわ。

私が口説きたいのは……って何思ってるのだ！

妄想を振り払い、ホームズ郷に聞くと彼はこう言いよった……。

「今ある秩序と平和を守る為に、力を僕が認めた後継者に継承するこ
とだよ」

意味がわからん。

言葉などアテにならないな。

問いたださそうとした正にその時、ホームズ郷に変化が起きた。

突如、目の前の奴の身体が光輝き始めた。

何だ、この光は？

これは、この光は……緋色に光るこの輝きは何だ？

「残念だけどそろそろ時間だよ。

遊びはお終いだ……」

ホームズ郷の、その透き通った声が聞こえ
人差し指。 奴が右手の

その指先を私に向けた、正にその瞬間。

私とホームズ郷との間に、何者かが入り込み……いや、誰かはわかつていた。こんな私を庇う馬鹿など限られている。

私を庇おうと目の前に立つミツルをどかす間もなく

一筋の紅い光線が私とミツルに向けて放たれた。

◇ ラカン視点。

「ラカンインパクト!!?!」

氣を凝縮させて放った気弾は龍樹に直撃するや否や、大爆発を放ち龍樹の巨体を軽々と吹き飛ばした。

爆発によつて龍樹の身体は大小様々な傷がつき、翼は千切れ、手脚は裂けた。

地に叩きつけられた龍樹はピクリともしないまま、弱々しく鳴いて頭の顎先を地面に垂れた。

ふうー。

終わったな。

酒でも飲んでえなー。

そんなことを思い、氣を抜いた時だった。

ゾクリ。

背筋に強烈な寒気が走った。

「な、なんだ？」

飲み友との遊びが終わり、地にひれ伏せた後で地面に座り小休憩代わりの伸びをしていた時、その気配と嫌な感じを受け取った。

「……こりゃあ、ヤバイな」

今、感じた感覚。

それは……。

かつて魔法世界。墓守り人の祭壇で感じたあの感覚と似ていやがった。

「チツ、メンドーなことになったな」

ババアならそう簡単に死にはしない……と思うが、奴も抜けてるところがあるからな。

万が一ということもある。

仕方ねえ。いっちょ様子見てくるか。

瞬間移動を気合いでして、ババアがいるはずの場所に一瞬で移動した。

ババアはまだ無事か？

確認しようと、その姿を見た俺はギョツとした。

ババアの腕の中、そこに血塗れで横倒れている奴がいたからだ。

近づいて姿を確認したがソイツの下半身がヘソの下、膝のつけ根辺りからごっそりとない。

奇跡的に呼吸と意識はあるが状態がヤバイ。

怪我のヤバさだけじゃねえ！

その身が、その異形の姿がヤバイ！

ソイツの身体は黒く染まり、手の指先が魔族や魔獣のように爪が長く伸びていて頭からは角が生えていたからだ。もはや人間だった形式はあたかたもない。

ソイツの周りには溢れんばかりの瘴気と魔素が広がり禍々しい空間となっていた。

ババアが抱きしめているソイツに向けて喚いていた。

「馬鹿モン！何故……何故飛び出して来た！

未熟者のお前が私を助けようとするなんて、100年早いわ！」

ババアの戸惑いと怒りが籠った怒声が辺りに響き渡った。

「推理通りだよ……安心していいよ。」

彼はここでは死なないからね」

その声は、俺の脳内に響いてきやがった。

辺りを探ると、さつきまで俺やババアがいた古びた旅館の屋根の上に一人の男が立っていた。

俺の第六感が再び警告してきた。

奴はヤベエ、と。

「彼なら大丈夫だよ」

「テメエ、一体何をしやがった？」

奴がいる建物に近づきながら問うと

奴は口に啞えた

煙管^{キセル}を吹かしながら世間話をするような感じで言い放ちやがった。

「たいしたことではないさ。彼の一部を未来に送っただけだからね」

未来に送った？

どういう意味だ。

わからねえ……こういう考えることはアルや詠春担当だしな。

俺にはさっぱりわからねえ。

考えるだけ無駄だな。

「彼なら大丈夫さ。」

見てごらん」

奴が指差した方向、そこに血塗れの少年の姿が見える。

ババアに抱き抱えられていたはずだが、今はババアから離れ一人で立ち上がった。

「……どういうことだ？」

なんで奴は起き上がれる？

下半身が再生した？

「ババアの眷属なのか？」

いや、違う。

そうじゃねえ……」

ババアのような吸血鬼じゃねえ。

禍々しさはあるがそれだけじゃねえ……。

「彼は闇と光、両方の眷属のようだね。」

いや、眷属というより加護に近いかな。

ふむ。再生能力……再生速度Aプラス。

なかなか、厄介だね。最悪ではないけど……だが」

ババアから離れたソイツは魔力を暴発させて暴れだした。

ソイツの周りには禍々しい魔素痕が発生していた。

「オイオイ……何だ、アレ？」

「力の暴走……今の彼は闇の魔法の力の源泉、負の感情が原因でその身を闇に飲み込まれかかっているのだよ」

最早、その姿は人間ではなく魔獣や魔族と変わらなくなっていた。

オイ、ヤベエゾ。

仕方ねえ、面倒くせえが手出すか……。

「ああ、心配ならいらぬよ。」

ここは、彼女が収めるからね！」

俺の考えを読んでいたようなタイミングで会話を続けている男は視線をババアの方に向けた。

男の視線の先を見ると

力の限り暴れだしたソイツを

ババアが魔法で押さえ込んでいる場面だった。

氷漬けにしようとババアが魔法を発動させようとした

正にその時。

ババアとソイツの周りに、上空から大量の羽が降ってきた。

降ってきたのは羽だけじゃねえ。

白い翼を持つ少女がドデカイ飛行機から落ちて来やがった。

あの飛行機は確か戦略爆撃機だったか？

あんなどデカイ飛行機がこっちの世界にもあるとは驚きだな。

空から舞い散る羽に触れたソイツは突然スイッチが切れたかのようになり大人しくなった。

続いて落ちてきた天使のような羽を持つ少女が歌を歌うとソイツを纏っていた禍々しい瘴気が霧散し身を纏っていた魔力の衣がひび割れし、まるで割れ物が割れたような甲高い音が聞こえると中から人

間の姿をした少年が姿を現した。

ババアがすぐ様駆け寄り状態を確かめていたが……ここからじゃ、容態はわからねえ。

「……ひとまず安心だね。」

これで彼は不死者に一步近づくことができる。

僕の推理通りだよ」

「ほう。ならこれも推理通りか？」

俺は目の前の男めがけて蹴りを放つ。

難なく避けられたが躲さるのは想定内だ。次の技を放つ為に気力を溜め腕を交錯させてとっておきの技を放った。

ビシッ。

「(キランッ!) エターナルッ……」

キメ顔をしながらポーズを続けていく。

ズバツ。

「ネギ…ファイバー!!?!」

万歳をした瞬間、身体の中、全身から強烈な光の光線が発生して目の前の男は光線の波動の中に包まれた。

「……チツ」

俺の超必殺技を放ったが放ってすぐに気づいた。

躲されたことにな。

奴は逃げやがった。

チツ、また面倒なことが起こりそうだな。

「……ネギフィーバーも改良があるな」

今度は口や指先からでも放てるようにしてみるか。

◇ ミツル視点（木乃香と離脱直後）

俺が雪姫がいる場所に近寄るとシャーロックの奴が雪姫に向けて

緋色の光線を放とうとしているところだった。

この技を俺は知っている。

「この技の名前は……」

「あれは……」

今、シャーロックが放とうとしている技の名前は……。

「『緋天・緋陽門』という（だ！）」

シャーロックと声が重なったがアレはマズイ。

アレは緋緋色金を持つ力の一つで時空を超える技だ。

放たれたら……時空を超えてどこかに飛ばされる。

飛ばされた先に何があるかは条理予知コグニクスを持つシャーロックにしか

わからないだろう。

「避けるー雪姫!!?」

「おや、ミツル君。君はやはりこの現象を知っているのかい?」

「黙れ、シャーロック!」

俺はシャーロックと雪姫の間、直線上に割り込み自身の身体を盾にしてやってくる攻撃に備えた。

あれがどうい現象が起こるかは知っている。

しかし、有効な防御手段は現在ない。
放たれるその瞬間まで雪姫の前に出ていた。
やがてシャーロックの指先から赤い光線が放たれ……下半身に激しい痛みを感じそこで俺の意識は途切れた。

意識が覚醒し、目を覚ますとまず最初に雪姫の顔が見えた。
よかった。

無事か……雪姫が無事で本当によかった。
視界には入っていないが他の人、小太郎やアスナ、皆の声も聞こえる。
全員無事のようなだ。

ホッとした俺はゆっくりと身体を起こした。
身体を起こすと辺りを見渡した。
全員の無事を確認して雪姫を見た。

雪姫はいつもの大人姿ではなく、何故か幼女姿の本来の姿になっていた。
いた。

その身に目立った傷はなく元気そうで安心した。
彼女の顔をしばらく見つめていると咳払いが聞こえた。

そちらを見ると――雪姫の隣に見知らぬ少女がいることに気づいた。

その少女は二重瞼の大きな瞳をしていて髪は黒髪で腰まで伸ばしている。

目が合うと微笑んで嬉しそうに抱きついてきた。

「よかった。よかった……無事だったのね」
初対面にも関わらず抱きつかれた俺は困惑した。

「えっと、君は……？」

抱きついてきた少女には身に覚えがない。
ない、筈なんだがなんだか懐かしい感じがする。

匂いもそうだが、少女はどことなく自分に近い感じがしていた。

「知り合いではないのか？」

雪姫がいかにも不機嫌だ、といった感じで聞いてきたが俺はこんな可愛い子の知り合いはいない。

首を横に振ったが雪姫の機嫌は何故か悪化した。

「わからないのも無理ないわね。

貴方が知らなくても私は昔から知ってるわよ」

「ちよつと待ってくれ、君の名前は？」

「ヒカリ」

名前を聞いた瞬間、俺の脚は震えた。

足だけではない。

全身が震えていた。

少女が名乗った名前……その名前には心覚えがある。

その名前の知り合いはいた。

いや、知り合いなのではない。

あの子には身近な大切な家族だったのだから……。

「ま、まさか……ヒカリ……なのか？」

ヒカリ、それは前世での俺達の娘の名前と同じ名だ。

「うん。久しぶりだね……。パパ」

装填21 神の代理人？

「ヒカリ……なのか、本当に？」

思わず聞き返してしまった。

俺は夢でも見ているのだろうか？

目の前に立つ彼女は、かつてその胸に抱いたとても可愛い我が子にソックリだった。

俺が我が子である娘を最後に見たのは娘が幼稚園に入る直前だ。

こつそり、彼女の家の近くで遊ぶ我が子を物陰から見たのが最期だった。

娘が目の前にいる。

その事実には戸惑いのあまり認める事ができないでいるとヒカリの隣に立つ雪姫が珍しく気を利かせたのか『ひなた荘』の方を指差しながら「落ち着けバカモン！ひとまず場所を変えるぞ。お互いに話した事があるみたいだからな」と言った。

ヒカリはそんな雪姫を見て何故だか頬を膨らませると爆弾を投下した。

「ねえ、パパ。」

「このオバサン誰？」

途端に、その場の空気が冷えこんだ。

比喩ではなく、実際に気温が低くなっていく。

恐る恐る雪姫の方を見ると雪姫は笑顔だった。

見たこともないほど爽やかな笑顔を浮かべていた。

だが、俺はすぐに解った。

雪姫の目は全くと言っていいほど笑ってない事に。

その証拠に顔は笑顔を浮かべていたが、雪姫の左手の指先に氷を鋭く尖らせた刃を魔法で作りに出していた。

あの魔法なら知っている。

『エキスキューションソード断罪の剣』……固体・液体の物質を無理矢理気体に相転移させる剣状の魔法だ。

「乳臭い餓鬼が何か言ったようだな。」

よく聞こえなかったからもう一度言ってみろ」
「耳まで悪いんですね。」

年増だから仕方ないでしょうけど」

こめかみをヒクつかせて聞き返した雪姫に対し、さらに挑発的な行為を行うヒカリ。

師匠VS娘大戦勃発。

「だ、誰が年増だー!!?」

この餓鬼！一度痛い目に遭わないと解らないようだな」

「600年生きている年増を年増と言って何が悪いのよ。」

私のパパを誑かそうとしたってそうはいかないんだからね！」

そう言っただけで俺に抱きつくヒカリ。

「あ、ちよつ……当たってる。当たってるし、柔らかい……」

抱きつかれた俺は、美少女の柔らかい感触とシャンプーの匂いを感じて思わず狼狽してしまう。

そんな俺の態度が気に入らなかったのか雪姫が矛先を俺に変えた。

「ほう、貴様はワザワザ助けに来てやった師匠よりも何処の馬の骨だかわからん乳臭い餓鬼の方がいいのか……そうか。なら二人仲良く冥土に送ってやろう」

「ちよつ!!?」

雪姫待って!!?」

違う、これ違うからー」

必死に雪姫を宥める俺だが俺に抱きつくヒカリがさらに雪姫の怒りのガソリタンクに油を注ぐ行為をしゃがった。

「パパ暴れないで……もう、仕方ないなあ」

微笑んだヒカリがその手を伸ばして俺の頬を両手で挟み

——そして。

「ちゅー！」

俺の頬を両手で挟んだヒカリが、自身の口で俺の口を封じる行為を行った。

「ん、ん、んー、んちゅ、ぬちゅ……」

重なり合う唇と唇。

唇を吸われているという行為に訳が解らずに呆然としていた俺を
されるがままに口付けをしていた。

やがてその行為はエスカレートしていき、舌と舌が絡み合う行為に
変わる。

「な、な、何をしておるかー！

貴様らー!!?」

雪姫の絶叫により正気に戻った俺はすぐに離れようともがいたが、
俺の頬を挟むヒカリの力はただの少女にしては強く、引き離せられず
にいた。

抵抗しようとヒカリの腕を掴んで離そうとしたがヒカリの腕に触
れた途端、俺の腕はビシ、ビシという音を立てて固まっていった。

これは――石化呪文!?!?

「駄目だよ、パパ。」

もう離さないからね……二度と」

俺が気づかないうちに石化呪文を発動したヒカリによって俺の身
体は指先から腕にかけて石化していった。

「ヒカリ、お前は一体……」

「パパと同じような存在だよ。」

私も転生者なんだよ。

女神の駒。

神の代理人って言えば解るよね?」

無邪気な笑顔で笑いながら石化の術を行使していくヒカリ。

事態に気づいた雪姫が断罪の剣でヒカリに襲いかかるが――

「もう、邪魔だなー。」

せつかくの親子の再会を引き裂こうとするなんて」

雪姫の断罪の剣でその身を真っ二つにされながらもヒカリは笑っ
たまま、笑顔を崩さずに俺の身体を石化させていき、やがて雪姫の魔
法剣により完全に引き裂かれた。

俺は雪姫に視線を向けたが雪姫の顔は驚愕した表情を浮かべてい
た。

視線をヒカリに戻すと。

雪姫に切断された箇所はみるみる再生されて何もなかった、かのよう
に元通りの姿に、彼女の身体は元の状態に戻っていた。

「無駄だよ。」

今の私は神様の眷属だからね。

死ねない、傷つかない身体になってるから例え真祖の魔法でも死な
ないよ」

「……神呪か。」

厄介だな。

アイツと似た力か」

雪姫が何やら呟いていたが俺はショックのあまり聞き取れなかつ
た。

ヒカリが神の代理人!?!?

それじゃあ、ヒカリも俺と同じように女神に無理矢理転生させられ
たのか。

「ヒカリ、お前も力を渡されたのか?」

「うん、そうだよ」

「この石化呪文がそうなのか?」

「ううん。これはほんの一部だよ。」

パパの力は闇の魔法マギア・エレベアなんだよね?

究極の不死転生術の……。

私は神力と一部天使の加護が使えるんだよ。

ねえ、パパ、私と一緒に戦おう。

戦で勝ち進めればママにも会えるよ」

娘の言葉に呆然としながらも俺は状況を飲み込む為に彼女の話し
を聞く事にした。

「それはどういう意味だ?」

「同盟を結ぼうよ」

「同盟?」

「そう、女神同盟」

「お前をこの世界に送った女神は誰なんだ」

「知りたい?」

「ああ……知りたいな」

「なら条件があるの」

条件という言葉に嫌な予感を感じつつ、身動きが取れない俺は視線を、雪姫に向けたが雪姫は何やら考え込むような顔をしていた。

周りを見渡してみても雪姫以外、誰も彼もその場から動けないように、完全に静止していた。

これは?

「停止魔法だよ。」

「禁呪だけどね」

時間や空間を停止させるような大規模魔法を無詠唱で発動させたのだ?!?

そんな事、普通の魔法使いには不可能だ。

「3日分の『運勢』と『体力』と『魔力』を消費すれば神の眷属なら一日中張れるよ。」

張った後はキツイけどね」

キツイと言いながらも石化呪文を解く事はせずに部分的にかけたまま、俺をその細腕で抱きしめた。

「同盟結んでくれたら石化も解いてあげる。」

「結ばないならこの辺一体、全て焦土にしちゃうよ」

ヤバイ。

笑顔で言っているが、この子は見た目と違って大変デンジャラスな発想をしている。

親の顔を見てみたい……まあ、前世での父親は俺なんだが。

「……解った。」

その代わり早く術を解いて周りの人や土地、建物を壊すな」

「わーい、話しが解るパパ大好き」

そう俺が答えるとヒカリは。パアツと笑顔を輝かせて「じゃあ、解くねー」とあっさり呪文を解除し、ふらつく俺を支えながら隣を歩いて『ひなた荘』の中へと入っていった。

話し合いの最中にも、明日菜や雪姫、ヒカリは俺に密着してきて、それが原因でぶつかり合い、何故だかその矛先は俺に向かった。

……理不尽だろ。

それから数時間後。

何故だか、一緒に付いてきたヒカリを伴って学園島に戻った俺達は車輜科ロのガレージで車を降りるとそこで一時解散をした。

ヒカリや小太郎と学園島に帰ってきた俺は、転入手続きの為に事務科マスに向かったヒカリや強襲科アサルトの蘭豹に呼び出された小太郎と別れて先に寮に戻り

疲れた俺は寮の部屋の中に入るとダイニングにあるソファアに倒れこんだ。

現在、時刻は午前10時30分。

既に遅刻が確定している時間だが雪姫から、午後の専門科目の授業から出ればいいと遅刻の許可は貰っている俺は少し身体を休めることにした。

あまりのんびりできないが朝っぱらから連戦した為、体力や精神を休めることが必要だと自身にいい聞かせて携帯をテーブルの上に置き、ソファアに横になったまま、瞼を閉じる。

今日は色々あったせいで疲れたな。

特に精神的に。

瞼を閉じると急激に眠気が襲いかかってきて俺の意識は落ちていった。

どれくらい時間がたっただろうか、意識を覚ますとテーブルの上から騒がしい音が鳴っている事に気づいた。

手を伸ばしてその元凶を取ると、俺の手の中で喧しく鳴り響く音の

原因 携帯電話が着信を知らせていた。

鳴り響く携帯の通話ボタンを押してすぐさま出ると

可愛らしいアニメ声が聞こえてきた。

『あんだ、今どこにいんのよ？』

今日は強襲科アサルトに行く約束したでしょ。

もうお昼過ぎてるじゃない！午後の専門科目の時間までに強襲科アサルトに来なかつたら風穴を開けるから！

早く来なさい！』

アリアはそう言うのと電話を切ってしまった。

聞こえて来るのは『ツー、ツー』と鳴る携帯から聞こえてくる音だけ。

アリアの電話で気づいたが、そっぴやそんな約束していたなー。

眠い目を擦りソファーに寝そべったまま、携帯の画面を見ると時刻は12時50分を示していた。

……は？

12……時……50分？

時刻を確認した途端、俺の脳は覚醒した。

ヤベエー寝過ぎたー！

慌てて俺は制服の上着と鞆を掴んで寮を飛び出した。

また、来てしまった。

強襲科アサルト……通称、『明日無き学科』に。

この学科の卒業生存率は97.1%。

100人に3人弱は、生きてこの学科を卒業できない。

任務を遂行中、または訓練中に死亡しているんだガチでな。

それが強襲科アサルトであり、武偵という仕事の暗部だ。

そんな場所に何故俺が来ているのかと言うと桃まんア武偵アに呼び出されたからだ。電話で。

発砲や剣戟が鳴り響く施設の中を歩いていると俺の携帯にメールが来た。

差出人はアリアからだ。

何だかとっても嫌な予感しかしないが開かないと風穴を開けられ

そんな予感も同時にしたので仕方なく開いて確認してみる。

タイトルは『来ないと風穴!』

……メール開く気を無くすな、オイ。

『今どこにいるの?あたしは強襲科アサルトの模擬戦ルームモックにいるから早く来なさい!

あんたが魔法なしでどれだけ戦えるか見てみたいわ。

相手にあたしの後輩を用意するから必ず来なさいよ。

来ないと風穴!』

一方的に模擬戦の参加を決められていた。

それも相手は後輩だと……俺が断れないようにワザと後輩を相手にしたんだろうが流石にこれにはイラつとくんな。

後輩との模擬戦を断れば、どんな理由があろうと逃げた、と言われるだろう。

そうなれば俺は残りの学校生活を『上勝ちが怖くて逃げた男』と呼ばれ馬鹿にされながら過ごすハメになる。

それは武偵高ではとても不名誉な事だ。

なんとかしても避けたい。

だが、メールには俺に魔法を使うなど書いてある。

銃技か、剣術、あるいは体術で俺は上勝ちを阻止しないといけない。魔法使いに魔法使うとか、イジメにも等しい指示だが……上等だ

魔法使い……いや、魔法拳士を舐めんなよ!

こうなれば相手が1年だろうが容赦しねえ!!?

「戦やつてやるよー」

装填22

模擬戦【画像有り】

「……か……」

体育館の中を進み辿り着いた先にある部屋の前で一旦立ち止まり、部屋の扉の真上にあるプレート眺める。

アサルトモックブルーム
強襲科模擬戦室。

部屋の前に設置されているプレートにはそう刻まれていた。

扉を開き、中に足を踏み入れると中は倉庫や工場を改築したような造りで二階建ての部分には観戦者用に安全柵が施されており、中央部は吹き抜けの造りになっており、一階の模擬戦場を見下ろせるようになってる。

一階部分の床には木箱やゴミ箱などの障害物が至る所に無造作に置かれていた。

俺が今いる二階部分にある鉄製の階段を降り、一階の模擬戦を行う障害物がある場所に行くと、そこには俺を呼び出した桃色ツインテールの鬼武偵様が仁王立ちで立っていた。

「遅い!!?」

「仕方ねえだろう!」

昨夜からシールドクエスト特秘任務に行っていたんだから」

カメラア色の瞳を吊り上げ、あたかも私、怒ってるわ! という

ような表情を浮かべているエリアにそう告げる。因みに昨夜から今朝にかけて起きた出来事はマスターズ教務課命令でシールドクエスト特秘任務扱いとなっている。

雪姫いわく、貴重な遺跡をテロリストに荒された、という事実を公に公表できないという理由が表向きの理由だ。

まあ、こればあくまで表向きの理由で表には当然の如く、裏がある。

裏の理由として、国家機密扱いされている国際犯罪者集団……伊・Uを束ねているのがあのシャーロック・ホームズだというのが大きい。

だが、この裏の理由は闇に葬られるだろう。

その事実を公に公表できない、という大人の事情があるからな。

何故なら伊・Uは紛れもなく犯罪者の集まりだが、同時に世界中の

犯罪者集団や国家を牽制する事が出来る、対抗戦力という側面も持っているからな。

伊・Uが存在する限り、国家間や犯罪者集団の間で世界を巻き込む争いは起きにくくなっている。

何故なら伊・Uは核を保有し、海底を自在に移動出来、個人の能力も飛び抜けて高いという超人の集まりだからな。

そんな相手がいつ介入してくるかわからないのに、誰だって自分から仕掛けて状況を悪化させようなんて思わねえだろ？

「そんなのわかってるわ。だけど遅れたら風穴ってメール出したでしよ？」

だから、風穴」

「いやいや、だから……じゃねえ!!？」

理不尽なアリアの返答に思わず突っ込んだじゃったよ！

俺が突っ込んだのが気に入らなかつたのか、アリアはムスツとしたまま、両腕を胸の位置で交錯させるように組み、俺を睨みつけてきた。胸に余裕があるからか楽に腕を組んでいるな。

「風穴」

ヤベエ……顔に出てたか？

「今、あたしの胸がない、とか思ったわね？」

「ソ、ソソナコトオモツテナイ「棒読みよ！」すみませんですっ！」

アリアの前では胸の話題は避けよう。

まだ撃ち殺されたくないからな。

いや、まだつて言ったが……後々撃ち殺されたいとか、そんな願望はないぞ。

俺はDMじゃないから撃ち殺されるのは我らの業界ではご褒美です！ とかそんな事はない。

ないっつたら、ない。銃で撃たれて喜ぶ趣味はない。

……本当だよ？

「あの一」

仁王立ちするアリアの後ろから姿を現したのは、アリアより背丈が低い女の子だった。

髪はオレンジっぽい色をしていてショートツインテール、体型は細め、特に胸元はアリア並み……おっと、殺気が……。

口は災いの元だな。

気をつけよう。

それよりも

—— やっぱりコイツが相手か……。

「アリアの後輩……だよな？」

その少女は原作通りの姿形をしていたが、念のために目の前にいる少女にそう問いかけた。

するとその少女は一度アリアの顔をチラツと見てから俺に向かいあうように体の向きを直した。

「はい。アリア先輩の戦妹の間宮あかりです。

先輩はえつと……」

「紹介するわ。

ミツル、この子はあたしの戦妹のあかりよ。

あかり、コイツがさつき言ったあたしの奴……協力者のミツルよ。

今からアンタとミツルで模擬戦してもらおうわ」

「え、ええええええ——」

間宮あかりは模擬戦の話しを聞かされていないなかったのか、驚いた声を上げた。

そして戸惑いながらもアリアに聞き始めた。

2人は「私、聞いてません」「そうね。今言ったからちなみミツルは探偵科と超能力捜査研究科に所属しているけど今回は魔法は禁止してるからあかりでもなんとかなるわよ」、「超能力捜査研究科所属なのに……魔法禁止？　大丈夫なんですか？」「平気よ。バカみたいに強い……はずだから」、「あの先輩のランクは？」「探偵科と超能力捜査研究科でSよ！」「ちよつ、そんな人と模擬戦させるなんて本気ですか——？」などといった会話を始めた。

まあ、なんだ。

まず、いろいろアリアに突っ込みたい気分だが、それより情報収集くらいしとけよ、あかりよ。

確かに今はあかりとは接点がない探偵科やSSR所属とはいえ、俺は昔、強襲科アサルトにも出入りしていたんだから、さ。自由履修で。

今はほとんど強襲科アサルトには近寄らなくなったけど。

主に、中国人の先輩達のせいだ。

だけどこんな情報は同じ強襲科アサルトの先輩奴らに聞けばすぐわかる情報モソだぞ？

そんな風に思っていると

一通りの会話が終わったのか、アリアはあかりの肩を片手でポンつと軽く叩いて、あかりの耳元でなにやらごによごによと耳打ちして会話を始めた。

「え？　嘘……そんな……やります。」

見ててください！　私、戦って勝ってみせます！

勝ってアリア先輩を解放させてみせます！」

最初は戸惑いと不安からか顔を青くさせていたあかりだが、アリアの言葉を聞くとすぐに顔を赤くさせ、何故かあかりは物凄く殺る気になった。

アリアがなにやらあかりに吹きこんだようで、あかりから闘志がメラメラと溢れ出した。

出ているのは闘志だけではないようで……なにやら「どうして、この先輩が？」、「私はあんなに苦労したのに」、「アリア先輩のパートナーは私だけでいいのに」などと妬みや恨みの感情をぶつけてきた。そういう事は自分より目上の相手、先輩とかには聞こえないように言えよ。

……止めるよ、アリアも。

というか、何を吹き込みやがった？

模擬戦という手前、無論実弾は使用禁止で弾は非殺生なゴムスタン弾かペイント弾の使用に限られている。

それも本来なら身体中を完全に防護するC装備の着用が義務付けられている。

いや、あれは決闘方式だけに当てはまることだったか？

いずれにせよ、極力怪我人や死人が出ないように幾重にも安全対策を重ねて取るのが普通だ。

そう……普通は、な。

だが不幸な俺は、たまたま暇だからという理由で現れた蘭豹によって、実弾の使用許可が出されてしまった。

それも実弾の使用許可が下りたのは対戦相手の間宮あかりだけ……。

そう、俺に下りたのはペイント弾のみの使用許可。

流石にこの扱いは酷い！

そう思い、蘭豹に意見したがキレた蘭豹に愛ある体罰（軽い指導）をされた挙げ句、刀剣も銃も使うな、男なら拳でやれやー！　とか言われてしまった。

……うん、おかしいよな。この学校。

しかも審判役のエリアもそれに賛成しやがった。

法治国家、日本はどこにいった？

エリアはあかりを連れて更衣室に向かった。

先に支度が終わった俺は、模擬戦室（モックブルーム）の中央に立ち、対戦相手の間宮あかりの準備が済むまで待機することになった。

「はあー、しかし……何でこんな事に……」

「八神先輩も大変で御座るな」

溜息を吐いていると俺の背後から聞き覚えがある少女の声が聞こえた。

「……その声……風魔か？」

背後を振り向いてその名を呼んだ俺と、現れた黒髪少女のツンとした目が合う。

諜報科1年、風魔陽菜。

その昔、相模国で暗躍していた高名な忍者の末裔で、俺達の後輩にあたる。

直立する風魔は両手に籠手を填めて、首に巻いた長いマフラーみたいな赤布を風になびかせている。

俺達というのは、実は彼女、金次と契約を結んだ教務課公認の戦妹^{アミカ}で俺とも昨年から交流がある奴だからだ。実は松○屋のバイトは風魔の紹介で入った。

紹介料として週に一度、桃まんを提供していたりする関係だ。

風魔の家は大変苦しく、彼女は高1にして赤貧少女と呼ばれているように満足に学費も払えないとか、イヤイヤ、実は他国の忍者みたいな諜報員により兵糧攻めにあっているとかでよく飯をたかられ……提供してやったりしているからな。まあ、前半はともかく、後半は嘘って事は分かっているがあまりにも可哀想だから提供してやっている。

それに、風魔は長瀬先輩に気に入られている。

俺もたまに風魔と一緒に長瀬先輩の修行に付き合ったりしている。

「風魔陽菜、只今参上つかまつった！」

「いや、呼んでねえよ」

「八神先輩！ 長らく修行が忙しくてお会いできず、寂しかったで御座るよー！」

「そうか。会えたな、良かったな。それじゃ、気をつけて帰れよ」

「あ、あうう……八神先輩が何時にも増して冷たいで御座るー！」

はっ!?? もしや、これも新たな修行で御座るか?」

「……アア、ソウダナ。シユギヨウダ。シユギヨウ。」

セイシンヲキタエルシユギヨウダ……」

「おおっ!?? 精神を鍛える修行とかで御座るか。」

それならそうと言ってくだされば……全く。

「師匠と同じように八神先輩は照れ屋で御座るな」

……殴っていいかな?

何しに来たんだよ！

「では、拙者は先輩が出された修行をしに行つてくるで御座る！」

「ドロン！」

風魔は両腕を組み印を結んでから片手を短パンの中に突っ込んで

中からかなり古いタイプの、それこそ時代劇に出てくるような手投げ式の煙幕弾を投げた。

煙幕弾は炸裂し、煙が勢いよく発生する。

辺り一面、発生した濃い煙によって視界は遮られた。

「それでは、八神先輩また会いに来るで御座るよ」

しばらく来なくていいぞー。

来るなら従兄の金次に所に行けよ。

そう思いつつ、手を降ってやった。

嬉しそうに微笑んだ風魔の姿は煙の中に消える。

建物の中に充満した煙により視界が完全に悪くなった頃、風魔の声が彼女が張った煙の中から聞こえてきた。

「八神先輩。何かあれば何時でも拙者は駆けつけるで御座る。」

急ぎの際には狼煙を上げてくだされ……それと腹を空かせた時にはまた兵糧をください」

「仕方ねえなあ。」

桃まんていいなら用意してやるよ」

しばらくすると煙は収まったがその場から……風魔の姿は消えていた。

念の為に当たりを搜索したがどこにもいなかった。

……ありえん。

「……そんな、バカな。」

風魔の忍術が成功するなんて……」

風魔は色々残念な奴なので武偵ランクは諜報科レザドのBランクに格付けされているが、まさか……その原因と思われるドジスキルっ子能力を発動させないなんて。

明日は雨どころか、槍が降ってくるかもな……。

不吉な事が起きる前兆かもな。

そんな事を考えながら模擬戦モックブルームに1人残された俺が準備を終えて待っていると

「お待たせ……って、あんた、何疲れた顔をしてんのよ」

「八神先輩……大丈夫ですか？」

C 装備を装着し終えた間宮あかりと審判を務めるアリアが模擬戦モックバトルに入ってきた。

俺の姿を見た途端、2人とも心底驚いた顔や心配そうな顔をして俺を気遣うかのように声をかけてきた。

「いや……何でもない。」

「さっさと終わらるぞ」

「アリア。ルールはどうする?」

「うーん……シンプルなルールがいいわね。」

一撃入れたら勝ちにしましょう。

それでいいですか?

蘭豹先生」

「かまへん。」

それとわかっていると思うが八神は魔法と銃剣類は禁止や」

「……はい」

「わかりました」

「ならとつとと殺れや!」

「それじゃあ、開始30秒前!」

アリアが開始のコールを始めた。

俺とあかりはアリアのコールを背中越しに聞きながらその場から走り出した。

身体強化してな。

蘭豹やアリアから魔法の使用は禁止されているが、魔力を使う事は禁止されてねえ。

だったら……。

俺は歩法の一つである『瞬動術』を使って走る。

そして素早くその身を建物内にある様々な障害物の一つに隠した。にしても間宮あかりの奴、つてきり背後を狙ってくると思ったが何もしてこなかったなあ。

銃撃されるって思って警戒していたんだが……。

「……静かだな」

俺は身を隠した木箱の陰からこっそり頭を出して間宮あかりに動きがないか当たりを見回す。

あかりの姿はおろか、人っ子1人いない。

「ふむ……どうするか」

相手は1年。だが非殺生の装備とはいえ、武装済み。

対する俺は服装こそ、防弾制服だが武器なし、装備なし。魔法禁止の身。

片や強襲科生^{アサルト}。従姉^{アミカ}はあの鬼武偵、双剣^{カト}双銃^{トラ}のエリア。

対する俺は探偵科^{インケスタ}と超能力捜査^S研究科^RのSランク。

昨夜からのゴタゴタで肉体的にも精神的にも疲れてる身。

クドイかもしれないが今回、教務課^{マスターズ}……というより蘭豹から直々に

魔法禁止を言い渡されている身。

うん。状況的に……

……詰んでるな。

「よし、逝くか」

俺は覚悟を決めて木箱の陰から飛び出した。

周囲を警戒しつつ、なるべく音をたてないように慎重に、尚且つ素早く移動していく。

直線上には進まず周りこむように遠回りの道を選んで進む。

そして移動していく事、数分で……

「瞬動はルール違反にならねえよな？」

さて、あかりを見つけちゃったが……どうするかなあ」

俺は標的である間宮あかりの姿を捉える事に成功していた。

あかりは俺から200メートルほど離れたゴミ箱の陰に隠れていた。

片手にはあかりの武器^{エモン}であろうUJIの銃口を天井に向けるように銃を持ちそのグリップを固く握り締めている。

さて……どうするか。

あかりの姿は捉えた。

だが姿を捉えても近づかなければ意味がない。

一撃入れたら終わる、というルールはあかりに有利だ。

Sランクが何を言っているんだ、と思われるかもしれないが俺がSランクなのは魔法戦闘や捜査といった限定的な状況での話だ。

餅は餅屋に、ではないが戦闘、それも近接戦闘においては強襲科アサルトの奴らの方が当然ながら有利だ。奴らは常日頃から格闘、射撃、剣技を磨く訓練を積んでいるのだからな。

なので、Eランク評価とはいえ、間宮あかりとはできれば戦りたくなかった。

前世の知識……と言っても漫画の知識だが、あかりは急所狙いで銃を撃てば直接的を目視しなくても、視線を逸らしていても当てられるほどの銃の使い手だと記憶している。

その技量は殺人が禁止されている武偵にとって確かに致命的で、落ちこぼれと呼ばれても仕方ないほどだが、逆に言えば抹殺者としては一流の技量を持っているという事になる。

そう考えるとEランクの1年とはいえ、あかり相手に素手で挑むのは愚弄な行為だよな。

となるとやはり得物がほしいよな。

だけど武器になりそうなもんは……これ使うか。

ガンツ！

俺は目の前にある木箱を魔力を纏った脚で思いつき蹴り飛ばした。

そして「アンサートーカー」を発動させる。

この能力はどんな状況、疑問、謎でも瞬時に「答え」が出せる能力で戦闘中に使えば、「どうしたら相手に攻撃を当てられるか」、「どうしたら相手の攻撃を躲せるか」という答えも瞬時に解ってしまう能力だ。

ただし、出せる「答え」には状況や実力にもよるが限界がある為、あまりに実力差が離れ過ぎていると相手の攻撃を躲すにはどうしたらいいか、などの「答え」を導き出したりする事は出来ない。

それに本人を見ないで答えを導き出したりしても完全な正解を導き出す事は出来ない。

そういった制約がある為、シャーロックには使えなかった。
だがこれから戦う間宮相手なら有効だ。

ドカアアアツ！

「きゃあー！」

間一髪で飛ぶ木箱に気づいたあかりが横に飛び退こうとしていた。
俺はあかりが飛び退く地点を予想し、そこへ瞬動で移動して奇襲を
仕掛ける。

「とりやー！」

横に飛び退いたあかりの膝に体重を乗せた蹴りを放つ。

「なっ！」

「ほっ………!?？」

突然現れた俺に思いつき蹴り飛ばされたあかりは驚愕した表情
を浮かべ、痛みで顔を歪ませた苦痛の表情を浮かべながら俺が隠れ
ていたのとは別の木箱を薙ぎ倒すように後ろへ吹き飛んでいった。

「……うっ、うっ」

粉々になった木箱を下敷きにしながら苦痛の表情を浮かべるとあ
かりは立ち上がったが、あかりが行動を起こす前に俺は彼女の側に瞬
動で移動してその首に魔力を纏った手刀を当てた。

そして頭上を見上げる。

腕を降ろせばいつでもあかりの首は飛ばせるぞ！ と二階部分

で見学していたアリアや蘭豹にアピールする為に。

「コラ、間宮！ 何やっとなのやー！」

接近されるまで気づかんとはどういうわけやー！」

「はあー、この前みたいなスリ技が見られると思ったけど……まだあ
かりには荷が重かったわね」

「確かルールは一撃入れたら勝ちだったよな、もう終わりでいいか？」

「……まだ負けてません」

首に手首を当てられているのにも関わらずあかりは強気な態度で
言ってきた。

こいつ状況を解っているのか？

それともまだ何か隠しているのか？

俺が疑問に思ったその時だった。

ゴト、ゴト。

俺やあかりの近くにある別の木箱が突然揺れた。

「何だ？」

「え？　え？」

状況が理解できない俺とあかりはお互いに戸惑いの表情を浮かべた。

木箱は大きな音を鳴らして激しく揺れ……そして。

突然、木箱の一部が粉々に吹き飛んだ。

「……げほげほっ……何だ？」

「なんなんですか？？」

あかりから離れて木箱の側に近寄るとそこには……

黒髪をポニーテールにした忍び装束姿の。

「いやー、拙者とした事が……失敗してしまいました。

面目ないで御座る」

見覚えがありすぎる少女が飛び出してきた。

「なっ……風魔？？」

中から飛び出してきたのは先ほど別れたはずの風魔陽菜だった。

「ゴラ、風魔！　何邪魔してるんやー！　死ね、死にさらせー！

罰として体罰フルコースしてやる、こつちに来いや」

蘭豹にしよびかれていく風魔を横目で見送り、あかりに向き直ると

あかりは落ち着いたのか、俺の顔を見つめ返してきた。

「八神先輩。もう一度だけお願いします！」

「仕方ねえな。次が最後だぞ」

俺とあかりはお互い向かいあうように模擬戦モックバトルムの中央に立ち、審判役のアリアの号令の元、再度駆け出した。

お互いの方向に向かって。

アンサートーカー発動！

あかりがどういいう攻撃を仕掛けてくるか、その答えを出す。

「行きますー！」

あかりは俺と交錯した瞬間、その時素早く俺の右手に嵌められてい

る指輪を抜き取ろうと手を出してきた。

俺が右手の指に嵌めている指輪が魔力制御の媒体になっていると気づいたようだ。

——これが鳶穿ち、か。

その鮮やかな手捌きと無駄の無い動きで俺の指輪をすり盗ろうとするあかりに驚きつつ、あらかじめアンサートーカーによりあかりがどういう行動を取るか答えを出していた俺は、あかりが接触した途端、指輪に大量の魔力を流した。

——バチツ！

「きやあ？？」

俺の中にある膨大な魔力が指輪に流れたせい、か、指輪に手を伸ばそうとしたあかりだが、手に魔力が放出されるのを感じ取ったのか驚き、その場を飛び退いた。

「残念だったな」

瞬動であかりの真後ろに移動し、その小さな体に魔力を纏わした掌打を放つ。

「みぎやあ……」という声をあげてあかりはその場で崩れ堕ちた。

「……コールは？」

アリアに戦闘終了を告げるとアリアはムスツとした表情をしながら戦闘終了の合図を鳴らした。

「そこまで。勝者。八神光！」

「……馬鹿ミツル」

「何でだよ」

間宮を背に背負った俺が強襲科棟アサルトを出るとアリアが不機嫌な表情で言ってきた。

「あんだ、手加減してたでしょう。」

全然本気でやってなかったじゃない」
バレてた。

確かに間宮相手に俺は全力で戦ったとはいえない。

「あんたが中国人の先輩達と仲良く一緒に稽古しているっていうことは知ってるのよ！」

中国拳法を見れると思ったから魔法禁止にしてあかりの相手させたのに」

「いやいやよく考えろよ！」

1年相手に、敵に手の内見せるわけないだろ」

「そうね。」

なら今度は蘭豹先生に模擬戦の相手をお願いしてみるわ」

「それだけは勘弁してくれ！」

いや、マジで。

蘭豹相手にしたら命いくつあっても足りねえよ！

恐ろしい事をさらりと言うアリアに戦慄しながら歩いているとアリアが足を止めて俺に言ってきた。

「ちよつと、あたしまだ大事な用事あるからあんたはあかりを救護科アンビュラスに連れて行ったら先に帰っていいわよ！」

アリアの用事？

ああ、そういえば今日は金次とアリアのラブラブゲーセンターイベントの日だったな。

なら邪魔者はさっさと退散してやるか……。

「そつか。それじゃあ金次によろしくな！」

それとUFOキャッチャーは金次に任せとけ！」

そうアリアに声をかけて俺は瞬動でその場を後にした。

「UFOキャッチャーって何よ？」

あ、ちよつとミツル……もう、馬鹿なんだから」

間宮あかりを救護科アンビュラスの奴に預けた俺は自宅の男子寮近くをゆっくり歩く。

周りは何れも似たような造りのマンションだ。

そのほとんどが学生寮なんだろう。

この学園島に住むのはほとんどが武偵高の生徒だから当然といえ

ば当然なんだけどな。

今日の夕飯は何にしようか、と道端を考え事をしながら歩いていると突然俺を呼ぶ声が聞こえた。

「ん？ 誰だ」

立ち止まり、キョロキョロと辺りを見回してみたが俺を呼んでいる人はどこにもいなかった。

「気のせい……じゃない!?」

声が聞こえる……上か？」

顔を上に向けて頭上を見渡すとそこには

一体の天使がいた。

大きな白い翼を広げて。

頭に光り輝く輪っかを浮かべた……

武偵高の女子制服に身を包んだ天使が

装填23

父娘デート？いいえ、ただのお食事です！

空から、女の子が降ってくるって思うか？

そんな奴はいない？

ああ、俺もそう思っていたさ。

そんなのは、映画とか漫画とかでよくある設定でしかないって。

仮に、もし実際に降ってきたらソイツは厄介なものを抱えた、ただの問題児だトラブルメイカーと思う。

そんな問題児相手に自分から関わりあおうと思う奴はよっぽどの暇人か、怖いもの知らずか、あるいは自分は絶対に大丈夫だと思っている過信家くらいだ。

どちらにしろ少人数だと俺は思う。

映画とか漫画とかならない導入だ。

それは不思議で特別な事が起きるプロローグ。

主人公は正義の味方にでもなつて、ドキドキワクワクな大冒険をそのヒロインと一緒にするんだ！

ああ、だからまずは空から女の子が降ってきてほしい！

……なんていうのは、浅はかってもんだ。

だってそんな子、普通なワケがないからな。

普通じゃない世界に連れ込まれ、普通じゃない価値観を押し付けられる。

そして厄介な出来事に巻き込まれる。

そして、大切なものを奪われる。

現実起きるとそれはとても危険で、苦しく、辛い出来事なんだ。

だから俺、八神光ミツルは——空から女の子なんて、降って来なくていい。

俺は厄介事に巻き込まれるのは……人を傷つけるのは本当は嫌な

んだ。

だから、本当は戻りたくないんだ。あの、トチ狂った学校の……あの、『学科』には……。

空から女の子が降ってくる……なんて出来事が現実
に起こった。

起きてしまった。

真上から両手を広げて、背中にある白い翼をはたかせて彼女は
ゆっくり、ゆっくりと俺の方に向かって降下してきた。

彼女が翼をはためかせる度に、白い翼から羽が舞い落ちて、その羽
は風に吹かれて辺り一面に降り注ぐ。

セーラー服を着た黒髪美少女が頭に光輪を浮かべ、背から翼を展開
させるその姿は、まごう事なき、天使が神々から遣わされて人々元に、
天界から下界に降臨したかのような、神秘的な光景だった。

そんな、神々しく降臨した目の前の天使は俺の腕の中に飛び込むや
いなや、俺の胸に顔を埋めてその小さな口から第一声を発した。

「やっど、見つけた〜！

パパぎゅー、して？」

「第一声がそれか!?!?」

あかね色に染まる坂を下る……なんて事もなく、俺と俺の隣を歩く
少女、ヒカリは学園島の歩道を共に歩き、モノレールに乗って移動し

て台場にある某ハンバーガーショップに辿りついた。

そもそも浮島の学園島に坂道なんて存在しないからな。

いや、あるのかもしれないが坂道があるなんて話を聞いた事はない。少なくとも俺はな。

ハンバーガーショップを物珍しそうに見るヒカリの手を取って注文カウンターに向かう。

今日は朝から大変だったから正直、夕飯を作る気力はなかった。

いや、さつきまでは少しはあったが……もうその気力はなくなってしまうた。

主に隣にいる少女の所為で。

「うわあ〜!??・　　たくさんメニューがあるんだねー!

何にしようかな?　　ねえ、パパのお勧めは何?」

「そうだなー。無難に照り焼きとか、チーズがいいんじゃない?」
前で『パパ』は辞めろ!??・」

あらゆる誤解を受けるじゃねえか!

……ほら、もう受付のお姉さんが明らかに変な人を見る目を向けているぞ。

何故か、俺にな。

違いますよ?

俺は（今世では）まだ、独身ですからねっ!

子持ちのパパとか、そういうプレイとかしてるワケじゃないですからねっ!

「ははっ、ふざけて変な事いうなよ。

ただの同級生とのお食事だろ?」

「えー、だってパパはパパだもん。

娘がパパにパパって言うのは『普通』でしょ?」

「その価値観は誰に教わった?」

男子高校生に向かって、人前で『パパ』と呼ぶのが『普通』とか……。
ないわ。それはないわ……。

「絶望したっ!　　お前の変な価値観に絶望したっ!??」

「あ、そのネタ知ってる。女神様が好きだった漫画のネタだ!

『パパ〇き』とか、『ハヤテの〇〇〇!』とか、『さい〇まチエンソー少女』とかよく読んでたよ。

あとは、アニメで『スクール〇イズ』とかも見て勉強してたよ」
おい、女神。

うちの子になんて物を教えてんだ!

『パ〇聞き』とかはいいが、『さい〇まチエンソー少女』なんて読ませるなよ。

うちの子が病んだらどうしてくれるんだ!?

漫画読ませたり、アニメ見せるなら『まぶ〇ほ』とかにしとけよ。

え? それもヒロイン病んでるって?

……聞こえない。何も聞こえない。

「あの〜」

大体、うちの子が病んでるわけじゃないじゃないか。

うん、ほら。きつとアレだよ。アレ。

今朝、雪姫とかに絡んだのは久しぶりに会った父親に、知らない人が近づいていたからちよつと驚いただけだよ。

うん。きつとそうだよ。

「あ、あの〜、お客様?」

「あん? 私のパパに話しかけないでもらえます?」

パパに話しかけていいのは『娘』である私だけだから」

……うん。アレだよ。

アレ、アレ。

ちよつと寂しがり屋なだけだよ。

……多分。

「え? いや、その……お客様。ご注文が……」

「聞こえなかったの?」

「聞こえないならその耳切り落とすよ?」

「ひっ!?!? ナイフ!?!? も、申し訳ありませんー!!!」

……アレだよ。アレ、アレ……!!!

「うちの子がヤンデレてるよー!?!?」

「畜生ー!?!?」

慌ててヒカリを取り押えて、俺はすぐに店員さんに謝罪した。

その場はアメリカンなジョークという事でなんとかなった……というわけでもなく。後始末で（迷惑料として食べたくもないハンバーガーやナゲツトを大量買いして財布が軽くなった事もあり）精神的に疲れた俺を他所に、ヒカリはニコニコしている。

「照り焼きハンバーガーって美味しいね！」

「……そっか。よかったな……」

「好きな人と食べると美味しき100倍だねっ！」

「……」

夕暮れ空の下、俺とヒカリはハンバーガーを食べている。

……台場のハンバーガーショップのお洒落なオープンテラスで、
な。

新しく綺麗なこのテラスには、カップルも多い。

中身がちよつと残念な事を知らなければ単なる美少女にしか見えないヒカリと共に向かいあってハンバーガーを食べている俺達の光景も、パツと見、制服デートに見えているんだろうな。

世間の人には。

「んーいいお天気！　絶好の父娘おやこデートだね、パパ！」

この自称、俺の娘ことヒカリさんは、どこにスイッチがあるのか解らないが、チャンネルが切り替わると――ナイフを人に突き

ついたり、人の身体を石化させたりしてしまう、ちよつと困った少女だ。

（つて何だよ、『父娘デート』つて……）

前世では確かに親子だったが、今は血の繋がらない『他人』なんだから、そんな変な呼び方すんなよ。

あとハンバーガーには普通に炭酸飲料だろ！

シエイ○なんて邪道だ！

……まあ、あくまで俺の好みは某炭酸飲料だから、だが。

などと俺様ルールをボヤきながら俺はヒカリとの制服デートを無事に終えた。

……のならよかつたんだが、そう簡単にはいかなかった。

俺とヒカリが学園島に戻ってきて、俺は自室として使っている寮への道を歩いていくと。

トコ、トコ、トコ。

当然のように、ヒカリが後を追ってきた。

俺が止まれば、ヒカリも止まり。

俺が歩きだしたらヒカリも歩き始める。

試しに全力疾走してみたら……ヒカリは空を飛んで追いかけて来やがった。

……うん。どうしてこうなった？

「なあ、ヒカリさんや」

「なに、パパ？」

「そーいや聞いてなかったけど……お前、うちの学校の制服着てるって事は編入するんだよな？」

「うん。そうだよ」

「学科は？」

「もちろん、パパと同じ超能力捜査研究科！」

あと、アンビュラス救護科も掛け持ちするよ！」

それは予想していた。

超能力……魔法の素質はあるだろう。

無詠唱で高度な石化魔法を普通に使えていたくらいだからな。

それに俺の身体を直したあの歌はなんだったのか、その答えはまだ聞いている。

俺の知らない能力をヒカリが持っている事は予想ついた。

だが、それよりも切実な問題がある。

「そつか……で、何処で寝泊りするんだ？」

そう。俺の側を離れたがらないこの少女が何処で寝泊りする気なのか？

その問題が今の俺にとっては切実だ。

「そんなの決まってるじゃん！」

ヒカリは何を聞かれていいのか解らないというような、キョトンとした表情を浮かべながら告げた。

「パパの部屋が私の居場所だよ？」

神様一つ聞きたい。

俺が一体何をしたい？

あと、もう一つ。

娘のヤンデレはデフォですか？

翌日。

信じられない事に、ヒカリとの同居許可は教務課からあっさり降りていた事を知った俺というか、俺達、俺とヒカリは、雨が降る中、バス停の前でバスを待っていた。

7時58分発。武偵高行きのバスを待つ。

昨夜は運がいい事に同居人は小太郎以外に帰って来なかったし、何故か、アリアも帰って来なかった。

正直、ヒカリの事で頭が一杯でアリアが来なかった原因を気にする余裕はなかった。

だから解らなかつたんだ。

思い出せなかつたんだ。

今日、この日に起きるあのイベントの事を……。

バスがバス停に着き、乗り込むとバスは超満員だった。

ぎゅうぎゅう詰めになれ、早くもバスに乗った事を後悔し始めたその時。

聞き覚えのある友人の大声が聞こえてきた。

「やった！

乗れた！

やったやった！

おうキンジおは

ようー！」

友人の武藤剛気の声が響き、それと同時に、俺の頭の中でこの後起

きる出来事が鮮明に映像となって脳内に流れた。

響く、悲鳴。

轟く銃声。

無機質な機械の声。

撃たれる少年、庇う少女……。

飛び散る血液……。

海中にあがる水柱……。

「ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ……！」

今日は武偵殺しが起こす『バスジャック』事件の日じゃねえか!?!」
俺がその出来事に気がついた、その時。

「俺のチャリはぶっ壊れちまったんだよっ。これに乗れないと遅刻するんだ！」

「ムリなもんはムリだ！ キンジ、男は思い切りが大事だぜ？」

1時間目フケちゃえよ！

というわけで2時間目にまた会おう！」

薄情な武藤の声と、意気消沈するキンジの声が聞こえ、俺は現実を直視する事となった。

キンジが乗り遅れたバスに俺が乗り合わせている。

……現実はこのまんか。

武藤の言うとおり、許されるなら1時間目の授業なんてフケてえよ。

バスジャックに巻き込まれるくらいならな！

いや本当。

……どうしてこうなった？

装填24 バスジャック①

「なんだってこんな目に……」

思わず頭を抱えそうになるくらい、今おかれている状況は切迫していた。

走行中のバスの車体。

その真下に固定されているのはカジンズスキーβ型のプラスチック爆弾、世を騒がせている武偵殺しが使う爆弾と同じものだ。

そう、俺は今車外に出てバスの車体の下を覗き込んでいた。宙に浮いてな。

いや正確には抱き抱えられて、といった表現が正しいな。

「わあ、本当にあった……凄いな。どうしようか、パパ？」
なんせ、今俺は。

俺を抱えているヒカリによって空を飛んでいるのだから。

そう、地面ストレスを低空飛行しているわけだ。

背中から白い翼を広げて空を滑空しているヒカリによって俺達がこんな目に遭うことになった原因。

それを語るには時をほんの少しばかり遡る事になる。



ヒカリと共に学生寮前のバス停からバスに乗り込んだ俺は、混み合うバスの中で揺られながら会話をしていた。

内容はヒカリの学園生活についてと、今後についてだ。

「だから、パパの近くにいないと私は駄目なんだよ。

という訳でパパの側にいるね！」

「待て！　何がだから、だ！　まだ何も話してないだろう？」

「様式美かなー、と思って」

「そんな様式美はいらねえ」

「えー、いいじゃん」

何がいいんだよ!?!?

「そんな様式美より、他に言う事あるだろ?」

同盟の事とか、何でヤツらの下伊・ウにいたのか、とか」

「んー、パパって結構細いねえ」

いやいやいやいや。

大事な事だろ。

「それに人前でパパは辞めろ。」

変な噂が経つたらどうしてくれるんだ」

ヒカリは気づいてないのか……俺達が乗った直後から周囲の人達の注目を集めている。

まあ、無理はないと思う。

ヒカリは美少女だからな。

黙っていれば世の男性の10人中7、8人は振り返るであろうほどの美少女だ。多分。

長い黒髪に、白い肌。大きな瞳。

大和撫子を体現したかのようなその容姿は注目を集めるのは仕方ないと思う。

ただ……問題なのが。

その連れが俺だという事実だ。

うう、聞こえるぞ。

同じ学年の女子

鷹根、早川、安根崎

俺や

キンジの悪評を迅速かつ、広範囲に広める事に定評のある通信科コネットトリオの声が……「聞いた!?!?」　パパだって……「え、親娘?」　なわけないよね……「まさか……　そういうプレイ!?!?」「あの噂本当だったんだよ。キンジの『たらし』が移ったっていうの……」「じゃあ、ロリコンって事?」「えー、ミツル君は絶対年上キラーだと思ってたのに……。雪姫先生とか、三年の桜咲先輩とか、古クちゃんとか……」などどヒソヒソ話してるのが。仲良いな、お前ら。

あと俺はロリコンじゃねえ!

「んー、じゃあ何て呼べばいい?」

「普通に八神君とか、八神さんとか君、さん付けで呼べばいいだろう？」

「えー、そんな他人行儀な呼び方は嫌っ！」

「じゃあ、ミツル君とかでいいだろう。」

「もしくはあだ名で呼び合うとか……」

「あだ名かあ。んー、それはいいアイディアだよ」

「にばー！　　というような感じの笑顔を見せるヒカリ。」

俺達の周囲にいた男子生徒はヒカリの笑顔を見ただけで打ちのめされていた。

「んー……じゃあ、みーくんっていうのはどう？」

「っ！！？」

ヒカリが何気無く発したその呼び名に俺は動揺してしまう。

みーくん。

それは前世で彼女が呼んでいた俺の呼び名で。

もう呼ばれる事はない名。

誰にも……呼ばれたくない名。

それは世界でただ1人だけが呼んでいい……特別な呼び名だから。

「……駄目だ。その呼び名を呼んでいい人は……もういないから」

いくら、ヒカリが前世での俺の娘でも。

彼女の娘でも、その呼び名では呼ばれたくない。

「……っ、わ、わかった。わかったよ。だから、そんな顔しないで！」
？

何故かヒカリは俺の顔を見て怯えていた。

怖いものを見たような顔をしていた。

俺は今、そんなに酷い顔してるだろうか。

「……悪い。怖がらせる気はない」

「あ、うん。こっちこそ、ごめんなさい」

お互いに頭を下げて謝る俺達。

二人の間を気まずい空気が流れる。

「みーくんはダメだがそれ以外なら好きに呼んでいい。

ただし、常識のある呼び名だぞ？」

「解った。じゃあ、ん〜……決めた！」

みつくんって呼ぶね？」

「一文字違うだけじゃねえかー!?？」

と、その時だった。

どん！ つと俺の背に誰かがぶつかった。

混雑した狭い車内だ。

ぶつかられても仕方ない。

そう思いながらも俺はぶつかってきた相手を見る。

俺にぶつかってきたのは……。

女の子だった。

髪は金髪で三つ編みに束ねていて、身長はかなり低い。

ぱっと見。小学生くらいだろうか。

本来ならいるはずがない年の女の子だ。

だが、ここは武偵高。

飛び級、インターン留学制度がある一般的な学校とは掛け離れた場所だからな。

小学生がいても不思議ではない。

いや、もしかしたらアリアみたいに実年齢と身体の成長があつていないだけなのかもしれないけどな。

そんな事を思いながら相手の顔をよく見た。

見てしまった。

そして、気づいた。気づいてしまった。

俺はこの子のことをよく知っている。

目の前にいるこの子の名前は。

さくらちめ
桜雨キリナ。

俺の一つ年下の従姉妹だ。

俺がその子に気づいたのほとんど同じタイミングで相手も俺に気づいた。

「げっ？」

なんで朝っぱらからアンタの顔を見なくちゃいけない

のよ。

「この、むのー」

「朝っぱらから、いきなりそれかー!?」

おとなしそうな外形に騙されてはいけない。

コイツは、その小学生みたいな見かけと違ってかなりの毒舌を吐く厄介なヤツなのだから。

ちなみにむのーというのは俺を指すコイツの呼び名だ。

昔はミツル兄とか、ミツルお兄ちゃんとか呼んでくれていたが年をとるごとにだんだん言い方がキツくなっていき、今やこの呼び名が定着してしまった。

「煩いわね、このむのーはー」

喚くなら鳴きなさい。

ほら、ワンと鳴きなさいよ」

「は?」

コイツ今、なんて言った?

「は?」じゃないわよ。このむのー。

ワンよ」

「わ、ワン?」

「オツケー」

じゃあ、その頭踏ませなさい」

「へ?」

「踏・ま・せ・な・さ・い・い・よ……このむのおお!!?」

「おい、ちよつと待て!

バカ、止めろ!」

「え、きやあー!?」

スカートをたくし上げて足を高く上げるキリナ。俺はキリナのその足を咄嗟に右手で掴む。

そして高く足を上げたキリナ自身の力を逆に利用して、全身を回転扉のように使いキリナを床に転ばせた。これは合気術の応用技で、昔雪姫が見せてくれた技の一つだ。

相手の力を利用する為、柔術を納めている人なら力が弱い女子供で

も使える技だ。

まあ、これを使えるようになるには何年もかかるけどな。
ドシーン、と尻餅をつくキリナ。
倒された痛みからか、涙目になってるがそれは自業自得だな。

「人の話を聞けよ！」

そもそもお前は昔から……」

久しぶりに会った従姉妹相手に俺はお説教を始めてしまう。

人の話を聞かないというのもあるが、何よりむのー呼ばわりされて
イラついていたからな。

お説教をしていたその時だった。

それまでおとなしく俺の背後で様子を見ていたヒカリが口を開い
た。

「おい、お前。私のパパをむのーとか言ったな……」

気づいた時には遅かった。

「死刑……」

そのヒカリの言葉と共に、キリナの全身が石化していったからだ。
無詠唱呪文による高難易度の石化呪文の発動。

ヒカリが右手の掌をキリナに翳したその瞬間。

たったそれだけの行為でキリナの全身は石化した。

「なっ、ちよっ!?」

止める間などなかった。

たった数十秒で愉快なオブジェと化したキリナ。

術を発動させたヒカリは俺の顔を見るとニコニコとしている。

まるで「邪魔者は消したよ！　褒めて、褒めてー」というような

視線を向けて。

「バカ！　何やってんだ！」

早く解け！　死んでない……よな？」

「死なないよ。石化させただけでもん。」

もっとも、石にヒビや傷がつけばただでは済まないけど。ふふっ

お前、一体どこの魔王だよ!？」

そう思った俺は悪くない。

「死ななくても早く戻せ！」

周りに何て言ったら……あれ？」

そう言えば、周りがやけに静かだ。

いや、それなりに騒がしくはある。

だが、それはいつも通りの騒がしさだ。

俺達の事に誰も気づいていない。

まるで俺達の存在が目に入っていないかのような、認識されていないな
いかのような。

そんな反応だ。

「大丈夫だよ。ちゃんと認識阻害の呪文は掛けといたから」

「いつの間に……」

ヒカリを敵に回すのは辞めよう。

何をしでかすかわからんからな。

知らない間に妙な術とか使われるかもしれんし。

……ないよね？

「ふふっ」

……心配だ。

「戻してほしい？」

「……戻せ」

「いいよ。その代わりに約束して」

「約束？」

「私以外の女子のことは、触ったり抱き締めたりしないって約束して」

「なっ!?」 そんな約束出来るかあ！

そんな約束したら何時もやってる事が出来なくなるだろう。

修業とか、訓練とか、稽古とか……。

我ながら色気が一つもないのがアレだけだな。

ともかく、そんな約束したら雪姫との魔法を使った修業も、先輩達
との特訓も何も出来なくなる。

どっちも身体に接触してしまうからな。

約束したら1人で修業するハメになる。

それは嫌だ。

「そう、ならいいよ。じゃあ、この人の石化は解いてあげないから
プイツと逸らしてしまおうヒカリ。」

頬を膨らませて不貞腐れるその姿も可愛い。

美少女が自分の為に妬いてくれる。

それは男なら嬉しいシチュエーションだ。

「はあー、その約束は出来ないけどその代わりに今度何処かに遊びに
行こう」

「デートね！　それなら……まあ、いいかな」

俺の提案を受け入れたヒカリはキリナの前に移動すると、片膝をつ
いた状態でバスの床に座った。

そして。

「あー、ぐっほん。ぐっほん……」

咳払いを2、3度した後「歌」を歌い始めた。

「サンクチュアリ天使の歌声!!？」

それは美しい歌声だった。

透き通るような声。

心に響く歌詞。

「わあ、綺麗な歌声……」「本物の……天使みたい」「心が浄化されそう」

「天使タンだおー、本物の天使タンが爆誕だおー」

気づけば認識阻害の魔法を使われているはずの周りの学生達も聞
き入っていた。

不思議な事に、ヒカリの歌声は聞こえても。

石化したキリナの姿には誰一人気づいた様子はない。

それだけヒカリの魔法が強力だという事だろうか？

それにしても賞賛の声が凄いな。

1人、正気を疑いたくなるような奴がいるが。

「プレリユード・ファイネ序曲の終止線！」

始まりの終わりの歌!!？」

ヒカリがその言葉を発した瞬間。

ピキピキといった音が鳴り響き。

シユー、と音が聞こえて。

石化したキリナの身体が元の状態へと『戻って』いった。

「はっ、え？　い、生きてるの……私!?!?」

キヨロキヨロ辺りを見回すキリナ。

「元の時間枠……巻き戻しじゃ……ない？」

え？　でも私は死んだはずで……?」

何かよく解らないが、無事のように安心したよ。うん。

「ふうー、私は約束守ったよ？」

「だからパパ……みつくんも約束守ってね？」

「あ、ああ。解った」

約束は守るさ。

今度何処かに連れて行けばいいんだろ？

買い物とか、ファミレスとかに連れて行ってやるよ。

雪姫や明日菜、理子とかと一緒に、な。

男と二人で行くより、女の子がいた方が喜ぶだろうし。

「はっ?!?　って、そうだ！」

大変なのよ！　大変！」

そんな事を考えていると。

突然、大変を連呼しだしたキリナ。

どうしたんだ、と声をかけると俺が恐れていたその言葉を言い放った。

「バスジャックされたのよ！　武偵殺しに」

「何！　本当か？」

キリナの肩を掴んで聞いただと、キリナは武偵殺しと繋がった状態の携帯を取り出してみせた。

通話はそのままで、未だにその端末からは無機質な機械音が聞こえている。

『バスの速度を落とそうとしたり、携帯の電源を切ろうとしたら爆発しやがります』

マジかよ。

悪い夢なら速攻覚めてくれ。

そう思ったその時だった。
俺の携帯が鳴り出した。

画面を見ると、表示には
アリアの名前が出ている。

ああ、ちきしよう！

逃れられないのかよー、俺は。

「もしもし」

仕方なく、諦めの心境で電話に出ると

『ミツル。今どこ？』

今の時刻は8時25分。

とつくに授業は始まっている。

「はあく……何処だと思う？」

『まだ寮にいるとかだったら風穴よ』

「それならアリアに撃たれる方がまだマシだったかもな。

残念ながらハズレだ。バスジャックに遭ってる」

『え、アンタそこにいるの？ ならちようどいいわ。直ぐに行くか

ら私達が着くまで何とかしときなさい』

「いや、何とかって……切りやがった!?？」 どうすりやいいんだ

よお!?？」

アリアは変わらずだな。

武偵殺しの事になると周りが見えなくなる。

まあ、母親の件があるから仕方ないっていうのは解るが……。

「む、女の声が聞こえた。むのー、誰からの電話よ」

「みつくん？ 浮気はダメだよ」

「だー、お前らは少し黙ってろおおお!!?？」

絶叫しながらふと疑問に思う。

アリアは何でバスジャックの事を知っているんだ？

まだ誰にも伝えていないはずなのに。

そう思った俺だが、その疑問はすぐに解決した。

バスの後方。

そこから女子生徒の悲鳴に似た叫び声と、パニックになった学生達

の声が聞こえてきたからだ。

電話を受けていたのはキリナだけじゃない!?!?

複数人に同じ内容の音声を送っていたのか。

武偵殺し。

あの子はやはり狡猾だ。

「爆弾!?!?」「爆発するの!?!?　イヤー!」「死にたくないよー」「け、

警察!?!?　誰か通報しろ!」「武偵だろ!?!?　お前ら何とかしろ

よ!?!?」「お前も武偵だろうが!」

車内はかなりのパニックになっていた。

「くそ、人が多い。これじゃ、車内に仕掛けられていても見つけないことなんて出来ない」

どうしたもんか、と頭を悩ませていた時だった

「ミツル!」

聞きなれた声に振り向くと、そこにはさつきキンジを見捨てていた武藤がいた。

「よお、武藤!　キンジを見捨てた罰が当たったな」

「あ、ああ。ちくしょう……!　なんでオレはこんなバスに乗っちゃ

まったんだ?」

「さあ、な。そんなの俺が聞きてえよ」

「無事に生きて帰れたらキンジに謝ってから……轢いてやる!」

「ただの逆恨みじゃねえか!?!?」

「あれだミツル。あの子」

武藤の視線の先。そこにはメガネを掛けた女の子が立っていた。

「や、ややや八神先輩!　助けてっ」

涙ぐんでいる。この子は見た目からして、中等部の後輩だ。

「どうした、何があった」

理由はわかりきっているが、念の為に聞いておく。

ハズレてくれていると嬉しかったのだが。

「い、いい、いつの間にか私の携帯がすり替わっていたんですっ。そ、

それが喋り出して」

彼女が手にしている携帯電話。

そこから聞こえてくるのは……。

『速度を落とすと　爆発しやがります』

やっぱりか。

コイツは武偵殺しの仕業だな。

おそらくあらかじめ、複数人の携帯をすり替えていたのだろう。

そして、偶然居合わせた俺やキリナが対策を話しあおうとしたのを知って、複数人の携帯を操作した。

そういう事だろう。きつと。

「誰かに知らせたか？」

「あ、はい。教務課にメールを……怖くて。ごめんなさい」

「あ、いや。責めてるわけじゃない」

「減速したらダメって言われたのですけど……連絡については何も言われなかったのだから」

責めるわけないだろう。

むしろ、よくやってくれた。

キリナの音声には連絡をしたら爆発するとあったが、彼女にはそれはなかったようだからな。

「そうか。頑張ったな、後は任せろ」

そう言っただけ俺は彼女の頭を軽く撫でてやった。

「あつ……」と言っただけ頬を染めたが別に嫌がってはいなかったしな。

「むー、私と態度が違い過ぎる。この、むのーが」

「あははは……死刑だね」

何だか周りが騒がしいが……うん。

シリアスな空気が和らいだから結果オーライだな。

うん。

そして俺は直ぐにバスの中に不審物がないか、くまなく探した。

まあ、原作通りなら設置されてるのは車外。それも車体の真下だから意味はないんだけどな。

しばらく探し回ったがやはり車内には何処にもなかった。

「残すは車外か……さて、どうするか」

空を飛んだり浮かんだり出来る魔法を俺は知らない。

雪姫やネギ、フェイトは普通に使っているが、俺はまだ使えない。瞬動術の一種に、『虚空瞬動』と呼ばれるものがあるがあれは空中ジャンプの一種で空を飛ぶ技ではないからな。

俺が地系の魔法を使えば鳶とかを操って爆弾だけをはずす。そんな事も出来たかもしれないが……そんな便利な魔法は使えない。

ワイヤーとか、ロープがあれば車外の真下に潜り込めるのだが。そんな便利な装備や道具はないからな。

無い物ねだりは出来ない。

さて、どうするか。

「どうしたの？」

「実はな……」

ヒカリが声をかけてきたから、どうやって走行中のバスの車体の真下を覗いたらいいかを相談してみた。

すると意外なほど、あっさりと彼女はその問題を解消してしまう。

「それなら私に抱きつけばいいんだよ！」

で、冒頭に至る。

うん、どうしてこうなった？

装填25 バスジャック②

逆さ吊り……というか、ほとんどヒカリに抱きつくような体勢で車体下を見るとそこにはやはり爆発物が固定されていた。

カジンスキーβ型プラスチック爆弾。

俗に言うC4と呼ばれるものだ。

この世界では武偵殺しが使う爆弾として、今やすっかり有名である。

その爆弾が見えるだけでも――炸薬の容積が、3500立

方センチほどのものが固定されていた。

過剰過ぎる量だ。

自動車どころか、電車を吹っ飛ばせるくらいの破壊力を秘めている。

「どうするの?」

俺を抱き抱えて地面スレスレを低空飛行するヒカリが聞いてきた。

どうするのか、そんなの決まっている。

「こんだけの量だ。もし、爆発したら尋常じゃない被害が出る。

……凍らせて使えなくしちゃおう」

普通なら潜り込んで解体を試みる、というのが一般的だろうが。

だが、俺には爆弾の解体経験なんてない。

素人が下手に触れる危険性を考慮したら、考えられる手段は二つ。

知識や経験がある奴の到着を待つか、あるいは解体以外の対処をするか、だ。

幸いな事に俺にはその手段がある。

そう、魔法だ。

炸薬が使いものにならないくらい温度まで冷却させてしまえばいいのだ。

「火属性の魔法をぶつけていっそ爆発させてしまおう、というのも悪くないが場所が場所だしな。

爆発させたら吹っ飛んじまうからまずは冷却させて使いものにならないから取り外す。

その後は海にでもぶん投げて、爆発させる……そんな感じでいこうと思うんだが」

「うん。いいと思う……けどこういうのってお決まりのパターンがあるんじゃない？」

「ん？　何がだ……チツ」

ヒカリの言葉に疑問を持ったその時。

俺達の背後に近づく、自動車のエンジン音が聞こえてきた。

ただの自動車なら問題ない。

だが、その自動車。

無人の真つ赤なルノー・スポール・スパイダー。

その赤いオープンカーの座席には見覚えがありまくるUZIを載せた銃座が付いている。

その銃座が、こつちに狙いを――！

「飛び上がれ――ヒカリッ！」

俺が叫んだ直後、ヒカりは俺を抱き抱えたまま空高く上昇した。

そして、俺達が飛び立った直後、俺達の後を狙うかのように大量の銃弾が放たれた。

バリバリバリッ！

放たれた銃弾はバスの後部窓を破壊した。

バスの中からは悲鳴や怒声が聞こえてきた。

恐らく今の銃撃により、ただでさえ不安定だった学生達は大混乱になっているだろう。

「クソっ、原作よりも襲撃のタイミングが早い！　まだアリアや

キンジがいけないのに、もう仕掛けてくるなんて想定外だ」

「どうする？　邪魔ならみんな、石化させちゃうけど？」

物騒な事を平然と言ってくるヒカリ。

この子には一般的な常識とか、良心とかはないのだろうか？

普段なら宥めつつ、お説教だが。

まあ、今はその力に頼るとしよう。

「そうだな。あまり時間もないし、頼めるか？」

「うん、任せて！」

「じゃあ、まずはバスの真上に移動するよ〜」

「そう言っただけでバスの真上に飛翔したヒカリ。」

「詳細は不明だが、ヒカリは高度な石化呪文を無詠唱で放てるようで、今回はそれを使ってバスに並走するオープンカーを石化させる作戦だ。」

「それじゃ、いくよ〜！」

「っ!?？」

「呪文を放つ為にヒカリが掌をオープンカーに向けたその時だった。」

「一発の銃声に似た音が聞こえて――」

「気が付いた時には遅かった。」

「ヒカリ!?？」

「銃弾はヒカリの翼を打ち抜いて真下の道路に着弾した。」

「そう、俺達は狙撃されたのだ。」

「俺やヒカリに気付かれる事なく、空高く飛翔していたヒカリの翼を打ち抜くくらいの高度から。」

「これは……ダメ……力が失われてい……」

「なっ、おい、ヒカリ！」

「糞、何処だ！」

「あつ、と思った時には……俺は空中に投げ出されていて。」

「銃弾を浴びたヒカリは気を失ったのか、頭から真下に落下している。」

「ヒカリ――――！」

「落下して行く、中。」

「俺に出来る事はヒカリの名前を呼ぶ事しか出来なかった。」

「そして。」

「っ!?？」 上から……」

「空中に投げ出された俺の、さらに上空から無数の銃弾が降り注いだ。」

「上空を見たが雨で視界が悪く見えない。」

「俺はなす術なく、その銃弾を身に喰らい……」。

「がはっ……魔力が……抜けて……」
俺は気を失っていった、のだった……。

「……ここは？」

『気——い——よ——っ——わ。』

ち————。』

目を覚ますと、目の前には心配そうな顔をしたアリアがいた。

アリアは全身をS A TやS W A Tが着るような装備を身につけていて。

俺が目を覚ました事に安心したのか、無線で誰かとやり取りをし始めた。

「……？」

俺が目覚めた事に気付いたのか。キンジが話しかけてきたが騒音の為、何を言っているのか解らない。俺が首を傾げていると側に控えていたレキがインカムを渡してくれた。

俺はそのインカムを装着してみた。

「ここは……ヘリの中？」

俺が寝かされていたのは、ヘリの座席で。

外を見ると大雨が降り注いでいた。

『そうだ。学園島のビルの屋上に倒れていたのをレキが見つけたんだ』

「レキが……？」

キンジの言葉に俺は驚いてしまう。

レキ。

俺達と同じ武偵高の二年で、Sランクに格付けされている狙撃科^{スナイプ}の天才少女。

身長はアリアより、頭半分大きい程度だが腕は確かで外見もショー

トカットの髪型をしていて可愛らしい美少女だが、その無表情の口ポットみたいな性格な為。

付いたあだ名はロボットレキ。

名字は誰も知らない。

原作では名前の漢字表記は蕾姫とされていた。

そんな無表情、無感情なレキが俺を助けてくれた……？

『八神さん……目を覚まされたようで何よりです』

「あ、ああ……悪い。助かった」

『ヒカリさんも無事ですからどうぞ安心してください。』

救護科の電波を傍受したところ、先ほど武偵高の附属病院の方に緊急搬送されたという情報を掴んでいます』

「なっ、病院に?？」

病院に運ばれるほど酷い怪我をした。

……という事だろうか？

『身体の方には深刻な外傷はありませんでした。』

ただ……』

「ただ、何だ？」

『……聞きたいか?』

俺の問いに、レキではなくキンジが尋ねてきた。

「ああ。知りたい、どんな結末であれ巻き込んだのは俺だからな」

『……そう。ならわたしが話すわ。』

ヒカリは失ったわ。

記憶を、ね……』

「なっ……嘘だろ?」

失った?

記憶を……。

『詳しい事は検査してみないと解らないみたいだけど……ヒカリに撃ち込まれていたのはあんた達、超偵を無力化する為の特殊弾。』

今まで見た事もないものだったわ』

『数年前から市場に出ている魔法禁止弾に近い品物です。』

ですが、その構造はこれまで流通したものより複雑で、より高度な技術力で作られてました』

「詳しいな、レキ」

『銃弾を作るのは得意ですから』

あれ？ レキってこんなに喋る奴だったか？

もつと無表情、無感情な奴というイメージがあつたんだが。

『あんた達が見た現場での状況を詳しく知りたいわ』

「まあ、そうだろうな。」

さて。まずは何処から話したものか……」

『……思ったよりも冷静ですね』

「まあな。悔しさや後悔、怒りももちろんあるが……騒いだところでどうにもならないからな。」

時間でも巻き戻せる奴がいるなら、もつと騒いで暴れるけどな。

だけど過ぎちまった事は変えられないからな……」

ゲームとかみたいは何度もやり直しが出来るなら俺だって喚くさ。

「この糞ゲーが！」とか「ふざけんな！」とか言つて八つ当たりとかもしただろう。

だか、今起きているこれは現実で。

怒りや憎しみをぶつける奴はまだ捕まっていないのだ。

武偵殺し。

一連の爆弾事件は確かにあの子の仕業だ。

だが、今回のヒカリや俺を狙って狙撃した犯人は別にいる。

彼女の他にも誰かがアリアを狙っている可能性がある。

それに……武偵殺しの正体を知っているが、俺にはヒカリを襲ったのが彼女とはどうしても思えない。

彼女ならもつと違うやり方で正々堂々、正面から来ると思う。

根拠なんてない。

ただ、ああ見えてプライド高い彼女なら姿を見せてから挑んで来ると思う。

なんせ彼女は証明しないといけないからだ。

自分が如何にアリアより優れているか、を。

そんな彼女が不意打ちを狙って俺達を襲うとはどうしても思えなかった。

『へえ、あんたもそれなりに考えていたのね?』

『その言い方は失礼だぞ!』

「まったく、それよりアリア。」

「バスの方はどうなってる?」

『状況は変わらずよ、今は青海南橋を渡って台場に入ったわ』

「そうか。ヒカリの事も心配だが、キリナも心配だな……」

『キリナ?』

「誰よ、それ!」

「俺の従姉妹だ」

『へー、あんた従姉妹いるのね』

『……』

「そうですか……従姉妹ですか……」

「気のせいだろうか?」

レキの表情が一瞬険しくなったかと思えばすぐにホツとしたかのように見えたのは、

その時だった。

インカムからキンジの声が聞こえてきた。

『警視庁と東京武偵局は動いてないのか?』

『動いてる。でも相手は走るバスよ。それなりの準備が必要だわ』

「アリアの言うとおりだ。少なくともバスの真下に潜れるようにワイヤーやロープはあった方がいい。

それに全身を守る装備もな。

相手はバスだけじゃない。オープンカーや見えない敵もいるからな」

『先にバスに乗り込んでいた光がいる分、情報をよく知る俺達が有利か』

「当然よ。ヤツの電波をつかんで、通報より先に準備を始めたんだもの。」

「光がバスに乗り込んだのは偶然だったけどね」

フン、と鼻を鳴らしたアリアは愛用の二丁拳銃のチェックをしながら言った。

アリアが持つガバメント。

その銀と黒の色が違う拳銃のグリップにはピンク色のカメラが付いている。

そこに浮き彫りで描かれているのはアリアに似た美人の顔だった。
『見えました』

レキの声に、俺達は揃って防弾窓に顔を寄せた。

右側の窓には、台場の街並みや湾岸道路、りんかい線が見える。
だが、この距離からでは車はよく見えない。

『何も見えないぞレキ』

『ホテル日航の前を右折しているバスです。窓に武偵高の生徒が見えています』

キンジの言葉に無表情なまま、レキは答える。

『よ、よく分かるわね。あんた視力いくつよ』

『左右ともに6・0です』

サラツと超人的な数字を言うレキ。

視力6・0って……マサイ族とかと同じくらいあるって事だよな？

レキの発言に思わず顔を見合わせてしまう俺達。

するとヘリは降下を始めて、レキが言った辺りを低空飛行するとそこには。

『本当にいやがった?!? まあ、いるとは思っていたが……規格

外な奴だな。レキも……』

キンジといい、アリアといい、レキといい、ネギといい……超人が多すぎる。

周りはみんな超人だ！ 超人のバーゲンセールでも開く気か?!?

そんな内心で一人突っ込みをしていると。

『空中からバスの屋上に移るわよ。あたしはバスの外側をチェックする。キンジは車内で状況を確認、連絡して。レキはヘリでバスを追跡しながら待機。』

「ミツルはあたしと来なさい！」

『内側……って。もし中に犯人がいたら人質が危ないぞ』

『あんた、話聞いてたの？ 中に犯人はいないわ。』

『そもそも「武偵殺し」なら、車内には入らないわ』

『そもそも「武偵殺し」じゃないかもしれないだろ！』

『違ったら何とかしなさいよ。あんたなら、どうにかできるハズだわ』
「まあ、俺もサポートするし大丈夫だろう。」

あ、そうだキンジ。何があってもヘルメットは外すなよ？」

俺がそう言くと、キンジは……。

首を傾げながらも頷いた。

強襲用パラシュートを使って俺達はバスの屋根に着地した。キンジは着地というより転がった、という表現の方が正しいが……。

「風よー！」
ウエント

俺は風魔法の一種。風を身に纏って体を保護することができる呪文を唱えた。

ふわりと着地した俺は先ず、辺りを見回す。

バスの周りには車は一台も走っていない。

先ほど俺を銃撃してきた真つ赤なルノー・スポール・スパイダーも今は見えない。

今はその姿は見えないが油断は出来ない。

爆弾を解体しようとしたらまた襲ってくるだろう。きっと。

「ちよつと本気でやんなさいよ」

「本気だつて……これでも、今は……！」

「これから、本気を出すんだよな？」

アリアとキンジの声を聴きながら俺はワイヤーを使って、リベリングの要領でバスの背面に体を落としていく。

アリアと共にバスの背面にきた俺は爆弾がある位置をアリアに教える。

「なるほど。確かにあんたの言った通りね、3500立方センチはあるわ。」

車どころか電車が吹っ飛ぶ過剰な量ね。

一応、キンジに知らせとくわ。あんたはキンジのところに行ってサポートして！」

アリアにそう言われた俺はひとまずバスの屋根に戻った。

そして、呪文の詠唱を始めた。

「来れ雷ウエニアント・スピリトウスアエリアレス・フルグリエンテース精風フルグリエンテースの精フルグリエンテース!!

雷クム・フルグラテイオーネを纏フルグいて吹フルグきすさフルグべ

アウストリーナ南洋の嵐

ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンテース
雷フルグの暴風フルグ!!!

スタグネット
固定!!!

コンプレクシオー
掌握

スプレメントウム・プロ
魔力充填

アルマテイオーネ
術式兵装

アギリタース・フルミニス
疾風迅雷!!!

呪文の詠唱が終わったその時だった。

バスの後方にドン！ という衝撃が走った。

来やがった！

後ろを振り返ると、そこにはやはり例のオープンカーがいて。

さらに上空からは……。

「っ!? これは、魔法の槍？」

無数の魔法の槍が降り注いだ。

形状からして電撃系の『雷の投擲』だ。

ただし、俺が使うものより威力も射程もあつて色も黒い。

バスに当たりそうな槍を魔法の矢で逸らしながら上を見上げるが

そこは雨雲に覆われた視界の悪い空で。

襲撃者の姿はおろか、飛行機の姿すら見えない。

「雲より高い位置からの魔法の行使だど!?」

どんな化け物だよ！」

俺が叫んだその時だった。

バスの後方にあるオープンカーから銃弾がばら撒かれて。

ぐらっ。

バスが妙な揺れ方をした。

「まさか……この揺れは？」

バスは左車線に大きくはみ出していく。

避けた対向車がガードレールに接触事故を起こし、火花を散らした。

大混乱だ！

恐らく原作通りに運転手が負傷してしまったのだろう。

徐々に速度が落ちていたバスだが、やがて速度を上げ

バスは右側に急旋回して有明コロシアムの角を大きく曲がった。

曲がりきったところで俺はバスを後続してくるオープンカーに向けて火属性の魔法の矢を無詠唱で放つ。

オープンカーは左右に大きく揺れてガードレールに接触して止まった。

「やったか？」

フラグにならない事を祈りつつ、そう呟いた。

豪雨の中、バスは高速でレインボーブリッジに入っていく。

都心は目と鼻の先だ。

ブリッジの入り口付近の急カーブでバスは一瞬片輪走行になったが、何とか曲がりきれた。

猛スピードで入ったレインボーブリッジは車は一台もなかった。

警視庁が手を回したのか、道路が封鎖されている。

レインボーブリッジを止めるには手続きに時間がかかるはずなんだが。

東京、神奈川、千葉……その他もろもろの機関に断りを入れられないといけないからな。

そんな事を思っていた時だった。

「おいアリア、大丈夫か！」

キンジが屋上に上がってきた。

俺の忠告を聞かずにノーヘルでな。

「キンジ！」

ワイヤーを伝って上がってきたアリアと俺の声が重なった。

「アリア! ヘルメットをどうした!」

「さつき、ルノーに衝突された時にブチ割れたのよ! あんたこそどうしたの!」

「運転手が負傷して……いま、武藤にメットを貸して「馬鹿野郎!」……光!?!」

「何でわかんねえんだ! 危機管理無さ過ぎだ!

そんな状態で上がってくるなんて……死にてえのか!」

「そうよ。危ないわ! どうして無防備に出てきたの! なん
でそんな初歩的な判断も出来ないのよ!

すぐに車内に隠れ——後ろっ! 伏せなさいよ!

何やってんのバカっ!」

アリアは突然二丁拳銃を抜き、真っ青になってキンジに突進した。
俺は瞬動を使い、アリアの前に出る!

キンジの背後、アリアの正面には黒いルノー・スパイダーがバスの
後方に走っていて。

そのルノーの銃座にあるUZIが銃弾をぶつ放すのが見えた。

俺は咄嗟に魔法障壁を展開して防ごうとしたが……。

「がはっ……?」

障壁を貫通した銃弾は俺の腹に被弾した。

魔法障壁をまるで発砲スチロールのように軽々と貫通するだど!!
?

「ミツル!?!」

「バカっ! 危ない、キンジ!」

キンジの声と焦ったアリアの声が聞こえ。

そして驚く事にこの場にはいないはずのヤツの声まで聞こえてきた。

「銃声!?! ちよつと大丈夫なの、むのー?

って、アンタそのお腹!?!」

「バカっ、何で……お前まで来たんだよ、キリナ」

バスの窓から上がって来たのかキリナは息を乱しながら近寄って
きた。

その頭にはヘルメットはなく、唯一の救いは防弾制服を着ている事だけだ。

俺は腹部を負傷したが防弾制服を着ていたおかげか、重症ではない。

バットで殴られたような強い衝撃はあるが。

「危ねえだろが！ 何でお前やキンジは俺の言うことを聞かねえんだ！」

死にてえのか！」

「だって……心配で……あつ、危ない」

「っはっ？」

キラナが動いたと思ったその時。

バスの周りは3台のオープンに囲まれている。

その内の一台、ルノーが放った銃弾は俺に狙いを付けられていて。

あつ、と思った時には既に遅く。

俺を庇うよに前に出たキラナはその身を銃弾に貫かれた。

「キ、キラナあああああ

！」

俺は魔法の矢を放ち、キラナを撃ったルノーを破壊したが、残っていた別のオープンカーに狙われ。

そのオープンカーに搭載されているUZIによって、銃弾を身体に浴びてしまった。

「……魔力が……クソっ」

放たれた銃弾が魔法禁止弾だったのか。

身体中から魔力が抜けていき……。

俺はキラナの隣に倒れてしまった。

俺が倒れたのを見たキンジが駆け寄ろうとして、アリアにつき飛ばされた。

銃声が響き渡り、アリアが倒れてキンジの叫び声が聞こえて。

そして。

俺はキラナの囁き声を聞いた。

「手……握……」

「……手？」

握ったところで何の……」

何の意味がある。

そう思っていたが……。

「……早く」

キリナの切迫詰まったような声を聞いた俺は、薄れ行く意識の中で必死で手を動かしてキリナの手を握ようとした。

その瞬間。

複数の銃声が聞こえ。

空を飛んでいたヘリが墜落するのが見えて。

そして。

俺達を乗せた武偵高行きバスが轟音を上げて爆発するのを俺は感じていた。

焼けるように熱い暑さをその身に感じて……。

必死に伸ばした手がキリナの手を握った感触を感じながら。

そう、俺は短い二度目の人生に幕が降りるのを確かに感じたのだ。

装填26

リセットOKな人生？

不意に目を覚ました場所は、見覚えのある草原だった。

某CMに出てくるようなこの木なんの木？不思議な木々的な大きな木の真下で、木の幹を背に俺の体は寄りかかるようにしていた。

土や草の匂いがほのかに鼻をくすぐり、木の枝と葉の間から差しお日様の光が薄く眩しく感じる。

見渡す限りの青空と草と土と、小さな石ころしかない空間。

ポカポカと俺の体を照らす日の光は心地よく、起き上がりたい気持ちを削っていく。

ああ、二度寝したい。

その衝動を抑えることなんて……出来そうになかった。

だから。

ここがどこかとか。

今はいつなのかとか。

——自分が誰なのか、とか。

そんな些細な問題はどうでもよかった。

唯一気になるとすれば……。

「お目覚めですか？」

俺と同じ大木の根元に腰をかけて俺の横に座る、杖と本を手に持つて微笑む眼鏡をかけた綺麗な少女のことだけで……。

見覚えがあるような、ないような、曖昧な記憶。

そもそも、自分の名前すら思い出せない自分が、彼女を覚えているはずもなく。

だけど不思議な事に彼女は自分の知る誰かに似ているような気がして。

よく見るとやっぱり知らないような気もする。

——よく知っている人が、いつもと違う服で笑っている、違和感と同時にドキドキするみたいな。

そんな感じの気持ちだ。

ただ、唯一解るのは。

その少女は俺の知る少女より優しいという事。
何故なのかは解らないが、俺の知る彼女はもつとドSのような……
？

なんとなくそんな気がしてしまった。

「まだ眠そうですね」

クスクスと笑うその仕草は上品で。

口元に添えた手やその指の白さすらも色っぽく見える。

この子となら、ずっと一緒にいられるような気がする。

この子となら――。

「駄目ですよ？」

真剣な口調ではつきりと「駄目です」と言われると何も言えなくなる。
る。

「大丈夫です！」

貴方にはちゃんと帰る場所がありますから」

丁寧な口調で「大丈夫」と言われると、なんとなく大丈夫な気がしてきた。

まるで誘導されているような気分になりながらも、逆にそれが心地よく思えた。

「貴方なら大丈夫！　　貴方なら……」

どうかその身に宿る力である人とヒカリを助けてください。

また、会いましょう……」

その言葉に促されるかのように、強い眠気に誘われて。

彼女の言葉が聞こえた。

「次会う時には………しましようにね？」

彼女が何を言ったのかは解らない。

だが。

――その誘惑は、とても甘美に……心に残った。

「……ないー!」

誰、だ?

「目を……なさいー!」

俺を呼ぶのは一体誰なんだ?

「ほら、さっさと目を覚ましなさいよ!　このむのー!」

ガンっ、と頭を叩かれて目を覚ますとそこは以前、金次と共に理子と会った温室のバラ園で。

俺はバラが咲き乱れる花壇の中に大の字になって倒れていた。

「こっ、は……う?」

温室の中というのは解る。

起き上がり周りを見渡しても俺が倒れているのはバラ園の一部だ。

今いる場所が温室というのは解る。

だが、問題はそこじゃない。

「え、あれ?　バスは?　爆弾は?　俺、撃たれたはずじゃ……?」

何で俺はバラ園なんかで倒れているんだ?

俺達が乗ったバスが最後に向かったのはレインボーブリッジでお

台場だ。

女子寮の側にある温室じゃない。

爆風で吹っ飛ばされたとしても飛ばされて辿りつけるような場所

じゃない。

どうなっているんだ!?!?

混乱しながらも俺は立ち上がってから腕時計を見てみた。

時刻は午前7時を指している。

バスはまだ来てない時間だ。

「……あ、そうか。」

夢かー。夢を見てたんだな、疲れてんなー俺」

よくよく考えてみれば、あんな事原作ではなかったし。

単なる夢を見た……んだよな?　きつと。

「落ち着きなさい。残念ながらアレは夢じゃないわ。

これから起きる現実よ!」

声をした方を振り向くと先ほど俺をぶつ叩いた張本人であるキリナがまるで残念な人を見るような眼で俺を見つめていた。

「はあ？　現実……何言ってるんだ？」

あんなのがこれから起きる出来事だつて？

寝言は寝ていえ、と思いつつ、キリナの顔を見ると意外にも彼女は真剣な眼差しをしていた。

「まあ、そう思われても仕方ないわね。

でもこれは現実よ。現実に起きるわ」

「……おいおい、キリナ。いくら予知能力者として超能力捜査研究科でランク付けされているからとはいえ、お前のランクは……」

「Eよ」

そう、キリナはEランク武偵だ。

変わり者が多い武偵高の中でも異端扱いされる超研の中でさえも、落ちこぼれ扱いされるほどの、そんな力しかキリナは持っていない。

「ええ、そうよ。私はEランク武偵よ。

でも誰も私の能力を知らないわ」

そうだ。キリナは予知能力を使えるとされているがそれがどんな能力なのかは誰も知らない。

予知とはそもそも不確実なものである為、正確な測定が困難なものだ。

しかし、古代から現代まで様々なところで予知能力者は活躍してきた。

身近な人だと白雪なんかがそうだ。

彼女、というより彼女の家。星伽は厳しい掟の元、才能のある巫女を育てる。

白雪などが使う予知能力には予知や予兆を夢という形で知る『託』とタロットカードなどで占う『占』があり確か、『託』は十代前半の巫女が使う不完全な占いだつた……と記憶している。

キリナの能力も『託』並みに不完全なものなかもしれないな。

「キリナの能力が予知能力というのはお前が武偵高に来た時に聞いていたが、それがどんな力を秘めているのかは確かに知らないな。だけ

どそれがどんな能力であれ、仮にあの夢の出来事が現実で起きる事だったとしても止めようがないだろう?」

「なんたって相手は姿さえ見せずに俺やヒカリを倒す化け物だ。」

「これがゲームならセーブポイントでセーブして勝てるまで何度もやり直す、なんて事も可能だが残念ながら現実にはゲームじゃない。」

「死んだら普通、終わりなんだ……。」

「まあ、普通はそうよね」

「だろ? だったら「でも私にはできるのよ!」は?」

「私にはできるのよ! 私なら『なかったこと』にできるの」

「は、はあ☒」

「キリナの言っている意味がよく解らない。」

「いくら予知能力を持つていようと、止められなければ意味がないという事も解らないだろうか。」

「大方、アンタは私の能力をただの予知能力とか思っているのでしょうけどそれは違うわ。」

「私の能力はただの予知能力じゃない。」

「ただちよつと時間を巻き戻せるだけよ」

「も、戻せる……時間を?」

「困惑する俺。そんな俺をあざ笑うかのように……。」

「そうよ。それが私の能力。俗にいう死に戻り。」

『リセット&リスタート
リセットOKな人生』よ!」

「は、はあ!?!? ちよつ、ちよつと待て!」

『リセットOKな人生』? 死に戻り?

「……時間を戻せるだつて!?!?」

「キリナがさらつと爆弾発言した。」

「SF?!? タイムマシンかよ?!?」タイムマシンじゃないわよ」す

「げえ!!? キリナ、お前すげえよ!!?」そ、そうかしら?」ああ、すげえよ!」

『死に戻り』なんてそんな事も魔法で出来るのか?!?」

「魔法じゃないわ。魔法は学べば誰でも使えるもの。これは私だけの能力よ。固有ユニークスキル能力と呼ばれるものよ」

「魔法じゃない?!?」 魔法じゃないなら科学か?

カシオペアとかを持つてるのか? 装備科^{アムド}の超先輩や葉加瀬

先輩とかと知り合いなのか?」

「科学じゃないわよ。固有能力よ!」 カシオペアって何?

それとまたさらつと女の名前出したわね、いつペン死になさい」

ただ普通に疑問に思った事を口にしたのに、頬を膨らませるキリナ。

今の発言に怒らせる要素あったか?

「まあ、突然言われても普通は信じられないわよね。

いいわ、これを見なさい」

バラ園の片隅をキリナが指を指す。

キリナが指す指先の方向には小さな砂山があった。

小さな子供が作るような簡素な砂山。

ただ、普通の砂山とは違い山の天辺に木の棒が刺さっていて木の先端には小さな火が灯っている。

さらに砂山の麓にはアルファベットで M FS という文字が刻まれている。

「これがセーブポイント。この火が灯っている間、私の能力は有効なのよ」

「こんな砂山がセーブ……ポイント?」

「ええ、そうよ。ルールは簡単。

1、セーブポイント(砂山)を作る。

2、死ぬと自動的にその地点に戻る。

それだけよ」

無い胸を一生懸命張って告げるキリナ。

うん、張れてねえ。

「本当は誰にも言うつもりはなかったんだけど今回はバスジャックの他に、正体不明な敵に襲われるなんて今までのやり直しにはなかった不測な出来事が起きてるから仕方ないわね。

説明を続けるわよ。今言った通り私は死ぬとセーブポイントに戻る。

ここからが大事なことだけどこのセーブポイントを作る時に『戻り方』を設定出来るのよ。

戻り方にはいくつか種類みたいなものがあって。

『M』^{メモリー}を入れると私の記憶を保持したままセーブポイントに戻る、とか。

『B』^{バインド}なら手に触れている人の『精神』と一緒に連れ帰る、とか。

『F』^{フレンド}なら手に触れた人を、『身体ごと』一緒に連れ帰るとか。

『S』^{スピリット}は魂の同一性を保持するとかがあるのよ。

『S』^{スピリット}は必ず入れないといけないし、『M』^{メモリー}は毎回入れないと未来で体験した出来事を忘れちゃうからまあ、おまじないみたいなものね。

今回は身体ごと連れ帰る『F』^{フレンド}を使ったわ」

「か、身体ごと……あれ？」

でも俺の身体は爆発で吹き飛んだはずじゃ……？」

「そうなんだけどね。私も失敗したと思ったんだけど……何故だかア
ンタの身体、再生してるのよ。

人間辞めてるよね、アンタ」

グサリ。

キリナの人間辞めてる発言に俺のライフは削られた。

これからは人間を辞めてる奴（キンジとか）を見かけたら優しくでき
きそうな気がする。

というか、キンジよ。

早く人間辞めてくれ！

そして俺より目立ってくれ！

キンジが目立てば俺は平和に暮らせる。

多分。

「まあ、アンタは魔法使いだし。再生や治癒の魔法で治したとかでも
不思議じゃない……かな？」

魔法についてはよくわかんないけど。

超能力捜査研究科のSランクで、あの『闇の福音』^{ダークエヴァンジェリン}の弟子でもあるア
ンタならまあ、それくらい出来てもおかしくはないわね」

どうやらキリナの中で、俺の身体が再生したのは俺が高位の魔法使

いである雪姫の弟子だから、という理由で納得したらしい。雪姫は吸血鬼だから治癒魔法は苦手なだけだな。

「うん、そうよねー。」

「そんなに違うわ」

「ああ、まあそれでいいや……うん」

説明したいが自分でもよくわかんないや。

だから俺の身体が再生したのは雪姫にそういった魔法を教わっていたから、という理由にしておく。

「それよりこれからどうする？」

キリナ的能力でバスジャックが起きる前の過去に戻れたのは解った。

腕時計を見ると午前7時15分を指している。

バスが男子寮前に着くまであと30分は猶予がある。

バスジャックが起きたのは8時20分くらいだから……まだあと一時間くらいは余裕がある。

一時間で対策を立てられればいいのだが……。

「前回の二の舞は避けたい。相手は雲の上から魔法を放てる奴だから……魔法に対処できて空中戦を想定した戦いが出来る人の力を借りたいな。」

刹那さんや雪姫に連絡をしてもいいか？」

刹那さんはともかく、雪姫は来てくれないと思うが。

立场上、教務課は介入しないはずだからな。

「うん、事件を解決するには人手がいるものね。」

私も装備科の先輩達に連絡はしてみるわ。

「だけどバスジャック犯の方はどうする？」

「そっちはアリア達に任せていいと思う。」

本来ならアリアやレキがいれば解決出来る事件だからな。

無理に介入しようとする前回みたいにイレギュラーが起きる可能性がある。

対処出来なさそうなら介入するが、基本的には無干渉でいこう」

前回は偶然バスに居合わせただけで襲われたからな。

二の舞を避けるなら最初から接触しなければいい。

おそらく、俺達が余計な介入をしなければ武偵殺しも予定外な行動は取らないだろう。

「バスにワザと乗り遅れるって事？」

「ああ、そうだ。理由は解らないがキンジの腕時計は壊れてないはずなのにアイツは乗り遅れてたからな。主人公補正なのか、原作通りに進めようとする世界の意思なのかは解らないが『流れ』を壊そうとしたらまた襲われるかもしれないからな。襲撃者イレギュラーによって。

世界の『修正力』とかで……な」

「うーん……その可能性もないとはいえないわね」

「多分、俺達が下手に介入しなければ解決出来るはずなんだ。

怪我人は出るかもしれないけどな」

頭によぎるのは頭部を撃たれるアリアの姿。

助けてやりたい。

何とかしたい。

そう思う。

だけど手を出してしまえばその矛先は自分や親しい人に向けられるかもしれない。

ヒカリが撃たれて解った。

俺は家族が傷付けられるのは耐えられない。

ヒカリを、大切な家族を失うかもしれない……あんな恐怖はもう体験したくない。

だから……俺は見捨てる。

アリアが撃たれるのを解った上で、助けないという選択肢を選ぶ。

「だけど例の襲撃者はどうするの？」

アンタが言う『修正力』とかがその襲撃者イレギュラーを指しているのならハッキリ言っただけ今の神崎先輩や遠山先輩には荷が重いのと思うわよ？アンタが何もしなくてもその力の矛先が先輩達に向かわないとはいえないし……それとも策があるの？」

「ああ、策なら……ある」

正直、ないがな。

時間がもつとあれば策を考えられるのだが……そんな時間はないからな。

せめてあと一日あれば何かしらの策を講じられたのかもしれないが。

ないものはない。

だがないとはいえない。

嘘も方便ではないが、ここは士気を上げる為にもあると言っておく。

「自身があるようね。」

確かに魔法バカなアンタなら如何にか出来るかもしれないわね。

それにやられっ放しっていうのも嫌だし……」

「だろう？　　だったら俺達が取る行動は一つ。」

目には目を。歯には歯を。イレギュラーにはイレギュラーを、だ！」

武偵ならではの返しでそう言った俺に……

「なるほど……イレギュラー（あんた）ね？」

どうなるか解らないけど、全てあんたに託すから頑張りなさいよ。むのー!!？」

キリナは俺が仲間を見捨てる覚悟を決めているとは知らずに言う。

笑顔で、グーに握った親指を立てて。

信頼した眼差しで。

「ああ、任せろ！」

俺は罪悪感に苛まれながらも出来るだけ笑顔で叫んだ。

大丈夫だ！

きつと大丈夫だ！

そうさ。

きつと……イレギュラー（雪姫とか刹那さん）が何とかしてくれるわ。

「IFルート」

IFもし金次が猫探しではなく遺跡調査に行つたら①

光の奴はどこ行つたんだ？

昼休みに俺は昼休みに入ったと同時に消えた友人の事を考えながら専門科目を受講するために探偵科棟にやってきた。

今日は依頼を受けるか。

侵略者は今頃強襲科で戦闘訓練してるはずだしな。

アリア対策として校外に出る為に探偵科の依頼板を見て簡単な依頼を探していく。

Eランクの俺でも受けられる楽な依頼ないかなー。

単位が貰えるならなんでもいい。

俺は来年からは一般高に通つて『一般人』になる。

その目標の為に、まずは平穏な日常を取り戻さないと。

単位や報酬、仕事内容が書かれた依頼書を見ていくと俺にぴったりな依頼が二つあった。

一つは猫探し、もう一つは古代遺跡調査の手伝い。

猫探しは青海地区、古代遺跡調査は東大に行かないといけない。

どちらも報酬1万、0.1単位分の仕事だ。

どちらにしようか迷っていると俺の隣にいた少女に先を越された。

「あっ…」

「何です？」

その顔には見覚えがある。

確か同じ探偵科の2年綾瀬夕映だ。

俺より1歳歳上なんだが：授業サボりまくって留年したとか。

実は帰国子女で異国の超能力者養成教育機関に留学していたとか。

そんな風に噂されてる奴だ。

「いや、それ。俺が受けようかなと思つた依頼…それは失礼。残念です。」

久しぶりに非日常の世界に行けると思ったのですがここの東大の助教授がまた面白い人なのです。

「はあー浦島先生の講義に参加したいです……悪いがそれは俺に譲ってくれ。先に見てたのは俺の方だからな」

「悪いと思いつつ綾瀬から依頼書を取りあげる。」

「どうしても駄目です?」

「ああ。依頼が受けられるのなら内容はどれでもいい……けどなんかこれは気になるからな」

自分でもわからないがこの依頼はやりたいと思う。

「ふむ。それはとても残念です。」

ならせめて写真だけでも撮ってきて下さい」

そう言つて綾瀬は俺にカメラを渡してきた。

それは随分と古いカメラだった。

ライ……なんて書いてあるんだ?

「……わかった」

「お願いしますよ?」

そう言つて依頼板クエストボードからもう一枚の依頼猫探しが書かれている紙を取り制服のポケットに入れた綾瀬。

空いてるもう片方の手で制服のポケットから缶ジュースを取り出し飲み始めた。

ゴクゴクと美味そうに飲んでるよ。桃まんコーラと書かれている物を。

「ふう。やはり武偵高の飲み物もなかなかいけますね。」

麻帆良やアリアドネーとはまた違った変わり種がありますしこれは趣味の飲み物探しが楽しみです」

ぜ、全部飲み干しやがった。

そんなに美味しいのか?

桃まんコーラ……。

「では、私はそろそろ行くです。お名前は何でしたっけ?」

「同じ探偵科2年の遠山金次だ。」

綾瀬は年上だし先輩呼びの方がいいか?」

「別に普通に綾瀬でいいです。

私は遠山さんと呼ぶです」

「じゃあ…綾瀬って呼ばせてもらうな」

「はいです。ではまた…」

綾瀬は依頼書を受け取ると依頼の詳細確認をしに教務科マスターズに向かう為探偵科棟の出入口に歩いて行った。

「変わった奴だな」

探偵科の綾瀬との出会い。

俺は思いもなかった。

この時の出会いによって俺の人生が『普通』から離れた非日常的なファンタジー世界で過ごすことになるなんてな。

探偵科で依頼を受けた俺は探偵科の専門棟を出ると…

「キーンジ」

探偵科の専門棟の前で待ち伏せしていたアリアに、俺は膝から崩れ落ちる。

ガーンだな…出鼻をくじかれた。

「なんで…お前がここにいるんだよ…!」

「あんたがここににいるからよ」

「答えになっていないだろ。強襲科の授業、サボってもいいのかよ」

「あたしはもう卒業できるだけの単位を揃えてるもんね」

アツカンベー。紅い瞳をむいてベロを出したアリアに、気が遠くなる。

美少女が校舎を出るのを待っていてくれた。

全国の男子諸君の憧れだろう。

だけどな、その美少女が二丁拳銃や二刀の小太刀で襲いかかってくる凶暴娘でも嬉しいか？

俺は嫌だ!

「で、あんた普段どんな依頼を受けてるのよ」

「お前に関係ないだろ。Eランクにお似合いの、簡単な依頼だよ。帰れっ」

入試の際にSランクに認定されたがアレは白雪を助けた際にヒ

スったせいになつたんだ。

普段の俺にはEランクがお似合いだ。

「あんた、いまEランクなの?」

「そうだ。1年の3学期の期末試験を受けなかったからな。」

「ランクなんか俺にはもうどうでもいいんだよ」

「まあ、ランク付けなんか確かにどうでもいいけど。それより、今日受けた依頼クエストを教えなさいよ」

「お前なんかに教える義務はない」

「風穴あけられたいの?」

「イラツとした表情のエリアが銃に手をかける。」

「今日は……遺跡調査だ」

「遺跡調査?」

「東大の研究室に行つて詳しい内容を聞くんだよ。報酬は1万。0.1単位分の依頼だ。」

「本当なら光も誘おうと思つてたんだが……連絡がとれないから一人で行くんだ」

「光を誘おうとしてたの?」

「ああ。あいつはこういう調査系も得意だからな。」

「まるで最初からわかつていたみたいなき感じで言うんだ。今のところあいつの的中率は100%だ!」

「やっぱりあいつにも何かあるのね!」

「私も行くわ」

「ついてくんな」

「いいから、あんたの武偵活動を見せなさい」

「断る。ついてくんな」

「そんなにあたしがキライ?」

「大っきライだ。ついてくんな」

「エリアは一瞬傷ついたような顔をし顔を伏せ、すぐに顔を上げ目を吊り上げた。」

「もっぺん『ついてくんな』って言ったら風穴」

「少し言い過ぎたかと思つたがエリアが普段通りに振舞つていたの」

で俺は気にするのをやめた。

仕方なくアリアを引き連れたままモノレールで浜松町まで移動した。

東大の門の前に着くと――

「大きな門ね。ここが日本の最高学府『東京大学』なのね！」

で、遺跡調査っていうけど、あんたどういう推理で探すのよ」

アリアが聞いてきた。

「別に。研究者や教授の指示に従うだけだ。まずは研究室に向かう。光なら現場に着いたらありそうな場所にすぐに向かうけどな。ていうか……お前こそ何か案でも出せ。俺に聞くぐらいなら、何かあるんだろ」

そうアリアに聞き返すとアリアは首を横に降った。

「ないわ。推理はニガテよ。一番の特徴が、遺伝しなかつたのよねえ」
つまりなそうに言うアリアは、形のいいおでこの下から俺を上目遣いに見た。

「ていうか、おなかすいた」

「さつき昼休みだったろ。メシは食わなかつたのかよ」

「(桃まん) 食べたけどへったのっ」

燃費の悪い奴だな。というかこいつが食ってるのもしかして全食桃まんじゃねえか？

そんな疑問を持った俺はアリアに聞いてみた。

「お前、普段何を食べてんだよ？」

「もちろん桃まんよ！」

だ、駄目だコイツ。早くなんとかしないと。

桃まん中毒者の行く末はアリアコイツみたいになるんだな。

ヤバイ、ヤバイぞ。桃まん。

桃まんに秘められた恐ろしき副作用カに驚愕していると……

アリアが突然唐突に言ってきた。

「なんかおごって」

「いきなり足を引く張るのかよ」

研究室にもついていないにもかかわらずもうアリア様は動けない

ようだ。

でも、まあ。今日は依頼を選ぶのに時間がかかったせいで俺も昼飯は抜いたしな。

しょうがねえ…おごってやるか。

「学食でいいか？」

アリアにそう言っていた。

東大にはロブスターミソ煮定食とか東大饅頭とかがあるって本当だろうか？

…後で確認しよう。

学食に着き、アリアの分まで注文してアリアの元に向かうと。

何をしてんだ？

よく見るとアリアは近くの席に座る女子大生と自分の身体を交互に見ている。

近くの席に座る女子大生さんはかなり美人だ。

眼鏡をかけていて真面目そうな感じだ。

どことなく雰囲気的にカナに似ている。

…ぷっ。

アリアの奴、女子大生にあつてアリアにない部分を凝視していやがる。

何度確認してもアリア、お前はひんにゆるーだ。

ああいう体型に憧れてるんだな。

寄りも上がりもしない小学生体型のくせに。

「おい」

「あ」

振り返ったアリアは俺が含み笑いをしていたのに気付いたらしい。ぶわあああと真っ赤に顔を染めると両手をブンブン降った。

「ち、ちがうの！あ、あたしはスレンダーなの！これはスレンダーっていうの！」

どっからどう見ても小学生だろ。

と言いかけたが言ったら風穴なのでやめた。

「あつちの席にしようぜ」

女子大生が座る席から離れた席を指していった。

アリアは後ろについてきた。なんだか怒ってるような、何かを言いたいようなそんな顔をしている。

空いてた席に座るとアリアの奴も隣に座った。

注文のハンバーグ定食&ドリンクにコーラ（アリアは桃まん井&コーラ）を食べながらアリアに言っておいた。

「アリア^はここの学食では離れていた方がいいぞ？」

「はんへよ」

「辺りを見りゃわかるだろ」

俺は飲みさしのコーラを置いて、視線で周囲を指す。

この学食は学生が多いだけあって平日の午後なのに周りはカップルばかりだ。

ちゃんと勉強してるのか東大生さんよ。

「あ……」

向かいに座っているカップルがくつついたのを見て、アリアはもまんをくわえたまま一瞬硬直した。

俺とカップルを何度も見て真っ赤になった。

コイツ、赤面癖があるみたいだな。

「……う。うー」

ウブなんだな。

「ほらな。もう帰った方がいいぞアリア。

東大の^中こんな所を2人で歩いたら、またキンジとアリアはつきあってるとか言われちまうだろ。俺は目立ちたくないんだ。お前だつて好きな男とかいたら誤解されちまうぞ」

「す、好きな男なんて！」

アニメ声を裏返した。

「い、い、いないっ！あたしは、れ、恋愛なんて———そんな時間のムダ、どうでもいい！ホンットに、どうでもいい！」

過剰反応し過ぎだ。

アリアの弱点発見だな。

「でも、友達とかにへんな誤解されたくないだろ」

「友達なんて……いないし、いらぬ。言いたい奴には言わせればいいのよ。他人の言うことなんてどうでもいい」
じゅるるるる。

そう言つてコーラを飲みだした。

「他人なんてどうでもいい、つてのにはまあ賛成だがな。一言、言いたいことがある」

「なによ。けぶ」

「それは俺のコーラだ」

アリアはコーラを吹き出した。

「このヘンタイ！」

いきなりなぐつて椅子から吹っ飛ばしやがった。

痛えな。この馬鹿力やろう。

「理不尽だろ!?」

「うっさい。コーラあたしの分まで零しちゃたじやない！」

買つてきなさい！今すぐ」

理不尽すぎだろ。

「そっういや売店で桃まんコーラとかも売つてたな……」

そう言つとアリアは……。

「桃まん!?」

桃まんという文字に目を輝かしていた。

桃まん……マジ恐ろしい奴……。

その後。

学生や職員に聞いて校内をさ迷いながら歩き周った。

なんとか研究室を見つけ出し中に入ると白衣を着た青年が俺達の姿に気づいて声をかけてきた。

研究室の中には大量の埴輪や土器、土偶などが乱雑に置かれていた。

中には割れたり欠けたりした物もあり、足を踏み入れるのにはかなり注意が必要だった。

「やあ。よく来たね！」

僕はここで助教授をしている浦島景太郎と言います。
よろしくー！」

装填27

デスメガネ参戦？

「それで具体的にはどうすんだ？」

雪姫や刹那先輩にメールを終えた俺は、温室にあった肥料袋を敷物代わりにして地面に座りキリナに尋ねた。

「ふふーん、まあ、ちよつと待ってなさいよ」

考えがあるのか、余裕の表情で笑うキリナ。

その顔はとても頼もしいのだが……何故だろう。

果てしなく嫌な予感がする。

「送信完了、と……ふふーん。これで準備は整ったわ！

アンタの方はどう？」

携帯を操作しながら聞いてきたキリナ。俺はそんなキリナに溜息を吐きながら答えた。

「……こつちも連絡は済んだ。だけど刹那先輩はともかく、雪姫は来ないと思うぜ？」

基本、マスターズ教務科は不干涉だからな。

まだ何も解らない一年や中学生ならともかく、二年生になれば自己解決できると判断されるだろうし。

と、俺がそんな事を考えていたその時。

狙っていたかのように、俺の携帯が鳴り出した。

着信表示を見ると、相手は雪姫だ。

携帯をハンズフリーモードにして会話を始めた。

「もしもし！　雪姫か、実は……」

俺は雪姫に今までに起きた状況を説明した。

朝、バスジャック事件に巻き込まれた事。

防ごうとして、武偵殺しに妨害された事。ヒカリが撃たれて重症を負った事。撃った奴は視界が見えない中で超遠距離から攻撃できる魔法を使う奴という事。

そして……キリナの能力で『やり直し』している事

雪姫は、ずっと黙って俺の話を聞いていたが……

『悪いな、ミッル。それはケースE8だ！　マスターズ教務科は動かない』

数秒間、雪姫は押し黙り。

口を開いたかと思えば、低い声でそう返してきた。

ケースE8。

それは「内部犯の可能性が高いので周知は出さない。信用できる者にのみ連絡を取り、当事者の手で解決せよ」という意味の符^{サイフアー}丁だ。

雪姫の判断は間違っていない。

犯人は武偵高生が乗るバスを、朝の混雑する時間帯を狙って襲ってきた。

生徒全員に周知してしまうと、余計な混乱が生まれたり、情報が筒抜けになる可能性がある。

それに武偵は基本自己解決するのが当たり前だ。

武偵憲章4条、武偵は自立せよ。

武偵高生も二年生、三年生になれば、自分の敵は自分で倒すのが原則だ。

教務科が手助けするのは一年や中学生まで。

俺も昨日、今日入ったばかりじゃないから武偵高の教育方針は知っている。

知っているが……ああ、くそ！ 自分達じゃどうしようもないから連絡したんだぞ！

雪姫の奴め、少しは協力してくれよ。

そんな事を思っていると

『もし非武装の市民が巻き添えになるようなら、改めて連絡入れろ。ミツル。』

それと……後で猫を行かせるから少し待て』

俺の内心を読んだかのように、雪姫は後半部分を声のトーンを落とすと言った。

『一時間。一時間だけ時間を作るようにお前の仲間に協力してもらえ。』

一時間の間に私直々にお前を鍛えてやろう』

「雪姫が鍛える？ 俺を……か？」

大魔法使いである雪姫に修行をつけてもらえる。

それは強さが必要な俺には願ってもいない事……なんだが。俺は全身から冷や汗が流れるのを止められなかった。

俺の脳内で浮かぶのはこの一年の間に雪姫から課された修行という名の虐待の数々。

極寒の雪山に全裸で放置。身体に風船を括り付けられて空に放たれる。

深い谷底に身体に重しを付けられた状態で突き落とされる。

大呪文の的にされる……などなど。ロクな記憶がない。

『安心しろ。特別強化コースで痛いと思う間もなく、サクツと殺つてやるから。』

後でお前らが驚くような贈り物を届けるから戒名考えて気楽に待ってろ』

「安心できる要素が一つもねえ!?!」

敵に挑む前に死ぬわ!

「ふっ、悪のラスボス……は無理だが大ボスくらいにはしてやろう。

心してかかるが良い!」

いや、悪の大ボスになるつもりはさらさらねえよ!

そんな俺の内心のツツコミをスルーして雪姫は電話を切った。

俺は話を聞いていたキリナに向かいあつて確認を取る。

「えーと、そんな感じなんだが大丈夫か?」

「構わないわ。アンタが雪姫先生に殺られるっていうのは、そんなの想定範囲内よ」

「さよですか……」

俺が死ぬのは想定内なのかよ。

何処からツツコめればいいんだ?

「それより問題はアンタが雪姫先生にボコられてる間に、誰が時間を稼ぐかって事ね。」

あとは桜咲先輩に任せるにしても一人だと厳しいわよね……空中戦が出来て、魔法に対抗出来る人なんて他にいるかしら?」

空中戦が出来て、魔法耐性がある人啊。

そんな知り合い他には……。

いや、待てよ？

生徒にはいないがあの人なら、もしかして……。

「一人いるな」

「誰よ？」

「デスメガネって知ってるか？」

「ええ。笑う死神とか呼ばれている武偵高最強教師陣の一人よね？」

素手で落下してきた戦車を受け止めるとか、暴走したロボットをたった一人で鎮圧した、とか。武偵高生が教務科に誤って撃ちこんだ炸裂弾を無力化した、とか。

素行の悪い生徒を見えない攻撃で無力化した、とか。

そんな噂が立っている人物——高畑先生の二つ名でしょ

？」

「ああ。知ってたかあ。まあ、高畑先生は本当は気さくでいい先生なんだけどな。

武偵高で一番マトモな先生じゃないか？

というか、武偵高内の風紀を取り締まるだけなのになんであの人は戦車やロボットを撃破してんだ？」

「ああ……それは酔っ払った蘭豹先生がぶん投げた戦車から周りにいた人達を守ろうとして防いだ場面を新聞部の朝倉先輩が面白おかしく書いたのが原因みたいよ。

ロボットは装備科アムドから脱走したのを捕獲しようとしたけど危険な武装が積まれている事が解ったからやむなく破壊したみたいだし……」

「あの先輩達は何してくれちゃってんだよ!?!?」

高畑先生そのうち倒れるんじゃないか？

主に心労が原因で……。

「ま、ともかく高畑先生ならもしかしたら動いてくれるかもしれない」
「でも、教師でしょ？ 教務科は動かないって……」

キラナが痛いところをついてきた。

確かに雪姫はそう言った。

だけど刹那先輩一人だけじゃ……。

「うん？　　僕がどうかしたのかい？」

その声が背後から聞こえてきて。

振り返った俺が見たのは……。

スーツのズボンに片手を突っ込み。

啞えタバコをしながら微笑む高畑先生の姿だった。

「え、せ、先生？　　何でここに……」

いつからいたんだ、この人!!？

全く気付かなかったぞ……。

「この学校に張つてある結果に不自然な歪みがあったからね。

その原因を調べに来たんだよ？」

結果？

そんなもんが張られているのか。

この学校に……。

鬼払い結果とかじゃないよな？

お稲荷大好きな狐とか、彷徨いてないよな。

「さて、話は聞かせかてもらったよ。ミツル君。

生徒達の危機だ！　　僕も力を貸そうじゃないか」

「へ？　　でも教務科は動かないって……？」

「確かに教務科は動かないよ。

武偵高生は自立しないとイケないからね！

だから教師として直接君達に手を貸す事は出来ない」

「それだったら意味がないじゃない！」

呆れたようにキリナは言うが。

「あはは！　　でも、風紀の見回り中に怪しい人物とかがいたら排除

しても……それは教務科が介入したっていう事にはならないよな？

それに、困っている生徒を指導するのも教師の仕事だしね？」

高畑先生はニコリと笑つてそんな事を言ってきた。

それはつまり。

「見回りは僕に任せてくれるかな？」

学校上空の風紀を守るのも広域指導員の仕事だからね！」

高畑先生は教師として学校の平和を守ってくれるようだ。

マスタース
教務科の一員としてではなく。

あくまでも一人の教師として大切な生徒を守る。

彼はそう言っていた。

いや、直接手助けするという言葉は口にしていない。

だけど、それが彼の生き様なのかもしれない。

「わあ、さすがはデスメガネ！」

話が解る人ね！」

「ああ、さすがはデスメガネだ！」

教師の鏡だな。

やっぱり凄いなー、デスメガネは」

「あはは……君達、そのデスメガネという呼び方は止めてくれないかなー」

そう笑って（死神の）顔を向けてきた高畑先生だが。

目は笑っていない。

そんな風に珍しくこめかみをヒクつかせている高畑先生に止めを刺すように、キリナは言い放った。

「え？　だって国際武偵連盟公認の二つ名ですよね？」

「何っ!?　ぷっ……　ぷっははは、国際武偵連盟公認の二つ名がソレって……」

それは知らなかった。

というか、二つ名がデスメガネって。

……うん、高畑先生。

「……ドンマイ☆」

フザケて笑った俺だが……。

「あはは……ミツル君。この件が片付いたらちよつと僕とOHANA SHIしようか？」

高畑先生の顔を見て、自分が誰を相手にしているかを認識した。

「あははははっ！（キュピーン！）」

その瞳がター○ネーターの如く光ったのを見た俺は。

「すみませでしたーっ!?」

即座に頭を下げた。

午前7時35分。温室前。

それからしばらく待つこと数分。

俺達の前に彼女達はやってきた。

まず初めに来たのは茶々丸さんだった。

珍しい事にチャチャゼロも一緒だ。

「おはようございます、八神さん。」

マスターから指示を受けています」

「ケケケ、ゴシユジンサマノカワリニオマエラブチコロシニキタゼ！」

「おはようございます。茶々丸さんが来てくれたのは助かります。」

オペレーターをお願いします。」

そして……チャチャゼロは変わらないな……」

「ウレシクテナミダガデルダロ？」

「ああ……涙が出るよ」

違う意味でだけどな！

「ケケケ、オマエヲナカスノガオレニアタエレタヤクメダカラナ」

くっ、このドS人形めっ！

製作者に似て性格が悪い。

そういうのはドMな人相手にやってろよ。

「ケケケ、ダイジヨウブダ。ヨノナカノオトコハオレヤゴシユジンサ

マミタイナセイカクデモヨロコブカラナ」

「それは……ドMな人は、だろ？」

世の中全ての男性が喜ぶと思うな。

そっちのけはない。

「ケケケ、マアイイサ。ソレヨリゴシユジンサマカラアズカリモンガ

アルゼ？」

「こちらです」

チャチャゼロが片手を上げて合図を送ると、隣に立つ茶々丸さんが

すかさず手に持つ紙袋からソレを取り出した。

「……おいおい。本気かよ、雪姫」

「これは……確かに短期間で強くなるにはそれしか道はないが……いや、しかしそれは」

「ん？　何よ、これ？　水晶……に、古い巻物？」

俺、高畑先生、キリナの反応は様々だった。

俺は純粹に驚き。高畑先生は困惑して。キリナは初めて見たであろう魔法具に興味深々だ。

そう茶々丸さんが紙袋から取り出したのは丸い水晶のような宝玉と、一本の古い巻物。

側から見たら解らないだろうな。

特に……この巻物の価値は。

『闇の福音』ダークエヴァンジェルが残した『闇の魔法』マギアエレベアの巻物、か。

ははっ、確かにこれはビックリするようなプレゼントだな」

「ネギ君が使った後に廃棄されたはずでは？」

まさか、また作ったのか!?!」

「闇の……福音？」

驚く俺や高畑先生とは違い。キリナは訳がわからないといった表情を一人浮かべた。

まあ、無理もない。

実際どれ程凄いものかは使った人にしか解らないからな。

「ほう。それが雪姫が残したという例の物か……」

「な、なんと。それが噂の……」

声が聞こえたのでその声の方を振り向くと。

そこには褐色肌の黒髪美人と、サイドテールに髪を結んだ黒髪の女剣士の姿があった。

「刹那先輩！　来てくれたんですね！

それに真名先輩まで」

「はい、学校存続の危機という話ですから」

「わたしはある人物から出された緊急の依頼でな。

君のサポートを頼まれた」

ちよつと話がオーバーになつてゐる気がしないでもないが、高ランクの二人が来てくれたのは心強い。

刹那先輩は強襲科アサルトのAだし（木乃香先輩のことになると任務中でも取り乱す為）、真名先輩は『必殺仕事人』、『灰色の魔眼使い』という二つ名を持つ狙撃科スナイプのSランク武偵だ。

「それはありがとうございます」

「で、どういった状況なんだ？」

刹那先輩と真名先輩に俺はこれまでの経緯を説明した。

俺の説明を二人は黙つて聞いていたが、話がキリナ 능력の事になると驚きと戸惑いの声を上げた。

「な、なんだと。『死に戻り』……噂に聞いた事があるが凄まじいな」

「まさか、実在する能力だとは……彼女が我々の味方でよかつた」

息を呑んで驚く二人のその様子に、俺は何だか胸騒ぎを覚えた。

「知つてるんですか？」

「知つてるというか、人づてに聞いただけだが。その能力を正しく使えば……そうだな。」

ミツル、君がこれからやろうとしている強くなる為の特訓にも彼女の能力は活かせるだろう」

真名先輩は俺とキリナの顔を交互に見ながら語り。そして雪姫が送つてきたもう一つの魔法具。

『ダイオラマ魔法球』を指差しながら言った。

「その魔法具の効力は既に知つてると思うが、簡単に言うると一時間を1日に引き延ばす魔法具だ。」

それ単体でも時間チートなものだが、そこにキリナ能力が加わればどうなると思う？」

「え？　それはどういう……」

「考えてみる。一時間を1日に引き延ばせた上で、何度でも同じことを繰り返せたらどうなる？」

想像してみた。

丸一日を何度でも繰り返せるとしたら……。

24時間という時間を何度でも繰り返せたら……。

それを全て魔法の修行に充てられたら……。

「やべえ……そういうことか」

「そういうことだ。雪姫もそれに気づいたから自ら鍛えると言ったのだろう」

「うわー、凄え！ キリナ。お前やつぱ凄えなー！」

「そ、そう？」

「ああ、凄えよ！」

「ほ、褒めても何も出ないわよ。」

ま、私が凄いののは当然だけど」

顔を赤くしながら言うキリナ。

キリナがいてくれて本当によかった。

「ありがとうな、キリナ」

「な、何よ。突然……はっ！ ま、まさか……だ、駄目よ。こんなところで。そういうのはもつと人がいないところとか……ま、まあ、どうしてもっていうなら……」

何を勘違いしたのか、顔を真っ赤にさせてもじもじとしているキリナを見ていると。

俺達のやり取りを見ていた茶々丸さんが声をかけてきた。

「八神さん。そろそろ始めませんか？」

タイムリミットまであまり時間がありませんし」

「ん、了解です。それじゃ、皆さん。よろしくお願いします」

「ああ、こっちは任せろ。君は君しかできないことをすればいい。

安心して任せろ、少年」

「なんとしてでも一時間持たせてみせます。

お嬢様の事は任せましたよ」

「ああ、木乃香先輩のことは任せてくれ！」

「ああ、任せ……あああ、やつぱり心配だああー！ 私がない間にこのちゃんの身に何かあったら……もし、バスに乗ってバスジャックに遭ってしまったら……すまん。やつぱりお嬢様の事が心配だから様子を見てくる」

突然、狼狽える刹那先輩。

「落ち着け刹那。近衛木乃香なら平気だ。楓に警護を任せてあるからな」

そんな刹那先輩を真名先輩は宥めて落ち着かせていた。
うん、

なんというか。いつも通りのやり取りで安心するな。
と、そんなやり取りをしていると。

「おーい！ ミツル君ー」

「八神さん。準備が整いました。八神さんとキリナさんはこちらに。
他の方は女子寮前に移動してください。車輛科クルマの生徒がお待ちしています」

高畑先生と茶々丸達の声が聞こえてきて。

俺達は行動を開始したのだった。

俺とキリナは誰もいなくなった温室内で水晶の前に立つと、その水晶に同時に触れる。

その瞬間、俺達の視界は一変し。
見慣れた温室の景色はなく。

代わりに眼前には中世ヨーロッパの古城や森が広がっていた。

「さて。始めるか」

「わ、わあ。な、何よ、コレ——！！？」

ファンタジー、ファンタジーの世界じゃない！」

キリナが興奮気味に騒いでいるが、そのうち熱も下がるだろうから
放置しておくでしょう。

時間は有効に使わないとな。

城の内部を散策すると食料や衣類衣服はきちんと置かれていた。
城には何体もの茶々丸さん（感情はない量産機）がメイドとして給
仕を行っており、衣食住に困る心配はない事が解った。

装備を確認してみると、朝と変わっていないので補給は必要なかった。

ま、そもそも魔法をメインに戦うから武器はほとんど使わないんだけどな。

そんな事を思いながら、俺は森に向かう。

その森は以前雪姫と戦った場所だ。

そこで俺は雪姫が送ってきた巻物を開いた。

そう。開いてしまった。

その瞬間。

俺は意識を失い。

気づいた時には何も無い、真っ白な空間にいて。

そして。

『構エロ』

その声が聞こえてきた。

『構エネバ……死ヌゾ』

その声の主は予想通り、俺がよく知る……

「雪姫……?」

『精神ノ死、ダガナ』

雪姫だった。

ただし、魔法薬を使っていない。ロリ体型の姿で剣を。雪姫オ리지ナル魔法の断罪の剣を発動させていた。

ガキイン　　ツ!!?

金属同士がぶつかるような音が響く。

無論、俺も目の前の雪姫も金属なんていう物騒なものを振り回したりしていいない。

いや……金属以上に物騒なものを振り回してはいるが。

『ホオ?　　重力魔法力。　　アルビレオノマネットイウ訳ダ』

エンシス・エクセクエンシス

雪姫の言う通り、俺は『断罪の剣』を受け止める為に自身が使える魔法剣の一つ。重力魔法と闇魔法を組み合わせて剣状にした

『闇夜月光輝漆黒刀』を発動させた。

『ナルホド。ナルホド……最初カラソノキダツタトハナ。ククク……』

雪姫は冷笑を浮かべると魔法剣を振りかざして俺を弾き飛ばした。
くっ……痛てえー。

『馬鹿メ』

雪姫は空中を飛び空いていた左手にも『断罪の剣』を具現化させた。

『ハハハ……マサカ闇ノカラチカラア使ウ愚ガ者ガマダイルトハナ』

何だ?!?

場所が変わった……?

いや、落ちつけ!

ここは多分俺の頭の中。

精神世界とかいうやつだ。

そして……あの雪姫も本物じゃないはず。

『フハハハハハ……面白い。面白い。面白いナオマエ。特別二復習シテヤロウ。』

闇トハ何ダ?』

……は?

……闇とは?

突然そんなこと言われても。

『光ニ対スル影。』

昼ニ対スル夜。

聖ト邪。

善ト悪。

秩序ト混沌。

条理と不条理。

……ダガ、ココデ貴様ニ必要ナノハ……』

俺に言葉を投げかけつつも。

「来レ氷精。」

大気ニ満チヨ……」

雪姫は呪文の詠唱を始めた。

雪姫が詠唱している魔法。

『モツトシンプルナ力サ』チカラ

あれは……!」

「トゥンドラームエトブラキエム・ロキーノクテイスアルバエ白夜ノ国ノ凍土ト氷河ヨ……」

俺が驚きの声を上げたその時。

ピキピキ、と地面が凍りつき。

「クリユスタリザテイオー・テルストリスコオル大地!!?」

地面から巨大な氷柱が突き出した。

俺は咄嗟に魔法剣で氷柱を切り裂く。

俺に当たりそうな氷柱を切り裂いていると。

雪姫の姿が見えない事に気づく。

気づいてしまった。

まずい!?!?

『其ハ全テヲ飲ミ込ム暗キ穴ニシテ、始マリノ闇……』

雪姫の姿を確認しようとして視線を上に向けると。

「来レ氷精爆ゼヨ風精!」

その呪文の詠唱が聞こえてきた。

『始原ノ混沌ダ!』

やっちまった!

『ニウイス・カースス氷爆!!?』

俺が気づいたその時には時遅く……。
大爆発が起きて、俺はその爆発に飲まれてしまった。

——ああ……。やっぱり勝てねえのか。

『全てを飲み込む始まりの闇』

畜生……。意味がわからねえよ。

『コノ意味ガワカラナケレバ……。貴様ハワタシニ破レテ、ココデシヌ』
駄目だ……。やっぱり俺じゃ雪姫には勝てねえ。

貰い物の……。借り物の力じゃ、誰も救えないんだ。

また守れないんだ。

……。また、大切な人を救えない。

『もつとも。』

貴様はその意味を。

すでに知っているはずだが……。』

「えっ……。っ？」

それは紛れもなく、俺が知る雪姫の声だった。

『終わりだ。』

ニウイス・テンベスター・オブスクランス

闇の吹雪！！！？』

俺はもう……

知っている？

そうだ。俺はもう知っているんだ。

それは以前、雪姫に言われた言葉だ。

『泥にまみれても尚……。前へと進む者であれ』

そうだ！

俺はもう知っている。

目の前の雪姫が偽物だということを。

俺のイメージが具現化された人造霊という存在だということも。

そして、俺は1人じゃないということも。

『あたしのドレイになりなさいー！』

『全力でやってやるよ』

アリアとキンジと交わした約束。

『このむの〜』

『大好きだよ！　　パパ！』

守りたいと思う少女達。

武偵憲章一条

『仲間を信じ、仲間を助けよ』

俺を信じて。

信じて戦う仲間がいることを。

「やられて……たまるかよー……！」

気付いた時には。

俺は右手を前に突き出していた。

ドゴオオオオオという音が鳴る中。

俺は闇の吹雪を受け止め……いや。

受け入れていた。

『闇の魔法』

それはつまり……

『善も悪も……強さも弱さも。』

全てをありのままに。

受け入れ……飲み込む力!!?』

コンプレクシオン
掌 握。

『なっ！　　まさか……それは『太陰道』!!?』

術式兵装……

「永久凍土!!?!」

俺の半径30メートル圏内を支配域とする。

その圏内を自在に飛び交う四枚の大盾が浮遊し、旋回する。

盾の性質は氷。色は黒。

厚さは1メートルほどだ。

形はどちらかという縦に細長くギリシャ神話に登場する《アイギ

ス》のようだ。

その盾の表面は鏡のように光を反射させていた。

『信じられん。』

太陰道……すなわち、気弾・呪文拘らず敵の力を我が物とする闇の魔法《マギア・エレベア》の応用技にして究極闘法。

それを会得するとは……いや。できるか。私の弟子ならば。

……しかし新たな術式兵装を生み出すとは』

新たな術式兵装を生み出したことに驚きの声をあげる雪姫。

彼女の予想を上回る結果を生み出したのなら……上々の出来だろう。

もつとも……一番驚いているのは。

他ならぬ……

俺自身なのだが……。

いや、だって。

ぶっつけ本番だし。他人の魔法を吸収出来ることは知ってたけどいざやってみると。かなり糞度胸がいる技なんだぜ？

ネギま！ 原作の主人公ネギ少年が同じように闇の吹雪を術式兵装してた描写あったけど。

ネギは生まれながらの天才だし。ナギというチーターの遺伝子を受け継いでいる主人公だし。

人外街道まっしぐらな闇の素養がある子だったから。

それに比べて……

一方の俺の力は確かに心の中に巣食う闇があつて闇の魔法を発動させることは出来るけど。

けど……それは女神様人様からの頂き物だから。

だから……出来るとは解つてても、成功するなんて信じられなかった。

そう。信じられなかったんだ。

俺は。

心の中でいつも信じていないんだ。
人を。

受け入れてなかったんだ。

周りを。

何もかも。

だから、妻を喪ったあの時も何もできず。

今回も諦めようとしていたんだ。

怖いから。弱いから。

だから……

諦める。

逃げる。

そんな選択ばかりしていた……だから守れなかったのに。

『信じて、立ち向かう』

そんな簡単な、大切なことも出来ないんだ。

僅かな勇気を出せなかったんだ。最期まで。

そんな俺だから……彼女。雪姫……の人造霊に言われるまで気づ

かなかったんだ。

『傷ついても、倒れそうでも、どんなに疲れていても……絶望してさえ

いても。前へと進むもうとする意思。そんな強さがあることに』

「シニストラー スプレイメントウム左腕……装 填」

俺は心の何処かできつと恐れていたんだ。

強い力を持つということに。

「デクストラー エーミッター右腕 解放!!? クリユスタリザティオーニテルストリスコ オル 大地」

だけど俺は悟った。

俺は一人じゃないということに。

俺には俺を必要として受け入れてくれる、頼れる仲間がいるという

ことに。

どんなに苦しんでもただひたむきに……前へと進むべきだという

ことを。

道を示してくれる師匠がいるということに。

そんな師匠が待ってるんだ！

出来ないなんて言えない！

いや……違うな。

出来る。出来ないじゃない。
やるんだ！

やってみせる！
やつと気付けたんだ。

それが俺が密かに（本人には死んでも言う気はないが）尊敬する。
そして……敬愛している雪姫の弟子として取るべき道だということ
に。

そんな想いを抱きつつ。

俺は瞬動術を使い一瞬で雪姫のもとに接近し、右腕に装填させたコ
オル大地を解放する。

俺の様々な想いが籠った無数の氷柱が遅いかかろうとする中。

人造^雪霊は余裕だった。

「くくく……いいだろう。ではその成果……見せよう！」

雪姫は余裕の表情で氷柱を防ぐと氷属性の矢や槍を無数に放ち。

俺は術式兵装『永久凍土』を発動させたまま、矢には、矢を。

槍には槍を放って対抗する。

何時間。何百時間経ったのだろうか？

時間の感覚が曖昧になる中。

ギンギン、ガガガという破壊音が鳴り響き闇と氷の属性を持つ力が
拮抗する。

そして。

徐々に激突していた片方のそのパワーの出力が落ちていく。

まあ、何百時間もの間。一つの魔法を維持していたのだから当然だ
が。

『ハハハハ。どうしたミツル？』

もう終わりか!?!?

たかだか数百時間で!!?』

「うぐっ……」

だがそれでも身体……いや、心に蓄積されたダメージは思いの外デ
カイ。

精神世界の中とはいえ。同じ空間で何百時間と戦うのは精神的に

まいる。

だが……それでも。

不思議と負ける気はしない。

『ん？ 何故笑っていられる？

自分が置かれている状況が解ら

ないのか？』

状況？

ははっ！ 雪姫とタイマンしてボコられることか？

そんなのはいつものことだ！

いつものこと……なんだけど。何故かな。全く負ける気がしねえ

！

ここが現実じゃないからか、あるいは目の前の相手が雪姫の姿をした魂だけの存在だから。

だろうか？

……解らない。

解らないけど負ける気がしない！

相手は強い。

確かに強いけど……勝てないとは思えない。

本物じゃないからだろうか？

いや違う。本物だろうがそうじゃなかろうがこの気持ちは変わらない。

まあ……もし戦って負けたら相当恥ずかしい気分になるとは思っているのだが。

本物の雪姫じゃないのに勝てなかったら悔しいと思う。

悔しいだろうが、そんなことはどうでもよくなると思う。

なんて言えばいいか解らないが。

なんかへんな感じの……このワクワクとした気持ちを現すとしたら。そう……

こういう風にドキドキするのも悪くない。

そんな風に思う気持ち？

なんていうかな。面白い？

そう。面白いんだ。

拳を交わす度に、魔法を撃ち合う度に楽しさが増していく。
もつと撃ち合いたい。

もつと楽しみたい！

もつと……もつと、もつと。

そんな風に思っていると。

雪姫は呪文の詠唱を終えてその魔法を撃ってきた。

『これで終わりだ。』

ニウイス・テンペスター・オブスクランス
闇の吹雪』

雪姫は容赦なく、闇と氷雪が合わさる大魔法を撃つ。

向かってくる大呪文。

その呪文に向けて。

俺は周りを飛び交う四枚の大盾を展開した。

雪姫を。人造霊を取り囲むように。

『なっ、この布陣はまさか……』

『太陰道』。八神流敵弾吸収陣……『四面楚歌』

呪文が盾に当たった瞬間、盾がほんのり光り輝き。呪文を跳ね返した。

盾から盾へと。

まるでタスキを繋ぐリレーのように。

盾から盾へと反射した呪文は雪姫に当たるまで繰り返し放たれる。

『くっ、そんなもの』

雪姫は時には氷の盾で防ぎ。あるいは同じ魔法をぶつけて相殺されて防ぐ。

しかし、雪姫が呪文を放つ度に、その呪文を俺は吸収していく。

そうして10発ほど撃ち合った時だった。

雪姫の動きが鈍る。

『ぬっ……か、身体が動かぬ!??』

ようやく効いてきたか。

俺が生み出したこの術式兵装は攻撃や素早さを重視したものではない。
ない。

どちらかというと防御と束縛系だ。

単純な攻撃力なら『獄炎煉我』。疾さなら『疾風迅雷』の方が上回る。なら何故このような術式兵装を生み出したのか。

それは闇と氷の属性が関係している。

氷の属性は破壊、封印や束縛。相手を『閉じこめる』のなら氷属性が使いやすいからだ。

そして闇を取り込んだ理由としてはその特性に『精神への干渉』があるからだ。

まあ、単純な『束縛』なら水や風でもいいのだが。

だがここは『精神世界』。

精神への影響を与えるなら『闇』だ。

『ぐぬぬぬ……私が、この私がただの人間ごときに……』

「悪いな偽雪姫。ただの人間じゃないんだよ」
転生者で。

なにより……

雪姫の弟子だからな。

普通の人間では務まらねえよ。

本当は一番解ってるだろ？

アンタも雪姫なら。

「……悪いな。これで終わりだ！」

シニストラ・エーミッタム ヨウイス・テンベスターズ・ラルゲリエンス
左腕解放……『雷』の暴風!!?!』

雷の暴風を発動させ、動きを止めたままの雪姫に放つ。

否……放とうとした。

だが放とうとした俺の意識は失った。

『ピカッ！ ガガガガガッ!!?!』

どこともなく放たれた。

たった一発の雷によって。

『?』

何が起きたか解らなかつた。
気付いた時には俺は地面に伏せていて。
頼みの綱の術式兵装も解除されていた。
そして。

そんな俺をあざ笑うように。
化け物が目の前に立っていた。

『……ふっ、保険をかけといて正解だったな。

私一人だけと、誰が言った？』

偽雪姫の声が聞こえて。

顔をその声のもとに向けると。

其処には化け物がいた。

人間ではない。

存在が人間とは違う。

どちらかというと魔族に近い。

俺はソイツと偽雪姫の顔を見て全てを悟った。

『ククククっ、紹介しよう。

我が本体が貴様の修業の為に貴重な時間やコネを使いわざわざあ
ちらの世界から呼び出したもの。

それが此奴。

『雷の上位精霊』

『だ』
ブローグ

ここまでの修業はほんのお遊びで。

ここからが本当の修業の始まりということ。

ところで。

魔法を発動させるには必要なことがある。

精霊魔法という名称の通り。闇の魔法を始めとしたネギま！
の魔法を発動させるには精霊の手助けを借りなければならない。
発動には魔力。俗にいう自然エネルギーを消費する。

魔力量が多いほど、強力で。扱いが難しい魔法を放てる。

そして……もつとも大切なことだが。

発動させたい魔法を具体的にイメージさせること。

それらが揃わなければ魔法は発動しない。

ま、当たり前といえど当たり前だな。

俺は女神から闇の魔法の素質を特典として転生前に貰っていたから当たり前というように魔法を使っていたが、その出来て当たり前という思い込みが当たり前前だと思ってしまうことが。

俺が今まで千の雷を発動できなかったという理由にあたる。

漫画の知識で知ってるから使える……なんて甘いことは当然ないわけ。

雷そのものを。

千の雷という具体的な魔法を理解し、イメージさせなければ当然発動するはずがなかったのだ。

『千キリーブルアストラベの雷 !!?!』

風魔法電撃系最強の呪文。

広範囲殲滅呪文の一つで、もう一つの世界。

アナザーワールド裏 火星で20年前に起きた大戦の英雄、ナギ・スプリングフィールドが使用していたことで有名な呪文。

そしてあまり知られていないが、元々は雷の上位精霊が使う技を人間用にしたものがこの技の由来だ。

装填29 上位雷精

突然現れたソイツを見た俺の感想はただ一言。
恐怖。

圧倒的な恐怖の体现者がそこにいた。

長い耳(?)に長い尻尾。

それはまるで物語に出てくる悪魔や龍人のような姿をしている。

その手に持つのは途轍もなく長い槍。

そして、その全身から迸らせるのは『雷』の魔法。

『保険をかけたという正解だったな。此奴こそが上位雷精『ルイン・イ

シユクル』だ!』

人造^偽霊^{雪姫}が一言告げた瞬間、雷の上位雷精の姿は消え。

ピリッ、と俺の周りの空間が震えたのを感じた途端。

ガゴオオオオンと轟音が聞こえ。

俺は意識を手放した。

『……ああ、やっぱり勝てねえか……』

精神世界。

その中の別の空間で俺は背中越しに雪姫と会話していた。

『なんだだらしないな』

『やっぱり、無理なんだよ。借り物の力じゃ』

『なんだ。贅沢なヤツだな?』

『贅沢?』

『そうだろ? 私を知る人間達は、今手にあるもので生きるのに精

一杯に見えたからな。配られた手札が不恰好だと悩むのは……貴族

くらいなものだ』

『そうか?』

『随分と呑気な……平和な時代に生まれたんだな』

『むう……』

『気持ちはわからんでもないが、使いこなしてくれれば私も嬉しいぞ』

『何でだ?』

『この『闇の魔法』は私が呪いから技へと昇華させたものだからだ』
『え?』

『……私が生きた証である技だ』

『え?　　そ、そうなるのか?』

『ふふ……: どういう経緯で貴様にこの力が伝わったのかは知らぬが
……私は嬉しいぞ』

『……っていうか、お前誰だよ?』

雪姫……であるはずはないし。

人造霊でもないよな?

『私はお前だよ』

『え?』

どういう意味だ?

俺が口を開く前に、雪姫は告げた。

『いいか、人の凄さというものは与えられた手札では決まらない』

そして雪姫は俺に掌を差し出してきた。

『手にした札で何をするのか?』

どうするのか?

その選択で決まる!

違うか?』

『……』

無言になりながらも俺は差し出された雪姫の手を握り締める。

その時だった。

思考が元の空間に戻り。

何かが直撃したと気づいたその瞬間。

俺は無意識のうちに左手の掌を前に突き出していた。

キイイイイ、と掌に雷の上位精霊が放った雷の魔法が直撃し、俺
はその魔法を受け止めた。

その威力は俺が扱える大呪文『雷の暴風』を遥かに凌駕する威力を
誇る。

おそらく……いや、確実にこの魔法は『千の雷』と同等の威力があ
るだろう。

ちよつと前の俺なら確実に受け止められずに、死んでいたであろうその魔法だが。

だけど、今の俺ならなんとか出来る！

そう、確信していた。

「うおおおおおおおおおおお！！！！」

『善も悪も、強さも弱さも……全てをありのままに受け入れ、呑み込む力』

思い出せ！

雪姫と過ごしたあの日々を。

思い出せ！

大切な人と過ごしたあの日々を。

思い出せ！

大切な人を亡くしたあの日を。

それが……。

『闇の魔法』を舐めんなああああああ『コンプレクシオン掌握！』

それが俺の力になるのだから！

それに雪姫が言っていた。

『僅かな勇気こそが本当の魔法』だと！

一步を踏み出す勇気がなければ何も変わらない。

だから俺はもう迷わない！

例え、どんなに強いヤツが相手だろうと引かないし、例え絶望したとしてももう、俺は後ろを振り返らない。

泥に塗れても前へと進んでやる！

それが俺の覚悟だ！

『術式兵装……』ヘー・アストラパー・ヒューベルウーラヌー・メガ・デユナメネー『雷天大壮』！！』

……の劣化版。

見た目はオリジナルとほとんど変わらない、全身が白く光って雷そのものとなることで物凄^雷い速^速さで移動出来る最速の術式兵装。

スピードは最強クラスだが、その反面弱点は多く。

雷速と言っても技が発動したほんの一瞬だけで思考速度は変わらない。『雷』そのものという事は放電現象が起きるわけで、先行放電^{ストリーマー}に

それを使えるんだ、興奮するなという方が無理だ、もつともネギのように、まだ二重装填などは試した事はないからあの技が出来るかはわからない。

だが、この力があれば少なくとも『武偵殺し』戦はかなり有利になり、『魔剣』^{デユランダ}戦までは充分有利に対抗できるだろう。

さすがに吸血鬼^{ブラッド}は今のままでは厳しいと思うが。

『千の雷』を使い熟^{こなせ}るようにならないとあの無限回復能力の前ではジリ貧となりそうだからな。

そんなことを思っていると、目の前の景色がまた変わり……。

『……ハデにやりおって』

『アイタタタ……拙者の負けでござるな』

仏頂面の雪姫と、たった今倒したはずの上位雷精『ルイン・イシユクル』の姿があった。

……。

これは一体、どういうことだ？

疑問に思う俺に偽雪姫は説明を始める。

要約すると、次のようになる。

俺が強さを求めることを悟った雪姫（本物）によって巻物、『真・闇の魔法の書』^{マギア・エブレア}が作られ、それを託された^{高畑先生}デスメカネに命じられ、修業という名の遊びを思いついた、との事。

元々は闇の魔法^{マギア・エブレア}を取得する為の巻物だったものを、雪姫が『ぼーや（ネギ）のようなヤツが出てきても面倒だ……少し難易度上げるか』というツンデレ的な発言により、難易度が高く設定されたものに、知り合いの魔女から借り受けた雷精をぶち込んで鬼畜度MAXに格上げさせた『闇の魔法使用許可書』^{マギア・エブレア}『エヴァ二級』を俺の修行に当てた』、というわけだ。

……まったく、傍迷惑な話だ。

こっちは死にかけてんだからな。

『心配せずとも、ここは精神世界。精神に多少の影響があっても肉体的には問題ないでござるよ』

『貴様なら大丈夫だ。殺しても死なないだろう？』

おいコラ、その二人！

少しは反省しろ！

『そんなことより、ミツル殿。お主……拙者に何か言いたい事があるのではないでござるか？』

「……バレてたか？」

『ん？ 何だ……気づいてたのか』

『ここは精神世界。お主とは精神的に繋がっているでござるよ』

『フン、精霊などに頼らず私に聞けばいいものを』

『こればかりは仕方ないでござるよ。』

ユツキーの得意な氷魔法ではないでござるから』

『それもそうか……って、待て！』

誰がユツキーだ！』

『エヴァたん、っていうのはさすがに抵抗あるでござる。キティ……うおっ!?』

突然、『ルイン・イシユクル』に向けて偽雪姫は氷の矢を放った。

危ねえなあ、俺にも当たるところだったぜ？

『貴様、雷精風情が調子乗りおって……』

『待ちなされ、冗談でござる！』

ただのブラックジョークでござるよ』

「ブラック過ぎだろ……」

あれ？

雷の上位精霊の『ルイン・イシユクル』ってこんなキャラだったか？

ラカンの回想だと、夜の迷宮の奥で待ち構えるラスボス的なイメージがあったんだが。

『フン、今度フザけた事を抜かしてみろ。貴様のその長い耳と尻尾をちぎって、家庭用コンセント変わりにしてやる』

電気イヌみたいに自家発電に利用するんですね？

わかります。

『おつかないでござるな。まあ、冗談はさて置き……拙者に何か言いたい事はござらんか？』

『ホラ、とつと吐け！　吐かないと愉快なオブジェにするゾ？』

「強引過ぎだろ！　……　——　して欲しい」

『ぬ？』

『ほう？』

俺の発言が意外だったのか、困惑気味に唸る二人（？）。

二人はしばらく思慮していたが、やがて『ルイン・イシユクル』が頷くと、偽雪姫は短く溜息を吐いて俺に告げた。

『……どうなっても知らんぞ』

「望むところだ！　強くないとダメなんだ！　どんなことをしても」

俺は偽雪姫と『ルイン・イシユクル』の顔を見つめ返し、そして頭を下げてお願いした。

「お願いします。俺を鍛えてください。俺に『闇の魔法』マジック・エベレアの全てと、雷の魔法を教えてください」

俺がさつき『ルイン・イシユクル』に告げたのはほんの些細な願い。

『俺に……雷精の魔法を教えてください。』

俺を雷精の弟子にして欲しい』

雷精が扱う雷魔法。

それを人が『千の雷』と呼ぶのだから。

手っ取り早く、『千雷』を取得するのなら。

そのモデルになった人に聞けばいい。

そう考えた俺は『ルイン・イシユクル』に頭を下げた。

しばらく頭を下げています。

『……顔を上げるでござる。わかったでござるよ。』

拙者でよければ協力するでござる』

ルイン・イシユクルから許可が降りた。

思わず、ヨッシャーと叫びたくなる。

これで取得に難航していた『千の雷』に光が見えてきた。

後は、偽雪姫の方が。

『フン、気はあまり進まんが……いいだろう。』

私を知る全てを貴様に叩き込んでやろう。覚悟するといいい』

あっさりとOKが出た。

『イヤイヤ振舞っておるが、その内心は頼られて嬉しいエヴァたんであつた……』

『可笑しなモノローグ入れるなー！』

雷精貴様ア、やはりここで死にたいようだな……』

「どんだけ仲良しなんだよ、お前ら……」

もう、アレだな。

俺の中のイメージの上位精霊は優秀な対雪姫弄りのスペシャリスト的なポジションに変わったぞ。

『ごほん。まあ、冗談は半分置いとくとして『半分？　全部捨てぬ

か、貴様アーーー！』……『千雷』だけで良いでござるか？　お主

のその巨大な魔力なら雷刀や雷槍も再現出来ると思うでござるよ？』

え？　マジで。

『マジでいざな』

いざな、いざなと言われると。

何処ぞの腹ぺこBランク従妹やカエル目の忍者が思い浮かぶ。

『なんと、拙者のような口調の仲間がいるでござるか？』

いざれ会いたいでいざな

まあ、そのうちな。

しかし、『千雷』だけじゃなく、『雷槍』や『雷刀』も取得出来るかもしれないとは。

もしかして、俺は人間より精霊に近い存在なのか？

……イヤイヤ。俺は人間だ。

化け物になったはずはない。

少なくとも今は人間のはずだ。

『拙者の『千雷』を取り込んだ時点でただの人間ではないでござるな』

止めてー、言わないでー！

俺はまだ人間で居たいんだ！

人間辞めるのはキンジ一人で充分だよ。

『クックククク……人間を辞めるのは嫌だか？』

だが、人間のままではいられんぞ？

貴様は禁呪に手を出したのだからな。『闇の魔法』マジック・エスレアは人間が扱うようには出来ておらぬ。あれは吸血鬼の真祖である私専用の魔法だからな。

ただの人間では耐えられぬ』
わかってるさ、そんなことは……でも、俺は人間を辞めるつもりはない。

人間の身で、人間だからこそ出来る。

人間しか出来ない方法で、俺は大切な人を守りたいんだ！

『フン、甘い選択だな。だが……面白い。』

純粹な『白』ではない身で『黒』ではなく、『白』を目指すか。

やってみるといい……その先で私は貴様を待っているでしょう。

さて、長話は終わりだ。始めるぞ？

ここからが本当の修行の始まりだ！』

偽雪姫は、掌に巨大な氷柱を発生させ。

『拙者に着いて来るでござる！』

『上位雷精』は雷刀を構え、雷の速度で移動した。

辛く、苦しい修行が始まるが、この修行を終えた俺はさらなる高みに達するだろう。

そう思うと、自然と笑みが浮かぶ。

そう。ここからが本当の始まりなんだから。

装填30 デスメガネと悪魔？

〃学園島〃

武偵高があるこの人工浮島メガ・フロートはそうアダ名されている。南北2キロ。東西500メートルにも及ぶ広大な面積を誇るこの人工浮島は海上の学園都市と言っても過言ではないくらいの学生の街だからだ。

麻帆良学園ほどではないにしろ、この街には学生が多く住む。

もちろん、住むのは学生だけではないがそれでも学生の数が他の都市と比べて高いのは事実だ。

学生が多いということは当然ながら、様々な問題も起きるわけで。普通の一般人に迷惑をかけないように暮らす。

残念ながら、そんなこともできない学生中にはいて。

警察や武偵高の生徒、そして……教職員が定期的に街を見回ることも珍しくない。

〃東京都湾岸地区特別広域指導員〃

僕が持つ肩書きの一つだ。

武偵高を拠点として、湾岸地帯に潜む特定人物、魔法団体の監視、魔法生徒及び、秩序を乱す生徒の指導を都から任されている。

都からとあるが、実際は関東魔法協会のトップであるあの人に押し付けられた、といった方が正しいが。

まあ、この学校に来ると決めた時点でこうなることは判っていたから予想の範囲内だけだね。

だが、予想外といった事態は必ず起きるわけで……

「くっ、マズイぞ。なんだアレは？」

僕が見上げる遙か上空。

そこに巨大な魔力が集まるのを感じていた。

禍々しいソレは、大気を震わせ、まるで生き物が呼吸するかのように、自然と魔力を吸って増大していた。

氣と魔力の合一『咸卦法』。

その究極技法アルティマアートを発動させている僕だが。

この身体中から力が抜ける感覚は……もしかして!?!?

最悪の事態が頭をよぎる。

マナフォースドレイン
魔気吸収技法。

相手の魔力や気力を吸い取り、奪う術式。

その術式が学園島の上空で広範囲に発動している。

高度3000メートルはあろうか……本来、羽田空港に近い学園島上空では様々な国籍の航空機や自衛隊機が飛び交うが、現在その高度で待機しているのはその建造物だけだった。

まるで、有名なアニメ映画の「コマみたい」に。島が空を飛んでいた。

いや、違うな。

空を飛ぶというより、浮いているといった表現の方が正しいかな。

見た目は小さな島だが、島のあちらこちらには森や小さな湖が。

中央には神殿のようなものが見える。

天空の城、空に浮かぶ島。

伝説上のものが頭上に存在している。

「廃都オスティア……ではないね」

魔法世界にある、あの島々を思い浮かべるも、すぐにその考えを振り解く。

「……高畑先生、アレは？」

教え子の一人、桜咲刹那君が上空の島を見て尋ねてきた。

彼女の背中からは純白の翼、『白き翼』が生えている。

刹那君は見た通り、純粋な人間ではない。鳥族と人間のハーフだ。

小さな頃から混じりものと言われ差別されてきた彼女はほんの数年前まで、自分がハーフだという事実を隠して生きていた。

その為、クラスメイトや自身が主とする、木乃香君との間に壁があり、なかなかうち解けずになっていたのだが、ネギ君やその仲間達との交流により今では肉体的にはもちろん、精神的にも成長して将来を期待される魔法生徒の一人。

武偵高では将来有望な『強襲武偵』として育成されている。

そんな彼女が今回、『空中戦』ができる武偵としてミツル君の呼びかけに応じてくれたのだが。

「解らない。だけどここにあっていいものじゃないのは確かだね」

「この魔力の集まり……まるで」

「うん、あの時のようだ……」

『コスモエンテアケイア
完全なる世界』が起こした『人類救済計画』。

アナザーワールド

裏 火星と麻帆良で起きたあのような出来事が今度は学園島で起きている。

麻帆良の時とは違うのは……魔力を消失するのではなく。

人が持つ魔力や気力を吸い取る術式が発動されていること。

今はまだ影響はあまり起きていないようだが、放っておけば気力を吸い取られた一般人や魔法抵抗の手段がない武偵高生に被害が出るだろう。

それはなんとしても防がなければいけない。

魔法先生として。

いや、『力のあるもの』として、責任を果たさなければいけない。

力のない人を、力がある人が守る。

守りたい人を守る。

それは当たり前のこと。

当たり前のことだが、僕はさらに。

大切な人達の大切な人をも守りたい。

それが僕達『力があるものが守らなければいけない正義……責任だ
と思う』から。

それが……僕達魔法使いが掲げる正義の正しいあり方だと思うか
ら。

まあ、こんなことを考えているから僕は魔法使いとしては『落ちこ
ぼれ』だと言われるのかもしれないけど。

でも、それが僕の『正義』だ！

魔法が使えない僕は確かに魔法使いとしては『落ちこぼれ』かもし
れないけど。

ナギや師匠達、ネギ君のように……正しい時に正しい力を使える人間になりたい。

だから僕はこの学園島に来た。

力があるものとして、正しい力の使い方を未来ある後輩達に教えていきたいと思ったから。

ミツル君と約束したのは、『時間稼ぎ』だけ。

大切な教え子だけに押し付けるのは一教師として見過ごせない。

「刹那君、ここは任せていいかい？」

「え、高畑先生？」

「……嫌な予感がするんだ。今すぐあの島に行かないと……手遅れになる、そんな予感が……」

魔力や気力が渦を巻くように島の神殿に集まっていく。

今すぐ止めないと。

嫌な予感がする。

「高畑先生……解りました」

僕が考え込んでいると、刹那君は頷き。

左右の手に刀剣を持ち、臨戦態勢を取る。

「先生が無事にあの島に突入できるように援護します」

「すまないね、刹那君。ありがとう」

僕は刹那君にお礼を言って、飛び出した。

今も魔力と気が渦巻く、空島へ向けて。

そもそも、どうしてこんなことになったかという時を少し遡ることになる。

バスジャック犯に武偵高生が人質に取られ、その犯人を捕らえる作戦を練っていると。

僕の携帯電話が鳴り響いた。

携帯電話を手に取り、画面を開くと。そこに写っていたのは同僚の蘭豹先生からの着信だった。

「もしもし？　ええ、はい、ふむ……」

蘭豹先生からもたらされたのは気になる情報だった。

聞けば蘭豹先生は今朝まで居酒屋をハシゴしていたらしく、出勤前の最後の一杯を取る為に武偵高に近いコンビニへ足を向けたところ。突然、空からロボットが落ちてきたらしく。

なんでもそのロボットは以前、装備科アムドが開発した自立型ロボ『田中さんマークV』をより巨大化させた外形をしていて。

装備も装備無効化の『脱げビーム』ではなく、実弾が出る仕様のものであったらしく。

一応教師である蘭豹先生が警告するも、ロボットの反応はなし。

それどころか、突然『脱げビーム』を放った『田中さんマークV』。短機関銃サブマシンガンと地对空ミサイルを装備した『田中さんマークV』と『人間バンカーバスター』と言われている蘭豹先生の仁義なき戦いが何故か始まってしまい。

酔っ払って機嫌の悪かった蘭豹先生は『田中さんマークV』を素手で無力化し、片手で持ち上げ、振り回して東京湾に沈めた。

ここまでなら蘭豹先生のいつもの日常的な光景なので笑い話で終わる話なのだが、今回はここからが本番だった。

なんと、空から降ってきたのはその1体だけではなかったのだ。

学園島で確認されただけでもおよそ1000体。

湾岸地帯を含むとおよそ1万體になる見通しだ。

そのロボットの外形は子犬型から人型まで幅広く、中には実弾仕様の兵器を搭載したもので確認されたらしい。突然の出来事に武偵高は混乱した。

バスジャック犯が捕まっていない中での、ロボット騒ぎ。

それも実弾がいつ使われるかは誰にも解らない状況。

警察への通報も検討されたが、メンツを重んじる武偵高は独自捜査にこだわった。

バスジャック犯の捜査は一部の生徒に任せ、上級生と一部の教員はロボット騒ぎの鎮圧に駆り出されることになった。

バスジャック事件には『ケースE8』を適用。

内部犯の可能性有りの周知メールも出さない。

ロボット騒ぎには周知メールを適用。

バスジャックに関わる生徒以外には全員メールが通知された。

僕達、広域指導員もロボット騒ぎの解決を最優先事項とされ、バスジャック事件に関わることは禁止されたのだが、そこに待ったをかけた人がいた。

超能力研究科の工……雪姫教諭だ。

彼女が雪姫と名乗っているのは親しい生徒や知人を裏の世界に巻き込ませない為だ。

彼女の首には今もなお、最高の賞金がかけているから。

彼女の過去を知っている僕はうっかり本名を言ってしまうが、ここではその名で呼ぶなど毎回怒られてしまう。それは勘弁してほしいと思うが、まあ、裏の世界で有名になり過ぎてから今の名で生きたいと思っている彼女の気持ちは理解できるけどね。

彼女は今のこの武偵高で過ごす日常を非常に気に入っている。

その証拠に……

ミツル君が知ったらきつと驚いただろうが、彼女は誰よりも早くバスジャック事件の資料を用意し、対応策を練っていた。アリア君を中心にした救出部隊の認可も彼女主導で行われていた。

反対する教員に掛け合い、アリア君達が動きやすいようにサポートしつつ、自分は問題が起きた時に備え現場近くに待機。

ミツル君からの電話には素っ気なく返事をしながら、影からサポートする姿を見てしまい、彼女の成長した姿にうるつときてしまう。

あの問題児だった工……雪姫先生がこんなに変わるとは。凄いなあ、ミツル君は！

などと思っていると。

偶然通りがかった女子寮の温室の中から、聞き覚えのある声がした。

中を覗くと、中にはミツルくんと、女生徒がいた。

その二人がしていた話は衝撃的な内容だった。

バスジャックをすでに知っていること。

僕達が知らない情報を持っていること。

中でも特に驚いたのは……

時間を「戻す」能力……それを持つという少女の存在。

時間を戻せる力と聞くと思い浮かべるのは、以前、超君が起こした騒動。

あの時はネギ君達英雄が何とかしてくれたが……今回、そのネギ君達英雄はいない。

英雄不在の時に超君がまた何かやらかしたのか、と心配になるが。彼らの内容を聞く限り、超君絡みではないようだ。

いや、後々超君絡みなら良かった、と後悔することになるのだが。その内容は最悪なものだった。

それは生徒だけで挑むには無謀な内容。

しかし。

なんとなく。

確証はないけど。

この子達に任せれば大丈夫、この時の僕はそう思ってしまった。根拠のない安心感。

それを与えてくれるのが、ミツル君の魅力だからだ。

本人は自覚がないようだが、探偵科の遠山君と共に、マスタース教務科では潜在的なカリスマ性を持つ生徒として、評価されている。

そんな評価をされているミツル君の会話を聞いた僕は……。

「僕が、どうかしたかい？」

彼らにそう声をかけてしまった。

彼らから詳しく聞かされた内容は予想より悪かったが、僕はそれを受けらることにした。

武偵憲章第1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。

そう常日頃、生徒達に教える側として、手本を見せないと示しがつかない、というのもあるが。

なにより……僕がそうしたかったからだ。

ミツル君と別れた僕は、刹那君と共に学園島の上空を見回っている……学園島上空に不自然な歪みがあることに気がついた。

その地点に向かうと、そこには島が浮いていて。

僕はその島に上陸したのだが。その島にある神殿。その神殿の奥。扉を開けて見えた玉座のような場所にソレはいた。

可愛いらしい幼い女の子の肉体をしているが、その女の子には本来ならあり得ないものが背中に生えていた。それは。

真つ黒な翼。

邪悪な存在を思わせる漆黒の、先端が鋭く尖った翼。

それは。最近、ミツル君の前に現れた『天使』の女の子と対を成す存在。

漆黒の翼、黒い瘴気を放つ異彩の存在。

僕が今まで出会ってきたものの中で、もっとも危険な存在。

「……『悪魔』」

そう。その見た目は悪魔そのものだ。

魔族とはまた違う。

もっと禍々しくて、気高い存在。

まるで……。

『まるで……神のような』か？』

「ツッ?」

僕の考えが読まれた？

というより、気づかれていた？

「人間の考えなどで、読む必要すらない。

正真正銘、妾は神じゃからな。

初めまして、そして、さようならじゃ。

妾は黄泉^{よみ}！ 『死を司る神』の眷属。『墮天使の黄泉』じゃ！」

可愛いらしい声が響く。

僕の瞳と、彼女の瞳が交錯する。

彼女の真つ赤な瞳が。その顔が。

身体を玉座に座らせた姿勢のまま、僕に向けられる。僕を見つめる。

黄泉と名乗るその女の子の顔は歪んでいた。

笑っていた。

まるで……まるで新しい玩具を見つけた無邪気な子供のように。

「墮天使？」

目の前の彼女が言った言葉に僕は疑問を浮かべてしまう。

墮天使……確かに彼女はそう言った。

『死を司る冥界の女神』の眷属だ、とも。

黒いヒラヒラのごスロリ姿をして、黒い翼を生やす彼女は確かに普通の人間とは言えないが、一般人ではない人間が集う武偵高この学校や麻帆良、そして……あの世界を知る僕からしたら別に珍しいものではない。

交換留学生や交流事業でこの学園島にもあの世界から魔族や魔法使い達が大量来しているし、麻帆良ほどではないにしても、『認識阻害』の術式が学園島一体にはかけられているからね。

だから、彼女みたいな『異形』な人物が存在することについては、僕は違和感なく受け入れられる。

だが。

「君の正体が天使だろうが、悪魔だろうがそんなことは気にしないよ。僕はね。ただ……君から出てるそれは見過ごせないな」

彼女の身体から溢れ出す多量の瘴気。

あれはマズイ。

僕はあれに似た瘴気を知っている。

今から20年前、もう一つの世界アナザーワールドで起きた世界大戦。

その時に感じた禍々しい魔力。見たものを屈服させる圧倒的な威圧感。

それを目の前の彼女から感じてしまう。

なんなんだ。なんなんだ彼女は？

「見過ごすがよい。わらわには誰も敵わないのじゃからな」

「そういうわけにもいかないんだよ。僕はこの学校の教師だからね！

学校の治安を守るのも僕の役目だ」

ズボンのポケットに両手を入れて、いつでも攻撃できるように準備を終える。

「……無駄じゃというのに」

黄泉と名乗った女は口元を歪ませて笑う。

その笑顔を見た僕は全身に悪寒を感じてしまった。
なんだ、この感覚は？

か、体が動かない!?!?

呑まれているのか! この僕が？

「お主では役不足じゃ。おとなしくしておれ」

「くっ、うおおおおおおお」

気合を入れて、無理矢理体を動かす。こんなところで、立ち止まってるなんかいられない。

『^威氣と^卦魔力の^法合一』を発動させた僕は、自身が一番得意とする技を黄泉に向けて放つ。

——居合拳!

ドゴオオオオオオオオオ!!

大砲の爆音のような音を鳴り響かせながら、僕が放った豪殺居合拳は黄泉にヒットした。

手応えはあった。

タイミングは完璧で確実に黄泉の肉体を捉えていた。回避は不可能。

完璧に決まった。その確信ならあった。手応えならあった。

そのはずなのに……!

何故、目の前の彼女は傷一つ付いていないんだい？

確かに手心は加えた。

武偵高で生徒に教える教師という立場にある以上、武偵という身分にもなっているからね。本気で居合拳は放てない。僕はここにいる間は『武偵』だから。

だから、『武偵法9条』の枷が僕にはある。

つまり、武偵高で教師をやっている間は僕にも、『人を殺してはいけ

ない』という枷があるのだ。

だが、本気を出していないとはいえ、咸卦法を纏った僕の居合拳を受けて平然としているなんて。

……そんなことがあるはずない。

「ふん、なんじゃ今のは？」

パンチの打ち方も知らんのか？

本当のパンチというものはな……」

黄泉はそう呟くと、ヒラヒラのスカートの中に手を入れ。

「こうやるのじゃよ」

そして、そう言った次の瞬間。

僕の体は強い衝撃を受けて吹き飛ばされた。

体に激しい痛みが走る。

今のはまさか……!!?

「滅殺居合拳……どうじゃ？ 妾が放つ真なる居合拳の威力は？」

馬鹿な！ いや、間違いない。

今のは居合拳……!!?

「クククツ、妾の前で技を見せたのがお主の最大の敗因じゃな。

お主の技、確かに貰い受けたぞ！」

まさか……僕の居合拳を真似された？

いや、落ち着け。偶々だ。居合拳はそんな簡単に取得できるようなものじゃない。それを誰よりも知っているのは他ならない僕自身じゃないか！

そうだ！ 居合拳は血を滲むような努力を重ねて初めて使えるようになる技だ。

僕の居合拳がそんな簡単に真似されるわけない！

普通の居合拳が効かないのなら……これならどうかかな？

「……っ、七条大槍無音拳!!」

「クククツ！ 無駄じゃ。七星冥王無音拳!!」

咸卦法によって強化された無音拳の拳圧にさらに気を纏わせて極太のレーザービームのように放つ光の無音拳を繰り出したが、僕がそれを放つのとほとんど同じタイミングで黄泉も漆黒の極太レーザー

ビームを放っていた。

ぶつかり合い、せめぎ合う二つの光線。

拮抗していると思いきや、僕が放った光の無音拳は漆黒の無音拳になす術なく押されてしまう。

極太のレーザービームを僕はその身に浴びてしまう。

(うおおおおおおお!!!)

気合い防御で、全身を鋼のように硬くして技のダメージを緩和させるが……ダメだ。

防ぎきれない。魔法が使えない僕は防御魔法陣や回復魔法、魔法による身体強化などは全くできない。

できるのは気を体に纏い、煉り鋼のように硬くすることだけ。

だが、いくら鋼のように硬くしてもダメージを無くすことなどできない。はしない。

だけど、こんなところで倒れるわけにはいかない!

約束したからね。光君と。『彼が来るまで時間を稼ぐ』と。

生徒に教える立場の教師が生徒とした約束を破るわけには……いかないんだ!

痛む体に鞭を打ち、無理矢理動かし、足腰に力を入れて僕は……ポロボロになりながらも耐え抜いた。

「はあはあ……マズいな」

居合拳も七条大槍無音拳も効かないか。

これはマズい。大技を使えば使うほど、手の内を晒せば晒すほど僕は不利になっていく。

こちらの攻撃は届かないのに、相手の攻撃は確実に僕に届く。

それも僕が放つより遥かに強力になって返ってくる。

これは効くね。

やられたよ。戦場で一番簡単に相手を無力化するのに一番簡単で、確実な方法をやってきたな。

それは……相手の心を折ること。

戦意を喪失させることさえ出来ればその者は戦わずにして勝者となる。

古典的だが、有効で確実な方法だ。
全くしてやられたよ。

だけど……

僕には逆効果だったね！

——無音拳、無音拳、居合拳、無音拳、無音拳、居合拳、無音拳、無音拳
!!!

拳圧で相手を吹き飛ばすただの無音拳と、咸卦法で強化された豪殺居合拳をランダムに繰り出して、黄泉に読まれにくくする。

「ぬっ、馬鹿な……ナゼじゃ？ ナゼ……主の心が、行動が読めないのじゃ？」

それはね、黄泉。

心を落ち着かせたからだよ。

昔、アスナ君が言っていたんだ。

咸卦法を取得するコツは心を落ち着かせること、だって。

何も考えず、頭を空っぽにする。それはつまり……仲間を信じて戦うってことだと思う。

そう考えただけで僕は。僕の咸卦法が強くなったのが解る。

「喰らいなさい、千条閃鏃無音拳!!!」
せんじょうせんぞくむおんけん

超高速で放つ無音拳による弾幕。その名の通り、千の拳を相手に叩き込む無音拳最大の技だ。

これに耐えられる人はそうそういない。

その超高速の拳を繰り出す。

ドガドガドガ、ドガアアアン、と爆音が鳴り響き僕が放った最速の無音拳が黄泉にクリーンヒットした。

城の床を砕き、大穴が空く。

舞い上がった土煙によつて、視界は遮られてしまう。

「……やったか？」

手ごたえはあった。躲された様子もない。

今度こそは……そんな手ごたえは確かにあった。

あったのに。

「効いていないか。頑丈だな」

煙が晴れた後、そこには無傷姿の墮天使が直立していた。

「ふっ、ふふふ……ふはははっ！」

黄泉が笑う。笑い続ける。そして、笑うのをやめる。笑いをやめた黄泉は眼光を鋭くし、僕を睨む。

「なかなかやりおるな。ただの人間風情が！」

黄泉が片足を上げ、床を踏んだそれだけの仕草をしただけで、ドン、ととてつもない衝撃、破壊力を生み出す。

僕はその余波を受けただけで、後退せざるを得なかった。

「妾が持つ能力の一つである、『深淵を覗く者』。お主らが解るように言うと、心を読む力を破るとは流石はなかなかやりおるな。じゃが、妾が持つ力はそれだけではないぞ？」

108つある妾の技を受けてみよ！ 次は……この技がいのかのう。『紫鏡』！」

黄泉の身体が発光した。紫色の光が広がり、やがて収まると僕の前には見知った顔の人物がいた。

それは……。

「し、師匠……う？」

僕の師匠、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグその人だった。

馬鹿な！ これは幻だ！

師匠がいるはずない。だって、師匠は……。

「師匠がいるはずない。だって師匠は……」

『ああ、そうだ。死んだ。高畑少年、君のせいで死んだ』

「っ！！？」

『『黄昏の姫御子』を麻帆良まで連れて行く道中、君のミスのせいで死んだ』

「僕は……僕は……」

『『君が殺した』』

「ウワアアアアアア」

頭の中に蘇るのは僕が生きてきた人生の中で犯した最大の過ち。

師匠の最期の場面。

アスナ君を麻帆良まで連れて行く道中、僕が犯したミスによって、師匠は殺された。

僕のせいで、師匠は死んだ。

償いきれないほどの過ちを僕は犯してしまったのだ。

これは報いなのかもしれないな。

僕に人を愛する資格はないと、アスナ君に告げたが。

それは僕は敬愛する師匠やナギ達、『完全なる世界』コズモ・エンテレケイア残党との戦いで救えなかった人々……彼らを救うことが出来なかった『英雄になり損ねた男』だからだ。

師匠……僕は。僕は本当は貴方みたいになりたかった。

貴方のような英雄に。

全てを諦め、両目を閉じた僕だが、何故か。

何故かはわからないが、その時、師匠が言った最期の言葉を思い出した。

『ドジった。気にするな。これは俺のミスだ。……1つ頼みがある。嬢ちゃんの記憶消去の件だけだよお。……俺の記憶だけ……念入りに消してくれ』

なんで最期にあんなことを師匠は言ったのだろう。

自分の存在を全否定するかのような、あんな言葉をなんで残したのだろう。

わからない。僕には師匠……あなたの考えはわかりません。

『嬢ちゃん、アンタには幸せになる権利がある』

ああ、そっか。師匠が良かったことが今なら少しだけわかる気がする。

僕は師匠のような英雄にはなれない。

ですが……。

これだけはハッキリわかる！

「師匠、貴方はアスナ君に心から幸せになって欲しかったんですね」

何故か、師匠から常日頃言われていた言葉を思い出す。

『なあ、タカミチ。強さってなんだと思う？』

師匠の問いかけに僕は思い浮かぶありとあらゆる強いものをあげていく。

しかし、師匠はその答えには首を振った。

『力の強さ？　魔法が使えること？　頭の良さ？　どれも違う。本当の強さっていうのは案外簡単なものなのかもしれないぞ？　ナギやラカン達のような馬鹿を見てるとな、よくわかるんだ。本当の強さっていうのは……』

「諦めない心。才能の良し悪しじゃない、心の強さ。そうだ、僕が諦めるわけにはいかないんだ！」

僕は教師だ。今は武偵この学校の生徒高生に教える教師なんだ。『武偵憲章第10条。諦めるな。武偵は決して諦めるな』。教師の僕が諦めるわけにはいかないんだ——!!!

僕は目の前にいる師匠に向けて最大限の敬意と感謝の意を込めた無音拳を放つ。

「貴方は師匠じゃない!!!」

——千条閃鏃無音拳!!!

戦車榴弾のような轟音を轟かせて、師匠の偽物を吹き飛ばす。

「なっ、なんだと!??　何故だ、何故立ち上げれる？　何故立ち向かえる!??」

「人間を、師匠を、『紅き翼』を、僕を、そして、武偵を甘くみるなあああああ!!!」

「『そんな馬鹿な……こんなことが……アアア』」

消失する師匠の偽物。

僕はその偽物師匠に向けて、最期の別れを告げる。

「師匠、ありがとうございしました。これで僕は先に進めます」

ポケットから煙草マールポ。とライターを取り出し、敵黄泉がいる前でも構わず一服する。

「……もうよいのかのう」

「待ってくれたんだね。ありがとう。さあ、続けようか？」

「紫鏡……一番不幸な時を見せる闇属性の魔法。それを自力で克服するとはお主、やはり面白い奴じやのう」

不敵に笑う黄泉の姿に、僕は警戒レベルを最大に引き上げる。

その時だった。

「ご無事ですか、高畑先生」

白い翼を羽ばたかせた刹那君が城外を飛び回る姿が目に入った。

「ほう、新手か。どれ、面白いものを見せてやろう。『黒雷招来』!!!」

黄泉が呪文名を口に出した瞬間、城外に爆音が鳴り響く。

嫌な予感がした僕が城の窓から外を見ると、城外の庭園で蹲る刹那君の姿を発見した。

僕はすぐさま刹那君のもとへと、駆け寄る。

倒れた彼女に話しかけると……よかった。意識はある。

「……っ、す、すみません。高畑先生……」

「大丈夫だ。後は僕に任せて安心しなさい」

僕は自分の心が乱れているのを感じながらも、それを制御できずにいた。

僕の大切な生徒に手を出されたのだ。

「覚悟は出来てるんだね、黄泉」

「ふふふふ、あははははは！ なんじゃ、なんじゃ、そんなにその

女子が大事なのかあ。

なら、きちんと守ってみせよ。『黒雷招来』!!!」

黄泉が呪文名を呟いた瞬間、上空から漆黒の雷が降り注いだ。

「ぐがががあああああああああ……」

「あはははは。あはははは……なんじゃ、たわい無い。所詮、人間風情。妾の敵ではないな」

身に降り注ぐ、何十発もの黒い雷。

その雷の威力は千の雷と同等。

いや、それ以上だ。

このままではマズイ。

そう判断した僕は刹那君に覆いかぶさる。せめて。せめて彼女だけでも守らないと……そう思っていたが。

おや？ 落雷が止んだ？

たった今まで降り注いでいた落雷が止んでいた。

何が起きたのかわからず、思わず上空を見た僕は目を見開いた。

そこには。

「待たせたな、先生。
後は任せろ！」

白い雷を迸らせながら、雷の魔法を身に纏う。左右の手にそれぞれ長槍とおそらく雷で出来ているのであろう刀のようなものを持つ光君の姿があった。